
7日間彼氏

里崎 雅（高橋 雅）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

7日間彼氏

【Nコード】

N0650T

【作者名】

里崎 雅（高橋 雅）

【あらすじ】

会社の上司が彼氏のフリ！？酔いつぶれたイケメン上司を、成り行きで一晩泊めてあげた美雪。そのお返しにと、女友達に紹介するために「7日間」だけ彼氏になってくれることに……。この恋は7日間だけで終わっちゃうの？

モバスペBOOKに掲載していた作品です。

第1話 ありえない姿

「はあ…ちよつと酔っぱらったかな」

彼氏のいない自分にとっては憂鬱なだけのクリスマス…

それがやつと終わった週末、街には忘年会帰りと思われるサラリーマンやOLが溢れていた。

各々の店先には、はずし忘れたクリスマスの飾りと少し早い正月向けの飾りが、同居してぶらさがっている。

それをぼんやりと視線の端でとらえながら、かすかにふらつく足で夜の繁華街を歩いていた。

ふじさきみゆき
藤崎美雪、20歳。

今日は、卒業以来ずっと会えずにいた短大時代の友人との、久しぶりの飲み会だった。

お互い仕事にも少しずつ慣れ、恋も仕事もまっさかりの友人たちとの会話はつきない。

女子トークは数時間にもおよび、とっくに日付は変わっていた。

「それにしても、驚いたなあ」

思わずつぶやき、足をとめ繁華街のネオンを見上げた。

短大時代が一番の遊び人で、まだまだ恋も仕事も謳歌するだろうと思われていた理子が結婚だなんて。

『この人を逃したら、次はないってピンときたんだ。彼、年も年だし早く結婚したいみたいだし』

そう言いながら頬を染めた理子は、今まで見たこともないような幸せな顔をしていた。
場は最高潮に盛り上がった。

結婚はおるか：恋人さえできたことないなんて：みんなに言える訳がないよ。

ちょっと情けない気持ちで、ちびちびと飲んでいると、突然話の方向が美雪に向いた。

「美雪は？どう？どーせオトコいないんでしょう。紹介しよっかあ？」

中・高・短大、とくされ縁が続いていた友人・瑠璃がいきなり言ってきた。

「ええっ？なんなのよ、いきなり…」

「アンタ中学高校と叶いもしない恋を追いかけてさ。卒業式で玉砕してからはすっかり臆病になっちゃって！いまだに処女なんじゃないのお？」

確かにその通り。

美雪には未だに彼氏もいなく、いわゆる男性経験はほとんどない。そうは言っても、大勢の前で話題にされると思わずカチンときてしまった。

「うるさいなあ！今はちゃんと彼氏いますから」

……タイミングが悪かった。

はかった訳でもないのに、たまたま場が静まったときに言ってしまったようだ。

思いがけず、美雪の発言が部屋に響いた。

「え、マジ!? 短大時代はそばに男がいるってだけで固まっていたよね?」

「そうそう、合コン連れてってもむすーっとしててさ。それなりに可愛いのに」

しまった、と思ったがもう遅い。

「ねえねえ、どんな人お〜? 美雪の彼氏って!」

友人の一人が、目をキラキラさせながら急に話題に入ってきた。

「い、いいじゃん別に……」

「見せたくないほど、イケてないとか?」

「そんなんじゃないけど……」

「じゃあいいじゃん!! 今度会わせてよ!」

居ないものを、会わせる訳にはいかない。慌てて酔った頭をフル回転させ、なんとか理由を考える。

「っ…付き合いはじめたばかりだし…ひ、人見知りする人だから」

「じゃあじゃあ、クリスマスももしかして一緒に過ごしたの?!」

「あ…クリスマスはお互い仕事で…」

「とかいって。本当に彼氏できたの？ちょっと強がった？」

さすが瑠璃、見すかされている。

でも今さら、後には引けない。

「わかったって！今度連れてくるから!!」

その後、再び話は結婚を決めた理子の話題になり、ほっとしていたのだが…

帰り際になると皆、

「じゃあ今度の飲み会は美雪の彼氏をネタに盛り上がるからね」

と、しつかり釘をさされてしまった。

(どうしよう…))

余裕の笑顔を装って別れたものの、すっかり暗い気持ちになってしまった。

今年のクリスマスイブだって、皆の嫌がる残業を引き受け、家に帰った時には日付が変わっていたくらいだ。

いや、今年のクリスマスどころか…ずっと一人か女友達と過ごしている。

彼氏はおるか、男友達だっていないのに。

はあ…と思わずため息が出たところに、少し先の喧騒が耳に入った。

「大輔！オイ！大丈夫か？？」

人が行き交う交差点で、道端に座り込んでいる男性が一人。酔い潰れてしまったのだろうか？

少し可哀そうに思いながらもその光景を横目に通りすぎようとした時、座り込んだ男性の顔を見て驚きで足が止まった。

「しゅ、主任！？どうしたんですか？！」

間違いない。

電信柱を背に、座り込んでいるのは…美雪の直属の上司である松沢まつぎわ^{・だいすけ}大輔だった。

年は確か30少し前だったと思う。

仕事中はとにかく厳しいし怖いので、気安く声をかけたり側にいるような存在ではない。

でも、すらりと背が高くクールで整った顔立ちなので、ひそかにファンという女子社員も多い。

美雪も入社当時はその大人な雰囲気憧れていた。

でも、直属の部署に配属になり、毎日厳しく指導されるようになってからは、怖いというか緊張する存在でしかなかった。

その上司が…普段のクールな姿からは考えられない状態で、座りこんでいる。

ありえない姿だった。

第2話 引き受けました

「ん…？君、大輔の知り合い？」

松沢の側で介抱していたと思われる男性が、そう美雪に聞いた。

「はい、あの、会社が一緒に…松沢主任は私の上司なんですけど」

「そつかあ、それは助かった…なんでかコイツ、今日はピッチが早くてさ。普段は酔っぱらうことなんてめったにないのに。」

その店を出て仲間と別れた後に、座りこんじゃったんだよ」

歓迎会や忘年会で何度かお酒を飲む姿を見たことはあるが、クールに淡々と飲むイメージしかない。
美雪にとっても、意外な姿だった。

「君、あの…」

傍らに座りこんで、マジマジと松沢の顔を覗き込んでいると、その男性が声をかけてきた。

「あ、藤崎です。藤崎美雪と言います。松沢主任の直属で働いています」

「美雪ちゃんね、大輔の家って知ってる？」

「家、ですか?!さすがに知らないですけど…」

そう答えると、その男性は明らかに困った表情を浮かべた。

「なんか少し前に引越したみたいなんだよ。俺も他のやつらも、誰もコイツの新しい住所知らなくてさ。」

送って行ってやるうにも、家がわかんないんだよ」

この年末の忙しい時期に引越とは。

プライベートな話は全くしない松沢なので、そんなことは知るわけもなかった。

当然、同じ部署の誰も知らないに違いない。

「うーん……私はわからないですけど……引越しなら、会社に届けは出してますよね？」

総務課の人に聞けばわかるのかも……」

「ホント!?じゃあコイツ、引き取ってもらえないかなあ。明日は土曜だし、うちに連れてってやればいいんだけど……今うちの嫁さん妊娠中で、ちょっとデリケートな時期なんだよね」

ちらりと男性を見ると、左手には指輪が光っていた。

奥さんが妊娠中では、酔っぱらった友達を連れて帰るわけにもいまい。

「わかりました。なんとかします」

大丈夫だろうかと思いつつも、本当に困ってる様子のその男性を見るにみかねて、そう言ってしまった。

「ありがとうございます。あ、俺コイツとは高校時代からの友人で、平岡って言います。」

一応、どうしようもなくなったら連絡して!その時は俺の家に連

れていくからさ」

赤外線でお互いの連絡先を交換して、その男性はこちらを気にしながらもどことなくイソイソと帰っていった。

「いいなあ…家庭を大事にする人って」

思わずつぶやいてしまう。

家庭を大事にするどころか、その家庭すらもっていないのだけだ。

「参ったなあ…どうしよう」

平岡と別れてから、ゆうに30分は過ぎていた。

浅はかだった。どう考えても。

一度会社に電話してみたものの、この時間では守衛さんしか残っていないかった。

当然、彼にイチ社員の連絡先などわかるわけもなく、一部のお偉いさんのものしか知らないようだった。

総務課の同期の知り合いに電話をかけようとして、ふと気付いた。もうすでに帰宅している彼女に、別の課の人間の住所などわかるわけなどない。

逆に変に思われて、あらぬ噂を流されては入社1年目の新人には生きていけない…。

それが、ひそかに皆の憧れである松沢主任の住所とくれば、下手すればストーリーカー扱いだ。

「どうしよう…主任、しゅーにーん！！起きて！起きてくださーい！！」

さつきから何度も何度も呼びかけてはいるもの…聞こえているのかいなのか、松沢は目をつぶって電信柱を背に座り込んだままだった。

日付はもう変わっている。

人通りもだんだんまばらになり、このままだとタクシーも拾えなくなってしまうかもしれない。

何より…アルコールをたくさん飲んだせいで、さつきからトイレに行きたくて仕方なかった。

先ほどの人に連絡をとることも考えたが、奥さんが妊娠中となると、こんな夜遅くに女の自分が電話することもはばかられる。

なんとかなるだろうと、気易く引き受けてしまったのは自分なのだ。

“すべての物事に、責任を持って”

入社したての時、そう松沢に指導されたことをぼんやりと思いだした。

仕方ない。

とりあえず自分の家に連れていこう。

幸い自分のマンションはここから近く、タクシーで行けば、5分もかからないだろう。

意を決してタクシーをとめ、運転手の力を借りて無理やりタクシー

に押し込んだ。

「近くて申し訳ないんですけど… までお願いします」

「はいよ。男前の彼氏、飲みすぎちゃったのかい？」

「はあ…」

彼氏、という単語にドキッとしてみよう。

なんとなく落ち着かないが、訂正するのも面倒だった。

ふと自分にもたれかかっている松沢を見ると、仕事中は見たこともないような幼い顔ですーすーと寝息を立てている。

彼氏…だったら、ジマンだよなあ。こんな素敵な人。

「ん…」

ふいに低くてハスキーな声が耳元で聞こえ、不謹慎ながらドキッとしてみよう。

「だ、大丈夫ですか？」

慌てて声をかけてみたものの、返事はない。ほっつと息をついた。

お酒を飲んでるせいか、なんだか身体が熱い。

改めて盗み見るように、松沢の顔を見つめた。

30くらい、と勝手に思っていたけれど、こうやって見てみるともう少し若い気がする。

お酒の匂いとは違う、整髪料のような男っぽい香りが美雪の鼻をくすぐっていた。

こんなに近くに、男性の存在を感じたことはない。
ドキドキすると同時に、自分に寄りかかる温かい重みに心地よさも
感じていた。

（彼氏って…こんな感じなのかな…）

ふいに先ほど交わしてしまった約束を思い出し、一気に憂鬱な気持
ちが襲う。

忘れてた、彼氏をみんなに合わせるって約束。

こんなことしてる場合じゃないのになあ。

タクシーの窓を流れる景色を見ながら、またひとつため息をついた。

第3話 酔っぱらい上司

とてもいい運転手だった。

180近くあるだろう松沢を美雪が1人で運べるはずもなく、玄関まで運ぶのを手伝ってくれた。

松沢は、時折

「うーん…」

「悪い…」

などとは言つもの、自分の置かれている状況は全く理解してないようだった。

「こ、ここです…ありがとうございます…」

二人がかりで、といつてもほとんど運んでくれたのはタクシーの運転手だったけれど、なんとか美雪の部屋の前までたどりついた。疲れた。思わず息が切れた。

「本当に…どうもすみませんでした」

「いいいいいよ、あんまり飲ませすぎちゃだめだよ」

松沢を玄関を上がったところに横たえ、運転手は帰っていった。

とりあえず急いでトイレをすませ、あらためて玄関先で眠る松沢を見つめてしばし呆然としてしまう。

この家には、引っ越しの時に業者が出入りした以外は男の人を入れたことはない。

彼氏どころか、男友達さえなかなかできないのだから。

それが、なぜか社内でも指折りのイケメン上司が寝ている。

朝、家を出る時には考えられなかったこの状況。なんだか不思議でたまらなかった。

「しゅにーん！主任！まだ目、覚めませんかあ〜？」

ダメ元で呼びかけてみると、部屋の灯りにまぶしそうに目を細めながらかすかに松沢が反応した。

「ん……藤崎……？んあー？」

「んあ〜、じゃないですよ！起きてください！風邪ひきますよあ〜」
のっそりと起きあがった彼を見て、美雪は少しドキドキしていた。

（やっぱりみんなが騒ぐだけあって、かっこいいな……。仕事中は怖くて、ろくに顔見れないんだもん。

なんだかかわいいかも……）

「お水、飲みます？」

「おお……ここは、どこだ？」

「え？あ……私の家ですけど」

急にドキマギしてしまう。

松沢は酔いつぶれていたから、ここに来た経緯などほとんどわから

ないのだ。
変な誤解をされては困る。

「あっあの、主任が酔っぱらって道端に座りこんで、平岡さんが家に連れていけないって困ってたから、私が仕方なくですね！」

「平岡…なんで藤崎が平岡のこと知ってるんだよ」

「なんでって…」

なんといつていいかわからず、言葉に詰まっているとゆらりと松沢が立ち上がった。

「しゅ、主任？大丈夫ですか？まだ座ってた方が……うぎゃっ」

女の子相手とは思えない、手加減のない力強さで顔をがちりと挟まれていた。

「ひゅ、ひゅにん…いひゃい…」

「なんで、平岡のこと知ってるんだよ。お前……今日…誰といたんだ？」

「ひよ、ひよっとまって…」

酔っぱらいだけに力の加減がない。痛い。

「い、いひゃい！ひゅ、しゅにん…！」

なんとか自分の頬から手を振りほどいたものの、松沢は納得のいか

ない顔をしていた。

「…なんで俺が藤崎んちにいるんだ？」

「だっ、だからですね、主任が酔っぱらって道端で座り込んでいて…」

「まあいいや。トイレ…トイレどこか？」

よろよろと立ちあがり、トイレに入っていた。
ボタン、とドアの閉まると、どっと疲れが出た。

「もう…なんなの？ 仕事中はあんなに冷静でクールなのに…」

でも…これからどうしよう？

目が覚めた以上、ここにタクシーを呼んで家に帰ってもらうのが一番だろう。

一刻も早くスーツを脱ぎすてて部屋着に着替えたかったけれど、同じ部屋に男性が、しかも上司がいるとなるとそうもいかない。

(なんか…面倒なことになっちゃったなあ…)

そう思いながらキッチンで水を飲み干し、松沢がトイレから出るのを待った。

… 3分。

… 5分。

… 10分。

いくら待っても、出てこない。

もしかして、気持ち悪くて吐いてるのかもしれない…

相当飲んでたみたいだし…ありえる。

大丈夫かな？

心配になって、コンコンとトイレをノックした。

「主任？大丈夫ですか？」

返事がない。

しばらく考えた後、もう一度声をかけた。

「あの…開けますよ？」

鍵がかかってなかったのが幸이었다。ためらいながら、そつとドアを引いた。

「うぎゃっ…！」

ドアを開けると同時に、松沢の大きな身体が倒れてきた。

「……………あゝ！もう！……………寝てるし……………」

そこには、ドアにもたれかかるようにすやすやと眠る松沢がいた。

もう諦めた。

今日はこのまま自分の家に泊めて、明日起きたら事情を説明しよう。このまま酔っぱらった松沢に話をして、理解してもらえとは思えない。

それが一番いい。

というか、美雪にはそれしか案が浮かばなかった。

松沢の大きな身体を、ずりずりとなんとか部屋までひきずった。

(服も脱がせた方がいいのかな…このままだと皺になっちゃうし…)
スーツのボタンを一つ、二つとはずし、女性とは逆の開き方に気づいて少し驚いた。
当たり前のことなんだろうけど…自分の男関係の無さに、ほんの少し情けない気持ちになる。

なんとか上着は脱がせたものの、それ以上は自分には精神的には肉体的にも無理だった。

(もういいや…このまま寝てもらおうと)

1LDKの部屋の中央に布団を敷き、またしてもゴロゴロと転がしながらなんとか松沢を寝かせた。

「はあ…おもいつ…なんで…こんなことになっちゃったのかな…」
思わず独り言がでる。

多少はみ出してはいるものの、なんとか松沢を布団の上に運ぶこと

に成功した。

ようやくスーツを脱ぎ楽な部屋着に着替え

(明日の朝に顔を合わすことを考えて、買ったばかりの可愛いめのスウェットにしたのは言うまでもなく)

電気を消してベットにもぐった。

男の人と…(仕方なくとはいえ)

夜に同じ部屋にいて…(布団は違うけど)

一緒に眠ってるなんて…

と一瞬緊張はしたものの、すーすーと静かな松沢の寝息に、思わず自分が恥ずかしくなる。

(…もう寝よう…今日は疲れた…)

横になると、少し目がまわる。

自分もアルコールを飲んでいたことを思い出した。

目を瞑ると、あっと言う間に睡魔に襲われて眠りに入っていた。

第4話 真夜中、ベッドの中で

なんだか身体があつたかい……まだ暗いけど……今何時だろう？

枕元に置いたはずの携帯に手をのばそうとして、自分の身体の自由が利かないことに気付いた。

「!?!」

声に出さずに、でも激しく驚いて身体が固まった。

(な、なんで!?!)

改めて確認すると、どうやら自分は抱き締められるような形になっているようだ。

目の前には白のTシャツ……というのか下着というのか……の胸があり、そつと目線を上にあげると目を瞑ったままの整った男の人の顔があった。

寝る前の状況を考えると、当たり前なのだけど……それは松沢の顔だった。

(いつの間に!?!スーツも……脱いでるし……って、し・下着だけ!?!)

首だけを動かしてベットの向こうを見てみると、無理矢理脱いだかのようにスーツとYシャツが散らかっていた。

(ど、どうしよう!?!……どうしようもできない……んだけど)

もそつと身体を動かしてみようとしたけれど、自分の予想以上にが
つちりとホールドされているようだった。

（もしかして…彼女とかと間違えてるのかな…）

そう思うと、ちくつと胸が痛んだ。

これだけ端正な顔をしていて、背も高くて女子社員の人気も高い。
詳しく聞いたことはないけれど、彼女がいない方がおかしい。

（それだったら…彼女に申し訳ないよね…）

この状況から抜け出さなければ。

起こさないように、なるべく静かに身体を起こそうとした。

「ん…」

やばい！起しちゃった？！

悪いことをしてる訳ではないのに、思わず身体が固まる。

彼女だと思って抱き締めていたのが、自分だと知ったら…きつと焦
って離れるに違いない。

それが一瞬淋しいような気がして、慌ててその考えを否定した。

私、何考えてるの！！ちゃんと教えてあげないと。

「しゅ、主任…」

そおつと声をかける。

「うん……なに…」

眠そうにぼんやりと目を開け、自分を見下ろしてるのがわかる。

「あ、あの…誰だかわかってます？」

「ん…藤崎、だろ…」

意外にもはっきりと自分の名前を言われて、どきっとする。

わかってるんだ。

……わかってる？

わかっててこの状況！？

自分の顔が、一気に熱くなるのがわかる。

「あ、あの…」

「……まだ、眠い…」

ハスキーな声でそういうと、ぎゅっと胸に押しつけられてしまった。

いや、抱き締められたと言った方がいいのかもしれない。

思わず身体を固くすると、優しくさするように背中に手が回った手がゆっくりと動くのがわかった。

暖かくて大きな手が、なだめるかのように穏やかに動く。

その手の気持ち良さに、自分の身体からゆっくりと力が抜けていった。

(　　)　　なんか……あつたかくて気持ちいいかも……)

しかし、ゆっくりと背中を撫でていた手が、なんだか下に降りてるような気がした。

気のせいではない。

緩みかけた身体が、再び硬くなる。

ヤバイヤバイヤバイ。

どうなっちゃうの？私。

鼓動が早くなるのがわかる。

懸命に冷静になるうとしてみても、経験がないだけにどうしていいかわからない。

でも、不快な気持ちではなかった。

憧れていた大人の男性、その腕の中にあることが信じられなかった。だけど……何かに流されているのなら、自分はいいのだけれど、松沢には申し訳ない。

後から、

「なんであんなヤツに手を出して」

って、後悔するに決まっている。

「あ……あのっ」

意を決して呼びかけてはみたものの、返事はない。

冷え性気味の自分よりも、ずっと高い体温。

それは、お酒のせいなのだろうか。

それとも、男の人だから？

この暖かくて大きな手は、何をしようとしているのだろうか。

そう考えると、身体の芯が熱くなるような感覚があった。

「…ダメだ…やっぱ…ねむ…」

ふいに手が止まり、半ば寢言のように、頭の上からそんな声が聞こえてきた。

「えっ？」

優しく美雪の身体をなでまわしていた手は今度は腰に回り、ぎゅゅつと、少し力をこめて抱き締められた。

思わず固まったままでいると、上からまたスースーと規則正しい寝息が聞こえてきた。

どうやら…寝てしまったらしかった。

(ちょ、ちょっと!!…どうなの!?!この体勢!?!男の人と、上司とこの状況…)

美雪のドキドキなど知る訳もなく、松沢はどっぴりと眠りに落ちたようだった。

まるで、抱きまくらになったような気持ちである。

結局、身動きも出来ず悶々としたまま時はすぎ…
ようやく美雪が眠りにつけたのは空がうつすら明るくなった頃だっ
た。

第5話 目覚めた後は

「おはよう。藤崎」

「んあ……おは、よう……っ!？」

一気に目が覚めた。

はっと目を開けて状況を確認すると、自分のすぐ隣に横たわった松沢が、肘について顔を支えた姿勢で自分を見下ろしてるのがわかった。

「っ……おはようございます……」

あれだけ酔っぱらっていた次の日の朝だというのに、なんだか涼しげな顔をしている。

普段はきちんとセットされた髪が、寝起きで少し乱れて、さらっと顔にかかっている。

そしてその顔は、少し怒っているように見えた。

私、何も悪いことしてないよね!？」

起き上がることもできず、毛布を口元まで引き上げたまま、思わず自分に問いかける。

まるで仕事で失敗した時のような、妙な緊張感が美雪を襲った。

「あのっ、主任、これはですね、この状況はですね!」

「ああ、大丈夫。友達にメールして聞いて大体わかったから」

しれつとした顔で言われて拍子抜けしてしまった。

「友達……って、平岡さんですか？」

「……携帯、何度か鳴ってたけど、もしかして平岡か？」

「え？ 携帯？」

慌てて枕元の携帯に手をのばすと、確かにチカチカとランプが光っていた。

メール2件。着信1件。

メールの一つは昨日の短大仲間からだったけれど、残りは確かに平岡からだった。

「あー本当だ……平岡さんからメールと着信ですね」

「なんで平岡にアドレス教えたんだけ？」

怒ったような視線を向けられ、何も悪いことはしてないはずなのに居心地が悪くなる。

「え、なんでって……困ったら連絡くれって……」

「アイツも軽いな。俺だって連絡先知らないのに、社外の人間に簡単に教えるなよ」

そういう問題ではない。

そう思うけれど、なんだか言えない。

「そもそも、なんで俺は藤崎の部屋にいるんだっけ？」

さぐるような、相変わらず少し怒ったような顔でそう聞く。

「な、なんでって……だって、主任が道端に座りこんでて……何回呼んでもわかってくれないし、どうしていいかわからなくて」

「連れて帰ってくれたんだ？」

今度はニヤニヤと、なんだか嬉しそうに人の顔をのぞきこんでくる。からかわれているのだろうか。

そう考えると、なんだかムツとしてきた。

「だって！ 主任のお友達、困ってたんですよ？家もわからないから送っていけない、奥さん妊娠中だから家にも連れていけないって……。いい大人なのに、何やってるんですか？」

ベッドの上だということも忘れ、思わずまくしたてた。

「へえ。いい大人か。藤崎からそう言われるとは思わなかったなあ」

松沢は妖しい笑顔でそう言うと、肘をついていない方の手を美雪の頭の後ろにおとした。

「な、何……」

「いい大人なら、どういふ状況かわかるよなあ？」

どういう状況……そう言われて改めて自分の姿を見る。

そうだ、いくら美雪は部屋着とはいえ、下着姿の男性と狭いベツトに入っているのだ。

でも……だから？という気もする。

社内でもファンが多くモテモテでイケメンで、大人な松沢が自分に変な気を起こすとは思えない。

そんな事するわけない。

「あの……私なんかにどういう状況と言われても。主任が私なんかを相手に何かをするわけがありません。からかってるんですよね？」

なるべく仕事の時のように、冷静にそう言つと、松沢は黙ってじつと美雪を見つめてきた。

「お前は……もう少し自分のことと、男のことをわかった方がいいと思うな」

どういう意味だろう。

今度はこっちがきょとんとする番だった。

松沢は短いため息のようなものを吐くと、むくつと起きあがった。

「……俺の家、わからないから連れてきてくれたんだろ？ 悪かったな。ありがとな」

「いえ……出すぎた真似をしてしまつて、すみません。総務の人に聞けば新しい住所がわかるかと思つたんですが、時間も時間だったもので……。私の考えが浅はかでした。申し訳ありません」

思わず、ビジネスライクな口のきき方をしてしまう。
そう、だってこの人は上司なのだから。

自分もベットから起きあがって、きちんと座りなおした。
白いTシャツ姿の松沢を見るのが恥ずかしくて、ぎゅっとにぎった
自分の手元を見つめていると、ふと視線を感じた。

松沢が、じっとこちらを見つめていた。

「なんで……俺を、お前の家まで連れて帰ってくれた？」

ふいに真面目な顔で、松沢はそう言った。

「え、だから、さっき……」

「そのまま、放っておけばよかったんじゃないか？」

「それだと……主任のお友達が、困っていたので……」

「それだけ？」

それだけって……なんと言えはいいのだろう。

言葉に詰まって黙っていると、ふいに松沢が近づく気配があった。

「……酔っぱらって困ってたら、お前は誰でも連れて帰るのか？」

「そ！ そんな訳……ないじゃないですか」

「じゃあ、どうして？」

「ど、どうして……しゅ、主任……」

気づくと、自分の目の前には松沢の顔があった。
そんなに近くで、こんなに綺麗な顔を見せられたら、頭がくらくら
してしまう。

な、なんて言えはいいのだ。

そう思って目を泳がせていると、

「……………ぷっ」

松沢がふきだした。

「藤崎、顔真っ赤。本当、男に免疫ないんだな」

「ひっ」

やっぱりからかわれていたのだ。

「ひどい……!」

「ひどくないよ。本当に聞きたいだけだ」

そう言って、今度は美雪の頭をポンポンと優しくなでた。

今まで、そんな風に男の人に触られたことはない。
きつとまた顔が赤くなっているに違いなかった。

第6話 一緒に朝食

『お礼に朝食を奢る』

という松沢の申し出を、素直に受けることにした。

本当は自分が手早く朝食の用意でもできればいいのだろうが、買い物に行っていないなかったために、冷蔵庫はからっぽだった。

買い物は、普段から週末にまとめて行っているのだから仕方ない。

それに、ほんの少しだけ近くなった松沢との距離が、嬉しくて……。正直、もう少し一緒に居たかった。

松沢の新しい引っ越し先は、美雪の家からはわりと近い場所だった。上がって待ってて、という言葉を丁寧に断りマンションの下で待っていると、ラフな格好の松沢が下りてきた。

「お待たせ」

振り返ると、スーツ姿とは全然違う松沢がいた。

(やば… かつこいい……)

スーツ姿もちろん大人で素敵なのだけど、私服姿は違っかつこよさがあった。

普段は自分よりずっとずっと大人に見える松沢が、ジーンズにラフなシャツとコートをばおった姿は、同世代にすら思える。

なんだか、またぐんと身近に思えてしまった。

「何？」

「い、いえ！あの…若くみえますね」

言ってから、しまったと思った。

「悪かったな、普段はおっさんで。行くぞ」

ちよつとぶすつとした顔をして、スタスタと先を行ってしまつ。

そんな事を言いたかつた訳ではないのに。相変わらず、口下手な自分。

ため息をついて、急いで松沢の後を追つた。

まだ早い時間で営業しているお店は少なく、手頃なファーストフードショップに入った。

「いいのか？こんなところで」

「え、全然いいですよ。主任こそ、朝からファーストフードでイヤじゃないですか？」

「だから年寄り扱いするなよ…」

「あ、そういう意味じゃなくて！」

「わかつてるって」

そう言つて、レジの前へと促すように美雪の背中に軽く手が触れた。自然なスキンシップはまるで彼女にでもしているようで、赤くなりながらも嬉しく思う自分がある。

(きつと…素敵なお彼女がいるんだろうな。うらやましいな…)

松沢が選んだ窓際の席に座り、もくもくとハンバーガーを口に運んだ。

何かを話そうと思ってても、緊張してしまって話題が浮かばない。

唐突すぎて意識する暇がなかった分、寝起きの方がずっとスムーズに話せた。

私って、つまらない女だ。

せっかく憧れの上司と一緒にいるというのに、面白い話題ひとつ浮かばないなんて。

はあっと小さくため息をついた。

「なんだよ？ため息なんかついて」

ポテトをつまみながら、ムツとした顔で松沢が言った。

「え？あ…あの…なんでもないです」

慌てて、何かフォローしなくてはと思っても、うまい言葉が浮かばない。

「俺と食事するの、そんなにイヤ？」

「そ、そんな訳ないです！…あんまり…男の人と食事するのに慣れてなくて…緊張しちゃって」

「緊張？」

くすつと松沢が笑った。

「お前、本当に男慣れしてないのな」

会社では苗字でしか呼ばない彼に、『お前』と呼ばれていることになんだかドキツとする。

「……この年になって恥ずかしいんですけど」

「一晩過ごした仲じゃないか」

驚いて顔をあげると、ニヤニヤと笑いながら美雪の顔を見ている。

「ひ、一晩って！その言い方はちょっとどうかと思いますけど」

そう言うってから、ハッと気付いた。

「そういえば……どうして主任私のベットに入ってたんですか？布団敷いたのに」

「え？」

何気なく聞いたのに、意外にも松沢は口ごもった。

「どうしてって……寒かったしなあ……」

「彼女と間違えたんですか？」

ちょっと胸がちくつとしながらも、なるべく平静を装ってそう聞く。

「……ていつか、そういうこと聞いたら朝のうちだろうが。いまさらだ」

無愛想な顔で口の中へポテトをほおりこむ松沢に、萎縮してしまう。

「そ、そうですね…：…なんでかなあって思っちゃって」

「男が女のベッドに入るのに、理由はひとつじゃねえの？」

にやっと笑って、松沢が言った。

理由…

理由はひとつって…

「そ、それはどういう」

「っていつか、アレ、お前の友達？」

「え？」

松沢に指さされ窓の外に目をやると、美雪の顔が凍りついた。

「ちよ、ちよ、ちょっと待っててください！！」

「え、オイ！」

飲みかけ食べかけのトレイをそのままに、慌てて店の外に飛び出した。

松沢が驚いて立ち上がるようになっているが、かまっていられない。

よりによって……、見られたくない人に見られてしまった。

第7話 不都合な目撃者

「ちよつとおゝ美雪ゝ！誰なのよ！あれがもしかして昨日言ってた彼氏？」

「超かつこいいい！あんなイケメンで大人な人、どこで見つけたの！？」

窓の外にいたのは、昨日の飲み会のメンバーでもある短大仲間のさくらと結衣だった。

「あの！これはっ……」

何か言い訳を…と思っても、この状況を上手く説明できるだけの経験とボキャブラリーが美雪にはない。

「こんな朝早くから一緒にいるってことは、もしかして…お泊り？！」

「もゝお、言ってくれたらもつと早く帰してあ・げ・た・の・に」

両側からガシツと肩を組まれては、身動きがとれない。

二人は確か昨日の飲み会で、彼氏がない・毎日に刺激がないと言っていた。

なおさら、今の状況が面白くてたまらないのかもしれない。

美雪をよそに店内に目を向け、とびっきりの笑顔で松沢に手を振ってみせた。

「ちよつ、何やってるのよ！」

慌ててその手を押さえようとしたが、1人对2人では勝ち目はない。

「いいじゃ〜ん！あんなにかっこよかつたら見せたくない気持ちもわかるけどさ〜！」

何も知らない松沢は、驚いた顔をしながらもニッコリと笑って軽く手をあげた。

途端に二人は、「キヤー！」と黄色い声を上げる。

(うわ、あれが噂のキラースマイル……)

社内ではいつも厳しい顔をして滅多に笑うことはない松沢だが、得意先で見せる笑顔には魅了される人も多いと聞く。
いや、関心してる場合ではない。

「ん！！なんか美雪、男の匂いがする！」

肩を組んでいた結衣が、軽く横にしばった美雪の髪の毛の香りをくんと嗅いだ。

「はあっ！？お、男の匂いって何よ！」

慌てて振りほどこうとしたが、今度は反対側のさくらまでもがくんと鼻をならす。

「本当だ。なんていうの？ヘアワックスのようなコロンのような……」

「ううっ、いいなあ〜！彼氏の匂いがついちゃうなんて！ラブラブ

なんだね〜」

「そうかあ、これがあの大人な彼の香りなのね」

二人は、ウンウンと顔を見合わせてうつとりとうなずいている。

昨日、松沢と一緒に寝ていたことで彼の香りがうつってしまったのだろう。

なおさら、言い訳ができなくなってしまった。

「ふ、二人はどうしてこんな時間に…？」

なんとか松沢から関心をそらしたくて、そう聞いてみた。

「飲み会の後も二人で女子トークしてたら、つい盛り上がっちゃったんだよ。ファミレスでオールしてたら、気づけばこんな時間だし。でもおかげでイイモン見れたー」

「あゝあ、瑠璃がないのが残念！」

「そうだねー、美雪に彼氏ができるはずがないって、一番疑ってたもん」

くされ縁の瑠璃がないのが、幸이었다。

彼女なら、ずかずかと店内に入って松沢を質問責めにしかねない。

ここは、下手に弁解しない方がいいのかもしれない。

「あ……あのさ…他のみんなには、このこと内緒に…」

しどろもどろにそう言うと、二人はニヤリと顔を見合わせた。

「ふっふっふ。あんなにカッコイイ彼氏じゃ見せたくない気持ちもわかるけどね。」

それはちょーっと、ずるいんじゃない？」

「えーい、いやそういう訳じゃないんだけど」

「どのみちさあ、昨日飲み会で会わせるって言っちゃったんだし。なんとか彼氏説得しなよ。感じよさそうじゃん」

松沢は相変わらず涼しげな顔でコーヒーを飲んでいたが、こちらの視線に気づくとにっこりと微笑んだ。

会社ではあんな笑顔なんか見せないくせに。なんだか面白がっているようにすら見える。

「ほらほら 彼氏待たせちゃ悪いしい。私たち行くね！」

「あ、瑠璃に写メを…」

「やーやめて！頼むからそれだけは！！」

携帯をかまえそうになる二人の前に慌てて割って入る。

「じゃあ、近いうちにまた飲み会セッティングするから、その時には連れてくるんだよー」

キヤハハッと笑いながら二人は去っていった。

まるで、嵐のようだった。

第8話 ギブアンドテイク？

どうしよう……

どーんと暗い気持ちになり、ヨロヨロと店内に戻った。

「どうしたんだ？友達か？」

「はあ……まあ……」

どすんとイスに腰をおろし、思わず頭を押さえてしまった。

「どうした？」

「あー……いや、なんでもありませんから……ホント」

のどが渴いていたことに気付き、一気にオレンジジュースを飲み干した。

「俺のこと、彼氏にでも間違えられたか？」

ぶつとオレンジジュースを吹き出しそうになる。

「げぼっ……な、なんで……」

「この時間にこの場所じゃあ、そう思われたって仕方ないだろうな」
しれっとした顔でコーヒーを飲む。

まあ確かに当然だろう。

「別にいいだろ、彼氏に間違えられるくらい。このシチュエーションじゃ、言い訳もできないだろうっしな」

松沢はそう言ってくれるが、問題はそこではないのだ。

「なんだよ？そんなに彼氏と思われたのが不服か？」

「は？いついえ、とんでもない！」

慌てて顔の前で手を振る。

「むしろ……主任に申し訳ないです。私の彼氏になんて間違えられちゃって、困るのは主任の方ですよ。すみません」

「別に俺は困らないけど」

ぶすつとした顔で松沢がそう言った。

“別に困らない”

そう言ってくれたのは、何気にとても嬉しかったけど……今はそれどころではなかった。

なんと答えてよいかわからず、ただ無言でストローの袋をくしゃくしゃと丸めた。

「……なんだよ？お前。俺が彼氏と間違われると、そんなに困るところがあるのか？」

松沢は、怒ったような困ったような、複雑な顔をしていた。

「間違われると、困るヤツでもいるのか？」

「はあ…えっ！？あ、いやそんな人全然いません！私が困ったっていうのはそこじゃなくて…」

思わず口がすべった。

「そこじゃなくて？」

「……い、いえ…ええと…別に…」

「なんだよ。言えよ」

ちらりと松沢を見上げると、意外にも怒っているのではなく心配そうな顔をしていた。

呆れられるかもしれない。

友達に、彼氏がいるって見栄をはったなんて。

でも、はぐらかしたまま帰れる雰囲気でもない。

そして、この場を切り抜けられるようなうまい言い訳も浮かばない。

迷った挙句、仕方なく、ぽつぽつと昨日の飲み会での出来事を話し始めた。

「なんだ、そんなことか」

美雪の簡単な話を聞いた後に、そっけなく松沢はそう言った。

「…まあ女性におモテになる主任にしてみれば『そんなこと』程度なのかもしれないですけど」

むっとして思わず嫌味が出てしまった。

美雪にとっては一大事なのに。

「俺が彼氏として飲み会に行けばいいだろ？」

軽く10秒は思考が停止していた気がする。

「はっ？…え、ええ〜〜！！」

お店の中だということも忘れて大声を出してしまった。
周りの視線を感じて、思わず縮こまる。

「なんだ？不満か？」

仕事中的ようなむすっとした厳しい顔をされては、口答えもできない。
い。

「ふっ不満だなんて、とんでもないです！そうじゃなくて、そんな迷惑をかけるわけには…」

「俺だつて昨日の夜、散々迷惑をかけたんだからお互い様だ。恩を売ったままというのは性に合わないんだ」

はた、と気付く。

そうか、昨日の恩返し…と言われると納得がいく。確かに仕事中でも、ギブアンドテイクというか、たとえ身近な部下や上司であっても相手に借りを作るようなことはしない松沢だ。酔っぱらって道路で眠りこけ、さらに一泊世話になったのが入社1年目の美雪とは…松沢自身が我慢ならないのかもしれない。それに、女性に不自由なんて決してしないと思われる松沢にとっては、彼氏の『フリ』をすることなんて、なんてことないことなのだろう。

「そ、そっか…昨日の借りってことですね…」

うんうん、と自分に言い聞かせるように頷いた。

これはいいアイデアかもしれない。どう考えたって、すぐに自分に彼氏ができるとは思えないし、彼氏役を頼めるような男友達だっていない。一度みんなに会わせてしまえば、すぐに『別れた』と言ってもなんとかなるだろう。

「そ、それじゃあ…あの、お願い…」

言いかけた時に、カウンターのの上に置いてあった美雪の携帯が鳴った。

“ 瑠璃 ”

携帯の画面に映る文字に、思わず電源を切ってしまいたくなった。が、松沢の前でそんな不誠実なことできない。一言ことわってから携帯を耳にあてる。

「もしもし……」

店の中ということもあり小さな声でそう言ったが、携帯の向こうからはひどく興奮した声が聞こえてきた。

『ちよつと!!今さくらからメールが来たんだけど、アンタ!男といるんだって!?!』

早い。

女の情報網というのは、本当に早い…。

「そ、そうだけど」

『昨日の話、本当だったの?!なんでもっと早く言わないのよ!』
嬉しいのか、悔しいのか、怒っているのか喜んでいるのかもよくわからない。

「いや、あの、まだ、つ、付き合い始めたばかりで…」

こんなことを言っているのだろうか?
ちらつと松沢を見ると、事情が呑み込めたのか、少しニヤニヤとしながら美雪を見つめている。

「…あの、私ちよつと外に出てきますね」

携帯の受話口を押さえてそう言いつつ、

「なんで?」
「ここで話せよ」

涼しげにそう言ってくる。

余裕のある態度が、なんだか腹が立つ。

「…瑠璃？ごめん、後から電話するから…」

『今いるの彼氏なんでしょ？ちょっと電話に出なさいよー！私まだ信じられないもん！』

「そんな、会ったこともないのにいきなり電話なんて…」

そう言いかけると、ひょいっと松沢は美雪の携帯を取り上げた。

「ちよっちよっど！…主任！」

まあまあ、と手で軽くジェスチャーをすると

「もしもし？ふじ……いや、美雪がお世話になっています。松沢ですが」

出た。

低くて艶のある、キラボーイス。

『キヤー！…！ホントだ！…！』

瑠璃の悲鳴にも似た絶叫が、携帯の向こうからかすかに聞こえてきた。

第9話 7日間の約束

「ああ……おはようございます。うん、聞いてます」

「ああ……うん……いや、会社が一緒で……」

瑠璃は何を言っているのだろうか？

隣に座って、携帯に耳をくっつけて会話を聞きたいぐらいだ。

「来週？いや、大丈夫だと思う……」

“もう切ってください！”

必死で、電話を切るようにジェスチャーを送る。

「あ……ごめんね、詳しくは美雪から。じゃあ」

松沢は余裕の表情で、携帯を返してきた。

「ハイ、“美雪”」

「っ……なんですか、それ！」

赤くなりながらも、とりあえず携帯を耳にあてる。

「もしもし瑠璃？もう切るよ。後でまた……」

『ちよつとおく、本当だったんだね！いやー信じられないわ』

「これでわかったでしょ？」

半分ほっとする。

これで、わざわざ飲み会に出てもらわなくてもいいかもしれない。

「じゃあ、またね。そのうち連絡するから」

『うん！じゃあ一週間後にね』

……一週間後？

“?????” が頭に並んだが、携帯はすぐに切れてしまった。

「あの…どうもすみません…」

「いや、いいよ。若い子って感じで元気があっといういな」

相変わらずニヤニヤしながら、松沢はそう言った。
何かイヤな予感がした。

「あの…瑠璃、なんか言っていました…？」

「昨日の飲み会のこと言ってたよ」

「それ以外に、何か…一週間後とかなんとか…」

「一週間後、新年あけて早々に新年会もかねて飲み会開くってさ。
来てくれて言ってた」

それか!!

「そ、そんな…主任、なんて言ったんですか？」

「大丈夫だと思う、って」

しれつと言う。

「なんだったらお友達も一緒に、って言ってたぞ」

「ええっ！なんて図々しい…って、そうじゃなくて！」

松沢はたいして気にとめてない様子だったが、美雪はそれどころではなかった。

「あの…行くんですか？」

「行ってくつて、さっき言わなかったっけ？」

「そ、そうですね…一週間後なんて、そんな急な…」

飲み会に出てくれとお願いする気ではいたものの、こんなに早く話が進むとは。

むしろ瑠璃との電話で、飲み会の話は流れてもいいだろうと思っていたのに。

「早い方がいいだろ」

相変わらず表情も変えず、コーヒーを飲みながら松沢が言った。

そうか。

松沢にとっては、こんな面倒なことは早くすませてしまった方がいいのだろう。

部下に借りを作ったままでは仕事もやりにくいだろうし、彼氏のフリをするという約束など、負担でしかないに違いない。こうやって一緒にいることを嬉しく思っているのだって、自分だけなのだ。

「そうですね。早い方がいいですね。ご迷惑をおかけしますが、お願いしてもいいですか？」

少しだけ悲しくなった気持ちを隠すように、冷静にお願いをした。

「……わかった。一週間後だな」

そう言って、松沢は美雪の目をまっすぐに見つめた。

「7日間、お前の彼氏になってやるよ」

急に、自分の鼓動が早くなったのがわかった。

こんな素敵な人にまっすぐにそう言われて、ドキドキしないでいる方が無理だ。

“7日間”という、限定期間さえなかったら…

そんな考えを振り払うように、勢いよく頭を下げた。

「よっ…よろしく願いします！主任！」

松沢が、ぷつと吹きだした。

「お前…“主任”はないだろ、“主任は”」

「あ、でもなんて呼べば…」

「俺の名前、知らない？」

「し、知ってますけど…む・無理！無理です！」

慌てて顔の前で手を振る。

「だ、大丈夫です！飲み会の際にはちゃんと…」

「無理だろ。お前、そんなに器用か？」

見透かされている。

「う…でも、いきなり名前は無理です…ホント」

「7日間でなんとかするしかないな。お前のあの友達の様子じゃ、
つつこまれまくりだぞ」

電話で少し話ただけなのに、さすが松沢だ。

「せめて会社の外にいるときに“主任”はやめろ。苗字でもいいか
ら」

「はい……松沢さん」

素直にそう言った。

「ちゃんと呼べるようになれよ」

テーブルの向こうから手を伸ばして、くしゃくしゃと美雪の頭を撫でた。

彼氏って……こんな感じなの？

慣れないスキンシップに、顔がにやけそうになる。

(思いあがつちゃいけない……7日間だけだから、主任は借りを返すだけなんだから)

心の中で自分に言い聞かせる。

「そろそろ出るか」

「はい」

松沢の後をついて店を出ようとした時、美雪の携帯が再び鳴った。

「あ、平岡さんだ……」

出ようとするのと、むっとした顔で松沢が携帯を取り上げた。

「あっ！ちょっと！」

美雪の制止も聞かず、松沢は通話ボタンを押して携帯を耳にあてた。

「もしもし？俺」

「！！松沢さん?!」

美雪の携帯に、勝手に出る理由がわからない。

というか、この時間に松沢が電話に出て、どついつ説明をするつもりなのだ。

慌てて携帯を取ろうとしたら、“うるさい”と言わんばかりに怒った顔をされる。

「ああ、昨日は悪かった。…うん、今一緒にいるよ」

(まあ元々主任のお友達なんだから、仕方ないのかもしれないけど)

「別にいいだろ。俺たち、付き合うことになったから」

一瞬、耳を疑った。

「邪魔するなよ、じゃあな」

ポチッと電源ボタンを押して、ぱいっと携帯を渡してきた。

「！！！！なんで?!そんなことワザワザ…!」

「お前の友達が、俺の友達も連れてこいって言ってただろ?だから」

そう言われては何も言えない。

「……文句ある？」

「いいえ……失礼しました」

文句を言える立場ではない。

むしろ、お礼を言わなければいけないくらいかもしれないのだ。

なんだか色々と腑に落ちないが、ひとまず黙って携帯をポケットにしまった。

「ふあ〜！やっぱりちょっと眠いな」

店の外に出て太陽を浴びると、松沢は大きく伸びをした。

昨日は随分ぐっすりと眠っていたようですけど。

喉まで出かかった言葉を、ぐっと飲み込む。

そういえば、どうして自分のベッドに入ってきたのか…聞きそびれてしまった。

「今日はさすがに帰るけど…お前、明日予定ある？」

「明日ですか？いえ、特に……」

「デートするか」

「ふえっ？」

頭に優しく手を載せられて、思わず変な声が出てしまった。

「デ・デートですか？」

「お前、男に免疫なさすぎ。このままだったら、友達にバレバレだぞ」

それは…そうかもしれない。

それでもなんだか信じられない気持ちで、松沢の顔を見上げた。

「誘って、くれてるんですか？」

「7日間だけど、俺は彼氏なんだろ？」

美雪の顔を見下ろしながら、松沢がふつと笑った。

会社では見せることのないその優しい表情に、ドキツとする。

7日間だけ……この状態を楽しんでもいいだろうか？

出会いもなく男の人とも上手く話せない自分が、こんなに素敵な彼氏ができる日なんて、きつと来ないから…

一生の想い出かも。

「あの……はい、お願いします」

「いいの？」

「はい」

意外にも嬉しそうな松沢の顔を見て、美雪の胸が痛いくらいに高鳴っていた。

第10話 初めての待ち合わせ

日曜日、約束の時間より大分早く目が覚めてしまった。

二度寝しようかとも思ったが、気持ちが高ぶって眠れる気がしない。

「~~~~~！」

意味もなくうなづいて枕に顔をうずめると、ほんのりと自分ではない香りがする。

これが、男の匂い？

そう思つて、かつと顔が熱くなる。

ここに松沢と一緒に眠っていたなんて…嘘のようだ。

昨日、連絡先を交換した後に松沢と別れると、平岡から再びメールが来た。

『付き合つて、本当？』

もし、昨日何かあったのなら謝るよ。

大輔を押しつけちゃってごめんね。

美雪ちゃんがいいならいいんだけど…

大輔のこと、よろしくね』

なんて返していいかわからず、メールはそのままだ。

(7日間だけかあ…。昨日からだとしたら、今日は二日目になるのかな)

ぼんやりと考えながら、携帯をパタンと閉じた。

デートどころか、男の人と出かけたことすらない。

昨日松沢と別れてから、考えることと言えば今日の初デートのことばかり。

何を着ていけばいいのか、何を持っていけばいいのか……

「あー、やっぱり昨日服でも買い行けば良かった……」

昨日は朝食だけと想っていたから、普通にデニムにカットソーを着て、コートを羽織っただけだった。

今日は……やっぱりスカート？

持ち物は、携帯にお財布に化粧ポーチにハンカチに……それだけでいいのかな？

女友達にメールして聞きたい気分。

でも状況が状況だけに、そういう訳にもいかない。

（待ち合わせが11時ってことは、お昼ご飯食べるってことだね。そしたら、朝ご飯も早めに食べておいた方がいいのかな）

初デートは、美雪にとって謎がいっぱいだった。

待ち合わせ場所に指定されたのは、昨日一緒に入ったファーストフード店の近くの大きな書店だった。

20分も早く着いてしまった。

（待ち合わせが本屋さんで良かった……）

気持ちを落ち着けるために女性雑誌のコーナーに向かい、手にとつてはパラパラとめくる。

『デート仕様のモテメイク!』

『彼に好かれるお出かけコーデ』

『これで絶対大丈夫!みんなのデート必需品』

普段は気にも留めず素通りしていたページが、やけに気になって仕方ない。

(ううっ…こんなピンクのキラキラしたアイシャドウなんて持っていないし…)

フワフワの白スカートなんて、食べ物こぼしたらどうしたらいいの!?

デート必需品に“お泊りスキンケアセット”って…マジで?)

いかに自分の視線が、『男』に向いていなかったかを実感した。

短大時代は当たり前だけれど周りは女の子ばかりで、当然のようにつるむのも女の子ばかりだった。

彼氏がいる子もいるけど、そうじゃない子の方が多い。

彼氏がいなくても淋しいことなんてなかったし、楽しかった。

女の子同士で遊ぶ格好と、男の人の視線を意識した格好は全然違うことに、今さら気付いた。

就職してからは周りに男性は増えたが、会社での付き合いだけだったし、それより大人でかっこいい女性に憧れて、こういう雑誌は全然読んでいなかった。

「はあ…私って、女子力低いわ…」

今後の参考のために何か雑誌でも買おうかと思ったとき、入口から入ってくる男性の姿が目に入る。

約束の時間より少し早い、背の高いその姿があの人だと、なぜだかすぐにわかった。

（わわっ…緊張してきた！！）

雑誌を読むことで少しは治まっていた緊張感が、たちまち復活する。声をかけた方がいいのかと一瞬迷って、でもなんて声をかけていいかわからず、とっさに目の前にある雑誌を手に取り読んでいるフリをすることにした。

（見つけて…くれるかな。わかってくれるかな）

このドキドキが、なんのドキドキかわからない。

視線は雑誌に向きながらも、神経は松沢に集中していた。

あ、キョロキョロしてる？

私を、探してるんだ……

うわっ、こっち来た！！

ぴたっと、美雪の背後で足が止まった。

「待った？」

バツと後ろを振り向き、ずっと心の中で練習していた言葉を口にす
る。

「いいえっ！今来たばかりか…！！！」

『り』、と言おうとして、思い切り舌を噛んでしまった。

「~~~~~！！！！」

何も言えずに口を押さえて涙を浮かべると、くすくすと松沢が笑っ
た。

「緊張して舌噛むくらいなら、始めから声かけるよ」

「どうやら、気付かれていたらしい。」

「すみません…」

「謝らなくてもいいけど」

改めて松沢を見上げた。

(今日は、昨日よりもさらにカツコイイな…)

ネックにポリウーームのあるカツコよくもカワイイパーカーに、ほど
よく色落ちしたデニム。

目の前にある雑誌の、『デート特集』に出てもおかしくなくらい
だ。

隣で立ち読みをしていた女の子二人も、チラチラと松沢を盗み見て
いるのがわかった。

松沢を見てから、ちらりと美雪に視線をうつす。

それがまるで、『釣り合わない』とでも言われているようで、ちくんと胸が痛む。

「ん？欲しいの？それ」

「え？」

松沢は、美雪が読んでるフリをしていた雑誌を指差していた。

『クリスマスに彼氏におねだりするならコレ！3万円までのプチアクセ』

開いたページには、色とりどりの指輪やネックレスなどのアクセサリーが煌びやかに載っている。

「もはやおねだり？」

「ちっ、違います！！」

バンッと閉じて雑誌を置いた。

浮足立っているように思われてしまっただろうか。恥ずかしくてたまらない。

「冗談だって。行くぞ」

さり気なく、本当に自然に、松沢は美雪の手をすつと取った。

「あっあの…手…」

小さく言ってみたものの、聞こえているはずの松沢は何も言わない。先ほどから松沢を盗み見ていた女子2人の、視線を感じる。スタスタと前を歩く姿を見ながら、ニヤけた顔を必死に戻そうとしている美雪だった。

第11話 ドライブみたい

松沢は車で来ていた。

背の低いタイプの黒いミニバンは、彼のイメージにぴったりだと感じる。

「どうぞ。乗って？」

手を離し、当たり前のように助手席を開けてくれる。

「ど、どうも……」

車に乗り込むと、昨日から何度も嗅いでいる松沢の香りがかすかにする。

二人だけの空間はちょっと緊張したけれど、むしろ他人の目が気にならない分落ち着く気がした。

「おはよう」

「おっ、おはようございます……」

「昨日の私服とは、また違うイメージだな」

迷った挙句、選んだのは膝より少し上の丈の、落ち着いた黒のスカートだった。

昨日は軽く横に縛っていた髪も、今日はおろしている。

それでも、ヒールの低いブーツはなんだか子供っぽく思えて、こんなことならボーナスで新調すればよかったと後悔していた。

「幼いですよね……一緒に出かけしてくれるのに、すみません」

「どうして謝る？かわいいよ」

“かわいい”

さらっと言われた一言に、またまた顔がゆるみそつになる。

「どこか行きたいところ、ある？」

いまさら見栄をはっても仕方ないので、正直に打ち明けることにした。

「あの……っついう、デ・デートってどうか……あんまりしたことなくて」

「デートって思うから緊張するんだろ。お前の行きたいところでいいよ」

なるほど。

とは言っても……自分の行きたいところに行つて、果たして松沢は楽しいのだろうか？

そう思うと、なかなか提案することができない。

「最近オープンしたアウトレットモール、もう行ったか？」

「あっ！テレビで見ましたけど……まだ行ってないです」

勢いよく返事をする、にこっと爽やかに笑う。

「連れて行ってやるうか？」

「い、いいんですか?!」

嬉しい。

行ってみたいと思ってはいたけれど、なかなか付き合ってくれる友達はいないし、一人で電車を乗りついでまで行く気にはなれないでいたのだ。

「結構距離あるから、コンビニで飲み物でも買っていくか」

「はい!」

(2人でドライブ…大人な展開!!まさにデートって感じ!)

浮かれてはいけないと思いつつも、心が弾んだ。

流れる景色を見てると気持ちも落ち着き、大分緊張感はなくなっていた。

「あの……松沢さん」

「大輔」

「え？」

「まだ呼べない？」

横を見ると、運転をしながら横目でこちらを見ている。口元が、かすかに笑っている。

「まだ…無理、です…」

「可愛いもんだなあ」

ハンドルを握っていない手で、ぼんぼんと頭を優しく撫でられた。

「前々から思ってたんだけど…お前、男苦手なの？」

急に話題を変えられる。

「え、どうしてですか？」

「仕事の時、なんか男相手だといつも妙に固まって困ってるように見えるから」

見ていてくれるんだ。

上司としては当たり前のことかもしれないけど、くすぐったい気持ちになった。

「正直…苦手です。苦手っていうか、何を話していいかわからなくて…」

「もしかして、今までに彼氏できたこと、ない？」

「情けないですけど……ない、です…」

「俺が初？」

「は・初って……一週間だけじゃないですか……」

恥ずかしくなって小さな声で言うと、力強く松沢は言った。

「7日間だろうが1日だろうが、彼氏は彼氏だ」

その勢いに、思わずふふつと笑ってしまう。

「今の若い子って、経験無いことを恥ずかしいって思っつのかもしれないけど……大事にとっておくことも大切だぞ」

「大事に……ですか？」

「うん。男つてのは、“初めて”になりたがるイキモノですから」

「初めてって……それは……」

言いかけて思わず顔が赤くなる。

「あゝ、お前今ヤラシイ想像しただろ」

「し、してません!!」

ハハッと軽く笑って、またしても頭を撫でてくれる。

スキンシップというより、女の子の扱いに慣れている。そう思わずにはいられなかった。

ずっと聞きたかった事を聞いておこうと思った。

「松沢さんは…彼女、いないんですか？」

「え？」

信号待ちだったために、こちらに目を向けてくる。

「あの…こんな面倒なこと引き受けちゃって、もし彼女さんがいるのなら申し訳ないなあって…」

「いたらフツーこんなこと引き受けないだろ」

“こんなこと”、と言われ、少しへこむ。

「そんなに不誠実に見える？」

「いいえ…そんなことないです。すごく優しいし、彼女がいたら大切にしようだなんて思います」

「そりゃどうも」

沈黙が続く。

やっぱり面倒なことを引き受けてしまったと、思っているのかな。

そう思うと申し訳ない気持ちでいっぱい、気分が沈んだ。

今日だって、経験のない私のために、デートを経験させてくれるんだもんね。

“初デート”に浮かれていた自分が、少し恥ずかしかった。

「どうでした？」

「いえ……別に……」

「なんか、へこんだ？」

「えっ？いいえっ、本当に別になんでもないです」

気にしてくれているのは嬉しいが、なんとって言えばいいかわからない。

「…俺、なんか変なこと言ったか？」

「本当に、なんでもないですって。気にしないでください」

「あ、そうか」

ふと気付いたように、松沢はまっすぐに美雪を見た。

「今は、美雪が俺の“彼女”だな」

「！……」

か、彼女……

「俺がお前の彼氏なら、お前は俺の彼女だろ？」

そついうつもりではなかったのだけど……

『彼女』

その甘美な響きが、ぐるぐると頭の中で回っていた。

さっきまでの暗い気持ちが、吹き飛ぶ。

「機嫌直った？」

「べつ別に……」

そう言いつつも、ニヤニヤとする顔を止められない。

（ 私って、意外とゲンキな奴だったんだな… ）

いまさら気付いたことだった。

第12話 イベントに参加？

年末最後の日曜日とあって、クリスマス後でもアウトレットモールはひどく混んでいた。

『はぐれないように』

そう言われて繋いだ手が、緊張で汗ばんでいることが気になる。

「腹減ったな。まずなんか食べるか。食べたいもの、ある？」

「えと…松沢さんは？」

「俺？うーん…ご飯ものがいいいかな…」

フードコートの入り口の看板を二人で見上げていると、バンツと誰かが松沢の背中を叩いた。

「いつてえ…あー！」

「久しぶり！大輔〜！」

振り向くと、そこには松沢と同じくらいの年齢のがっしりとした体つきの男性が立っていた。

「おお…久しぶり。元気だった？」

「ホント、2年ぶりくらいじゃね？」

ふとその男性の目が美雪に向いた。

「彼女？」

「うん、そう。美雪」

さらっとそう告げる松沢。

「……」

思わず声をあげそうになるのをこらえ、松沢の顔を見上げた。
“何？”とでも言いたそうなくらい普通の顔で、美雪の顔を見る。

きゅっ、と美雪の手を握る手に、少し力がこめられた。

それは、『大丈夫だよ』とでも言われているようだ。

「可愛いね。若いよね?!いくつ?」

「あっ…は、20歳です」

「マジで!うらやましい!お前うまくやったな!歳の差ほぼひとまわり!犯罪じゃん!」

わはははっと豪快に笑いながら、バシバシと松沢の背中を叩く。

「…いつてえな。コイツ、大学んときの友達の村西」

そう紹介され、初めましてと頭を下げる。

「じゃ。初デートなんだから邪魔するなよな」

松沢は美雪の手をひっぱり、そのまま歩き出そうとした。

「待て待て待て！初デート？！それなら、いい思い出作らない？！」

慌てたように、村西というその男性が二人の前に回り込んだ。

よく見ると、腕には「STAFF」という腕章をつけ、首からは許可証のような物をぶら下げている。

「……なんだよ。あんまりいい予感がしねえな？」

むすつと松沢が言う。

「前会った時に言っただろ？俺、イベント企画会社で働いてるんだ」

「ああ、それは聞いたよ」

「今日、ここで午後からイベントあるんだけど…参加者が足りなくて今スカウトしてたところなんだ。簡単なイベントですぐ終わるから、参加してくんない？」

そう言って、村西はひらつと一枚のチラシを美雪に手渡した。

「カップル…ベストドレッサー賞??」

「そう ここに来ているカップルの写真を貼りだして、お客さんに投票してもらうんだ」

「断る」

冷たく言い放つと、松沢はスタスタと歩き出す。

「待てって！頼むって〜！」

「そついつの苦手」

「わかってるけど…ホント人が足りないんだ。頼む！このままじゃ企画倒れで…」

さらに前へと回りこみ拝むように手を合わせる村西に、松沢は困惑していた。

「頼むよ。助けると思ってさあ…同期のよしみで！」

うんざりとした様子で頭をかく。

「ね！彼女もなんか言っつてよぉ〜」

今度は美雪の方を向いて、さらに拝んでくる。

「そつ言われましても……」

どうしてよいかわからず、ちらりと松沢の顔を見上げた。

「ダメ。コイツ、見せ物じゃねえし」

相変わらずムスツとした顔でそつ言っつ。

「じゃあ帽子でもかぶっつて、写真もなるべくわからないようにする

からさ〜!」

ガバツと、村西はいきなり土下座を始めた。

「頼む! 本当に! お前みたいなイケメンが出てくれたら、目玉になるし!」

「おまつ…やめろって!」

人通りの多いフードコートの前、周りはなんだなんだとこちらに視線を向ける。

このままだと人ばかりができてしまいそうだ。

「ま、松沢さん……」

「~~~~っ! ……わかったよ」

はあっと松沢がため息をつきながらそう言つと、村西は心底嬉しそうに立ち上がった。

「助かる〜! お前は昔から、イザというときには頼りになる奴だった!」

「……お前は昔から、しつこい奴だったよ」

うんざりとうなだれた松沢に、まあまあと言いながら村西は“エントリーカード”というものを差し出した。

「これに必要な事項を記入して、13時まで中央エリアに来てね
カメラマンがいるから。写真を撮ったら終わり! 簡単だろ?」

「オイ……13時つてすぐじゃねえか」

「エントリーしたら2、000円分のグルメ券もらえるからさっ。
昼食のタシにして じゃ、俺はギリギリまでスカウト続けるから、
本当に頼むよー！」

それだけを告げて、彼は足早に去っていった。

「ごめんな、面倒くさそうなことに巻き込んで……」

「あ、いえ……」

内心、ちょっとだけ楽しそうだと思っていたことは言えない。

「……アイツも言ってたけど、帽子でも、買う？」

そう言いながら、美雪の髪にさらっと指を通す。

「あ……はい！」

優しげな指先だった。

その後、昼食は一旦我慢して手近なショップに入った。
一通り店内を見て周った後、顔が隠れそうな中折れ帽子を手にとる
と、隣にあるメンズサイズを松沢が手にとった。

「え？」

「せっかくだからお揃い」

そう言って、ぽふっと自分の頭にのせる。

(なんでも似合うんだな……)

グレーの帽子は、一層松沢をオシャレに見せている気がした。

「よくお似合いですよ。そちら、メンズサイズとレディースサイズがあるので、カップルで被られる方も多いんです」

すかさず店員が寄ってくる。

「……美雪は？それにする？」

「あ」

慌てて自分も頭にのせて、鏡をのぞいてみる。

普段帽子はかぶらないので、あまり似合っているかわからないが……少なくとも今日の服装と合わせても変ではないと思う。

「かわいいよ」

そう言って、松沢がすぽっと美雪の頭から帽子をとった。

「これ、二つともすぐかぶっていくんで」

「ハイ ありがとうございます〜」

店員が、いそいそとレジに商品を運んでいった。

「あっ、お金払います!」

急いでついていこうとしたが、軽く手で制された。

「いいよ。俺の友達にまきこんじゃったんだし」

「でもっ」

「お前なあ、1年目の新人なんだからこういう時は甘えろ」

呆れたようにそう言われ、可愛げがなかったかなと思いなおした。

「あの…ありがとうございます」

「そう、それでいい」

にこっと笑う。

仕事をしている時と比べて、今日は随分笑ってくれる気がする。

「はいどうぞ」

そう言って、会計の終わった帽子を美雪の頭にのせて、松沢も同じ帽子を深く被る。

お揃いの帽子が、なんだかくすぐつたい。

「なんか、バカッブルみたくなってないか不安」

「…今さらそれを言いますか?」

2人で笑いながら、中央エリアへと向かった。

第13話 エントリー

「ハイ もう少し近くに寄って〜！彼氏、彼女の肩に手をまわしてみて〜！」

エントリー広場には、カメラマンの撮影の順番を待つカップルが数組。

そしてイベントを見に来た客であふれかえっている。

（こ、こんな大勢の中で、撮影?!うう…恥ずかしい…）

松沢は渡されたボールペンで、手早くエントリーシートに必要事項を記入していく。

「お前の住所は書かねえぞ。年は、20歳…か？」

「はい。早生まれなんで」

「お付き合い歴ってなんだよ…」

うんざりした顔で、『ヒミツ』にぐるっとマルをつける。

「松沢さんって28歳だったんですね」

「…知らなかったのかよ」

「あ、聞く機会がなかったもので…」

「彼氏の年くらいさっさと聞け」

やや不服そうにそう言った。

「撮影を待ってる彼女さん、よかつたらメイクお直ししますよ」
ふと目をやると、撮影わきのテントにメイクコーナーがある。
どうやらイベント協賛の化粧品メーカーが、無料でメイクをしてくれるようだった。

「行ってくれば？」

「え、いいんですか？」

「順番まだまだ。俺、これ書いとくから」

「あっ…ありがとうございます！」

ちょっと覗いてみたいと思っていた気持ちを、気付いてくれたのが嬉しかった。

(やつぱり、気遣いが大人だよなあ…)

テントの側に近付くと、スタッフと思われる女性が声をかけてきた。

「よかつたら、メイクしましょうか？」

「はっハイ！お願いします！！」

他の人にメイクをしてもらうのなんて、生まれて初めてだ。
少し緊張して、案内されたパイプ椅子に座る。

「可愛いのに、ちょっと今日のメイクは地味目ですね。直してもいい？」

「あ…ハイ、あんまり持つてなくて…」

女性は、手早く美雪のベージュ系のアイシャドウを、化粧水で落とすしていく。

「あなた、色が白いからこのピンクがはえると思いますよ」

(出た！これがモテ系アイシャドウ……)

思わず女性の手元に目が行く。

「せっかく素敵なお彼氏といるんだから、思い切り可愛くしてあげてね」

まぶたの上にふわりと淡いピンクがのせられ、目のフチには濃いボルドー。

さらに、キラキラと光るシャドウが上から重ねられ、目の周りが華やかになる。

ほんのりオレンジのチークが頬にのり、顔色がいきいきと見える。

すごい、こんな短時間で。

関心せずにいられない。

最後にルーージュを塗ると、唇がぷっくりと見えた気がした。

「グロスもいいけど、この新作の口紅はオススメですよ。サンプル

差し上げますね」

「ありがとうございます！」

お礼を言って、マジマジと鏡を見つめる。

少しは、松沢の隣が似合うような大人に見えるだろうか。

「終わった？もうすぐだぞ」

テントの中に松沢が入ってきていた。

「あっハイ、今終わりました」

振り向くと、少し驚いた顔をしているのがわかった。

「どうですかあ〜？彼女さん、可愛くなったでしょう〜！」

ニコニコとメイクをしてくれたスタッフの女性が、美雪の肩に手を添える。

「はあ、そうですね…」

なんとも気のない返事に、少しがっかりする。

「も〜！かわいいねって言ってあげてくださいよ〜」

ふふふっと笑って、女性はサンプルを詰めた紙袋を差し出してくれた。

「どうぞ 撮影、がんばってくださいね」

「ハイ、あの、ありがとうございます」

テントを出て行った松沢の後を、慌てて追う。

「あの…遅くなってすみません」

「いや、まだ大丈夫だろ」

「……キライですか？こっぴうの？」

「いや…」

松沢が、手に持っていてくれた美雪の帽子をかぼつと深くかぶせてきた。

嫌いだったのだろうか、こっぴう華やかで派手なメイクは、余計なことをしてしまったかと、そわそわする。

「あんまり……」

「え？」

「あんまり、顔出すなよ」

松沢が、美雪の手をぎゅっと握った。

「おっ！彼女、すごく可愛くなったね」

先ほどの村西が、順番を待っている2人に声をかけてきた。

「早く終わらせるよ。腹へってんだから」

「まあまあ、すぐ終わるからさ！2人なら、優勝も狙えるよ！」

「優勝？」

思わず聞きかえす。

「そう！優勝をはじめとして、豪華な景品もあるからさ。かわいく写ってね」

会場にいる人は、写真を見てそれぞれのカップルに投票。

賞を取ったカップルにはもちろん商品があるし、優勝したカップルに投票した人の中から抽選で景品も当たるらしい。だからこれだけ観客が多いのか、と納得した。

「別にどうでもいいし」

心底興味が無さそうに、松沢があくびをしている。

「では次！20番のカップルの方」

「さっさと終わらそうな」

スタッフから声がかかると、美雪の手を引いてスタスタとカメラマンの前に出た。

「ハイ、もうちょっと彼女くっついて」

(くつついてって…もう充分くつついてるんですけど)

握っている手に、思わず力が入る。

「うーん…なんかよそよそしく見えちゃうなあ。彼女緊張しないで」

“ね〜20番のあの人が、超カッコよくない!?”

“本当だあ、それに大人っぽいけど服装かわいいよ!私、あの人に投票しようかなあ〜”

周りから、そんな声が聞こえてくる。

やっぱり、今日の自分の格好では、松沢の隣に並ぶには普通で子供っぽすぎる気がする。

恥ずかしくて、逃げ帰りたい気分だ。

思わずうつむいてブーツのつま先を見つめっていると、ぼそっと松沢が言った。

「自信もてよ」

「え?」

「充分かわいいよ。あんまり他のやつらに見せたくないくらい」

かっ顔が熱くなり、松沢の顔を見上げた。

「あっ、彼女いいね〜、その見上げる感じ!じゃ、彼氏さんは彼女の腰に手を回して〜」

ずっと松沢の手が美雪の腰にまわり、ぴったりと身体を寄せられた。ふっと頭の上に何かの感触があり、気付くと美雪の頭にもたれかかるように松沢の顔がのっていた。

きゃあつと観客がざわめくのがわかる。

「いいねえ！ラブラブ！」

カメラマンがカシャカシャとシャッターを押していた。

「はあああ…：なんだか疲れましたね」

撮影が終わり、ようやくとれた遅い昼食。

時間がずれただけあって、カフェはそれほど混んではいなかった。

「悪かったな、お前目立つの苦手だろ？」

「いえ、綺麗にメイクしてもらえましたし…：それに」

手にもった写真を見る。

撮影が終わった後に、スタッフの人が手渡してくれた写真。

「いい記念になりました！」

自分の顔は帽子で少し隠れているが、ぴったりと寄り添い美雪の頭

に軽く頬をよせる松沢が、かつこよくてついニヤけてしまう。
メイクのおかげか帽子のおかげか、こつやってみると松沢の隣に並ぶ自分も、そんなにおかしくもない気がする。
少なくとも、写真の中の2人は本当の恋人同士のようなだ。

「こつやってみると、本当に恋人同士って感じですよね!」

「!.....げほっ!」

思わずそう言つと、松沢が喉に水をつまらせた。

「あっ...す、すみません...浮かれちゃって...」

「い、いや...素直すぎてびっくりした」

少し赤くなった松沢の顔を見て、急に恥ずかしくなり下を向いてしまった。

(今の...何気に爆弾発言だったかも...)

「結果発表は17時からか...どうする?それ終わるまで待っていると帰りちよつと遅くなるけど」

「あ、そ・そうですね...」

どうしようかと考えていると、ふいにカフェに入ってきたカップルに声をかけられた。

「あの!さっきイベントに出てたお二人ですよね?」

「はい、そうですけど…」

そのカップルはニコニコと顔を見合わせながら、嬉しそうにこう言った。

「お二人、とつても素敵でした！私たち投票したので、がんばってくださいね！」

「ど、どうも…」

赤くなり囁んでしまった美雪とは対照的に

「ありがとうございます」

松沢は爽やかに笑顔で答える。

「絶対、賞取れますよ！」

そう言って奥側の席へと去っていくカップルを見送りながら、2人で顔を見合わせる。

「一応、待っててみるか」

「そうですね……一応……」

考えていることは、同じなようだった。

第14話 内緒のプレゼント

ゆっくりと遅い昼食をとった後は、時間までぶらぶらとショッピングを見てまわった。

女友達とだつたら気軽に店に入り手に取れるものが、男の人と一緒にだそうはいかないものなのだ、と思った。

下着や化粧品なんてもちろん見れないし、洋服をじっくりと見るのも申し訳ない気がする。

「見たいところ、ゆっくり見ていいんだぞ」

松沢はそう言ってくれるけど、一緒にショッピングというスキルは自分にはまだ無いようだ。

「あ、靴買おうかな。仕事用の」

ふいにそう言い、松沢がメンズブランドのシューズショップで立ち止まった。

「じゃあ私、この辺見てもいいですか？」

「ああ」

一旦松沢と別れ、一人で周りの店を見て周ることにした。

いつも一人だったはずで、男の人の存在を感じるのは今日だけのはずなのに、一人になるとなんだか心許ない感じがする。

隣が淋しく感じてしまうのは、なぜだろう？

ビジネスシューズを眺める松沢を遠くから見つめながら、そう思った。

離れた手が、寒かった。

仕方なくぶらぶらとお店を見て回っていると、ふとセレクトショップの男性用の雑貨が並ぶコーナーで足が止まった。

（ 今日のお礼に…なにかプレゼントしたいな ）

ネックレス、カフス、ネクタイピン、ストラップ……

たくさんアイテムが並んでいるが、いくつか手にしてはため息をついて棚に戻す。

きつと、どれもすでに持っているに違いない。

そう思うと、選ぶことができなかった。

好みも知らないし、どんな物を持っているかもわからない。

所詮、偽りの恋人同士にすぎないのだと思い知る。

「あ、これ……」

黒い革のブレスレットが目に入り、そつと手にとってみた。小さなシルバーのプレートがついたシンプルなデザインで、小さくブランド名が彫ってある他は余計な装飾はない。

（ 今日の松沢さんの服装に、似合いそうだな ）

「いかがですか？」

微笑みながら男性店員が声をかけてきた。

「あ……あの……」

「シンプルですけど、おしゃれでしょう?」

「はい...」

緊張して身体が固まり、思わずプレスレットを持ったままうつむく。やっぱり男の人は苦手だ。

それでもちよつとだけ勇気を出して、その店員に聞いてみた。

「28歳の男の人に... どうでしょう?」

「革は上質ですしちゃんとしたブランドの物ですから、大人な方がされてもおかしくないと思いますよ」

「そう...ですか...」

物はいいのだろうけど、アウトレットだけに値段は美雪でも買える程度だった。

「これ、ください」

「プレゼント用ですか?」

「...はいっ」

『お礼に』って、さり気なく渡せたらいいな。

受け取ってもらえるかも、喜んでもらえるかもわからないけれど。深い紺の包装紙でラッピングされた小さな包みを、そっとバッグの中にしまった。

店の外に出ると、松沢はベンチに座って待っていた。

「ちょっと早いけど、行くか？」

「あ、はい！」

すっと差し出された手を、一瞬ためらった後にきゅっと握った。

昼間と違って、人通りはもうまばらで、はぐれる心配はもうないのに。

こうやって、特別なことが当たり前になっていくのが、付き合いっ
てことなんだろうな。

そう思った。

「明日明後日働いたら、正月休みだな」

「そうですね。松沢さんは、帰省とかされるんですか？」

「しないよ。俺の実家、北海道だから。この時期に飛行機なんて乗
る気しない」

そうなんだ。知らなかった。

「ていうか…帰省するんだったら、飲み会の約束なんてしないだろ
そう言われてはっと思いだす。」

「あ…私、友達に連絡とらなきゃ」

「オイ……俺の友達、本当に連れてった方がいいのか聞いとけよ」

呆れたような顔で、松沢がこつんと美雪の頭を肘でつついた。飲み会までの7日間のはずが、松沢と過ごすのが楽しくて忘れていた。

このまま、本当の恋人同士になれたらいいのに。

そう思わずにはいられなかった。

第15話 結果発表

中央エリアは、イベントの結果を待つ人で溢れていた。

「あつ、あれ20番のカップルじゃない？」

「投票しましたよ〜！」

その声をかけられ、恥ずかしくて帽子をさらに深くかぶる。

「そついえば、優勝商品何か知ってた？」

松沢がふいに話しかけてくる。

「え？あ、なんかいつぱいいっぱいで、ちゃんとチラシ見てなかつ

…」

その時、キーンとマイクの音が響きわたった。

『お待たせしました！これよりカップルベストドレッサー賞の結果発表を行います！』

司会者と思われる女性が、イベントスペースに設けられた舞台上に上がった。

『皆さん、お買い物をした時にもらった投票用紙は、もう投函済みですかあ〜？』

優勝したカップルには、高級リゾートホテルのペア宿泊券を交通費つきで！

そして投票していただいた方の中から1名様にも、同じものをプレゼントいたしまーす!』

「そうなんだ」

「……知らなかったのかよ」

「あ、撮影ばかり気になってて、終わったらほっとしちゃって……」

呆れたように言われて、あわててそう弁解する。

ありえないとは思っけど、優勝したらペア宿泊券か……。実際にもらったとしても、まさか松沢と二人で行くなんて考えられないし、高級リゾートなんて友達と行く気にもなれない。

「あの……もし優勝したら、松沢さんが宿泊券を使ってくださいね」

「……行くやついねえよ」

「松沢さんなら、すぐに相手、できますよ」

「ふーん……お前はそれでいいんだ」

「え？」

見上げてみても、帽子に隠れた松沢の表情を読み取ることはできなかった。

『それでは開票結果を発表します! エントリーは全25組! まず3位の方から』

ざわざわとしていた会場が、少し静まった。呼ばれるわけがない、と思っではいても、もしかして……と期待する気持ちで胸がドキドキして落ち着かない。きゅっと繋いだ手に力を入れると、松沢は指を一本一本からめるように繋ぎなおしてくれた。

(あー…これ、恋人つなぎってやつだよね…)

心が、ほわっとする。

ほんの少しだけ、気付かれないように松沢の腕に身を寄せた。

3位、2位、と次々にエントリーナンバーが呼ばれ、舞台には嬉しそうに手を？いだカップルが並んでいる。

『それではいよいよ、優勝カップルの発表です！エントリーナンバーは……』

松沢の手に、少し力がこもった。

『6番!~!』

わあっと会場から歓声が上がった。キヤーキヤーとはしゃぎながら、1組のカップルが壇上に上がった。いた。

同じようなテイストの服を着た、かわいらしいカップルだ。

『あ〜……』

自分たちの周囲から、残念そうな声上がる。きつと、自分たちに投票してくれた人もいるのだろう。宿泊券を獲得する権利を失わせてしまったことに、申し訳ない気分になってしまう。

「……やっぱり、偽物の即席カップルじゃ、ダメですよね」

自嘲気味に、松沢を見上げながらそう言った。

美雪を見下ろす目は、優しかった。

あらためて舞台を見ると、ニコニコと笑う優勝カップルは、自分たちよりずっと距離が近く幸せそうに見える。

「……帰るか？」

「ハイ！」

元気よくそう答えた。

今日ここに来られただけでも、私は幸せだ。心からそう思えた。

『なお、3位と僅差だった20番のカップルには、審査員特別賞をおくりたいと思いまーす 舞台にどうぞ！』

え？

急に自分たちにスポットが当たったのがわからなかった。

「え、今なんて……」

「……俺も聞いてなかった」

『特別賞ですよー！！20番のカップルさん！舞台上上がったくださーい！！』

驚いて2人で顔を見合わせた。

周囲の人たちやスタッフに押されるようにして、慌てて舞台上がる。

司会者が、ニコニコと微笑みながらマイクを松沢に向けた。

『聞いたところによるとおー、お二人は今日が初デートだそうですね』

「あのヤロ……」

チツと松沢が舌打ちをした。

舞台の袖で、村西がニヤニヤとVサインと送っているのが見える。会場からは、意味もなく歓声と拍手が起こり、美雪は恥ずかしすぎてうつむくしかできない。

『いい思い出ができましたか！？』

「……はい。嬉しいです。ありがとうございます」

にっこりと営業スマイルを浮かべながら、松沢が言った。

『彼女さんも、こんな素敵な彼氏ができて幸せですね！』

「はっハイ?!あ、ハイ……」

急にマイクを向けられ、どもってしまった。

『では、お二人にはアウトレット内で使用できる3万円分の商品券が贈られます。ありがとうございます。』

商品を受け取りそくさと舞台を降りると、村西が2人にかけてよってきた。

「いやあ、惜しかったなあ。4位から1位までは、本当に僅差だったんだぞ」

「お前、余計なこと言つなよ」

ぱしつと松沢が村西の背中を叩いた。

「まあまあ、細かいことは気にすんな！」

またしてもわはははつと豪快に笑う。

「じゃ、俺ら行くから。これ、もらっていいんだな？」

松沢が、商品券の入った袋をひらひらと振る。

「おう、投票の結果なんだから、堂々と使ってくれ！」

村西はにっこりと笑って、美雪の方に向き直った。

「美雪ちゃん、今日はありがとう」

すつと手を差し出す。

おずおずとその手を握ると、ぎゅつと村西は力をこめた。

「大輔のこと、よろしくね。コイツ、無愛想だけどいいヤツだから」

「あの……ハイ……」

小さくそう言って頷いた。

“よろしく”…その言葉が、少しだけ自分の心を重くしたようだった。

会場では引き続き、投票者を対象にした抽選会が続いていた。その歓声を背に、暗くなつた道を2人で歩く。

「どうせなら、靴を買う前にもらいたかつたな」

二人でくすくすと笑う息が白い。

「これ、やるよ」

「えっ！？そんな、松沢さんが使ってください！」

「いいよ。女の子の方が、色々買い物とか多いだろ？」

「でも、今すぐ買いたいものなんて決められないし……。多分、私もうここに來ることそんなにないと思うんです。……電車だと、乗り継ぎとか結構大変で」

すぐに使えと言われても、こんな大金をすぐに使うことはできない。車のある松沢なら、また來ることもできるだろう。その相手にも、きつと困ることはない。

「松沢さんがいたから、もらった賞のようなものなんですから」

「ふーん…じゃあ俺がもらうか…」

そう言つて、パーカーのポケットに封筒を突っ込む。

「帰る前に、ちょっと寄っていい？」

欲しいものでもあるのだろうか。ハイ、と答えて松沢についていった。

第16話 思いがけないプレゼント

「あの、ここ……?」

松沢が入ったところは、高級そうな女性物のアクセサリーショップだった。

いらっしやいませ、と黒い制服を着た女性の店員が優しく微笑む。

「誰かにプレゼントですか?」

もしかして、私に選ぶのを手伝ってほしいとかかな。アクセサリーのセンスに自信はないんだけど……

「うん。俺の横でとぼけてる誰かさんに」

「……えっ?」

驚いている美雪をよそに、松沢はネックレスのカウンターへと近づいた。

「朝雑誌で見てたやつ……こういうのだったよな」

「あ、あれは、別に欲しくて見てた訳じゃなくて……」

「いらない?」

「いついえ……そういう訳じゃないですけど……」

とどろん声が小さくなる。なんて言えばいいのかが、わからない。

目の前のカウンターのの中には、キラキラと輝く小さなトップがついた、可愛いスキンジューエリーが並んでいた。

「あの、本当に……おねだりしたくて見てた訳じゃないんです……」
そう思われていたのなら、すごく恥ずかしいし不本意だ。
ちゃんと付き合っている訳ではないのに、そんな図々しいことはとてもできない。

「うん。わかってる。俺が美雪に買ってあげただけだから」
あまりに優しい声音に、そっと顔を見上げる。
微かに目を細め、今まで一番優しい顔で美雪を見つめていた。

どうして、そんな顔をするの？

私は、どうして、こんなにドキドキしているの？

見つめあう視線を、ふっと先にそらしたのは、松沢の方だった。

「……どれにする？」

「お好きなのをカウンターからお出ししますよ」
女性店員がカギを手にカウンターに近付き、中から何点かのネックレスを取り出した。

「あまり派手なのは上司として認めません」

ふざけたように松沢が言った。

「わ、わかってます…」

どうせなら、いつも肌身離さずつけていたい。
仕事中でも、邪魔にならないように。

「これなんていかがですか？お客様のイメージに合うと思いますよ」
そう言って目の前に出されたのは、華奢なゴールドの鎖に小さな小さなダイヤがついたネックレス。
キラキラと輝くそれは、よく見るとハートの形をしている。

「希少なハート型のダイヤを使っているんです」

「かわいい……」

思わず手にとり、掲げるように見ていると

「どうぞ、つけてみてください」

と、目の前に鏡を差し出された。

「つけてやるよ」

まごついてる美雪の手からネックレスを取り上げ、松沢が留め具をはずした。

「髪の毛」

「あっ、ハイ」

片手で髪を束ねると、松沢のひんやりとした指が軽く首に触れた。それだけで、鼓動が早くなる。

「わぁ……とても、お似合いです」

そう言われて鏡を覗き込むと、小さなハート型のダイヤが、美雪の胸の上でキラキラと光を放っていた。

「うん……似合う」

にこっと松沢が笑った。

「他のものもご覧になりますか？」

「あ、はい」

女性店員が他のカウンターに商品を取りに行く間に、慌てて自分でネックレスをはずし気付かれないようにそっと値札を見てみた。

(ー!ー!……こんなのも買ってもらえない!)

賞品としてもらった商品券の金額を、軽くオーバーしている。

そもそも、ここに並んでいるネックレスはほとんどにダイヤが使われているようで、全てが高額のようだ。

「……松沢さん？」

「ん?」

「あの……私、こんなの買ってもらえませんか……」

こそこそと小さい声で話しかける。

「なんで？」

「いえ……あの……」

「お待たせしました」

先ほどの店員が、何点かのネックレスをトレーに載せて戻ってきた。クロスモチーフにしたもの、バタフライに小さなダイヤが散りばめられたもの、シンプルな一つ石のもの……

キラキラとしたネックレスに、もう純粹に手を伸ばすことができない。

「これは？」

『M』のインシヤルをかたどったネックレスを、松沢が手にとった。

「あの……素敵ですけど……」

そう言ったまま黙っていると、強引に美雪の首にネックレスをつける。

「んー、かわいいですけど……お客様にはちょっとチェーンが長いかしら……」

“ここではチェーンの交換はしていないんです”

申し訳なさそうに店員がそう言う。

「やっぱり、最初のがいいかな？」

「そうですね、お客様の雰囲気にもお似合いです」

女の子にとってはきっと幸せな時間であるに違いないのに、それを素直に楽しむことができない。

松沢と店員があれこれと交互に差し出すネックレスを、複雑な気持ちで見つめていた。

「美雪は？どう思う？」

「ちょっと……考えさせてください」

気を利かせたのか、店員がカウンターを少し離れた。

「松沢さん、本当に私、欲しくて見ていた訳じゃないんです」

「だから、わかってるって」

「こんな高いもの……いただけません」

下を向いて、ふるふると首をふる。

「こづいこの、キレイ？」

「えっ、キレイな訳……ないじゃないですか」

指先で軽くハート型のダイヤに触れる。

正直言うと、自分の鎖骨で揺れていたダイヤの輝きを、忘れられそうにはない。

「でも……私……所詮7日間だけの彼女なのに」

自分で口にしておきながら、落ち込みそうになる。

「謙虚な姿勢はいいと思うけど、こういう時には素直に受け取ってくれる子の方が俺は好きだ」

鏡越しに松沢を見ると、ちょっと怒ったような顔をしていた。

「……そういう言い方、ずるいです」

「1年目の新人のクセに」

「関係ありません」

「美雪」

ふいに名前を呼ばれた。

「俺は、美雪に笑って受け取ってほしいんだけど」

そう言って、覗き込むように首を少しかがめて微笑む。

その笑顔は、反則だと思う。

ただ頷くしかできないから。

「お決まりですか？」

「はい、やっぱり最初のこれを」

いい？と目線で聞いてくる松沢に、黙ってうなずく。

夢みたい。

嘘みたい。

つい顔がにやけて、口元がゆるむ。

「そうそう。そういう顔してらって」

美雪の頭をポンポンと軽く叩くと、支払いのためにカウンターを離れた。

(本当に、本当にいいのかな……)

ぼーっとした思考のなかで、松沢の後姿を見つめていた。

第17話 気付いた気持ち

「ハイ」

店の外に出てから、赤いリボンがかけられたゴールドの包装紙の小さな包みを渡された。

「少し遅くなったクリスマスプレゼントってことで」

「……ありがとうございます。すっごく……すっごく嬉しいです」
嬉しさのあまり、思わず涙ぐみそうになる。
ちゃんと自分は、笑えているだろうか。

「うん」

一言そう言つと、松沢は美雪の手をきゅっと握った。

「帰るぞ」

「ハイ！」

車に乗り、もらった包みをバッグにしまおうとして、先ほど買った紺色のラッピングを見つけた。

（あ、これ……）

自分ももらったネックレスの値段を考えると、渡すのが少しためらわれる。

でも……

声をかけようと思った瞬間、車はエンジン音を響かせて走り出した。

（今渡したら、運転の邪魔だね。後で……かな）

そっと包みを元に戻した。

「どうした？開けてもいいぞ」

「えっ」

思わず手元の赤いリボンを見つめる。

「あの……手を、洗ってからにします……」

ハハツと笑い声が車内に響いた。

「遅くなっちゃったけど……本当に、夜食べなくていいのか？」

「ハイ、昼が遅かったのであまりお腹がすいてなくて……」

「そっか」

松沢の車は、美雪のマンションの前に止まっていた。

夕食に誘ってくれたけれど、結局昼食もコンビニの飲み物も全て奢ってもらっていたので、これ以上お金を出してもらうわけにはいかない。

それに、本当に胸がいっぱいで、食欲が全くなかった。

“さよなら”

そうやって車を降りればすぐなのに、そのタイミングがわからず黙りこむ。

「あ………」

ふと視線を落としたバッグの中に、紺色の包みが覗く。一瞬迷った後に、それを取り出した。

「これ、あの………」

「なに？」

驚いた顔をして、松沢が美雪の手元を見つめていた。

「あの、デートに連れて行ってくれたお礼に………」

「俺に？」

「はい」

緊張でかすかに震える指に、どうか気付かないで。そう思いながら、そっと松沢に包みを差し出した。

「……ありがとう。すげえ嬉しい」

にこっと笑う。

受け取ってもらえるかとか、色々悩んでいた気持ちが晴れる。

ああ、私もただ笑って受け取ればよかったのだと、少し後悔した。

「開けてもいい？……手、洗ってないけど」

ふふっと笑った。

「はい。喜んでもらえるか、わからないですけど」

それには何も答えず、松沢はかさかさ丁寧に包装紙を剥がしていき。

「へえ……いいね」

中から出てきたブレスレットを、手のひらに乗せて少し眺めた後に、すぐに自分の手首にはめてくれた。

シンプルなデザインは、細く骨ばった彼の手首によく似合った。

「これ、今日買ったの？」

「はい、あの……一人で見ている時に」

「全然気付かなかった。すげえ嬉しい」

さするよつに、ブレスレットを軽くなでる。

「お前もこつこつというの買ってたくせに、自分は受け取るのしぶるって

どういふことだよ」

「あ……すみません……」

「いや、謝んなくていいけど」

2人で顔を見合わせて笑った。

「やっぱり、お前も今開けて？」

「え、どうしてですか？」

「ん、つけてるところが見たいから」

もしもまだ辺りが明るかったら、赤くなった顔をきつとからかわれただろう。

黙ってうつむいたまま、赤いリボンをほどく。

金色の包装紙を解くと、ピンクの小さなジュエリーケースが見えた。静かにそおつとケースを開けると、小さなハート型のダイヤが、真ん中に収まっている。

夜の暗い車内でも、小さなそれはキラキラと輝いていた。

思わず、ふーっと静かに息を吐いて、松沢を見上げた。

「やっぱり……すごく、かわいいです……」

「つける？」

返事を待たずに、細く長い指が美雪の手元からジュエリーケースを優しく奪った。

片手で髪を束ねて横をむこうとしたら、

「そのまま、こっち向いてて」と言われた。

腕が、スツと自分の首の後ろにまわった。正面から、松沢の顔を見つめる形になって、2人の距離が近くなる。首の後ろにまわった手が、さらっと髪を優しく梳いた。昨日から何度も嗅いでいる、松沢の香りがする。

私、この香りが好きだ。

まっすぐに見つめることができなくて、少し視線を下げて彼の唇を見つめていた。留め具から離れた指が、鎖をそつとなぞり、首の下で揺れるダイヤに優しく触れた。

「うん……似合うよ」

そう言つて、また2人の距離は離れた。何も言わずに、少し伏せていた目を松沢に戻す。2人の視線が静かにからまったとき、下ろしたはずの松沢の腕が再び上がり、なぜか美雪の頬に軽く触れた。

お互い、何も言わなかった。

沈黙を破ったのは、またしても松沢の方だった。

「じゃあ、また明日」

美雪の頬に添えていた手が、すっと離れた。

「あ……は、はい！」

ぼうつとしていた美雪は、慌ててコートを着込みバッグを手にした。

「そういえば、お前こそ正月には帰省するのか？」

「いえ、あの、両親が温泉旅行に行っちゃうので……帰省したくてもできないんです」

「お前は行かないのか？」

「私がようやく就職して独り立ちしたんだし、2人で行きたいって言われちゃいまして」

「仲がいいんだな」

松沢が笑った。

ただそれだけなのに、目を奪われる自分がいる。

触れられた頬が、熱い。

「今日は本当にありがとうございました」

車の外で、深々と頭を下げた。

「うん、また明日。会社で。」

「はい、明日」

「あ」

閉めかけた車のサイドガラスが、途中で止まる。

「え？」

「俺、公私混同はしないからな」

にやっと笑う。

「わかってますって」

「友達に連絡しろよ」

「はい」

「おやすみ」

車の中から手がのび、くしゃくしゃと美雪の頭を撫でた。

「……はい。おやすみなさい」

今度こそ、ウィンドウが上まで閉まった。

“パタン”

テールランプが見えなくなるまで見送った後、のろのろと階段を上

り自分の部屋のドアを閉めた。

好きなのは、あの香りではなく
松沢自身なんだと
はつきりと自覚していた。

無意識に、首元のネックレスに手を触れる。
ずっと握っていた手、触れられた頬。
その全ての感触が急にこみあげてきて、意味もなく胸を押さえ、唇
をぎゅっと噛みしめる。

身体の中から、何かが溢れそう。
私の、許容範囲をオーバーしてる。

好き。

好きなんだ、あの人が。

でも

7日間、だけなのに。
7日たったら、どうすればいいの？

お風呂に入らなきゃ。
ご飯、何か食べなきゃ。
あ、瑠璃にも連絡しなきゃ。

そう思っても、浮かぶのは松沢の顔ばかりだった。

第18話 月曜日

『ありがとうございます〜』

なじみの店員の声に見送られながら、いきつけのコーヒーショップを後にする。

甘いカフェラテの入ったお気に入りのタンブラーを手にしたまま、会社への道のりを歩いていった。

結局……昨日はただソワソワとしているうちに時間がすぎ、何もできなかった。

こんなことなら一緒に夕食を食べればよかったと、何度後悔したかわからない。

眠りについた時間は遅かったはずなのに、朝も早く目が覚めてしまつて、どうせならいつもより早い時間に家を出た。

このまま、落ち着かない気持ちで家にいるくらいなら、まだ会社に行つて何かをしている方がいい気がした。

その方が、松沢にも早く会えるかもしれない。

「おはようございまーす……」

そおつとフロアに足を踏み入れたが、まだ美雪の部署は誰も出社していないようだった。

残念なような、ほっとしたような、複雑な気持ちだ。

バッグを机に置き、タンブラーの蓋を開けながらふと窓に目をやる。昨日もらったたくさんのサンプルの中でも、比較的落ち着いた色のアイシャドウと口紅を選んで使ってみた。

それでも、普段の自分の地味すぎるメイクを考えると、すさまじい

変化だと思う。

そつと、白いシャツの間から覗くネックレスに手を触れた。昨日から、クセのようになってしまっていた。

「おはよう。早いな」

びくつとして振り返ると、驚いたような顔をした松沢がいた。

「おつ、おはようございます！」

なるべく自然に、と思っていたのに、急に声をかけられたために声が裏返ってしまった。

「まつ……しゅ、主任も早いですね」

つい、松沢さんと呼びそうになる。

「早朝会議があるから」

そういえば、年末で早くに帰宅する人も多いからと、今日の役職会議は朝になっていたことを思い出した。

新人の自分には、全く関係ない話だけだ。

松沢はそのままスタスタと自分のデスクにつき、何やら資料を整理しているようだった。

「お茶でも淹れましょうか？」

「いや、いい」

素っ気ないその態度に、少ししゅんとなる。

先週であれば、当たり前で気にもならなかったその行動が、やけに冷たく感じる。

『公私混同はしない』

昨日かけられたその言葉を思い出す。

そうだ、こんなこと気にしちゃいけない。ここは、仕事をする場所なのだから。

気を取り直して、給湯室へと向かった。

就業まではまだ時間があつたので、ふきんをしぼり皆のデスクをふいていた。

特に指導された訳ではないが、綺麗な机で仕事をする方がいいだろうと、気付いた時にはそうしている。

「おはよう、藤崎さん。早いね〜」

「あ、おはようございます」

何人かの社員が出勤してきて、フロアには活気が満ちてくる。

「おはよう美雪ちゃん！朝から掃除？偉い！っていつか明日大掃除なの〜」

隣のデスクで、3年先輩にあたる成田かすみが出勤してきた。

美雪の直接の教育係でもあり、彼女から仕事を教わることが多い。

「おはようございます！」

「おっ元気だね〜。あー、そのネックレスかわいい〜」

すぐに気付くのは、さすが女性だ。

「あ……ありがとうございます」

「あれー？なんか今日、メイクもいつもと違うね。どうしたの？」

「え、あ、別に……何もないんですけど……」

「えー？なんかあやしいなあ。もしかしてデートお？」

にっこりと笑いながら、デスクに座る。

「いついえ！私、ふきん洗ってきますから」

「ふふっあやしい〜」

明るく笑う成田の声を背中に、慌てて給湯室へ向かった。ちよつとからかわれただけなのに、あからさまに動揺してしまった。

(恋愛イベントの、スキルが低い証拠だよなあ……)

ふきんを洗い、ついでに先週からたまっていたと思われる来客用の湯のみ茶碗を手早く洗う。

「藤崎」

「！」

聞きなれた声に、ぱつと振り向く。

給湯室の入り口に、もたれかかるように立つ松沢がいた。脇には、会議の資料と思われるファイルを抱えている。

「は、はい……」

（な、何……私、なんかした?!）

「会議、行ってくる。その後は、課長と一緒に得意先に年末の挨拶まわりに行くから」

「は、はい」

「多分、戻るのは遅くなる」

「はい。あの……何か、主任に提出するデータ、ありましたっけ……?」

配属したての頃に、何度も仕事のやり直しを命ぜられたことを思い出して、恐る恐る聞いてみる。

正月休みが近いので、急ぎの仕事は全て終わらせたつもりでいたけれど……何かもれていただろうか。

「……」

松沢は、黙ったまま美雪を見下ろしていた。

「あの……」

すっと腕が上がり、美雪の首を軽く撫でた。

それが、ネックレスの鎖をなぞっているということに気付くのに、

数秒かかった。

途端に、顔に血が上る。

「しゅ……」

「夜、メールするから」

かすかに笑い、そのまま給湯室を出て行くこととして一度振り向いた。

「顔、赤。そのまま戻るなよ」

「だっ誰のせいですか!」

ふっと鼻で笑う声が聞こえ、足音が遠ざかっていく。

(公私混同はしないって、言ってなかったっけ!?)

そう思いつつも、嬉しくて頬がゆるんでいた。

「んー……こんなとこかなあ。美雪ちゃん、そっちはどう?」

「はい、大体終わりました」

正月休みがすぐとあって、急ぎの仕事はほとんどない。

有給休暇をとっている人も少なくともはないため、フロアは静かなもの

だ。
取引先も、大手企業などはすでに休みに入っているとこころも多いのだから、当然ともいえる。

「このままいけば、定時に帰れそうだね。」

「そうですね。」

パタパタとパソコンを打ち込む手を休め、ふと松沢のデスクを眺める。

「主任……何時に戻るんですかね？」

「は？」

成田が驚いた顔してこちらを見た。

「なんで？なんか頼まれてた仕事あったっけ？」

「え、あ、いや……ないですけど。」

不思議そうな顔をする成田に、慌てて弁解をする。

「や、あの……年末なのに外回りも大変だな〜と思って……」

「まあねえ、課長と一緒にするのも憂鬱だよね。」

「ね！そうですね！」

ほっと胸をなでおろす。

「あの……コーヒーでも淹れましょうか？私も飲みますから」

「いいの？ありがとっ！」

にっこり笑う成田からマグカップを受け取り、給湯室へ向かう。
このまま、何事もなければ本当に早く帰れそうだ。

（今日はもう松沢さんに会えないかなあ。でもメールくれるって言うてたし！）

スキップでもしたくなるような気持ちだ。

「失礼しまーす」

給湯室には誰がいるようだったので、軽く声をかけて中に入る。

「……！！」

数人いた女性社員が、いつせいに自分を見たのがわかった。

“な・なに？”

その只ならぬ雰囲気、足が止まる。

「あの……何か……？」

「いえ、別に」

どこの部署かはわからないが、自分よりはずっと年上と思われる女

性社員がツンとそう言った。

給湯室はシーンと静まり、つき刺さる視線が痛い。

“なんか、聞かれたくない話でもしてたのかな……”

タイミングを誤ったことを軽く後悔しながら、備え付けのコーヒーサーバーからマグカップにコーヒーを注いだ。

「……あなた、情報課の藤崎さん？」

いきなり自分の名前を呼ばれて、驚いた。

「は、はい！」

「そう」

カップを持ったまま振り向いてみたが、どの女性が話しかけてきたのかわからなかった。

それに、彼女たちは黙って美雪を見つめるだけだった。

「あの……失礼しました」

何も話はないようなので、ぺこつと頭を下げて給湯室を出た。

途端に、後ろからヒソヒソと話す声が聞こえる。

なんなのだろう。

（……聞かれたくない話なら、あんなところで話さなきゃいいのに
な）

こっちは何もしていないのに、なんだか後味が悪い。
軽くため息をついて、自分のデスクに戻った。

「成田さん、どうぞ」

コトツと成田のデスクにコーヒーを置く。

「ありがとう。ちょっと休憩しようか 今日はずるさい主任もいな
いしねっ」

「そうですね」

成田の笑顔に、ほっとした気持ちになる。

「美雪ちゃんの淹れてくれたコーヒーは美味しいわあ〜」

「備え付けの、いつものやつですよ」

笑いながら一緒にコーヒーを飲む。

「そついえば……美雪ちゃんは明日の大掃除出るんだっけ？」

「あ、はい。1年目ですから」

明日の社をあげての大掃除は、一応各フロアから決まった人数の参加があれば、希望者は休んでもいいことになっていた。

普段の掃除に業者は入れていても、『一年に一度の大掃除くらいは自分たちでやる』、というのが社長の方針だ。

成田は、実家に帰省することもあって休みをとっているようだった。

「ごめんねー、一緒に出てあげられなくて」

「いえ、大丈夫です！新人ですから、当然です。私、帰省の予定もなかったですし」

一日中、掃除や資料整理で仕事というほどの仕事ではないし、勤務扱いにもなる。

それに、今となればフロアの責任者として松沢が出勤予定なのも嬉しかった。

「でもさー、主任とか山田さんとか、男ばっかだよ？大丈夫？」

成田はそう言いながらちらつと美雪を見た。

教育係として一緒に仕事をするようになってから、美雪の男の人が苦手なところには気付いているようだった。

「……大丈夫です。ずっと、苦手なままでいるわけにもいかないですし」

情報課にいるうちはデスクワークが主になるが、今後営業や広報に異動になることだってある。

そうなると、もっと積極的に外に出ていき交流が必要になるだろう。今の会社は好きだし、この就職難にせつかくこんな大手の会社に就職できたのだから、なるべく色んな仕事がしたい。

それに明日は松沢も勤務だし、きっと大丈夫だろうという気持ちがあった。

にっこり微笑みながらそう告げると、成田が意味ありげな顔をした。

「んー、やっぱり美雪ちゃん、なんかあった？」

「え？」

「ちょっと雰囲気変わったよね。そのネックレスだって、よく見ればハート型！」

「あつ、いや、これは本当に……なんでもないです……」

思わず赤くなって下を向く。

「ふふつ、いいけどさあ。彼氏できたら教えてね！美雪ちゃんのコイバナとか聞きたいし」

深く突っ込んで聞いてこないのが、成田の優しさだと思った。
彼女には、結婚を約束している恋人がいると聞いているが、きっと
素敵な人なのだろう。

「さつ、続き続き！」

成田の声に、気持ちを入れ替えてパソコンに向かった。

第19話 呼び出し

仕事は順調に定時に終わった。

一度課長から電話があり、遅くなるとの連絡が入ったようだった。

今日はやっぱり、このまま松沢には会えなそうだ。

「はあ、今年の仕事が終わったあ」

「お疲れサマでした！」

ふっつと成田が軽く息を吐く。

「ご飯でも食べに誘いたいとこだけど、実家に帰る用意が全然できてなくてさ。年が明けたら、ゆっくりご飯でも食べようね」

「はい！」

にっこりと笑う。

「じゃあ、お先に失礼します！皆サマよいお年を！！課長と主任にもよろしく願いします」

「お、成田、お土産持ってこいよ。藤崎さんは明日もよろしくね」

「はい、お先に失礼します」

帰り支度が終わり、まだ残っている同僚たちに挨拶をしてから成田と一緒にフロアを出ると、少し歩いたところで後ろから声がかかっ

た。

「藤崎さん？ちょっといい？」

振り向くと、先ほど給湯室にいた人と、名前の知らない別の課の女性社員が2人いた。

「はい……あの……」

なんだかわからないが、新人には断れない雰囲気だ。
イヤな予感がする。

「なんなんですか？」

何かを察した成田が、ちょっとキツイ顔をしながら美雪に代わって言った。

「私たちは、藤崎さんに用があるの」

素っ気なくそう言った女性は、見かけこそ綺麗だがいい感じがしない。

美雪の前へと一歩踏み出した成田を、“立ち去れ”とでも言わんばかりに睨みつけている。

どうやら、美雪一人だけを連れ出したいのは明らかだった。

「あの……成田さん、先に帰ってていいですから……」

「え、大丈夫？」

「はい。よくわかりませんが……」

正直、成田についてきて欲しかったが、それを許されるような雰囲気ではない。

何より、そんな迷惑をかける訳にもいかない。

成田が渋々という感じで行ってしまつと

「こつちに来てくれる？」

と、誰もいない会議室に連れていかれた。

「あなた、情報課の藤崎さんよね？」

会議室のドアを閉めると、声をかけてきた綺麗な女性が真つ先にそう言った。

改めて向き合ってみると、年齢は20代後半といったところだろうか。

スーツにはやや短いスカートに、フリルのついた薄い紫のブラウス。

髪も綺麗に巻かれていて、まさに昨日読んだ雑誌の『彼氏ウケファッション』が頭に浮かんだ。

短大時代も、こういうタイプの人とはあまり友達になれなかった。

「はい」

「昨日、どこかに行ってた？」

昨日……そう言われてハツとした。

これは、もしや。

「昨日、あなたアウトレットモールに行ってた？」

知っているのだ。昨日の今日で、もう？

やっぱり女の情報は早い。

嘘はつけないことを悟る。

「……はい。行きました……」

「誰と？」

「……」

どうして、今ここでそんなことを答えなければならないのだろう。
そう思うと口が開かない。

「言っ気なしい〜？」

今度は、横にいた女の人がそう言う。

「なんでここに連れてこられたか、わかる？」

「……わかりません」

「昨日、あなた松沢主任とアウトレットモールに行ってたんでしょ」

「……」

「なんかさあ、2人でイベントに出てたっていうじゃない？」

そういつて、今度は反対隣で携帯をいじっていた女性が、美雪に携帯の画面をつきつけた。

そこには、やや不鮮明ながら昨日撮影した写真がうつっていた。きつと会場に張り出されたものを、携帯で写したのだろう。

「コレ、帽子でちょっと顔隠してるけど、藤崎さんだよね？」

そこまでされては否定もできず、こくんと小さく頷いた。

「やっぱり」

「あんたさ、何年目よ？」

「何しに会社来てるわけ？」

「上司に色目使って付き合うなんて、10年早いんじゃない？」

矢継ぎ早にそう言われ、答えることができない。

「で、付き合ってるの？ “大輔”と」

一番最初に声をかけてきた綺麗な女性が、上から目線でそう言った。『大輔』、という言い方が癪に障った。

付き合ってるとも、付き合ってませんとも、どちらとも言えない。

「……………」

「黙ってないで、なんか言ったら？」

「……付き合っつて、ません……」

今はそう言うしかなかった。

「は？じゃあなんで、こんなイベントになんか出てるわけ？」

イライラとしたように、携帯をいじっていた女性が言う。

なんと答えればいいのか迷ったが、こんな状況でうまい言い訳が浮かぶ訳もなく、結局素直に言うことしかできなかった。

「……イベントの企画のに、人が足りないからって頼まれて……」

意外な答えが返ってきたようで、三人が一瞬顔を見合わせたのがわかった。

「どういうこと？」

「……イベント企画会社の人が松沢主任の大学時代のお友達だそうで、人が足りないし目玉になるから松沢主任に出てほしいってお願いしてまして……」

「そこにたまたま藤崎さんがいたってこと？」

「……はい」

たまたま、ではない。

でも今はそう返事をするので精いっぱいだった。

「じゃあ付き合っつてる訳じゃないのね？」

「……はい……」

念を押すように言われ仕方なくそう返事をする、途端に3人の態度が軟化した。

「そうなんだあ。私たち、てつきり藤本さんが松沢主任と付き合い
ってるかと思っただからあ」

「松沢主任、誰かと来てるみたいだった？」

今さらのように作り笑いで話をされても、笑う気にはなれない。

「……いえ」

「情報課の人に聞いてみたら、藤崎さんは“大人しいし男嫌いみた
いだ”って言うてたから、まさかとは思っただよねえ」

カゲで詮索されてたのだと思うと、なんだかムカムカとした。

「別に私たち藤崎さんを怖がらせようとか、そういうんじゃないん
だあ」

「藤崎さん、まだ1年目だから松沢主任のことよく知らないもんね」
だからなんだというのだ。

今さらのように“親切な先輩”面をする彼女たちに、どうしようも
ない嫌悪感が沸いた。

「ダメですか？」

「は？」

「付き合っちゃ、ダメなんですか？」

余計なことは言つなと心がブレーキをかけているのに、止まらなかつた。

美雪の言葉を聞いて、また三人が険悪なムードを漂わせたのがわかつた。

「どづいつこと？」

「アンタ、松沢主任のこと好きなの？」

「松沢主任は、サキと付き合ってたんだよ？」

どうやら、『サキ』というのが声をかけてきた綺麗な女性の名前らしかった。

「……過去の話ですよ？松沢さん、彼女はいないって言ってました」

そう言うと、三人がぐっとうまつた。

「別にいいけど？“大輔”があんたみたいなガキみたいの、相手にするとも思えないし」

『サキ』と呼ばれた女性が、吐き捨てるようにそういった。口から出る醜い言葉というのは、その人の美しさを奪うんだな……と思わずにはいられない。

大体社会人にもなって、この人たちはなんて幼いことをしているん

だろう。

「遊ばれればいいんじゃない？」

「今までもそういう子、いたしね〜」

「ホントホント。私たち教えてあげようとしただけなのにさ」

何も言えずに黙っていると、言いたい放題だ。

「感じわる。新人のくせに」

感じ悪いのはどっちだ、と心の中で呟く。

「もういいよ、いいっ」

ただ俯くばかりの美雪にしびれを切らしたのか、三人がぞろぞろと会議室のドアへと向かっていった。

嫌味のように会議室の電気をバチッと消され、暗闇の中美雪だけが取り残された。

「はぁ……」

暗い会議室の中で、ため息が出た。

予測しなかった事態だった。

いや、自分が甘かったんだ。

確かにかっこよくて素敵で、女子社員の中でもしゅっちゅう話題にのぼることが多いけど……

正式に付き合っている訳でもないのに、呼び出し。

それに社内に元カノがいるというのも初耳だった。

「趣味わる……」

ぼそつとつぶやく。

でも、綺麗な人だったな。あんな綺麗で大人な人と付き合ってたんだ。

こんな子供みたいな新人の自分を呼び出して、一言言わずにいられないなんて、きつとまだ松沢を好きなんだろう。

『付き合ってますん』

そう言っつて、笑っつてやり過ごせばよかつたのに、どうして反論なんてしてしまつたんだ。

“遊ばれればいいんじゃない？”

“今までにもそういう子いたし”

イヤな言葉が耳に残つていた。

第20話 相談相手

力無く会議室のドアを開け、外に出た。
さつきまでの楽しい気持ちは、とっくに吹き飛んでいた。

(とりあえず……帰る……)

エレベーターに向かおうとしたが、もしかして先ほどの3人に会ってしまいかもれないと思い、階段へと方向転換した。

トントンと、誰もいない階段を重い足取りで降りる。

怖そうな先輩社員に目をつけられたかもしれないことより、元彼女の存在の方が、何故かシヨックだった。

松沢は、自分よりも8つも年上の大人だ。

今まで、どんな付き合いをしてきたかなんてわからない。

仕事中は怖いけど、本当は優しい。

見た目のかつこよさだって。

そんな彼だから、きつとたくさんの恋愛をして、たくさんの彼女がいたに違いない。

美雪が知らないだけで、他にも社内には元カノはいるかもしれない。

それは、仕方がない。

(っっていうか……私7日間だけの彼女だしね。……関係ないか)

本当は『自分が彼女だ』と、はっきり言えなかったことが、悔しくて悲しかった。

思わず唇を噛みしめた瞬間、下からトントンと誰かが階段を上ってくる音が聞こえた。

(やだな、こんな時に。誰にも会いたくないのに)

慌てて階段の端により、うつむき下を向いて降りる。

「藤崎？」

「え？」

名前を呼ばれたことに驚いて顔を上げると、下から上ってきたその人物は、松沢だった。

「一番会いたくて、一番会いたくない人。」

「どうした？」

「え、あ……お、お疲れさまです！お先に失礼します！」

「一気にそう言っつて、ペこりと頭を下げて階段を下りようとした。」

「おい」

すれ違おうとした時に、ぐっと腕を掴まれる。

「どうした？」

「ビ、びびりして……」

思わず目を逸らす。

「なんかあったのか？」

「え……」

「なんで、そんな顔してるんだ？」

「そんな顔って……」

「一体どんな顔だと言うのだ。」

腕を掴まれたまま、黙ってうつむくしかない。

「何があった？」

もう一度、そう聞かれてさらにうつむいた。

「……なんでもないです」

「お前な…そんな顔して、なんでもないで誤魔化せると思ってるの？」

「……」

「仕事のことか？」

「……いえ……」

「じゃあなんだよ」

怒ったような顔をして、美雪の顔を覗き込む。
何故だか、涙が浮かびそうになった。

「あのっ、離してください!……誰かがきたら……困ります」

一瞬の間の後、松沢がすつと手を離れた。

「……悪い。余計な干渉だった」

そう言っつて、美雪の顔も見ずに背を向けた。
何も言わず、トントンと静かに階段を上っていく。

「……あ、あの!」

「何?」

いたたまれずに声をかけると、振り向きもせず前を向いたまま、怒ったような声が聞こえた。

その冷たい声色に、喉まで出かかっていた言葉が凍りつく。

「……いえ、お疲れさまでした」

くるつと背を向けて、走るように階段を下りた。

一気に下まで降りると、息が切れた。

なんとも言えず空しい気持ちで会社を出ようとした時に、入口で佇む人を見つけた。

「成田さん!」

「あ、美雪ちゃん!大丈夫だった?」

にっこりと優しく笑うその姿に、思わず引っ込んだ涙が再び出そうになる。

「はい……あの、もしかして、私を待っててくれたんですか？」

「そうだよー！あのままじゃ、気になって帰れないでしょ。おかげで主任の顔を拝めちゃったわ！」

あはは、と明るく笑う。

「なんかあったんでしょう？お茶でも飲みながら、聞いてもいい？」

「でも成田さん、実家に帰る準備は……？」

「あー、いいのいいの！相方にやらせればいいから！アイツ、今日仕事休みだったんだから！」

「相方って、彼氏さんですか？」

「うん。一応ね、一緒に住んでるんだ」

照れたように成田が笑った。

半年以上一緒に仕事をしていたが、一緒に住んでいるとは知らなかった。

思えば、成田の彼氏のこととはほとんど聞いたことがない。

「ね。行っっ！」

「はい……」

迷惑かもしれないと思いつつも、今は、成田の気遣いが嬉しかった。

「そうだったんだ……」

彼氏がいると嘘をついた事を話すのは恥ずかしかったが、昨日までの出来事を成田に話した。
一緒にベッドで寝ていたとか、ネックレスを買ってもらったとか、
言えないこともたくさんあったけれど。

「あの人、確か総務課の江藤沙希さんだと思う。主任と付き合ってたんだ……知らなかった」

知らないということは、成田が入社する3年以上前のことなのかもしれない。

そんなに前なのに、まだ松沢のことを想っているのだと思うと、複雑な気持ちだった。

「あの……、やっぱり主任って、会社の女性と色々あったんでしょ
うか？」

「え？」

「なんかあの人たちが、“遊ばれた子もいる”とかなんとか言ってたので……」

「うーん……どうかなあ……」

少し考える素振りを見せてから、成田が言った。

「噂でしかないんだけどね。私も入社した時は、松沢には気をつけるとか、冗談なのか本気なのかわからないことは結構聞いた」

「そうですか……」

「でもさ、一緒に仕事してたらわかるじゃない？ 厳しいし怖いしさあゝ。なんか……女として見られてる感覚がないっていうか。ありがたいけどね」

「少なくとも、遊んでるとか女好きには見えなんですけど」

「女好きというよりは、仕事好き？」

二人で顔を見合わせて、くすくすと笑う。

「……私が入社してから今まで、松沢主任と噂になるような子っていなかったと思う。主任自体があんな感じだしね」

暖かいココアを飲みながら、成田が言った。

「そうですか……」

「江藤さん、焦ったんだろうね」

「はあ……」

なんとなくいいかわからず、目の前のアイ스티ーの中の氷を、ストローでカラカラとかき混ぜる。

「それで、どうなの？」

「え？何がですか？」

「美雪ちゃん、松沢主任のこと、好きなの？」

身を乗り出すようにそう言われて、顔が熱くなった。

「あ……えと……わ、わかりません……」

語尾が、小さくなる。

「松沢主任、素敵な人だけどね。確かに社内に敵は多くなりそう」

「ていうか……多分、私なんか相手にされてないですよ」

「そう？でも彼氏のフリしてくれるって言ったんでしょ？」

「フリですよ、フリ。しかも一週間だけだし。多分、酔っぱらっちゃった失態の借りを返したいんですよ」

自嘲気味に笑うしかない。

先ほど階段で怒らせてしまったことも、気持ちを重くしていた。

「そうかなあ……。主任、そういう面倒なことには首突っ込まなそうな感じするけど」

そう言われても、嬉しいとも思えなかった。

「それにしても、金曜日の飲み会は女子会だったのか」

「え？」

いきなりそう切り出され、アイステイーを飲もうとした手が止まった。

「めずらしく美雪ちゃんルンルンで早く帰ったからさ、みんな『デートか?!』って言ってたんだよお」

「そうなんですか？」

そんな事を言われていたとは。

「短大時代の友達に会うの久しぶりだったんで……確かに浮かれてはいたかも」

「今日の朝、ホントなんか雰囲気変わったからさ。やっぱり金曜日はデートだったんだなって思ってたのに……まさか主任がらみだったとは」

ニヤニヤしながら、探るように美雪を見つめてくる。

「もう！成田さん！」

「えー、私間違ったことは言ってないよ！」

ニコニコと微笑まれ、落ち込んでいた気持ちが少し晴れる。成田と話していると、少しだけ素直になる自分がいた。

「さっき……階段で主任に会ったんですけど」

「あ、そういえば、主任戻ってきたもんね」

「……なにかあったのか？って言うてくれたのに……私、突き放すようなこと言っちゃって……」

松沢の怒ったような顔を思い出すと、また泣きたくなった。

「心配してくれてたのに、なんか、素直に言えなかったです……」

「そっか……」

胸元のネックレスに、手が伸びた。

朝、自分の首元をそつとなぞった指先を思い出す。

縮んだと思っていた距離が、今は遠い。

「仕方ないよ。江藤さんたちに言われた後だもん。元カノだって言われて、告げ口する訳にもいかないよねえ」

「……」

成田は慰めてくれたが、先ほどの自分の行動を考えると、何も言えなかった。

「私、正直男の人って苦手で……恋愛らしい恋愛ってあんまりしたことないんです」

「そうなんだ。苦手なんだろうなってのは、なんとなく思ってたけど」

「どっしたたら……いいのかな……」

ふと、そう漏らしていた。

「ふふっ。美雪ちゃん、可愛いね」

「えっ？」

顔を上げると、晴れやかに笑う成田がいた。

「大丈夫だよ。大したことじゃないって！」

「でも……」

「主任も、伊達に美雪ちゃんより8つも年上じゃないって！……んな可愛い姿見たら、すぐに許してくれるよ」

「か、可愛いって……」

同性とはいえ、思わず赤面してしまう。

「私も、そんなに経験がある方じゃないから上手くはいえないけど」

一呼吸おいて、美雪を見た。

「恋愛は、素直になったもん勝ちだと思っよ」

「……ハイ！」

まっすぐな成田の言葉が、美雪の心にストンと落ちるようだった。

「やっぱり美雪ちゃん、主任のことが好きなんだねえ」

「！ー！や、まだ……わかんないですってば！」

「あつ！素直になれって言ったばかりなのに！」

そう言っつて、また2人で笑いあつた。

あまり引きとめてはいけないと思いつつ、気付けば1時間以上も話をしていた。

カフェの外に出て、改めて成田に向き合う。

「せっかく早く帰れたのに……本当にすみませんでした」

「うっん、気にしないで！いい話聞けたし」

そう言っつて、ニヒヒっと笑つた。

「本当に、ありがとございました。今度、成田さんの彼氏の話も聞かせてくださいね」

「うん。今度ね。じゃあ……がんばってね」

背中をぽんと叩かれた。

「よいお年を！ー！主任によろしくー！ー」

「もう！」

にっこりと笑い、ひらひらと手を振りながら帰っていく後姿を見送った。

過去の恋愛を気にしても仕方ないし、うじうじとしていても本当の彼女になれる訳ではない。
気にするだけ、無駄なのかもしれない。

(っっていうか、私にはその資格ない？みたいな……)

電車の中でぼんやりと流れる景色を見ながら、携帯を開いた。

『松沢大輔』

たどったアドレスのその文字の上に、しばらくカーソルを置いてからパタンと画面を閉じる。

(帰ってから、メールしてみようかな……)

その時、マナーモードにしていた携帯がブルブルと震え、メールの受信を知らせた。

もしかして、とはやる気持ちで携帯を開いてみたけれど、それは瑠璃からのメールだった。

件名の『飲み会』という文字に、あっと声をあげそうになる。

(連絡するの、すっかり忘れてた……)

あんなに松沢は何度も気にしてきてくれたのに。
慌ててメールを開く。

『2日金曜日、新年会のセッティングしたよ。』

19時から、創作和食料理屋の“K”を予約しました！

急だったもんで、人数少なめ。

メンバーがはっきり決まったらまた連絡するね

理子が、未来のダンナさまを連れて参加するってさ。

美雪の彼氏も期待してまゝす！』

ふうっとため息をつく。

彼氏として、飲み会に一緒に行く　　そういう約束だった。

デートに連れていってくれたのも、男に免疫がなくデートの経験もない美雪のために、気まぐれでしてくれたにすぎない。

飲み会が終わったら、それで2人の仲は終わりだ。

それなのに、どこかで期待している。

本当の彼氏のように振る舞う松沢が、7日を過ぎても自分の側にいてくれるのではないかと。

(……そんな訳ないのにね)

『了解しました。』

連絡が遅れてごめんね。

そういえば、瑠璃が変なこと言うから、友達連れてった方がいいのかと言っていました。

行けるかどうか、確認してまたメールするね』

ピッと送信ボタンを押した。

いつそのこと飲み会が延期になれば
もう少しだけ、偽りでもいいから恋人同士でいられるのかな。

でも……

『早い方がいいだろ』

ファーストフード店でそう言った松沢の顔と
今日声をかけてきた、江藤沙希の顔が浮かぶ。

素直になろうと思っていたのに、素直になったところでこの恋の進め方がわからない。

(やっぱり、松沢さんからメールが来るまで待とう)

まだ自分からメールをするだけの勇氣はなく、怒らせてしまったか
もしれないけれど

『夜メールするから』

そう言ってくれた言葉を信じたかった。

しかし、その日、待ちわびたメールが届くことはなかった。

第21話 仕事納め・1

朝、起きて真つ先に携帯を開いてみたけれど、メールの受信はなかった。

（メールするって、言ったたのにな……）

昨日の自分の態度を棚に上げて、そんな批判めいた淋しい気持ちが広がる。

もしかして、7日間、彼氏を演じてくれると言った約束も、無しになっってしまうかもしれない。

それならそれで仕方ないと、半ば諦めに似た気持ちもあった。

「……うしっ！」

落ち込んでいても仕方ない。

（今日は仕事納めで大掃除だし、気合入れて仕事行かなきゃ！）

無理に自分に喝を入れて、出勤の準備をした。

通勤電車は、普段より人が少ない。

その代わりに、帰省すると見られる大荷物家族連れが目立って見えた。

（今日仕事に行ったら、明日は大晦日だもんね。当然かあ……）

今年の年越しは、どうなるかな。

去年までは実家に帰ったり友達と初詣に行ったり、彼氏がいらないな

りにそれなりに楽しい年末を過ごしていたように思う。
でも、みんなの前で彼氏がいると言ってしまった以上、今年は誰も誘ってくれないだろう。
頼みの両親も温泉旅行だ。

(せめて…… 1人でも年越しそばくらいは食べようっと)

寒空を1人、会社へと急いだ。

フロアは静かなものだ。

いつもは絶えずついているパソコンも消え、蛍光灯も一部しかついていない。

「おはようございます」

「おー、藤崎さんおはよう」

「御苦労さん」

今日は大掃除が主な仕事とあって、みんなスーツではなくラフな格好だった。

そっという自分も、私服に近い動きやすいパンツスタイルだ。

(あ……)

「おはよう」

松沢はちらりと美雪を見たあとに、いつものようにクールにそう言った。

「おはようございます……」

小さくそう言う。

ベージュのパンツに、シンプルな黒いカーディガン。

スーツではない姿に、二日前の初デートのことがよみがえる。

思わず見とれそうになり、ふいに、昨日会議室に呼び出されたことを思い出してしまった。

どこで、誰が見ているかわからない。

(今日は、あんまり主任の側に行かないでおこう……)

自然と、松沢から足が離れていた。

「じゃあこれ、倉庫の棚に置いてきて。情報課の棚ね」

「はい！」

どさつと段ボールを渡される。

成田が休みをとっている今日、自然と一緒に作業するのは成田の上の先輩である山田という男性社員になっていた。

山田の担当である、資料の保管と廃棄を手伝う。

普段は、仕事以外の会話をすることはない。

でも、実際話せばなんてことはなく、自分が不必要な壁を作っていたのだと感じた。

「あー、でもこれ藤崎さん1人だとしんどいよね。俺も一緒に行くわ」

持ったばかりの段ボールをひょいと取り上げられ、代わりにひとまわり小さな段ボールを渡される。

「え、大丈夫ですよ。両方持てます」

「いいからいいから」

そう促され、結局一緒に倉庫へ向かうために廊下を歩く。

「普段からきちんと片づけてれば、こういう時に何もなくていいんだけど」

「でも、なかなか難しいですよね」

総務課の前を通り過ぎる時に、こそっと中を覗く。

忙しそうに動く人の中に江藤の後姿が見えたような気がして、ぱっと視線を逸らした。

昨日のことが思い出され、思わず段ボールを抱く手に力が入る。

「藤崎さんてね」

「はっはい？」

ふいに山田に声をかけられ、身体がびくっと跳ね上がった。

「彼氏とか、いるの？」

「あ、え？」

「いや、別に変な意味はなくて……ただの興味っていうか！」

「はあ……」

なんと言っているのかわからず、言葉に詰まる。

「あ、あれ？俺、なんか変なこと聞いた？」

「いえ……」

少し考えてから、

「いません。彼氏」

ポツリとそう呟いた。

「そう、なんだ……」

二人の間に、不自然な沈黙が流れる。

松沢という時には特に何も思わなかった沈黙が、なんとも重苦しい。

「あの、山田さんは？」

耐えきれずに、そう聞いてみる。

「え？俺？」

「はい。彼女さん、いるんですか？」

「残念ながら……」

そう言つてハハツと笑つた。

「仕事してると、なかなか出会いがなくてね」

「そうですね……」

どことなく上の空にそう答えた。

「藤崎さん、短大だったよね？」

「あ、はい」

「どつ？合コンとか？」

いきなりのその言葉に、身体が硬くなる。

「あの……私、そういうの苦手で……」

「あー、そういう感じ、するよね。俺ともまともになかなか話してくれないもんね」

「はあ……」

なんでこんな話をしてるのかと、いたたまれない気持ちになる。

倉庫が見えてきて、ほっとした。

それでもまだ折り返し地点にすぎない。

山田の指示のもと資料を倉庫に片づけ、再び二人でフロアに戻る道のりを歩く。

「そういえば、昼飯はみんなまで食べに行くらしいよ」

「え？そんなんですか？」

山田の言葉に、驚いて顔を見上げる。

「うん。毎年恒例。昼食は会社負担で出してくれるから、みんなまで食べに行くんだって」

「そんなんですか……」

「いつも課ごとに固まって食べるからさ、藤崎さんも一緒に食べようよ」

「は、はあ……」

それじゃあ、このまま松沢をさけている訳にもいかない。

昼食持参であれば、一人でフロアに残ることも可能だったのに。朝、昼食を買ってこなかったことが悔やまれた。

「あれ……主任、どうしたんですか？」

山田の声にどきつとして顔を上げると、珍しく急いだ様子でこちらに向かってくる松沢がいた。

「お前ら、今持ってた段ボール、廃棄した訳じゃないよな？」

厳しい声でそう言っ。

「え？保管分ですよ？倉庫に置いてきましたけど」

「あの小さい方の段ボール、課長の資料だよ。保管分はこっち」
ため息をつき、そう言って脇に抱えていた段ボールを差し出す。

「え〜！？すみません！気付かなかった……」

「浮かれて仕事してるんじゃないよ」

山田に向かって冷たく言った。

「す、すぐに取りってきますから！」

「いい。お前がいなかったら資料整理が進まないだろ。フロアで待つてる連中いるから戻れ」

そう言って美雪を見下ろす。

「藤崎。お前がついてきて場所を教える」

「は、はい……」

“ごめん”と口パクで謝りながら、山田がフロアに駆けていった。

第22話 仕事納め・2

黙って、松沢の広い背中を見ながら歩いていた。
気まずい。

昨日の自分の態度をあやまりたいけれど、メールが来なかったことで勇気が出なかった。

（怒ってるのかな……それとも、もう私のことなんて何も気にしてないとか）

ふと、段ボールを抱える松沢の左手に目があった。

その手首には、腕時計と並んで、2日前に美雪がプレゼントしたブレスレットが鈍く光っている。

「あ！」

「……なんだ？」

不機嫌全開という顔で、松沢が振り向く。

「い、いえ！なんでもありません……」

冷たい声色に下を向いて慌てて弁解をしたけれど、ふと顔がゆるむ。

（あのブレスレットをつけてくれてるってことは……嫌われてないよね？）

前を向きスタスタと歩く松沢に、小走りですいていった。

倉庫として使われている、暗くてやや湿っぽい室内に入る。

「どこに置いた？」

「あ、こっちの棚です」

案内をしようと松沢の前を歩くと、パタンとドアを閉める音が聞こえた。

「これ、この上の……」

山田が置いてくれた段ボールを下ろそうと背伸びをすると、ひよいつとそれを取り上げた。

手早く蓋を開け中身を確認する松沢を、黙って見つめる。

「……なんで俺のこと避けてんの？」

段ボールに視線を注いだまま、こちらを見ずに言った思いがけない言葉に、思わず身体が硬くなった。

「なんの……ことでしょうか？」

「昨日の夜から、なんだか話しかけてほしくないみたいだから、こっちは気をつかってるんですが」

そう言いながら、段ボールを脇に抱えていたものと差し替え、軽々と棚に戻す。

「せめて、避ける理由くらい教えてくれない？」

資料用の段ボールを小脇に抱えたまま、美雪の横に棚へと寄りかかり軽くため息をついた。

「……避けてる……つもりはないです……」

「……ふーん」

いかにも信じてない様子で言いながら、じつと美雪を見下ろす。

「お前が変な駆け引きとかできないのは知ってるから……俺の勘違いだっただのか？」

「え？」

その言葉の意味を聞きなおそうとした時、ガチャッと倉庫室ドアを回す音が聞こえた。

「……！」

驚いて思わずその場にしゃがみ込む。

昨日のこともあり、松沢と二人きりでこんなところにいるところを見られてはマズイという気持ちかはたらいた。

“なんで隠れるんだよ”

そう言いたそうな顔をしながら、松沢までもがつかられて屈みこんだ。

「「これどこに置けばいいんだっけ？」」

「「適当に置いとけばいいんじゃない？中身がわかれば大丈夫でしょ」」

ケラケラと明るく話ながら、段ボールを抱えたどこかの課の女性2人が入ってきた。棚や段ボール、物品で溢れる倉庫は死角が多い。彼女たちが近寄った棚からは、美雪と松沢は見えないに違いない。ほっと息をつく。

『どうしたんだ？』

小さく、松沢が言った。

顔を上げると、心配そうな顔で美雪をのぞきこんでいる。ふいに伸びてきた細く長い指が、優しく美雪の髪を梳いた。

「そついえばさ、情報課の松沢主任の私服見た？」

いきなり話題に出た名前に、どきっとする。

「見た見た、スーツ姿もかっこいいけど、私服も爽やかだよね。目の保養になるわ」

「なんで結婚してないんだろ？彼女とかいないのかな？」

「さあ。でも男は30すぎても全然オツケーでしょ？」

どうやら昨日江藤に言われたことは、まだそれほど社内で噂になっている訳ではないらしい。

少し安心して、そつと松沢の顔を見ると、自分が話題がのぼっていることなど何とも思っていないようだ。

まるで聞こえてないかのように、黙って指先に絡む美雪の髪を見つめている。

(松沢さんくらいかっこいいと……噂されるのなんて、なんとも思わないのかな)

ふと目が合う。

彼の目に自分が映っているのがわかり、それほど近い距離に向き合っている事実気付く。

「かっこいいといえば営業企画の盛永さんも、かっこよかったよ」

「えー、私まだ見てない! つうかあんた今日何してんの?」

「いつもはスーツのイケメンたちの私服を拝めるのも、大掃除の醍醐味なんだよね」

あははっと笑いながら彼女たちはパタン、とドアを閉めた。

遠ざかる足音に、はぁーと安堵のため息をついていると、すくつと松沢が立ち上がった。

「本当にお前、どうしたんだよ?」

すつと差しのべられた手を、素直に掴むことができない。

「ちょっと……人に、言われまして」

「何を?」

「……主任と、付き合ってるのかって……」

「はあー？」

呆れた声が聞こえた。

「で？」

「え……」

「それで？」

「それでって……だ、だから、あんまり近くにいない方がいいかな
ーと……」

「なんでそうなるんだ？」

「な、なんでって……」

思わずうつむく。

「わ、私みたいなガキみたいの、主任が相手にするわけないって言
われて」

「……」

「避けてたつていうか……ど、どうしていいかわからなくて」

何故かじわっと涙が浮かんだ。

「どうせ、7日間だけの約束なのに……私となんて噂になったら、
主任に申し訳ないし……」

「……そう」

軽くため息をつきながら、もう一度手が差し伸べられた。少し迷ってから、黙ってその手を掴み、立ち上がる。

ぼん、と自分の頭の上に優しく手がのせられたのがわかった。

「そっか」

頭上の手が、ゆっくりと動くのがわかる。

ただ黙って頭を撫でられていることに、何故か涙腺が緩みそうになった。

「……彼女3日目のお前には、それはキツイか」

「……」

違っんです。

本当の彼女ならまだいい。

彼女だと、堂々と言えなかったことが悲しくて空しかったんです。そう言いたくて、言えなかった。

「俺は先に戻るから、お前はみんなの分の缶コーヒーでも買ってきて」

倉庫を出ると、松沢からお金を渡された。

一緒にフロアに戻るの気が引けたし、少し気持ちもリセットさせ

たかったので、素直にそれを受け取る。

「藤崎」

「はい？」

「お前、付き合ってるのか聞かれて、なんて答えたの？」

「……付き合ってますんって、言いました……」

「……そっか。わかった」

そう言うと松沢はくるりと踵をかえし、スタスタと廊下を歩いていく。

その背中を数秒見つめてから、自動販売機へと向かった。

どういっつもりで自分にそんな質問したのか、疑問が浮かんだけれども、答えはみえない。

とりあえず、自分の昨日の行動の意味をわかってもらえただけでもよかったのかもしれない。

怒ったり嫌いだったり、そういう感情で避けていた訳ではないことを。

冷たい缶コーヒーを抱え、今度は一人でフロアに戻った。

第23話 仕事納め・3

午前中の作業が順調に終了した。

山田が言ったように、やはり昼食は団体でとるらしい。

少し憂鬱な気持ちでトイレに向かおうとした時、ふと前から歩いてきた人たちに美雪の顔が強張った。

「あ……」

見上げた顔がひきつる。

「あら藤崎さん」

にやにやと笑うその姿は、昨日美雪を呼び出したのと全く一緒のメンバーだった。

総務課を通った時に見かけた後姿は、やっぱり江藤だったらしい。

大掃除だというのにスキがなく女性らしい姿を見ると、色気も何もないパンツスタイルの自分がひどく惨めに思えた。

「あなたもお昼？」

「は、はい……課のみんなで……」

「偶然！総務課も一緒なんだよねー」

「今日はいつもの子と一緒にじゃないの？」

「一緒の子とは、成田のことだろうか。」

成田の存在がないことに気が大きくなったのか、たたみかけるよう

に言葉が続く。

「まさか、松沢主任と一緒に食べるとか、ないよね？」

ぎらつとした視線が自分に向けられた。鋭い視線のその理由は、痛いほどわかる。

「身の程、わきまえなさいよね」

江藤が捨て台詞のようにそう言い、美雪の横をすり抜けていった。甘い、ローズの香りがする。

自分では決してつけることのない大人っぽい香水の香りが、余計に敗北感をかきたてていた。

「藤崎さん！よかったら一緒に食べようよ！」

一人離れたテーブルにつこうとしたら、山田が誘いに来た。断る理由は見当たらない。それでも咄嗟に松沢の姿を探しそうになったが、先ほど江藤たちに釘をさされた事を思い出した。それに、松沢はすでに他の課の人とテーブルについているようだ。女性の姿も見える。

「はい…私でよかったです」

他愛もない話をしながらも、松沢のことが気になって仕方なかった。気にしてはいけない、気にする資格はないと思って、どうしても目がいく。

側にいる女性は、誰だろうか？

「藤崎さん？」

「え？」

「どうしたの、ぼーっとして」

気づくと目の前に座る山田が、心配そうに美雪の顔を覗きこんでいた。

「あ、いえ…なんでもありません」

慌てて笑顔を作る。

「そう？藤崎さん、いつも成田さんといるからさあ〜なかなか話す機会がなくて」

「はあ……」

今は、成田がないことが心細くてたまらない。

作り笑いは心底疲れたし、ニコニコと向けられる笑顔もなんだか居心地が悪い。

なんとか昼食を終えてフロアに戻った時には、何故だかどっと疲れが押し寄せた。

（松沢さんと食事した時には……楽しいとしか思わなかったのにな）

2日前の出来事が、すでにずっと前のような気がしていた。

大掃除も資料整理も順調に終わりを迎えようとしていた。普段の終業時間より、大幅に早く終わりそうだ。明日からの正月休みを、待ちわびる声があちこちから聞こえる。

「本日はお疲れ様でしたー!!」

ようやく全員の作業が終了し、総務課の課長がそう皆に声をかけてまわっていた。

「ふいふ、今年もお疲れ様でした」

「すっきりしましたねー」

お酒の代わりにとジューズを振る舞われ、あちこちでカッソと缶をぶつける音が響く。

「じゃあ一息ついたやつから順次自由解散で。お疲れさま」

解放感に満ちたフロアで、松沢が一言そう言った。初めての仕事納めが無事終わったことに、ホッする。

(週末買い物に行けなかったし……今日はゆっくり買い物でもして帰ろう。美味しいご飯でも食べて)

もやもやする気持ちをふっきるのには、それが一番いい。今は少しでも早く会社から退散したかった。

身の回りの荷物を片付けコートを手に持ったとき、

「藤崎さんー!」

背後から声がかかった。

山田がコートを手にし少し頬を赤らめて、ためらうような顔をしている。

「あのさ、今日……これから暇？せつかく色々話せたんだし、よかったら」

「山田」

最後まで言い終わらないうちに、かぶさるように松沢の声が聞こえた。

振り返ると、いつの間にか美雪のすぐ後ろに立っている。

その距離に驚いている美雪にかまう様子はなく、にやりと何かをたくらんでいるかのような笑顔が浮かべた。

「悪いな、コイツ先約があるから」

「へ？」

きよとんとする山田の目の前で、ぐっと美雪の肘を掴んだ。

「行くぞ」

「え？」

今度は美雪がきよとんとする番だった。

倉庫で話をした後は、今日一日は全く接点がなかった。急にそんなことを言われても、意味がわからない。

「あ、あの……何で…?」

恐る恐る声をかけてみるが、返事はない。

美雪の腕を掴む松沢に、フロアの注目が集まるのがわかる。

「あの、ちょ、主任!?!」

「じゃ、みなさんお疲れ。よいお年を」

慌てる美雪など気にする様子もなく、なんだか珍しく機嫌の良さそうに松沢に引きずられるようにして、フロアを後にした。ぽかんと二人を見つめる山田を残して。

「あの、主任!?!」

相変わらず、エレベーターには乗らずに階段に向かう。

「……エレベーター、使わないんですか」

「28のおっさんですから。健康のために」

違う、聞きたいのはそうではない。

「な、なんで……」

「なんで?」

「みんな……見えましたよ」

「何が？」

「だから！手が……」

腕を掴んでいた手が、いつの間にか美雪の手を握っている。

「アホか。お前もつと堂々としてる。男苦手なくせに、山田に寄り
れてんじゃねーよ」

吐き捨てるようにそう言いつと、急に立ち止まる。

「お前と帰ろうと思って、今日は車で来てただけだ」

そう言いながら、優しく美雪の目を見つめた。

「やめる？」

「や、やめません！」

思わず勢いよくそう言いつと、ふつと松沢が笑った。

その笑顔に、ぎゅつと胸が苦しくなる。

やっと、ちゃんと松沢の笑顔を見れた気分だった。

それだけで、昨日からのイヤなことが吹き飛ばすような気持ちだ。

「車まわしてくるから。玄関で待ってて」

「え、ついて行っちゃダメですか？」

「え」

何気なく言った一言に、松沢が驚いたようにこちらを見た。

「……ダメじゃないけど、駐車場ちょっと遠いし今日は寒いから。風邪ひいたら困るし」

そう言って、少し困ったような顔をした。

「お前、何気に発言がさあ……。狙ってる？いちいち、俺のツボにはまって困る」

握っていた手に、きゅっと静かに力がこもった。

(そ、そんなつもりじゃ、なかったのに)

「そんなに離れ難い？」

「そ、そういう意味じゃないです！早く行ってください！」

ニヤニヤと顔を覗きこまれて、慌てて手を離して松沢の背中を押す。

「すぐ来るから。これ持ってた」

そう言って、手に持っていたマフラーがふわりと首に巻かれた。

(あ)

たった二日ぶりなのに、懐かしいような松沢の香りがした。

第24話 今年最後の仕事の後に

マフラーに顔を埋めながら、会社を出て少し歩いたところで松沢を待っていた。

“着いたらメールするから、中で待ってて”

そう言われたけれど、なんだか落ち着かなくて中にはいられなかった。

「さむ……」

随分と気温が低い。

（そういえば、大晦日から元旦にかけて、寒波が到来するって言うてたっけ……）

寒い中、車を取りに行ってくれた松沢の気遣いが嬉しかった。

気温が低くてもイヤな気持ちがないのは、自分が浮かれているせいだろうか。

むしろ寒さが心地いいくらいだった。

はーっと空中に白い息を撒き散らしていると、背後からコツコツとヒールの音が聞こえた。

何気なく振り向くと、そこにはいたのは江藤沙希だった。

ぎくっとして身体が縮こまる。

「あら……こんばんは」

「お、お疲れさまです……」

かるうじてそう答えたものの、2人の間に沈黙が流れる。

黒いコートにファーのマフラー。

ヒールの高いハイブーツの姿には、相変わらず隙がない。
素敵な格好だと、素直にそう思う。

まっすぐに見ることができず、視線を落としたときにふと気付いた。

(もしかして……ここで松沢さんを待っていると、鉢合わせ?)

どうしようと思ったのと、携帯がメールの受信を知らせたのは、ほぼ同時だった。

『もうすぐ着く』

慌てて携帯を開いてメールを確認した瞬間、美雪の前に黒い車がぴたっと止まった。

「中で待ってるって言ったのに」

そう言いながら降りてきた松沢は、江藤の顔を見て一瞬表情が止まった。

「……大輔」

ひきつった顔で、江藤がそう言った。

「江藤、お疲れさん」

あくまで仕事の延長だと言わんばかりに、松沢は静かにそう言った。

「どうして？」

耐えかねた様子で、江藤が口を開いた。

「……………何が？」

「どうして、藤崎さんと帰るの？」

「どうしてって言われても」

そう言っつて松沢は、外にいたせいで冷たくなった美雪の手をとる。

「付き合ってるから」

驚いたのは、江藤だけではない。

美雪もまた、目を見開いて松沢を見上げずにいられなかった。

「だって、この子付き合っついてないって……………!!」

「……………美雪に変なこと言ったの、もしかしてお前だったの？」

松沢がはーっとため息をつき、バツが悪そうに江藤が顔を歪めた。間に挟まれ、一人居心地が悪い。

「自分よりずっと上の先輩に凄まれたら、“付き合っついてない”って言わざるを得ないだろ」

「私の時は隠してたくせに、今回はオープンなのね」

松沢の言葉に、江藤が嫌味のようにそう言った。

“私の時は”

その言葉を聞いて、やっぱり2人は付き合っていたのだと今さらのように思った。

きっと、2人が並ぶと素敵なカップルだったに違いない。

「ほつとくと、悪いムシがつきそうなもんで」

その言葉で我に返る。

悪い虫つて…もしかして、山田のことを言っているのだろうか？

「大事にしたいから」

心臓が、ぎゅっと掴まれたようだ。

これも、彼氏の演技？

だとしたら、残酷すぎる。

彼氏の約束は7日間だけど、それが終わったとき、私は7日前の私には戻れそうにない。

江藤は黙ってこちらを見つめていた。

傷ついているのかもしれないと思ったけど、何も言えない。

この場で口を開くのが一番ふさわしくない人がいるとしたら、それは間違いなく自分だろうと思うから。

「……もうわかったわ。お疲れ様。よいお年を」

そう言ってくるつと背中を向けた。
そして数歩歩きかけて、振り返った。

「ハタチの子に手をつけるなんて、おじさんね」

「オイ！」

捨て台詞のようなその言葉の後に、江藤がにこつと笑った。
その笑顔は美雪には向けられてはいなかったけれど、悲しい笑顔だった。

別れてもずっと好きだった人に新しい彼女ができて、目の前で「大事にしたい」と言われたときに
自分はあるな風に笑えるだろうか

まだまだ恋愛一年生で、彼女としてはスタートラインにすら立っていないけど
その辛さは、あの笑顔を見ると少しわかる気がした。

この恋を7日間で終わらせたくない。
期限つきの恋にしたくない。

松沢の手を握る力を少し強めながら、初めて、そう思った。

「どっぞ」

「どっぞも……」

助手席のドアを開ける松沢に礼を言って、車に乗り込んだ。なんとなく、それ以上は言葉を発することができない。車が静かに走り出した。

「ごめん。嫌な思いさせて」

松沢がぼつりとそう言った。

「いえ……」

「昨日今日といいアウトレットのイベントといい、なんか嫌な思いさせてばっかだな」

「……」

そんなことはない。少なくとも今日は、嫌な気持ちではないのに。そう思ったけど、何も言えなかった。

「……たった7日なのに、彼氏失格だな」

ふ、と松沢が苦笑した。

「あの……江藤さんと、付き合ってたんですか？」

本当の彼女でもないのに、こんなことを聞いていいものかと思ったけれど、聞かないで黙っていることもできない。

「んー……昔ね。アイツ、同期なんだ」

確かに、言われてみれば同じくらいだと今さらのように気付いた。

「……………他にも？」

「え？」

「他にも付き合ってた人って、社内にいるんですか？」

「いや。……………ちょっと懲りたから、社内ではなるべく彼女は作らないようにしてたけど」

「懲りた？」

「ちょっとね。……………あまりいい別れ方じゃなかったから、色々ある」と無いこと言われて

「……………」

「別に仕事に支障はないから、気にしたことはないけど」

“遊ばれた子もいる”

江藤たちに言われた言葉を、ふいに思い出す。

「江藤さん、きっとまだ松沢さんのこと好きなんですね」

「どうかな」

松沢は軽くそう言ったけれど、きっとそれは間違いないだろう。
好きな人の悪い噂を流してまで、彼の心が他の誰かに向くことを認

められなかったのだとわかる。
少し前、仕事だけの付き合いしかなかった頃には、悪い噂を聞いた
ら信じてしまっていたと思う。

でも。

松沢は、少なくとも美雪に対しては優しくして誠実だ。

（それは、本当は付き合い合ってる訳じゃなくて、部下だから？）
そう思う気持ちもあるけど、心のどこかで松沢を信じたい気持ちがある。

色々聞きたいことはあったはずなのに、一緒にいると口にできない
のが不思議だ。

松沢に目をやると、美雪が贈ったブレスレットが目に入る。

「あ

「何？」

「ブレスレット……してくれて、ありがとうございます」

「うん」

そう言いながら、ハンドルを握る左手首を軽く撫でる。

「今日、ずっとしてたよ」

「はい、知ってます」

「知ってたの？」

「えと……倉庫に行く時に気付いて……」

「へえ。てつきり、気付いてないかと思ってた」

「え、どうしてですか？」

その言い方に、ちょっとひっかかる。

「山田と一緒に、楽しそうに作業してたから」

「えっ！」

「嘘だよ」

目だけを美雪に向けながら、微かに笑う。

「助けてやれなくてゴメン。でも、昨日からお前がどう思ってるかわからなかったから」

照れたようなその言い方に、自分の態度を悔やまずにはいられなかった。

松沢のような大人でも、気持ちが変わらなったり不安になったりするのだろうか。

そう思いながら、暗くなり始めた車内で松沢の横顔を見つめた。

「今日はしてる？」

「何がですか？」

きよとんとして尋ねる。

「ネックレス」

ふと胸元に手を伸ばし、今日はタートルネックのカットソーを着ていたので、見えてないことを思い出した。

「はい、服の下にですけど」

「もうはずしたのかと思った」

「あんまり見えると……なんか恥ずかしいというか」

昨日のことがあってから、ネックレスを見るのが少し辛かった。

鏡越しにネックレスを見つめていると、ハート型のダイヤの煌めきに自分が負けてしまっている気がしたのだ。

「そっか、よく似合うのに」

ぼつりと松沢が言った。

「……明日からは、見えるような服を着ます」

「素直でよろしい」

にこっと笑った松沢が、軽くぼんと美雪の頭を撫でた。

この二日で離れた距離が、少しずつ少しずつ、また縮んでいる気がした。
自分には、恋の駆け引きなんてできないから、素直になるしかないんだ。
素直になることで、少しでも本当の恋に近付けるのなら。

てっきり自宅に向かっているとばかり思っていたのに、どうやら違うみたいだ。

「あの、どこへ向かっているんですか？」

「オフィスラブと言えば、仕事帰りのデートでしょ」
そう言ってニッと笑った。

「オフィスラブって」

つついられて、ふふっと笑う。

「今日もしかして、なんか用事あった？」

「あ、いえ。食料品の買い物に行こうかなーって思ってたくらいです」

「明日車で連れてってやるよ」

さらっと言ったその一言が、明日も一緒にいられることを表している、思わず口の端が上がりそうになる。

“これも、練習ですか？”

口から出てしまいそんな言葉と気持ちを、必死に抑える。

練習だっていい。

彼氏彼女のふりでもいい。

今は、一緒にいられることが大事なんだと、恋愛一年生の自分でもわかるから。

「……優しいですね」

そう言いながら、松沢の横顔を見つめた。

「誰にでもって訳じゃないけどね」

ちらりと横目で美雪を見る。

その目をじっと見つめてしまいそうになって、慌てて前を見つめる。

胸がドキドキする。

「どこ行きたいって聞いても、どうせ決められないだろ？」

「……すみませんねー」

自分の気持ちを誤魔化すように、わざとおどけて言った。

「とりあえず食事行くか。この前行けなかったしな」

「はい！」

今年最後の仕事が終わった日に、こんな御褒美があるなんて想像もしていなかった。

思わずニコニコと笑顔でいたら、松沢の視線を感じた。信号待ちの間、こちらを見ているのに気付かなかった。

「え……あの？」

「いや、楽しそうだなと」

そう言って目を細めた。

「はい……楽しいです」

松沢は楽しくないのだろうかと思ってしまっ。

「連れ出す甲斐があるよ」

伸びた左手が、軽く美雪の髪をなぞる。

「お前が喜ぶと、俺も嬉しい」

頬を撫でた暖かい手に、そっと顔を寄せた。

第25話 スケートデート・1

「うわあ〜！寒い！すごい！」

「なんだよその歓声」

ぷつと松沢が笑う。

目の前には、ビルに囲まれたスケートリンクが広がっていた。

リンクの周辺にはイルミネーションが灯り、氷盤にも様々な色のスポットが当たっている。

そんなに寒くはないと思っていたのに、氷の側にいるからか冷気を感じていた。

「想像してたより、ちょっと寒いですね」

そうやって松沢を見上げると、ぎゅっと握りしめていた美雪の手を静かにとった。

「手袋、買つか」

そう言ってワゴンに近付く。

「はい！」

弾むように、松沢の後に続いた。

松沢が連れて行ってくれたレストランで食事をしている時に、

『スケート、行ってみる？』

そう言っつて、チケットを見せてくれた。

「取引先にペアチケットもらったの、昨日思い出して」

「スケート、ですか……。私小さい頃に一度、行ったつきりで。滑れるかな」

正直、無様な姿を見せるのは恥ずかしい。

「少しは教えてやれるよ」

「松沢さん、滑れるんですか？」

「一応、北国育ちですから」

松沢がスケートを滑る姿を、見てみたいという興味が先に立つ。

「じゃあ、行きたいです！」

勢いよくそう言っつと、気のせいかほつとしたような笑顔を向けられていた。

「すごいですね。ビルに囲まれた所に……。こんな大きなスケートリ

リンクがあるんですね」

「そう？狭くないか」

ベンチに腰をおろし、手早く貸スケート靴の紐をしばりながら松沢が言った。

北国育ちの松沢には、このリンクは小さく感じるのだろう。

スケート靴は思いのほか履き心地が悪く、真似をしながらしばらくと思っても、上手くできない。

モタモタしていると、すつと足元に松沢がしゃがんだ。

「やってやるよ」

美雪の手元から靴ひもととり、器用に交互にひもをかけていく。

自分の足元に松沢が座り込んでいることが、なんだか恥ずかしい。デートと言われて、スカートを履いてこなかったことを少し後悔したけれど、スケートならパンツで良かったとつくづく思っていた。

「久しぶり！何年ぶりかな」

心底嬉しそうに、松沢が笑った。

仕事中には決して見せない子供のような笑顔に、美雪まで笑顔になる。

松沢は慎重に氷に足を下ろし、スイーっと前に進んだ。

「少しだけ待ってて」

そう言い残し、リンクの中を人をよけながらスイスイと滑っていく。

「わあ、あの人上手！」

「本当だ〜、かっこいいね」

美雪の周りから、声があがった。

あっという間にリンクを一周して、入口で待つ美雪の元にたどりつく。

「すごい……上手ですね」

「そう?」

そう言いながら、美雪にすっと手を差し出した。

恐る恐るその手を掴み、そおっとリンクに足を踏み出す。

「わっ!」

あまりにスイスイと松沢が滑るので、つい錯覚をしてしまった。

足元は想像以上におぼつかなくて、立っていることさえままならぬい。

「きゃっ」

後ろに身体が傾きそうになったときに、美雪の腰に松沢の手がふわっとまわった。

「大丈夫か?」

「はっはい……」

思わずその腕にすがりつく。

「ははっ、生まれたての小鹿みたいなの？」

「ふ、ふざけてやってるんじゃないんですから」

必死にそう言いながら、リンクのへりにつかまっただ。

運動音痴というほどでもないが、体育はいつもだった。

運動神経は人並み、こういうセンスはある方だとは言えない。

片手は松沢、片手は手すりやへりにつかまりながら、少しずつ前に進むのがやっとだった。

「上手な人を見てると、優雅なんですけどねえ……」

あらためて周りを見渡すと、イルミネーションに囲まれた夜のリンクは、やっぱりカップルが多い。

その中にも、家族連れの姿がちらほらと見え、自分はどんな子供よりも下手だと思わずにいられない。

「はあ……」

なんとかリンクを一周したときには、足ががくがくと震えているような気がした。

「じゃ、手すりから手離して」

「えっ！」

ぐったりしているところまで両手をとられ、手すりから引き離される。

「ちよ、松沢さん！早い！」

「大丈夫大丈夫」

足を踏ん張りながら、必死にその手にしがみつく。

松沢は後ろ向きに滑りながら、美雪の手をひいてくれる。

「そうそう。足を八の字に……」

そうは言われても、足が上手く動かない。

それでも必死にリンクを周っているうちに、少しずつ滑れるという
か歩けるようになってきた。

「手、離してみるか」

「え!？」

反論する間もなく、美雪から手を離し松沢が2メートルほど先に離
れた。

「やつ…無理です！松沢さん！」

わたわたと美雪が慌てる様子を、なんだか楽しそうに見ている。

「もう……本当に無理ですってば」

必死に少し先の松沢に手を伸ばすが、美雪が近づいた以上にスイツ
と後ろに遠ざかる。

なんだか悔しくなり、大きく一步前に足を踏み出した。

「わっ！」

つんのめるように、身体が前に傾いたとき

「あぶなっ」

てっきり転ぶと思っていた身体が、すっぽりと松沢に抱きとめられる。

いきなりだったので、遠慮もなしに抱きついてしまった。

「いめんいめん」

そう言っつて松沢は、美雪の背中にまわした手をぼんぽんと叩いた。がっしりとした身体に触れて、一緒のベッドに入り眠ったことをふいに思い出し身体が固まる。

「どうした？」

「いつ、いえ！」

慌てて離れようとして、また転びそうになる身体を掴まれる。

松沢の手を借りながらようやく体勢を立て直し、はーっとため息をつく。

その際に、また松沢の身体がすーっと美雪から離れた。

「もう……松沢さん！」

身体のバランスを必死で保ちながら、そう呼びかける。

「大輔」

「……え？」

「名前呼べたら、手つないでやるよ」

ニヤニヤと笑いながら、少し離れたところで美雪を見つめている。

「いつまでたつても、進歩しなそうだから」

「……それは」

スケートの腕前なのか、2人の関係なのか。

言いかけて、勇気がないまま、その言葉を飲み込む。

「行っちゃうぞー」

松沢が美雪の方を向いたまま、後ろ向きに滑りだした。

「あ、ま、待って!」

一瞬躊躇して、

「だ、大輔…さん」

小さな声でそう言った。

「……まさかの“サン”づけ？」

少し離れたところで、かすかに目を細めながら可笑しそうに美雪を見つめている。

その微笑みの意味が、わからない。

「だ、だって……呼び捨ては、無理で…あっ！」

泣きそうな顔でそう言った瞬間、バランスを崩して転びそうになった。

が、すばやく隣に並んだ松沢が、美雪の手をつかんでいた。

「仕方ねーなー」

その顔の表情を見たかったけれど、

「ぎゃっ」

急に走り出す松沢につかまるのに必死で、見上げることができなかつた。

黙ったまま、手を繋いでリンクを走る。

最初は怖いだけだったのに、次第につかまりながらも風を感じるのが楽しくなってくる。

「楽しい！」

思わず口に出す。

「よかった」

ようやく美雪を見下ろし、にこっと松沢が笑った。

手袋ごしに、暖かい体温を感じるようだった。

第26話 スケートデート・2

リンク脇のベンチに腰を下ろし、松沢が買ってきてくれたココアを飲む。

「はー……見るのとやるのじゃ、全然違いますね」

スケート靴をはいた足はじんじんするし、無意識に前かがみになるため腰も痛い。
それでも、氷の上を滑る感覚は格別だし、久しぶりに身体を動かした爽快感もあった。

「疲れた？」

「はい。でも、楽しかったです！」

満面の笑みを浮かべて松沢を見つめる。

「俺、もうちょっと滑ってこようかな」

「あ、どうぞ！私ここで見てますから」

そっとうと松沢は、一人でリンクに降りた。

聞けば、地元では中学に上がるまではホッケーをしていたらしい。スイスイと人をよけながら滑る姿は、優雅にすら見える。
美雪から少し離れたベンチで休憩をしているカップルや家族連れも、松沢の姿を目で追っているようだ。

「なんか、すっげ上手い人がいるんだけど」

「あっあのベージュのパンツの人？すごい」

「ちょっと！顔もとんでもなくイケメン！」

「マジで!?!」

女子高生と思われる子たちがキャーキャーと騒ぐ様子を聞きながら、美雪も松沢の姿を見つめていた。

普段の仕事と違って、ラフに流した髪が風にさらさらとなびいている。

背の高さに釣り合う長い手足が、いつそう松沢を大きく見せている気がした。

あらためて見ると、本当に素敵の人だと思う。

あの日 あんなことがなければ、きっと普通に上司と部下のままで、こんな姿を見ることなんてなかったに違いない。

「ただいま!」

心底楽しそうな顔をしながら、ベンチに座る美雪の隣にどさつと腰を下ろした。

「おかえりなさい」

「ちょっと疲れた。年かな」

そう言いながら、スケート靴のひもを少し緩める。

「なんか、俺が楽しみたいくて来たみたいだな。悪い」

「え、そんなことないですよ！私も楽しかったし……」

少し考えてから、思っていたことをそのままに言う。

「松沢さんの、スケートを滑る姿を見れて得しました」

「松沢サン？」

ニヤニヤしながら松沢が顔を覗きこむ。

「あ……」

何気なく言った一言でも、訂正しなければならいらしい。

「大輔さん、でした」

「お前飲み会大丈夫かよ」

笑いながら、頭をげんこつでコツンと優しく小突く。

そんな何気ない動作が、嬉しくてドキドキする。

「そ、そういうえば、飲み会決まりました」

飲み会、と言われたことで思いだした。

二人の関係にとっては一番重大なことのはずなのに、伝えそびれるところだった。

「前、電話で言った通り……2日に予約したって言ってました」

「俺の友達、声かけた方がいいの？」

「え、うーん……呼んで、とは言ってたんですけど……」

松沢が彼氏として出てくれるだけで、美雪にとっては充分だった。それに、イマイチ微妙な2人の関係を、これ以上広げない方がいい気もする。

「ご迷惑かけると困るので、無理に呼ばなくても」

「短大上がりのハタチの子と合コンって聞けば、来たがるやつはいくらでもいるけど」

冷めた缶コーヒーをぐくりと飲みながら、松沢が言った。

「合コンって……」

慌てて否定する。

「実は、友達が結婚することになって。その子が未来の旦那さんを連れてくるみたいで」

「へー。ハタチで結婚？」

「あ、その子は21ですけど」

「大して変わらないだろ。すごいな。出来ちゃった婚とか？」

「あ、いえいえ……旦那さんになる人が、結構年上みたいで。だから、みたいです」

「……俺らみたいなの？」

さらっと言われて、ハイ、と素直に言いそうになる。

「あ……どう、でしょうか……」

「そこは『ハイ』って言っとけよ」

ふっと目を細め、呆れたような顔をした。

こんな思わせぶりなことを言うのは、少しずるい気がする。

「あ」

美雪を見つめていた松沢が、ふいに小さな声を上げた。

「え？」

不思議に思い首をかしげると、松沢が答えないまま手袋をはずした。

ふにっ。

そしてその長い指が、美雪の下唇に触れた。

「ココア、ついてた」

そう言っつて、わずかにココアのついた指をぺろっと舐めた。舌が覗いた口元から、吸い寄せられるように目が離せない。

松沢が何をしたのか、理解するまでに数秒かった。

「な、な、な」

「何？」

「……い、いえ……」

思わず赤くなつて俯くと、松沢がくすくすと笑つた。

「口につけて飲むなんて、子供かよ」

（笑つた理由はそれなの！？）

心の中で密かに突っ込みをいれるが、多分松沢は美雪の考えていることなんてわかつているのだろう。

その証拠に、再び指を伸ばし、美雪の下唇に親指で触れた。外気にさらされた唇に、松沢の指はあたたかく感じる。

何か、話さなければ。

そう思い小さく口を開いたと同時に、松沢の指が離れた。

「そろそろ時間だな」

何事もなかったかのようなその言葉に、一人寂しい気持ちになる。時計を見ると、貸スケート靴の返却時間がせまっていた。

「そうですね」

おぼつかない足で立ち上がると、松沢がすつと手を出す。

―昨日の初デートの時より、ずっと自然にその手をとった。

振り返ると、イルミネーションに照らされた銀色のリングが、煌めいていた。

誰もが、楽しくて幸せそうだ。

「また、来ることあるかな……」

思わずぼつりとおつぶやく。

「私、多分次来るときには、また滑れなくなってる気がします」

寂しさを忘れるように、ふふつと自嘲気味に笑った。

「……連れてきてやるよ」

「え？」

ざわめきにまぎれて、松沢の言葉が聞こえない。

「いや、行くぞ」

「はいー」

また、来ることができますように。

色とりどりのイルミネーションに、そう願いをかけた。

第27話 頬に。

年末の道路は夜でも意外に混んでいて、いつもよりゆっくりと景色が流れる。

「混んでるな」

その口には出したものの、さほど松沢からは混雑に対する苛立ちは感じられない。

「大丈夫か？喉かわいてない？」

「大丈夫です」

気遣いが、嬉しい。

「少し遅くなりそうだな」

「でも、明日から休みですしね」

明日からの正月休みを思うと、自然と笑みが浮かぶ。

「そうだな」

ちらりとこちらを見ながら、松沢も優しく笑った。

「明日の年越し、どうするんだ？」

ふいに松沢が言った。

「年越し……」

復唱して、その意味を考える。

「えと……テレビでも見て、寝る……くらいですかね」

「あ？友達とかと、過ごさないのか？」

「今年は……多分、お誘いはかからないと思うので。彼氏いるって、見栄はつちやいましたから」

恥ずかしい話だが、松沢に隠す理由はない。

「そうか……」

もしかして誘ってくれるのかと一瞬期待したが、それ以上言葉は続かなかつた。

「じゃあ明日、買い物行くんだよな？」

ゆっくりと進む車が美雪の家についた時には、日付が変更する直前だった。

「あの……本当にいいんですか？」

「当たり前だろ。今日の予定変更させたんだから。俺も買う物はあるし」

車で行くとなると、普段は躊躇うような重い物も買える。車で買い物に連れて行ってもらうのなんて、両親が遊びに来たときくらいだ。素直に嬉しかった。

「嬉しいです！年末年始だし、結構色々買うものあるので」

ふと、今日のお礼を言っていないことに気付く。

「あの」

きちんと松沢に向き直った。

「今日は……本当にありがとうございました」

「何が？」

「え、あの、食事とスケートっていうか……デートに連れて行ってくれて」

ああ、と言って松沢がホルダーに置かれていた缶コーヒーを持ち上げ、ごくりと飲んだ。

「今日もそうですけど、一昨日のアウトレットも……。私、本当に嬉しかったし、楽しかったです」

「そう」

何故か松沢の返事は素っ気ない。

その答えになんだか慌ててしまい、口が止まらなくなった。

「わ、私、デートってどういうものかわかんなくて、想像するしかなかったんですけど、実際体験してみると想像以上だったっていうか……」

松沢は黙ったままだ。

「とにかく、なんか、いい経験ができました！松沢さんには感謝してます」

「おい」

「へ？」

間の抜けた返事をしてしまった、と思う間もなく、松沢の手がすつと伸びた。

そして、さきほどと同じように、美雪の唇をなぞった。

いや、「さつきと同じ」ではない。

もっと優しく、ゆっくりと輪郭をなぞる。

驚いて、松沢の顔を見つめる。

かすかに細められ、美雪を見つめる目に、背中がぞくっとした。

これって、もしかして

キス、される？

そう思った瞬間、松沢の親指と人差し指が、むにゅと美雪の下唇を

つまんだ。

「!?!」

「“大輔”って呼べって言わなかっただけ？アホ！」

そう言っつて、ニツと笑った。

「あ、アホっていう人がアホなんです！」

キスされると、早とちりした自分が恥ずかしくて、まるで小学生のようなことを言っつてしまふ。

松沢は、軽く笑っつて美雪の口元から手を離した。

胸の鼓動は、ドキドキと早いままだ。

からかっつているのかな。

思えば最初からそうだった気がする。

松沢は、自分よりずつと大人で、経験も豊富に違いない。

彼の発言や行動に一喜一憂してるのは自分だけ、と思っつとなんだか悔しかつた。

(距離が縮まっつたと思っつてるのも、ただの勘違いなのかも……)

つい、軽くため息が出た。

「何？そのため息」

「え、別に……」

子供じみていると思っつても、ふいと横を向いてしまふ。

「じゃあ……今日はありがとうございました。また明日」

惨めな気持ちを隠すように、そう言ってさっさと降りようとしたら

“ガチャ”と運転席側からドアをロックされた。

「え？」

思わず松沢の顔を見つめる。

「だから、なんでため息？」

「……」

なんか、怒ってる？

でも、どうして怒っているのかわからない。むしろ怒りたいのはこっちの方だ。

「説明しなきゃ、ダメですか？」

つい、反論してしまった。

「は？」

冷たい言い方と目つきに、仕事をしている時の厳しい姿勢を思い出
し、怖気づく。

「だ、だって……」

ぎゅっとバッグを握り締める。

「なんか、いつも松沢さんにからかわれてるなーって思って……」

また“大輔”と訂正される気がしたけれど、気にしてられなかった。

「からかってる？」

松沢が意外そうなニュアンスでそう言った。

「俺、からかってるつもりはないけど」

「え、だって……」

『だって今、キスされるかと思ったのに』

そんなことが言える訳もなく、黙りこむ。

相変わらず、松沢は納得のいかない顔をしている。

「2回言うっ？」

「……いえ、結構です……」

むすっと下を向いた美雪をなだめるかのように、優しく美雪の髪を撫でる感触がした。

「なんか怒ってるなら謝るけど」

「いえ、謝らないでください……」

思わずしゅんとなる。
勝手に舞い上がって、勝手に早とちりをして、そんな自分に恥ずかしさが沸いてきた。
これも、経験の無さからくるものだとしたら、もっとうしようもない。

「からかっているのかなって、思った……だけです。本当になんでもないです」

「そう」

なんだか微妙な空気になってしまった。

「本当、ごめんなさい！私……」

なるべく明るくそう言いかけたとき、美雪の頬に手が回った。

何？と思う間もなく

反対側の頬に、何かが触れる感触があった。

それは間違いなく、松沢の唇だった。

なんの音もしなかった。

ただ、触れただけだった。

キスするときって、何か音がすると思っていた。
でも、優しく、静かに唇が触れただけだった。

「じめん」

何故、ごめん？

松沢が謝る意味がわからない。

ただただ呆然と、松沢の顔を見つめていた。

「オイ」

「はっハイ！」

思わず声が裏返る。

「からかってない」

「……は、はい」

「そう思っただとしたら、気のせいだ」

気のせいな訳はない気がしたが、とりあえず頷く。

松沢は、美雪の顔を見ずにハンドルに身を預け、フロントガラスを見つめていた。

ぼうつとその姿を見つめていると、つい先ほどされた事が、急に自分にせまりくる。

「あの……わ、私、帰ります。また……明日」

どうしていいかわからず、小さくそう言った。

「うん」

ハンドルにもたれたまま、かすかに顔だけを動かし松沢がこちらを見た。

かすかに細められたその目が、今まで見たどの表情とも違って、急に自分の身体の奥がドクドクするのがわかった。

「あつ、ありがとうございました！また明日！」

慌ててドアのロックを自分で解除し、バタバタと車を降りる。

「おやすみなさい！」

そう言いながらドンッと重いドアを閉めた。

運転席に座る松沢がこちらを見ながら、軽く手をあげた。ライトがついたせいで、松沢の表情が見えない。

そして、サイドガラスが開くことはなく、静かに車は走り去っていた。

マンションに走りこんだフリをしながら、車をずっと見送っていた。

（ な、なんで……ほっぺにキスしたの？）

考えても、当然答えは出ない。

ぼんやりと自分の部屋に戻り、頬にそつと手をあてた。

なんだか、熱い。

松沢が見せたあの目を思い出すだけで、なんだか胸が苦しくなる。

それは、頬よりも熱い。

携帯電話から、メールの受信を知らせるメロディが鳴る。

「あ………」

『明日、何時にする？』

素っ気ない、松沢からのメールだった。

肝心なことを、なにも約束していなかったことに気付く。

自分はともかく、何事も完ぺきな松沢にしてはめずらしい気がする。

もしかして…松沢さんも自分と同じ？

そう思って、それを慌てて否定する。

そんな訳ない。

自分より8個も年上で、かつこよくて、過去には綺麗な人と付き合い合
つてて……

考えるだけで落ち込みそうになる。

でも、今は彼女いないって言ってたし。

でも、私は期間限定の彼女だし。

相反する気持ちで揺れていた。

しばらく考えて、慎重にメールをする。

『13時くらいでどうですか?』

ピッ。送信。

)

間髪入れずに返信がくる。

『わかった。

迎えに行くよ。

今日は、ありがとう』

“今日は、ありがとう”

その一言で、沈みそうな気持ちがすくいあげられたようだ。顔が緩む。

ふと、テーブルの上に放置していた、アウトレットモールでもらったサンプルを手にとった。

今まで、スキンケアやメイクは、誰のためでもなかった。

必要最低限、社会人として清潔感さえあればいいと思っていた。

でも……

ふと自分の手を見つめ、ネイルも塗られていない幼い指先が、ひどく恥ずかしく思えた。

「……お風呂入って半身浴しよう!」

明日までに、ほんの少しでもいいから綺麗になりたかった。

少しでも、あの人の隣が似合うように。

第28話 大晦日の始まり

『ピンポーン』

きっかり朝10時、チャイムの音で目が覚めた。

結局昨日は、雑誌を見ながらのスキンケアやマッサージに夢中になり、気持ちが高ぶっていたこともあり眠れなくなってしまった。

ベッドに入ってから悶々としてしまい、眠りにつけたのは相当遅かったと思う。

誰だろうと疑問に思いながら、慌ててカーディガンを羽織り玄関へと急ぐ。

「宅配便です」

玄関の覗き穴を確認すると、よく見かける緑の制服が見える。急いでドアを開けた。

「藤崎様ですね。お荷物届いています」

差し出された伝票にサインをし、荷物を受け取る。

「ありがとうございます」

「御苦労さまです」

若い宅配業者の男性を見送り、パタンとドアを閉めた。

「…………お母さんからだ。何だろ」

荷物のことは何も聞いていない。
部屋に運びこみ、ビリビリと梱包をほどいた。

「あー！」

中には、いくつもの密閉容器に分けられた惣菜が入っていた。
その中のひとつを手に取り蓋を開けると、甘い匂いが鼻をくすぐった。

「栗きんとんだ……」

重箱にこそ入っていないが、それらがお節料理だということがわかる。

脇に封筒が差し込んであるのを見つけ、封を開けると短い手紙が入っていた。

『美雪へ』

一緒に温泉に行けなくてごめんね。

せめてお友達と一緒に食べてください。

よいお年を。

母より』

簡潔な内容が、母らしかった。

小さな段ボールにぎっしりと詰まった荷物からは、懐かしい実家の匂いまでがするようだ。

しかし、

「友達と年越しするなんて、一言も言っていないのに……」

早とちりで押しつけがましいところも、また母らしい。

母親の愛情は嬉しかったが、正直1人で食べるには多すぎる。

（松沢さん……お正月、どうするのかな……）

昨日は何も言っていなかったが、これを理由に誘うことができるかもしれない。

思えば今まで、誘ってくれるのは松沢の方ばかりで、美雪から声をかけたことは一度もなかった。

（買い物後に、話してみようかな……）

一つ一つ中身を確認しながら、そう思っていた。

（たかが買い物なのに、気合い入れすぎ？）

余裕を持って出かける準備を始めたはずなのに、いつの間にか約束の時間がせまっていた。

初めて使ってみたサンプルのアイシャドウが、派手すぎに思えて落としたり、髪型が決まらず急にシャンプーをしまったり、ミニスカートから覗く自分の足が恥ずかしく思えて、デニムを引っ張り出したり。

初めてのデートの時より用意に時間がかかってしまうのは、自分の気持ちを自覚しているからかもしれない。

彼の目に自分がどう映るか

今さらのように気になって仕方がない。

メールの着信を知らせるメロディに、慌てて携帯を手に取った。

『下に着いた』

携帯を開くと、相変わらず素っ気ないメールが松沢から送られてきた。

「わ……ヤバ！」

結局、髪の毛はいつもの横しぼり、デニムにカットソーという無難なコーディネートになってしまった。

慌ててコートを羽織り、階段を下りる。

“どんな顔で会えばいいのか”

そう悩んでいたのをすっかり忘れていたが、玄関に止まる黒いワゴンを見つけると、急に忘れていた緊張が湧き上がる。

「おはようございます」

なるべく平静を装い、助手席のドアを開けた。

「おはよう」

ちらり、とこちらを見て松沢がそう言った。
いつもの松沢だ。

「あの、昨日はありがとうございました」

「いや……」

なるべく普通に振る舞おうと思っていたのに、顔を見るとダメだ。昨日の夜、自分の頬に触れた手を思わず見つめてしまう。そしてあの目を思い出し、顔が赤く染まるのがわかった。

「買い物、どこに行きたい？」

「え、あ、一通りの食料品がそろつならどこでも……」

(本当の恋人同士なら……こういう時はどうするのかな)

松沢の質問に答えながらも、頭では別のことを考えている。悔しいくらい普段通りの松沢は、やっぱり大人なのだと思うには
いられない。

「ちゃんと寝れたのか？」

ふいに松沢がそう言い、美雪の顔を覗きこんできた。

「な、な、なんでですか！」

いきなりの行動に驚いて、声が裏返る。

「目、なんか、クマみたいの出来てるけど」

そう言って、自然に美雪の目元へと手をのばす。

「だ、大丈夫です！ちよつと……メイクに失敗したのかも……」

あまりに自然に触れられた手に、びくつと身体が反応する。
朝一番、会ってすぐのこの行動はキツイ。

「お前……まだ、ダメなの？」

すつと手が離れた。

「え？何がですか？」

「男。苦手なの？」

質問の意味がわからず、しばし沈黙してしまった。

「えと……なんでですか？」

「……おい……」

何故か松沢の声が不機嫌になった。

「触ったら、硬くなるから、まだ苦手なのかって聞いたの」

一瞬、その言葉の意味を考える。

「え？あ！ち、違います！」

慌てて顔の前で手を振った。

「あのっ、苦手は苦手ですけど……まつ……じゃなくて、大輔さんは大

「大丈夫です」

そう言って、なんと言葉を続けなければならないのか考える。

「あの……逆っていつか……」

「逆？」

このまま話していると墓穴を掘ってしまいそうだ。

「と、とにかく大丈夫ですから、気にしないでください！」

「そんなにビクついてて、友達の前に俺を連れてって大丈夫なのか？」

軽く笑って言われたその言葉が、まるで「7日間」という約束を再確認させられたようだった。

（そうだよね……それが約束なんだし。昨日のは……きつと松沢さんの気まぐれなんだよね）

「早く緊張しないようになれよ」

そう言ってぼんぼんと美雪の頭を軽く叩く。

手の感触を感じながら、ふいに昨日の頬へのキスのことが思い出された。

（もしかして……ああいうことしたのは、私が緊張したりしないように？）

ありえる。

そうだとしたら、1人浮かれていた自分は少し惨めだ。やっぱり、恋は少しだけ面倒だ。

「行くぞ」

静かに動き出す車の中で、気づかれないように静かにため息をついた。

松沢が連れていってくれたのは、大型スーパーのついたショッピングモールだった。

大晦日であるにも関わらず、店内は大勢の人で溢れている。さすがに家族連れが多いように思う。

松沢から差し出された手に、自然と自分の手を重ねた。

「スポーツ店に寄りたいんだけど……どうする？先に買い物行ってもいいけど」

「え、うーん」

松沢が何を買うつもりなのか、興味がある。もっともっと、彼のことを知りたい。

「ついて行ってもいいですか？」

「うん」

当たり前のように、そう言ってくるのが嬉しい。

「何買うんですか？」

「スケートやったら、なんかまたウィンタースポーツやりたくなつて……ボードのウェアを見ようかと」

「スノーボードもやるんですか？」

「うん。まあ、人並みに。高校の時は、スキーかスノボが体育で必修だったから」

さすがにスケートとは違って、気軽に一緒に行くことはできないだろう。

「スノーボードも、きっと上手なんでしょうね」

「だから、人並みだって」

笑いながら言う松沢の横で、いつか、その姿を見てみたいと思っていた。

ショッピングモールの中とはいえ、かなり大きいスポーツ店についた。

正直、運動があまり得意ではない美雪にとっては、滅多に近寄らない場所でもある。

キヨロキヨロと見回していると、意外とスポーツブランドの洋服がかわいいことに気付いた。

部屋着などにいいかもしれない。

「私、ちよつと色々見ててもいいですか？」

「うん。俺も適当に見てるから」

松沢と離れ、女性用のスポーツウェアコーナーをブラブラと歩く。

「藤崎？」

ふいに背後から、声をかけられた。

男の人の声だ。

誰だろう、と思って振り向き、その顔を見て身体が凍りつく。

180以上ある長身に、鍛えられた身体。

冬だというのに、随分と日に焼けているように見える。

「吉村…くん…」

「やっぱり藤崎だ。久しぶり」

にこやかに声をかけられたけど、なんて答えていいのかわからなかった。

「あの…どうして、ここに？」

「藤崎こそ、スポーツ店ってイメージじゃないけど」

にこつと笑ってそう言ったが、美雪の顔はこわばったままだ。二人の間に、沈黙が流れる。

「この店長が知り合いで、今、正月休みだからちよつと寄ったん

だ

何も言わない美雪に気を使ってか、吉村がそう言った。

「そう……あの、じゃあ」

慌ててその場を離れようとした時、

「待って」

ぐっと吉村に腕を掴まれた。

「俺……ずっと、藤崎に謝らなきゃいけないと思ってて……」

「……」

その意味がわからず、声を出さずに下を向く。

美雪が動かないことを知って、掴んだ腕が静かに離れた。

「卒業式の時……ごめん。他のやつに写真のこと聞いて……」

途端に美雪に脳裏に、忘れたくてたまらない思い出がよみがえっていた。

第29話 苦い思い出

吉村のことは、小学生の時から知っていた。

野球が好きだった父親に連れられて、よく従兄弟のリトルリーグの大会に応援に行っていた時、その中でもひととき目立っていたのが吉村だった。

（あの子……私と同じ年なのに、なんかスゴイ。かつこいいかも！）
同じ中学に上がってもその才能が衰えることはなく、エースピッチャーとしてチームを全国大会へと導いた。
その時からいつの間にか、吉村に対して憧れにも似た淡い恋心のようなものを抱くようになっていた。

美雪の、初恋と言ってもいい。

高校進学の際、全国の強豪校からの推薦入学の誘いを断り地元公立高校に進学した時には、随分話題になったものだ。
てっきりどこかの名門校に行くと思っていたから、同じ高校に進学できるとわかった時には、密かに喜んだ。

高校に入学してからは1年生の時からエースとしてマウンドに登り、2年の春に初めて甲子園への出場切符を手にした。

でも、それからの吉村は、随分と変わってしまった。

長身に甘いマスクは、テレビや雑誌に何度も取り上げられるほどだった。

放課後の校門の前には、ファンと思しき女子高生がいつもたむろし

ていて、時には雑誌やテレビの記者がいることもある。
学校や年齢は関係なく、美少女と言われるような可愛い子と次々と付き合い、ただでさえ引つ込み事案な美雪とは話すこともほとんど無くなっていった。

「美雪、アンタさ、このままでいいの？」

「何が？」

卒業式が1週間後にせまった放課後。

教室から野球部のグラウンドを見下ろし、友達の麻紀と2人で紙パツクのジュースを飲んでいた。

昨年の秋にドラフト指名された吉村は、学校に姿を見せることはほとんどなくなっていた。

「吉村くんだよ！このままプロ野球に行っちゃったら、今でさえ遠い人なのに、もっともっと遠くなって会うこともできなくなるんだよ！」

「でも……」

クラスが同じとはいえ二人で会話をしたのは随分前で、もう好きかどうかすらよくわからなかった。

吉村を好きだと言う子はたくさんいる。

それは、自分も含め、テレビに出ているアイドルを好きだと思っ気持ちに似ている気がした。

「最後の記念に、告白くらいしてみたらいいじゃん！」

「え……」

気が進まない。

告白したところで、何が変わるのだろうか？

可愛い子とばかり付き合っている吉村が、美雪と付き合う訳がないことは火を見るより明らかだ。

「中学の時から好きだったんでしょ？このままなんとなくフェイドアウトするくらいならさあ……スパッと告白して進学して、新しい恋しようよ！」

「んー……」

確かに、麻紀の言うことも一理ある。そう思っただけで曖昧な返事をしていた。

「私もコクるから、一緒にしようよ！」

「えっ、もしかして……バスケット部の日下くん？」

「うん！」

彼女が1年生の時からずっと、バスケット部のエースである日下に想いを寄せていたのは知っていた。

彼氏ができたこともあったが結局すぐ別れたのは、日下への気持ちに誤魔化すことができなかっただろう。

恥ずかしそうに笑う麻紀は、何故だかとても綺麗に見えた。

「いいなあ……私も、考えてみようかな」

「うん！しようよ！一緒に告白！」

思えば、こんな安易なノリが、あんな事態を生むなどは思わなかった。

「美雪！吉村くん、式の後に呼び出しといたよ！」

「は!?!」

卒業式の式典に向かう廊下の途中で、麻紀がこっそりと耳打ちをしてきた。

「な、なんで!?!」

「一緒に告白しようって言ったじゃん！なのにアンタさっぱり行動しないからさ」

ニヤニヤしながら脇を小突いてくる。

「なんで勝手に……」

動揺と怒りにも似た気持ちが、ごちゃまぜになってわいてきた。

「だって、今日を逃したら吉村くんにもう会えないんだよ？大丈夫だって。好きでした、記念にボタンください、でいいじゃん！」

「そこ！列をみだすな！」

担任に注意され、しゅしゅと麻紀が自分の場所に戻っていく。

(そんな……心の準備が……)

前方に並ぶ吉村の後姿に、ドキドキと鼓動が早くなった。急に気持ちが悪くなり、式典の最中も上の空で、周りのクラスメートたちが涙を流すなか1人そわそわと考え事をしていた。

音楽室の窓から、校門を見下ろす。

案の定、吉村は卒業生にも在校生にも囲まれてもみくちゃにされている。

(呼び出したってあんな状態じゃ、来れる訳ないよね)

ボタンだって、きつと残っていないに違いない。

別にそれでよかった。むしろ、ここには来てほしくない気がする。

ふいに制服のポケットの中の携帯が震えた。

『やっぱり玉砕だった。』

でもボタンくれました！

いい思い出だよ！

美雪もがんばれ！』

麻紀からだった。

(いい思い出か……)

そう思うと、少しは気持ちが軽くなる気がした。

覚悟を決めて、音楽室の机に腰をおろした。

どれくらい時間が経過したかわからない。

このまま待ち続けていても、吉村が来るはずはない。そろそろ帰ろうかと腰を上げた時に、ガラッとドアを開ける音がした。

振り向くと、吉村が驚いた顔をして立っている。

「俺のこと呼び出したのって、藤崎だったの？」

意外そうな顔だった。

「あ、うん……ごめん……」

「いや。何？」

制服は乱れ、ボタンは一つも残っていないようだ。

それに気付くと、なんて言ったらよいのか言葉が浮かばない。

「俺……急いでるんだけど」

もじもじとする美雪の態度に、イライラとしたように吉村が言った。

その顔には、小さな頃から知っていた吉村の面影はない。

なんだか悲しくなってきた。

クスクス

ふいに笑い声が聞こえてきた。

それに気づき入口に目をやると、開けっぱなしのドアから数人の女子生徒が携帯片手にこちらを見ているのがわかった。

彼女たちの目は、当然のように美雪に向けられている。

好奇心と蔑みが入り混じったような視線に、身がすくんだ。

「な、なんで……」

思わずそう言つと

「仕方ないだろ。今日の状況で、誰にも気づかれずに来れる訳なんてないだろーが」

慥然とした表情で吉村はそう言った。

ますます、惨めな気持ちになるばかりだった。

「だから、何？」

「あの……ボタン、欲しかったんだけど……もう、無いみたいだから」

「それだけ？」

「えと……中学の時から、好きでした」

半ばヤケになった気持ちでそう言った。

「……ふーん。でも俺、プロ行くし、もう会うこともないだろうから」

その通りだ。

「うん……あの……がんばってね」

消え入りそうな声で、そういうのがやっとだった。

「ありがとう」

たくさんの人にそう言われているのだろう。

感情のこもらない声でそう言われ、吉村はスタスタと教室を出て行った。

「さすが吉村くうーん」

「ねえねえ、一緒に写真とってよお」

キャハハハっという笑い声とともに、媚びたような女子生徒の声が廊下にひびく。

最低だ。

泣きたい気持ちで、のろのろと音楽室を出た。

とぼとぼと歩き、麻紀と待ち合わせをしているファーストフード店に向かった。

店内には、胸に花をつけた卒業式帰りと思われる学生が溢れている。

「美雪！」

立ち上がって麻紀が呼んだ。

仲の良い友人たちも一緒だった。

「どづだった？」

「どづって……最悪だよ」

一部始終を話して聞かせると、皆が黙りこんだ。

「吉村くん……なんか変わったよね」

1人がぽつんと呟く。

「うん。そんなひどいこと言う人じゃなかったのに」

「美雪……ごめんね、私余計な事して」

麻紀が泣きそうな顔で頭を下げた。

「もういいよ。懂れてたのは本当だし」

皆に気を使われるのが辛くて、わざと明るくそう言った。
こんなこと、忘れてしまおう。それが一番だと思った。

でもそれが、思いがけない事に発展してしまった。

春休み中、いつものファーストフード店で麻紀はおずおずと携帯を差し出した。

「なに……これ……」

食い入るように画像を見つめる。

そこには、吉村と自分が映っていた。
うつむいてはつきり顔は写っていないが、見る人が見れば美雪だとすぐに気付くはずだ。

あの時廊下にいた女子生徒が、携帯を使って撮影したに違いない。

“王子にマジ告白した身の程知らず”

そんなタイトルがつけられ、この画像のついたメールが、チェーンメールのように卒業生の間を広まっていた。

数日前、買い物に行った時に同じ高校の生徒にくすくすと指差されている気がしていた。

いたたまれなくてその場を離れたが、原因がわからなくて不思議に思っていた。

それは、きつとこのせいだ。

「ひどい……なんで……」

思わず言葉を失った。

「迷ったんだけど……どうせ耳に入るなら、私が言わないと思ってっつて」

麻紀が美雪から携帯を取り上げ、そつと画面を閉じた。

「ごめん……本当に……。私が余計なことしたばかりに……」

麻紀がうなだれるようにして、謝った。

「うっん、麻紀のせいじゃないよ。……身の程知らずって言われたら、そうかもしれないし……」

「何言ってるの!?!」

怒ったように麻紀が声をはりあげた。

「本当むかつくよ！吉村のやつ！1人で来てって言ったのに、こんな写真撮らせるなんて！」

「仕方ないよ。今やスターだし……」

へへっと力無く笑う。

本当は泣きたいくらいショックだったけど、今ここでそんな態度を見せたら麻紀が傷つく。

「私、男子で吉村くんのアドレス知ってる人探して、このこと言うよ」

麻紀が力強くそう言って立ち上がった。

「もう……いいって……」

「私の気が済まないの！」

そう言って、再び座りこんでくしゃっと顔をゆがませた。

「ごめん……美雪……本当に……私が余計なことしたばかりに……」

「いいんだって。……もう忘れるから……」

それしかできない。
なんの取り柄もない自分が、告白したこと自体が奢った行動だったんだ。

もう、忘れよう。

麻紀の頭をそっと撫でながら、そつ心に誓っていた。

第30話 アイツって。

「他のやつらにメールのこと聞いて……藤崎にちゃんと、謝らないとって思ってたんだ」

吉村の声で、ハッと我に返る。

「うっん……いいよ、もう」

小さな声でそう言った。

「あの頃さ、俺、調子にのってた」

吉村が、遠くを見るような目で言った。

「甲子園に行つて、周りにちやほやされて、プロ野球入りも決まってる……自分の実力を過信してた。

プロなんて、上手いやつらはゴロゴロいて、それが当然で。俺なんて全然大したことないんだ」

確かに、吉村がプロ野球で活躍する姿はまだ見ていない。

噂では2軍でプレーをしていると聞いていた。

「言い寄ってくる子なんて、俺の肩書しか見てないんだよ。全然……俺の中身なんて見てないんだ」

なんと言っていていいかわからず、黙って吉村を見つめた。

そこには、音楽室で無愛想な顔をしていた吉村ではなく、小さな時から知っている彼がいるようだった。

「藤崎、本当にごめんな。お前の気持ちを踏みにじるようなことして」

美雪はふるふると頭を振った。

「もしよかったら、連絡先……」

「美雪」

吉村の声に被さるようになり、凜とした声が響いた。振り向くと同時に、松沢がすつと美雪の前に周り込んでいた。

「俺の連れになんか用？」

威圧的な態度で、吉村に鋭い視線を送る。

身長的には二人はほとんど変わらなく、プロで身体を鍛えている吉村と並んでも、松沢は見劣りしていなかった。

「ちつちが、松沢さん!!」

慌ててその手を握る。

「あの……高校の時の、同級生なんです」

「え？」

松沢が驚いた顔をして、美雪を見下ろした。

「藤崎……、もしかして彼氏？」

吉村が、冷静に松沢を見つめながらそう言った。

「あ、えと……うん……」

消え入りそうな小さな声で返事をすると、顔が急速に赤く染まっていくのがわかる。

「……悪い。ナンパかと思った」

松沢が、素直に吉村に向かって頭を軽く下げてくれた。

「いえ……」

同じく頭を下げながら、ぼそつと吉村が答えた。
その表情は、気のせいかな少しだけ苦しそうに見える。

「藤崎……今、幸せなんだ？」

松沢をちらりと見ながら、吉村がぼつりとそう言った。

「……うん……」

一瞬の間の後、下を見たままコクリと頷いて見せた。
というか、この状況ではそう答えるしかない。

「そっか。それなら……良かった……」

少し淋しそうに、にこりと笑う。

「じゃあ、俺行くわ。呼びとめて、悪かった」

「ううん。吉村くんも……がんばって。応援してるから」

そう言うと、吉村は一度松沢の顔をちらりと見てから、美雪に視線を戻した。

「……もし、あの時……」

「え、何？」

「……いや、なんでもない。また、どこかで会えたら」

吉村は、松沢に軽く一礼してからくると背を向けた。そして、振り返ることなくスポーツ店を出て行った。

「ただの同級生じゃないだろ」

「え？」

足早にまっすぐと歩いていく吉村の背中を見ながら、ひどく無愛想な顔をしたまま松沢が言った。

「えと……まあ……幼馴染とも言えますけど」

「ふーーーーん」

ちよつと意地悪なその言い方に、何故だか居心地が悪くなる。確かに、ただの同級生でないと言えそうかもしれないが、吉村と

の事を松沢にまだ話す勇氣はない。

美雪にとつては忘れたい過去でもあるし、男の人が苦手になったのに拍車をかけた出来事でもあったから。

自分よりもずっと経験豊富な松沢だから、きっと何かに気付いたのかもしれないが、正直今は触れてほしくなかった。

「あ、松沢さん、ウエアいいのありましたか？」

「……」

「松沢さん？」

「……」

もしかして、と思い呼びなおす。

「あの、大輔さん？」

「何？」

嫌味なくらい、にっこりと笑ってこちらを見る。

「……いえ……」

その笑顔に若干ひいてしまう。

どうやら、名前を呼ばないと返事をしないつもりらしかった。

先ほど吉村の前で“松沢さん”と呼んだことを怒っているのかもしれない。

「あいつ、なんかどっかで見たことあるような顔なんだけど」

「あ、プロ野球の選手なんです。今はまだ2軍ですけど……」
「アイツ、という呼び方に若干のひっかかりを覚えながらもそう言っ
と、松沢はひどく驚いた顔をした。

「マジで？」

「はい……3年前、高校卒業の時にドラフトで指名されて」

「それはそれは」

そう言いながら、相変わらず吉村の去った方向を見つめている。

「大輔さん、野球好きですか？」

「あ？まあ、人並みに」

「サインとか、欲しかったですか？」

「……お前、何言ってるの？」

ムツとしたようにそう言って、松沢が美雪の手をとった。

「行くぞ」

「え、ウェアは……」

「いい。もうそんな気分じゃないから」

訳がわからない。
手を繋ぎながらズンズンと歩く松沢に、必死についていく美雪だった。

賑やかな食品売り場に差し掛かると、少し松沢の足がゆるんだ。ほっとして、歩みを合わせる。

「……悪い」

「え？何がですか？」

きょとんとして、カートにかごを乗せる。
怒らせるようなことをしてるのは、むしろ自分の方だと思う。

「……いや……いいよ」

そう言って、美雪の頭を撫でる。
何故だか優しく笑いかけてくれる松沢に、つられて自分の顔にも笑顔が浮かんでいた。

「大輔さん、なんか変です」

「……うん。変かも」

そう言いながら、ふいに美雪の手に指をからめてくる。
指と指を一本ずつからめる、いわゆる、恋人繋ぎで。

「……手、繋いでたらカート押せません……」

「あー、そっか」

赤くなつてそう言つと、すっと手を離し松沢も自分のカートにカゴを乗せた。

その姿に、思わず吹き出しそうになる。

「だ、大輔さん、似合わない……」

「なんだよ？これでも1人暮らし歴は長いんだからな」

無然としながら松沢がそう言った。

「大学入学と同時だから、もう10年か」

「つていうと……私が小学生の頃には、もう大輔さんは1人暮らししてたんですね」

「それ言つなよ……軽く凹むから」

軽く笑いながら、2人でカートを押した。

少しずつ、側にいることの居心地の良さを感じてしまっている。

それを、手放すことができるのかどうか、考えるとなんだか怖かった。

第31話 買い物とおすそわけ

（お母さんがお節を送ってくれたから……買うもの、結構減ったかも）

カラカラとカートを押しながら、ぼんやりと考えていた。ふと松沢に目をやると、出来あいのお節料理が詰められたパックを物色しているようだった。

「大輔さん、お節買うんですか？」

「あー、どうしようかな」

そう言いながら、手にとっていたパックを戻す。

「実は、これから俺の家に友達が来て年越すことになってて。面倒くさいけど、何も用意しない訳にはいかないしな」

（そっか、お友達と年越しなんだ……）

昨日、何も言ってくれなかったのは、そういうことだったのだと納得する。

「男ばっかりだから」

美雪の顔を見ながら、ニヤッと笑ってそう言う。そんなことを心配していた訳ではないのに、何か顔に出ていたのかと恥ずかしくなる。

「ごういつ出来あいのって、高い割に旨そうじゃないよなー。どっか予約しておけばよかったな」

そう言いながらポンツと手頃な値段のものをカゴに放り込んだ。ふと、家に送られてきたお節のことを思い出す。

「大輔さん、あの一」

「ん？何？」

「お節、いりますか？」

「え、なんで？」

驚いたようにカートを押す足が止まった。

「実は母が送ってきてくれて……。ちょっと量が多くて、1人では食べきれないと思ってたんです。お口に合つかわからないですけど、良かったらお友達と食べてくれませんか？」

「そりゃ嬉しいけど、いいのか？」

「はい」

母親の手作りを食べてもらうとは、まるで自分が作ったものを差し出すような恥ずかしさを覚える。

でも、松沢になら食べてもらいたいような気がしていた。

「そっか、ありがとう」

すんなりとそう言って、松沢はカゴに入れたばかりのパックを売り場に戻した。

「お前の手作りだったら、もっとよかったのになー」

「そ、それはさすがに……」

短大時代からの一人暮らしで大抵のものは作れる自信はあったが、さすがにお節料理となるとそうもいかない。

「いや、きちんと自炊してるだけ偉いよ。会社にもよく弁当持ってきてるだろ。感心してた」

そんなところを見られていたとは、思いもよらなかった。

教育係の成田が弁当派だったこともあり、見習って週に何度か持参していたにすぎない。

誉められるのもなんだか気がひける。

「いえ……。成田さんの真似してただけです」

「ああ、アイツも入社したときからそうだったな。一緒に住んでる彼氏の分も作ってるって言ってたっけ」

驚いて松沢の顔を見る。

「知ってたんですか？彼氏さんのこと」

「まあ一応、上司だしな」

素っ気なくそう言い、物色していた惣菜をカゴの中に入れた。

無愛想でクールで、怖くて近寄りがたい。

それが仕事中の松沢に対するイメージだった。

でも、確かに仕事には厳しいが、課の面々からも慕われているのはわかる。

知らない面をどんどん見せられているな気がしていたけど、ただ、自分が気づいていなかったただけなのかもしれない。

今まで松沢に対して上司以上の感情を持っていなかったのだから仕方ないのだけれど、なんだか悔しい気持ちだった。

結局、買ったものと言えば数日分の普通の食料品で、特別お正月らしいものといえば年越し蕎麦用の材料くらいだった。

松沢はというと、大量の酒類がほぼカートを占めている。

「すごい量ですね……」

「え？ああ……。最近、家で飲むようなことはあんまり無かったから、ほとんど無くて」

そう言いながらいくつもの缶や瓶をレジ袋につめる。

「そつえば」

その姿を横目で見ながら、ふと気になっていた事を口にしてみた。

「あの日……どうして、あんなに酔っぱらってたんですか？」

「え」

ぎくっとしたように、松沢の手が止まった。

「めずらしいですよね？課の飲み会とかでも、あまり酔わない方なのに」

「あー……」

無表情に、黙々と袋に詰める作業を続行している。その表情の表すものは、美雪にはわからない。

「……行く前に風邪薬飲んでたし、その薬と相性悪かったのかもな」

「そうなんですか？」

松沢らしくない曖昧な表現が、なんとなく腑に落ちない。

「でも……」

「忘れる」

言葉を続けようとしたとき、話の腰を折るかのようにバツサリと松沢が言い切った。

「え？」

「よし！行くぞ！」

気づけば大量の酒類や食料品は、全て詰め終わっていた。美雪を置いて、スタスタと行ってしまふ。慌てて自分の荷物を手に取り、その後を追う。

（絶対なんかある……）

確信にも似た気持ちがあったが、それをハッキリさせるのはまだ今は無理そうだった。

買い物が終わわり軽くお茶をして、美雪の家まで送ってもらった時にはもう夕方近い時刻になっていた。

友達との約束がある松沢を、そんなに連れまわしてはいけない。そう思っではいても、自分の家が近づいてくるのが淋しく思えて仕方なかった。

「あ……お節詰めてきますから、待っててもらえますか？」

玄関の前に車が停まったので、そう言っって降りようとした。

「上げてくれないの？」

少し意地悪そうな顔をしながら、松沢が言った。

「上がってもらいたいですけど……時間、あんまり無いですよね？」

つい、上目づかいに見てしまう。

「その聞き方、ずるいな」

大人の余裕だろうか。困ったような顔をして見せながら、くすくすと笑っている。

「まだ大丈夫だよ」

優しく言って、美雪の髪を撫でる。

その動作に、またドキドキする自分がいる。

「じゃあ、そこに来客用の駐車場がありますので……」

そう言っつて車を誘導しようとした時に、ある事に気付いた。

(私……部屋、ちゃんと片付けてたっけ?!)

思えば、松沢からのメールで慌てて家を飛び出している。

脱ぎ捨てた服が、散らかっているかもしれない。

見られたくない下着や部屋着などの洗濯物も、居間にかけてっぱなしだ。

「あのおつ！私先に行っつていいですか？」

「なんで？」

「……部屋が……ちよつと気になつて」

誘っつておいて失礼とは思つたが、松沢は可笑しそつに笑つてくれた。

「わかつた。停めてからゆつくり行くから」

「は、はい……」

車のドアを勢いよく閉めて、階段をかけあがる。

まさか、また再び松沢が自分の家を訪れることになるつとは、恥ずかしいよつな嬉しいよつな、くすぐつたい気持ちだつた。

『ピンポーン』

バタバタと部屋を片付けていると、チャイムの音が聞こえた。完璧な状態とは言えないが、恥ずかしくない程度には片付いていると思う。

「は、はいー！」

慌てて玄関のドアを開ける。

「お邪魔します」

「ど、どござ……」

お互い妙にかしこまってしまつ。

一度入ったことがあるとはいえ、あまりにも特殊な状況だったためか、今日が初訪問のような雰囲気だ。

「あの、急いで詰めちゃいますから」

「慌てなくてもゆっくりでいいよ」

そう言つて美雪の頭をぼんぼんと叩く。

脱いだコートをハンガーにかけるために預かろうとした時、手首に美雪が贈ったブレスレットが見えた。

「あ……。今日も、つけててくれたんですね」

「ん」

そう言って松沢は、美雪の胸元のネックレスに手を伸ばした。

「お前も、ね」

「あ……はい……」

キラキラと光る細いチェーンを、松沢の指がなぞる。

2人の間に、甘い空気が流れているような気がしてしまう。

急に、二人つきりという現実を実感してしまい、途端に緊張が押し寄せた。

「て、適当にその辺に座っててくださいね！」

わざと明るく言いながら、慌てて預かったコートをハンガーに通す。

（なんか、家が上がってもらったのは色んな意味で失敗だったかも……）

買ってきたものを手早く片付けた後、早速母親お手製のお節料理を取り分け始めた。

美雪の家に重箱はないので、適当な容器に詰めるしかない。

松沢と、その友達の目に触れるのかと思うと、少しでも綺麗に見えるようにと慎重に詰めていく。

松沢はというと、最初は多少キョロキョロとしていたもののすっかり部屋になじんでいる様子だ。

美雪のベッドを背に座りながら、置きっぱなしになっていたテレビ雑誌を見ている。

「あー。なんか、帰るの面倒になってきた」

そう言ったかと思うと、上半身をベッドに投げ出した。部屋でくつろいでくれるのは嬉しいが、そんなことを言われると益々一緒にいたくなる。

「でも……お友達と約束してるんですよね？」

「そうだけど」

ちらつと美雪を見上げた。

「お前も、来る？」

「え？」

突然の言葉に、手が止まる。

「えと……どうしようかな」

焦らしたりする訳ではなく、素直になんと言っていいかわからなかった。

「か、彼女としてってことですか？」

「当たり前だろ」

「男の人……はっきりなんですよね？」

「うん。だから、正直誘いたくないんだけど」

それなら……誘わなければいいのではないか？
そんな疑問が頭に浮かぶ。

確かに、男性ばかりなのに自分がノコノコとついていっては、場の雰囲気壊しかねないだろう。

もしかして、美雪が離れ難く思っていることが伝わって、気を遣ってくれているのだろうか。

（そんな……気を遣わなくていいのに）

思わずハッキリとした断りの文句を口にしようとした時

「でも、このまま別れがたい」

ストレートな松沢の言葉が、部屋に響いた。

胸をぎゅっと掴まれたように、鼓動が早くなった。

下を向いてせつせと手を動かすことで、なんとか気持ちを落ちつけようとする。

「あの……私、多分大輔さんのお友達と上手く話したりとか、できないと思うんです……」

「んー、まあそうだろうな」

「私なんか連れてったら、場の雰囲気を壊してしまうかもしれないし」

「そんなことないだろ」

「なんていうか……恥ずかしいですし……」

「イヤ？」

そう言われると困る。

嫌と言えば嫌だ。

でも

「大輔さんと一緒に、年を越せたら……すごく、嬉しいですけど……」

勇気を出して言った言葉に、返事はない。

反応が気になり松沢の方に目をやると、驚いたように目を見開き、じっとこちらを見つめていた。

「あの……？」

「あ。いや、なんでもない……」

そう言うと、手にもったままだった雑誌をパラパラとめくり始めた。返事は、宙に浮いたままだ。

最後の一つの容器のフタを、ぱちんと閉じる。自分の分を少しだけ残し、大半を詰めてしまった。

「あの……お、終わりました」

「ああ。うん」

雑誌を閉じ、松沢が立ち上がり美雪の側までやってきた。

「こんなにいいのか？」

「はい、母が……友達と年越しするって勝手に早とちりして、たくさん送ってきたので」

横になって漏れることのないように、一つ一つビニールにくるんでから丁寧に紙袋に重ねていく。

「はい、これどうぞ」

ずっしりと重くなった紙袋を、テーブルに載せたまま松沢の方へと押した。

しかし、差し出された松沢の手は紙袋を掴むかと思いきや、それを通り過ぎ美雪の髪へと伸びた。

そして美雪の髪を一束、ふんわりと指先でつまんだ。

「やっぱり……来ない？」

「え……」

思わず松沢の顔を見上げる。

「えと……」

返事に迷っている間も、何故か松沢の顔に引きつけられて目が離せなかった。

寂しいような、何かを期待しているような、そんな表情。

髪を弄んでいた指が、すっと顔の輪郭に触れるか触れないかの距離

ですべった。
息が、できない。

「い、き、ます…」

切れ切れにそう言ったのと、松沢の指が遠慮深げに美雪の頬に触れたのが、ほぼ同時だった。

「うん」

そう返事をして、松沢の指が美雪の頬から離れる。

ほっとしたような、淋しいような、はっきりしない気持ちに自分でも戸惑う。

「あの……私、用意しますね」

取り繕うようにそう言って、慌てて脱衣所に飛び込んだ。

心臓が悪い。

いっそのこと、好きだと伝えて、本当の彼女になれたら？

ぼんやりと浮かんでは消えていた想いが、今はっきりと心に確認できた気がした。

でも、ダメだったら？

全て、部下に対する優しさでしかなかったら？

恋愛初心者の自分には、松沢の気持ちもわからなければ、自分がどうしていいかわからない。

(せめて明後日の飲み会が終わるまでは、このままで……それまでは、側にいられるから)

そう思って、自分の胸の鼓動を治めた。

ズルイ考えかもしれないけど、今、この関係を壊したくはない。もう少しだけ、松沢の優しさを独り占めしていきたい。

明後日、飲み会が終わったら、自分の気持ちを伝えてみよう。

こっぴどく振られて、仕事に差し支えることになるかもしれないけど……

あの優しい目で見てくれないのなら、部下として側にいられたとしても、きつと苦しいだけだから。

それまでに、少しでもいいから好きになってくれたらいいのに。

脱衣所の鏡にうつるハートのダイヤが、きらりと光った。

流れ星のように、それに願いをかけた気持だった。

第32話 彼の家で

松沢の友達に会うのに、まさか買い物に行ったのと同じラフな格好で行く訳にはいかない。待たせてはいけないと思い焦りながらも、着替えを済ませる。

「あの……こんな感じで……いいですか？」

初デートの時に履いた膝丈のスカートと、シンプルなVネックの力ツトソー。

こんな普通の格好。

聞く必要はないのかもしれないけど、わざわざ着替えた事が恥ずかしくて聞いてしまう。

「え？あ、うん」

案の定、松沢の返事も素っ気ない。

軽く凹みながらもコートを羽織ろうとして、松沢の目線の先に気付いた。

「……」

目線は、テレビの横に軽くたてかけるように置いていた、写真に注がれていた。

アウトレットモールで、撮影した時にスタッフにもらった写真だ。嬉しくて、いつも見えるようにと立てかけて置いたのが災いした。

思わず走り寄って隠してしまいたい衝動にかられた時に、松沢の視線がふつと写真からはずれた。

「行くか」

「あ、はい……」

もしかして、迷惑だったかな。

本当の彼女でもないのにキモいやつ、とか思われたかも。

そう思って、急にそわそわする。

「どうした？」

美雪の様子に気付いたのか、紙袋を持ったまま美雪の顔を覗きこむ。その表情に、嫌悪と呼べるものは見当たらず、ひとまずほっとした。

「いえ、なんでもありません！」

慌ててバッグを掴んで、玄関へ向かおうとして松沢に続いた。

松沢の車に再び乗り込み、シートベルトを締める。

「忘れ物ない？」

「はい、大丈夫だと思います」

そう答えたものの、正直何を持っていけばいいのかわからない。

松沢が酔っぱらって美雪の家に泊まった日。

その時に歩いて松沢の家に寄った時には、「上がって待ってて」と

言われても素直に上がることができなかった。

男の人の家になるといいうことが、美雪にとってはハードルが高すぎた。

それが、わずか4日後には一時的とはいえ彼女として訪れることになるとは。

思わず、自分の成長を感じずにはいられなかった。

「お友達は、何時頃に来るんですか？」

大量の酒や食料品を車からおろすのを手伝いながら、そう尋ねた。すでに時刻は17時をまわっている。

「んー、わかんない。仕事あるやつもいるし。来るときにメールくるはず」

「そ、そんな呑気でいいんですか？」

「男同士なんてそんなもんだよ」

「夜ご飯とかは……？」

「惣菜とか買ってきてるし、適当に……」

どうしよう、自分が何か作ったりした方がいいのだろうか。急に緊張が襲ってきて、手が冷たくなる。

「お前は何も気にしなくていいんだよ。俺が無理に連れてきたよなもんなんだから」

そう言って、優しく笑う。

「部屋汚いけど、後から来てもらう訳にはいかないしな」

エレベーターの5階のボタンを押しながら、松沢が言った。

「今日はさすがに階段じゃないんですね」

「この荷物じゃ、ね。お前もいるし」

くすくすと笑いながら、重い荷物を足元におろす。その顔を見ると、少しだけ緊張がやわらいだ。

ポケットから手なれた様子で鍵を取り出す松沢を、後ろから見つめていた。

彼氏がない自分が、ずっと憧れていたシーンだ。

「どうぞ」

「お、お邪魔します……」

男の人の部屋に入るなんて、人生初。

恐る恐る踏み入れた家の中から、ふわっとかすかに松沢の香りがした。

部屋のおちこちに、段ボールが見える。

引っ越したばかりだということを忘れていた。

「年末に強行で引っ越したから、荷物が全然片付いてなくてな」

「あ、平岡さんに聞きました」

そういえば、今日平岡は来るのだろうか。

「今日、平岡さんは来るんですか？」

「……………なんで？」

途端にむっとしたように松沢が美雪を見下ろす。

「え……………深い意味はないですけど……………？」

何かマズイことでも言ったのだろうか。

一人でも知っている人がいれば、と思っただけにすぎない。

「来ないよ」

「そうですか……………」

あっさりと言われたことに少しだけ落胆したが、結局もらったメールにも返信していないのだから、その方がいいのだろう。

「今日来るのは、彼女もいないような連中ばっか。少し前にやった飲み会で、そういうやつらで年越そうってことになって」

「え、それなのに私……………いいんですか？」

「いいよ。俺の家だし、俺の彼女なんだから」

“彼女”という言葉に顔がにやけつつも、なんだか申し訳ないような気持ち湧き上がる。

『一緒に年を越したい』

そう言ってしまったことで彼に負担をかけたのではないかと、少し後悔する。

「あの、手伝います！」

せめて何か役に立たなくては。

そう思っつて、レジ袋に手をかけて中身を取り出すのを手伝うことにした。

「いいのに」

そう言いながらも、松沢は美雪の行動を止めようとはしない。なんだか嬉しそうですらあった。

「お節、出しちゃうか」

「え！お節食べるのは明日ですよ？」

「俺の実家では、大晦日にもう食べてた。母方の実家の地方ではそうらしくて」

「え〜！」

二人でわいわいと話しながら、買ってきた荷物を片付ける。

冷蔵庫や戸棚に美雪が手をつけても、何も言われないし何も思っっていないようだ。

さり気なく辺りを見回しても、意外と女性の影を感じさせるような

物は何もない。

その事に、ほっとしている自分がいる。

(なんだか、どんどん欲張りになってるみたい……)

片付けが全部終わらないうちに、ふいに松沢の携帯が鳴った。

「もしもし」

携帯を片手に、リビングへと移動する。

「ああ……うん。もう家にいるよ。うん。502号室。待ってる」

簡単に会話が終わり、携帯を切る。

「来るってさ」

「は、はい……」

途端に、緊張が押し寄せる。

「大丈夫か？」

「なんか、就職した時の面接試験を思い出します……」

素でそう答えてしまうと、松沢が軽く笑った。

「そういえばお前は、新人講義の時もガチガチだったよな」

「え……覚えて、るんですか？」

意外な言葉だった。

入社して何日目かの新人研修で、講義をしたのがそういえば松沢だった。

周りの新人女子社員たちが、キヤーキヤーと騒いでいたのを思いだす。

「まあ、情報課志望って珍しいからな。広報とか営業が多いだろ」

一瞬期待しそうになって、少しガツカリする。

自分の部下になるかもしれない新人なら、最初から見ているもおかしくない。

「見られてるなんて、知らなかったです……」

「いや、そんなにじっと見ていた訳ではないけど」

そういえば、何か話しかけられた気もするけれど、緊張しっぱなしだったためか研修中のことはほとんど覚えていない。

「あの……何か話しましたっけ？」

「大したことは話してない」

会話の内容を覚えていないなんて、勿体ない気がした。

『ピンポンピンポン』

軽快なチャイムの音がした。

「来たな」

松沢がすたすたと玄関に歩いて行くのを見ながら、どうしたらいいのかわからず、ひとまず後を追う。

「うーす」

「ピザ持ってきたぞー」

ドアを開けると同時に、何人かの男の人の声がした。

「おー、入れ」

松沢の声を聞きながら、覗くように後ろから恐る恐る顔を出した。

「え、誰!？」

美雪を確認した一人が、驚いたような声を上げる。

「まさか彼女!？」

「おお」

にやっと松沢が笑った。

「こ、こんばんは……」

緊張しながらも、印象を悪くしてはいけないと思いペこりと頭を下げる。

「ええ〜！！大輔、彼女できたの？」

「早く言えよ！」

我先にと玄関に上がりながら、皆が騒ぐのが聞こえる。

「なになに、どこの子？」

「会社の後輩」

松沢が庇つように美雪を引き寄せて、頭をぼんぼんと叩きながらそう言った。

「なんか、若いよね？」

「あ、ハタチです……」

「ひえ〜！」

「いいから、お前らとりあえず中に入れよ」

苦笑しながら松沢が言った。

「じゃ、色んな意味でお邪魔します」

明るい声で、美雪に笑顔を向けながらどやどやと居間へ移動していった。

遊びに来たのは3人のようだ。

その3人の視線を浴びながらも、それほど居心地は悪くない。

(多分、彼女ってポジションがあるからだろうな……)

そう感じていた。

「じゃあとりあえず」

「かんぱーい」

テーブルの上には、友人たちが持ってきたピザや松沢が買ってきた惣菜などが並ぶ。

当たり前のように松沢の隣に座るようにながされ、それが少し照れくさかった。

「お前この間の飲み会じゃ、彼女いないって言ったのに」

一人が料理をつまみながらそう尋ねてきた。

「あんなところで話したら、ネタにされるだけだろ」

松沢がさらっとそう言った。

簡単な自己紹介こそしたものの、女同士と違いあまり根ほり葉ほり聞いてくる人がいないことに驚く。

類は友を呼ぶとも言うのか、松沢ほどではないが素敵な人ばかりだ。

皆そろって彼女がいないというのが、信じられない気がした。

「大輔って会社じゃどうなの？」

小林と名乗った友人の一人が、美雪にそう聞いてきた。

「え？あ、厳しくて怖いです。仕事の鬼っていうか……」

思わず本音で答えてしまい、どっと場が沸いた。

「お前な……」

こっん、と頭を小突かれる。

「こいつ、無愛想だもんな」

皆でケラケラと笑う。

松沢も会社の飲み会などとは全然違い、リラックスしてるのがわかる。

ふと気づくと、松沢はお酒ではなくお茶を飲んでいるようだ。

「大輔さん、お酒飲まないんですか？」

「飲んだら、お前を送っていけないだろ」

それもそうだ。

気づかずに呑気にチューハイを飲んでいた自分が情けない。

「いいじゃん！美雪ちゃんも朝まで俺たちとオールってことで……」

「アホか！年が変わったら送っていく」

騒ぐ友人を一蹴して、松沢がそう言った。

「大丈夫ですよ。私歩いて帰れますから」

せつかく友達が遊びに来ているのに。

急に来てしまった自分を優先させてしまっただけは、彼らに申し訳ない。

「なにに、美雪ちゃんちってここから近いの？」

「あ、はい。割と……歩いて20分くらいかな？」

「お前まさか、それで引越したとか？」

「偶然だよ。前のところ、事情があつて急に出なくちゃいけなくなつたから」

「じゃあじゃあ、みんなで送って行くぞぜ」

まるで学生のようなノリに笑ってしまう。

くすくすと笑っていると、テーブルの下に置いている手を、皆に気付かれないように松沢が握った。

途端に、心臓が壊れんばかりに鼓動が早くなる。

「一人で歩いて帰るなんて危ないだろーが。言うこと聞け」

「あ、ハイ……」

顔が赤くなっているのを、皆に気付かれないだろうか。

思わず俯くと、大きくて骨っぽい手が、目にうつる。

「そうそう。年の功、年の功。言うこと聞いとけて」

「俺たちなら好きにやっってるから」

「いや、お前らが好きにやるのは許さん」

「なんでだよ」

4人の仲の良さがうかがえる。

ここに、自分を連れてきてくれたのがすごく嬉しかった。

笑い声にまぎれて、松沢の暖かい手がゆっくりと美雪の指をなぞっていた。

「美雪」

松沢の声にハッと目を覚ます。

お酒がまわったのか、ウトウトとしてしまっていたようだ。いつの間にか手は離れていたが、身体が少しだけ松沢に寄りかかっていた。

「あ、じ、ごめんなさい！」

慌てて姿勢を正したが、なんだか頭はぼんやりとしたままだ。

「お前、やっぱり昨日あんまり寝てないんだろ？」

「あ…はい…」

松沢やその友達といえることは楽しかったが、やっぱり美雪にわから

ない話も多くて、ほぼ聞き役になっていたのもある。
ぷるぷると頭を振って見たが、眠気は晴れない。

「奥の部屋で少し寝てろよ。起こすから」

「え、でも……」

「俺らなら気にしなくていいから」

小林がにっこりとそう言った。

確かにこのまま起きている方が、皆に気を使わせてしまうかもしれない。

色々ありすぎて、自分の眠気もピークのようにだ。

「じゃあ、ちょっとだけ……」

松沢に促されるままに、奥の部屋へと案内された。
ベッドと数個の段ボールだけがぽつんとある。

「俺のベッドで申し訳ないけど」

「そんな。むしろ……場を壊すようなこととして、ごめんなさい……」

「大丈夫だって」

そう言って頭を優しく撫でる。

「……あんなとろんとした顔で、あそこに居られる方が心配だから」

「え？」

「……なんでもない」

言葉は聞き取れたが、ぼんやりとした頭では意味がわからない。

「じゃあ、0時が近づいたら起こすよ」

「はい」

ドアがパタン、と閉じて、美雪はそっとベッドに横になった。

（ 大輔さんの香りがする…… ）

何故だが、安心する香りだ。

彼の香りに包まれ、気づけば深い眠りに落ちていた。

第33話 年越し

どれくらい眠ったのだろうか。

かすかに聞こえてくる話し声で目が覚めた。

それはどうやらリビングからではなく、玄関の方から聞こえてくる。1人はもちろん松沢の声。もう一人の声も、どこかで聞いたことがある。

(誰だっけ……この声……)

まだ眠い頭でぼんやりと考えるうちに、その声有谁か気づいた。

「平岡さん……?」

ベッドを抜け出し、手櫛で髪を整える。

鏡がないのでちゃんと整っているか不安だったが、ドアをわずかに開けて様子を伺ってみた。

「悪いな。所持持ちがわざわざ寄ることなかったのに」

松沢の声とともに、がさがたとレジ袋の音がする。

どうやら、平岡が差し入れでも持ってきたようだ。

「いや、麻友の親戚の家に寄った帰りなんだ。車で待ってるし、すぐ行くよ」

麻友? 初めて会ったときに話していた、奥さんのことだろうか。

「平岡く、上がっていけよ」

リビングから誰かが呼びかける声が聞こえる。
楽しそうなその声から察するに、酔いもまわり盛り上がっている様子
子がかがえた。

「今日は帰るよ」

少し大きめの声で、平岡が皆に声をかけた。

その後に、

「大輔にちょっと……聞きたいことがあって」

声を潜めて言った。

「何？」

「美雪ちゃんと付き合ってるって、本当なのか？」

思いがけず自分の名前が出てきたことに驚き、ドアの向こうで息を
のんだ。

「……ああ」

「もしかして、俺があの日押しつけちゃったことが原因？」

「原因って訳じゃないけど」

松沢にしては齒切れが悪い言い方だと思った。
それは、美雪と大輔の微妙な関係のせいだろう。

「俺、ちょっと責任感じちゃって……。あの子に悪いことしたかな
って」

「どつという意味だよ」

「お前、本当に真面目に付き合う気あるの？」

ドキツとした。

聞きたいような、聞きたくないような。

身体が固まって動かない。松沢は、なんと答えるのだろう。

「……もう、昔の俺とは違うんだよ」

「そっか……それなら……」

答えの意味がわからない。

「もしかして、あの日」

平岡が言いかけた時に、ギシツと美雪がもたれていたドアが鳴って
しまった。

（ヤバイー！）

平岡がとっさに言葉を切ったのがわかる。

一瞬だけ考えたのちに、覚悟を決めてさっとドアを開けた。

「すみません。私、結構寝てました？」

わざと明るい声をあげる。

「み、美雪ちゃん？ いたの？」

平岡が驚いた声をあげる。

「あ、平岡さん」

今気づいたような、驚いた顔をして見せる。

わざとらしくはないだろうか。平気な顔をしながらも、緊張で胸がバクバクしている。

「美雪、起きたのか」

松沢が、少し驚いた顔をしながらも優しく笑いかけた。

「はい……なんか、ぐっすり寝ちゃってみたいで」

にこっと笑って見せる。

美雪のその顔に、平岡がほっとしたような顔を見せた気がした。

「あ、平岡さん。メールの返事してなくて……ごめんなさい」

「いや、いいんだよ」

「人の彼女にメールなんかしてんじゃねーよ」

松沢の隣に並ぶと、いつもより少し乱暴な動作で美雪の髪を撫でてきた。

「……寝ぐせ、ついてますか？」

「ガッツリ」

「え！」

「嘘だって」

思わず顔を見合わせて笑ってしまう。

「……安心したよ。俺、色々考えちゃってたんだけど。なんか幸せそうで」

二人を見ていた平岡が、嬉しそうにそう言った。

胸がズキツとする。本当に幸せな訳ではないのに、この人を、騙していることになるのだろうか。

松沢は大人だからそういう演技ができるだけで、幸せだと思っっているのは自分だけなのに。

「あ、お前、短大卒のピチピチした女の子たちと合コンしたい？」

取り繕うかのように、松沢が急に話題を変えた。

「なんだよそれ」

「美雪の友達に、明後日会うことになってるんだ」

「俺はいいよ。嫁さん妊娠中なのに、バレたら何言われるか。あいつら誘ってやれよ」

リビングで盛り上がる友人たちに目を向け、平岡がそう言った。

「美雪ちゃん、本当に大輔なんかでいいのー？　こんなオッサン」

突然、美雪に話が向いてきた。

驚きで、まじまじと平岡を見つめる。

初めて会った時はあまり気づかなかったが、平岡もまた松沢とは違うタイプのイケメンだと思った。

優しいような温かい雰囲気、よい夫なのだろうということを容易に想像させる。

落ち着いた話し方や振る舞いのせいか、松沢より年上にも見える。

「お前だっておっさんだろうが」

少し不機嫌そうな様子で松沢が言った。

「いえ！　私には勿体ないくらいの人です」

考える間もなく、素直な気持ちで口をついて出ていた。

その言葉に、松沢と平岡が顔を見合わせた。

「だって！　大輔、お前ちゃんとしろよ？」

「……………うるせえな」

気のせいか、松沢の顔がほんのり赤い気がした。

「俺、お前には、本当に幸せになってもらいたいと思ってるから」

急に真面目な顔をして、平岡が言った。

「美雪ちゃん、コイツのことよろしくね」

「は、はい……」

平岡の真剣な雰囲気戸惑いながら、一応返事をする。

松沢は、黙ったまま何も言わなかった。

「じゃあ俺もう行くわ。お前ら、良いお年を！ 美雪ちゃんをあまりからかうなよ〜！」

「おう！ 良いお年を〜！」

平岡が部屋の奥のメンバーにそう声をかけ、そしてにっこりと笑って明るく去っていった。

パタン、と静かにドアが閉まる。

思わず松沢の顔を見上げると、松沢も目線だけを美雪に向けていた。

「……幸せにしてくれんの？」

「えっ！」

「冗談だつて」

笑いながら、美雪の首筋を撫でる。

自分が知らない松沢の顔が、まだまだあるようだった。

でもそれを知るには、まだ早いのかもしれない。

「美雪ちゃん、おはよう」

グダグダとお酒を飲んでいたらしい3人が、美雪に気付いてその声をかけてくれる。

「すみません、ぐっすり寝ちゃって」

「いやいや、気にしないで」

皆はにつこりと笑ってそう言ってくれる。

本当にいい人ばかりだと、少しほっとする。

時計を見ると、年が明けるにはまだ時間があった。

ふと、年越し蕎麦の準備をしてきていることを思い出した。

「年越し蕎麦、作りましょうか？」

「えっ！ いいの!？」

途端に皆が盛り上がる。

「はい！ お蕎麦食べないと、年が明けませんよね」

小さい頃から欠かさず食べていたせいか、食べずに年を越すなんて考えられなかった。

「俺も手伝うか？」

松沢がそう言って、腰を上げた。

「大丈夫です！ 簡単ですから」

鍋の場所などを教えてもらって、1人キッチンに立つ。

「いいなあ……俺も彼女欲しい」

しんみりと誰かが言うのが聞こえる。

「あ、お前ら2日ヒマ？」

「なんで？」

「美雪の友達何人かと飲みに行くことになってるんだ。お友達もぜひって言われてるけど、来る？」

「マジで！？ 行く行く！！」

「大輔さま」

途端に、居間にいる皆が色めき立つ。

彼らとまた会えると思うと、美雪もなんだか嬉しかった。

盛り上がる声を聞きながら、ねぎを刻む。誰かのために料理をする日が、こんなに早く来るなんて思っていなかった。

嬉しいけれど、緊張する。

蕎麦は茹でるだけだし、つゆだって市販の物を薄めるだけなのに。

美雪の様子を見るかのように、松沢がキッチンを覗いた。

「心配ですか？」

笑いながらそう尋ねた。

「いや……」

そう言いながら、美雪の後ろにすっと立つ。

「せっかくの初手料理なのに、あいつらと一緒にか……」

「え？」

見下ろされてるのが分かると、なお緊張してしまう。

「……美雪」

「はい？」

包丁を持ったまま、後にいる松沢を見上げる。

何かを言いたそうに、こちらを見下ろしている。

「大輔さん？」

「さっきのって、本当？」

質問の意味がわからず、きょとんとしてしまふ。

「さっきのって？」

「……いや」

もしかして、玄関で平岡と話していたことだろうか。

一瞬そう思ったけど、今度は答える間もなく松沢の手が美雪の顔に添えられた。

「あ、あの……」

何か言わなくちゃ。

そう思った時、わっとリビングから盛り上がる声が聞こえた。

「ちよつとちよつと！ 大輔来いよ〜！」

「……なんだよ……」

ちつと舌打ちをして、松沢が美雪の後から離れた。

どきどきとうるさい胸の鼓動を、必死に抑えていた。

（さっきのって……『よろしく』って言われて、はいつて答えたこと？ でも……）

松沢と平岡には、自分なんか口を挟めないような過去がある気がした。

それが気になるような、なんだか触れない方がいいような、微妙な気持ちだ。

リビングは相変わらず騒がしい。

何があったのだろう、と思った時に松沢が顔を出した。

「美雪、大変。雪降ってる」

「え？」

慌てて鍋の火を止めて、キッチンの小さな窓をのぞいてみる。

「わ、本当だ」

ちらちらと、わずかだが雪が降ってきていた。

(そういえば天気予報で、夜から急激に寒くなるって言ってたっけ)

「参ったな、俺車で来たのに」

「そんな積もるほどは降らないだろ」

皆がわいわいと騒いでいたのは、雪のせいだったようだ。

まるで小学生の男子のように騒ぐ声を聞きながら空から舞い降りる白い雪を見ていると、急に冷えてきたような感覚におちいる。

「あ、お蕎麦お蕎麦」

ハッと我に帰った。急がないと年が明けてしまう。

「お待たせしましたあ」

「お、旨そう」

窓に集まっていた皆が、テーブルにつく。

自分よりも8個も上の人たちなのに、なんだか可愛らしい感じにする。

鶏肉とねぎだけの簡単な蕎麦だったが、皆喜んで食べてくれた。

「美雪ちゃん、美味しいよ。いいお嫁さんになるよ」

そう言われて、思わずげほっと蕎麦を吹き出しそうになる。

「あ、ありがとうございます……」

「まだ二十歳なのにさ。ちゃちゃっと作れるなんて家庭的だね」

自分に向けられた、ニヤニヤとした視線が痛い。

「あんまりからかうなよ」

すました顔で蕎麦をすすりながら、松沢が言った。

「大輔、お前そんな悠長にかまえてていいの？」

「彼女も居ないお前らには言われたくない」

軽く笑いがおこる。

「今年ももうすぐ終わりかあ」

テレビからは、新しい年へのカウントダウンが聞こえてくる。

短大の卒業・就職に始まり、色々あった1年だと思う。

最後が、こんな年越しになるとは夢にも思わなかった。

ちらっと松沢の顔を見ると、目が合った。

「もう少ししたら、送っていくから」

「あ、はい」

「雪降ってるから、車は乗らない方がいいな。歩きでもいい？」

「はい。すみません」

一人でも帰ることのできる距離だけれど、先ほどのやりとりを思うと、この場は素直に甘えた方がいいのだろう。

「あー!!」

テレビの画面から、新年の幕開けを告げる派手なコールが聞こえてきた。

「あけましておめでとーございますー!!」

「あけおめ〜!!」

皆でグラスを持ち、カチンと合わせる。

「今年は、いい年になるといいな」

小林がしみじみと呟いた言葉が、妙に場に響いた。

「お前は色々あったからなあ……」

小林の隣に座る、桐野と名乗った男性が軽く肩を叩く。

その理由を聞きたい気もしたが、黙ってグラスの中のお酒を飲み干した。

「2日の日、俺ら行ってもいいの？」

突然、美雪に向き直り小林が言った。

「はい。あの、ご迷惑でなければ……」

「なんで迷惑？ 喜んで行くよなあ」

他の2人もうんうんと頷く。

彼らが来てくれるなら、瑠璃たちもきつと喜ぶに違いない。

でも、7日間が過ぎて美雪と松沢がただの上司と部下に戻ってしまったら、彼らとの接点はなくなってしまふ。。

(それなのに、紹介してもいいのかなあ……)

何とも言えない気持ちで松沢の方に目を向けたけど、何も言わずにちらりと美雪を見返すだけだった。

第34話 二人で初詣

「じゃあ俺、美雪送ってくるわ」

新年の興奮が冷めた頃、突然松沢が立ち上がった。

「え？あの、片付けとか……」

「いいつて」

松沢にそう言われ、慌てて帰る準備をする。

「え〜！美雪ちゃん帰っちゃうのお〜」

「お前ら泊まってくんだから当然」

コートを羽織りながら、松沢が皆に言った。

「俺らが帰ろうか？」

申し訳なさそうな顔をして、小林が美雪に声をかけてきた。

「え！とんでもないです！私の方が突然来ちゃったんですし……」

慌てて手ぶんぶんと振る。

「わ、私、昼から友達と約束もあるので、今日は帰ります！」

そんな予定はまるでなかったが、そう言つと皆は納得したようだった。

た。

「それじゃあ、2日に」

「はい。よろしく願いします」

ぺこりと頭を下げた。

「俺ら適当にやってるから、ごゆっくり」

「じゃあお言葉に甘えて」

松沢がニヤツと笑った。

「だ、大輔さん！」

ぱしっと大輔の背中を軽く叩くと、皆がはははっと声を出して笑った。

「今日は突然すみませんでした。おやすみなさい」

「またね！」

わざわざ玄関まで見送ってくれた松沢の友人たちにもう一度頭を下げ、外に出た。

「じゃあ悪い。ゆっくりやってて」

松沢がそう言ってドアを閉めた。

「わー……さすがにちょっと寒いですね」

雪がちらつく外は、吐く息も白い。身がぎゅっと引き締まるような寒さだ。

「悪いな、なにかあったら困るから、車では送れない」

「いえ、いいんです」

歩いて帰るのは確かに寒いが、車で帰るより長くいられる。それが嬉しかった。

賑やかな室内にいたせいか、外の静寂を強く感じる。

「ん」

松沢が、片手を差し出した。

ほんの少しの照れくささを感じながら、差し出された手を握ると、松沢は繋いだ手を自分のコートのポケットに入れた。

「……あつたかいです」

「うん」

ポケットの中で、松沢の指が優しく美雪の手のひらを撫でた。

「みんな、楽しい人ばかりですね」

「そっ?」

「はい。あんまり緊張しなかったです」

「そういえばそうだったな」

他愛もない話をしながら、ゆっくりゆっくりと歩く。自分の家が近づくのが、なんだか惜しい気がした。

「そういえば」

ふいに松沢が言った。

「今日、スポーツ店で会ったやつ、アイツお前の何？」

突然の話題にびっくりする。

「え、いきなりなんですか？」

「いや、気になってたから。ただの幼馴染じゃないだろ」

隣を歩く松沢を見上げてみたが、まっすぐ前を見たままだ。幼馴染、という言い訳はきかなかったようだ。

「……中学高校のときに、好きだった人です」

素直にそう言った。

「へえ」

松沢の方から聞いてきたくせに、返答がなんだか冷たい。何故だか焦ってしまい、言葉を続ける。

「好きってというか、憧れてただけってというか……」

「憧れ？」

「中学の時から野球がすごく上手で、全国大会に行ったり甲子園に行ったりしてたんで、皆とアイドルみたいに騒いであただけっていうか……」

「でもアイツ、お前に気がある感じしたけど」

ぼそつと松沢が言った。

「2軍とはいえ、プロ野球選手とはすごいよな」

「……でも、卒業式に玉砕してますから」

「告白したの？」

驚いたように松沢が美雪を見る。

「はぁ……友達にそそのかされたというか……」

「ふーん……」

何故いきなりこんな話をしなければならぬのだろう。

美雪にとっては思い出したくない過去でもあったし、特にこんな話は松沢にはしたくなかった。

なんの意図があって聞かれたのかはわからないが、二人の間に不自然な沈黙が流れていた。

じきに自分の家についてしまうのに、この時間がなんだか勿体ない。

「あの、寒いですね!」

わざと明るく声をかける。

「ん」

一応返事は返ってきた。

そつと顔を見上げると、ばちつと目が合う。

「何?」

「いえ、別に……」

すつと顔を下げる。せつかく二人でいるのに、淋しい。

「この近くに、神社あるの知ってた?」

ふいに松沢が言った。

「え、本当ですか?」

「うん。小さいけどな」

「知らなかったです」

「……少し、寄っていく?」

もう少し一緒にいたい。

そんな美雪の心を見透かしたように、松沢が言った。

「はい！」

自分の気持ちが伝わっていたのなら、こんなに嬉しいことはないのに。

そう思いながら、繋いだ手にそっと力を込めた。

松沢が言う神社は、美雪のマンションからほど近いところにあるようだった。

誘導されるがままに細い坂道が上がっていくと、はるか上にぼつかりと灯りがともっている。

階段の先には、鳥居が見える。

「わー！こんなところ……はあ……」

階段を上がると、情けないことに息が切れる。

「運動不足」

「うー」

笑いながら言われて悔しいが、言い返せない。

後半は、松沢がひっぱる腕にすがるように階段を上っていた。

ようやく上り切って鳥居をくぐると、そこは地域の人だけが訪れるような小さな神社のようだった。

新しい年を迎えたというおめでたい雰囲気の中にも、厳かな空気に

身がひきしまる。

新年早々の初詣に訪れた人々が参拝のための列を作っていたが、その数は決して多くはない。

列の最後に2人で並んだが、この分だとすぐに順番はまわってきそうだった。

「よくこんなところに神社があるの、わかりましたね」

「たまに家の周りをランニングしてるから、その時に見つけたんだ」

「へえ……」

鳥居の脇では、参拝客へと甘酒がふるまわれているようだ。

温かい雰囲気、心が和む。

美雪と松沢の番がまわってきたので、御賽銭を入れてそっと手を合わせた。

何をお願いしようか、並びながらずっと考えていた。

こんな時だけ神だのみというのも図々しい気もするが、願わずにはられない。

“ずっと、大輔さんの側にいられますように”

ただ無心にそう思い、頭を下げた後に横をちらりと見た。

松沢はまだ手を合わせたままだ。

手を合わせて目をつぶるその姿に、魅せられる。

(何をお願いしてるのかな……)

ぱちつと目が開き、慌てて目を逸らす。

「行くか」

「はい」

お互いに無言で拝殿を後にする。

「おみくじ、ひくか？」

「んー……凶だったら凹みそうだから、やめときます。お守り買おうかな」

おみくじや破魔矢が並ぶ社務所へと2人で足を運ぶ。

カラフルなお守りが並ぶなか、レトロなデザインの赤いお守りを手にとった。

「あー、なんかこれかわいいかも」

「買ってやろうか？」

ひょい、と松沢が横からお守りを取ろうとした。

「え、いいですよ。自分で買います！」

慌てて、奪われないようにとお守りを握り締める。

「……やけに力強いな」

「なんか、神様に失礼というか……御利益が薄れそうで」

「どついつ意味だよ？」

「悪い意味じゃないですよ！」

「わかってるって」

困ったように笑うと、同じデザインで色違いの青いお守りを松沢が手にとった。

「じゃあ俺これ」

「大輔さん、お守りとか持ち歩くタイプなんですか？」

「そついつ訳じゃないけど……」

そう言つて、隙を見てさつと美雪が手に持っていた赤いお守りと青いお守りを取り換えた。

「はい。じゃあ美雪はこれ買つて」

「え？」

驚く美雪をよそに、松沢は赤いお守りを巫女さんに差し出す。

「これ、お願いします」

「はい、1000円お納めください」

訳がわからないまま、美雪も青いお守りを巫女さんに渡しお金を納めた。

「はい、交換」

社務所を後にすると、買ったばかりのお守りの袋を松沢が差し出した。

「藤崎”の仕事のミスが減りますように」

にやにやと笑いながら、美雪の手にぽんとそれをのせる。

「えー、そんなにミス多いですかあ……」

なんだか少しショックでもある。

「じゃあ、主任が仕事でもっと優しくなりますように」

今度は美雪が青いお守りの入った袋を松沢の手にのせた。

「仕事に優しさは必要ねえよ」

「そうですけど……」

確かに、松沢が仕事にも優しくなってしまうのは、社内のファンが増えるだけだ。

「……やっぱり、冷たいままでいいです」

「なんだよそれ」

軽く笑う。

美雪の気持ちなど、きつとわからないのだろう。
それでもいい。

「俺の見えないところでも、美雪を守ってくれますように」

「……え？」

にこつと優しく笑って、松沢が美雪の頭を撫でた。

「甘酒飲んで帰るか」

「あ……はい」

再び繋いだ手があったかい。

交換したお揃いのお守りが、嬉しい。

同じものを持っているという絆が、この先も結びつけてくれる気がした。

温かい甘酒を飲みながら、ゆっくりゆっくりと階段を降りた。

寒さに身をすくめた参拝客が、次々に美雪たちを追い越していく。

松沢の家では、小林たちがきつと松沢を待っている。

そのことを忘れた訳ではないけれど、一緒にいる時間が少しでも長引けばいいと願わずにはいられない。

「雪、つもりますかねー」

「こんなちよつとじゃ、すぐ溶けるよ」

ちらちらと降る雪は、道路にふれるとすぐにとけてしまふ。

きつと、雨に変わってしまうだろう。

あと少しで美雪のマンションにつく。
お礼を言わなければと、松沢の顔を見上げた。

「送ってもらった上に、神社にまで連れてってくれて……ありがとう
うぐざいました」

「おー」

なんとか気の抜けた返事が返ってくる。

明日、というか今日の約束はしていない。

次に会うのは、2日の飲み会になるのだろうか？

（最近、毎日のように会ってたからなあ……）

約束がないのが、なんだか淋しい気がした。

第35話 セカンドキス

「美雪」

マンションの入り口の少し手前、ふいに松沢が美雪の名を呼んだ。

「はい？」

「淋しい？」

またからかわれているのかと思いきや松沢の顔を見上げてみたが、意外にも真面目な顔をしていた。

「えーと……はい……」

少し迷ったが、正直にそう答える。

「お前は、素直だな」

松沢の足が止まる。

「あんまり素直で、どうしていいかわからなくなる時がある」

何が言いたいのだろう。

ただ、首をかしげて松沢を見上げてみた。
ポケットから出た手が、美雪の頬に触れる。

「俺が何したいか、わかる？」

「えと……わか、りません」

半分くらい、もしかしてという気持ちもあったが、そう答えた。

「お前、ひよつとしてキスもまだ？」

ストレートな質問に、ぽかんと口が開く。

「き、急になんですか?!」

「初めてだったら、悪いようなそうじゃないような……」

「は、はあ？」

あまりの唐突な問いかけに、口を半開きにしたまま、松沢を見つめ返すしかできない。

なんとなく誤魔化したい気持ちと、流れに身をまかせたい気持ちが、美雪の中でせめぎ合う。

覚悟を決めて、口を開いた。

「あの……初めてじゃ、ないです」

「マジで？ 男に免疫なくせに」

「……そりゃ確かに……彼氏は今までいなかったですけど」

正直に話すようなことなのか迷ったが、なんだか松沢には嘘はつけない。

「小学5年生の時に……」

「は？」

松沢が目を丸くした。

「何それ」

「……転校していく同級生の男の子に……記念に最後に、キスさせてって言われて……」

「させたの!？」

「は、はあ……」

「マセガキ」

冷たく言われた一言に、カチンとくる。

「……色々と、好奇心旺盛なお年頃だったんです!」

「へー」

そつぽを向いた松沢が、はあっと白い息を吐く。

「みんなに人気があつて、スポーツが得意で、仲良かったし……ちよつと、好きなタイプかもって思ってたし、ほ、ほっぺにするのかと思つてたから、驚きましたけど……」

「へー、意外とミィハー」

馬鹿にしたようなその言い方に、少しむっとする。

「……もーいいです。今思えば、あれが私の、最初で最後のモテ期だったんです」

いじけてフンと横を向いた。
やっぱり言わなければよかった。

「正直、はつきり覚えてないし……」

「オイ」

「なんですか!？」

見上げるように振り向いた瞬間
松沢の顔が目の前にあった。

そして、軽く唇が触れた。

「……セカンドキス？」

至近距離で、にやつと松沢が笑った。
とっさに何が起きたのか分からず、呆然と松沢の顔を見つめてしま
う。

「いくらオツサンでも、我慢の限界です」

そう言って、頬の輪郭を軽く指でなぞる。
そしてその指が、優しく唇に触れた。

「……なんか言え」

優しい手先とは裏腹に、怒ったような顔をする。

「な……なんかって……」

ただただ、松沢の顔から目が離せなかった。

どうしていきなり？

どういう意味で？

なんで、キスしたの？

頭の中には疑問符ばかりが浮かぶ。

赤くなった顔で見つめていたら、息がつまりそうだった。

「もう一回、していい？」

そう言って、かすかに松沢が首をかしげる。

「は……」

い、という言葉を飲み込んだ。

そっと松沢の顔が近づくのがわかったから。

誰に教わった訳でもないのに、自然と目を閉じようとしている自分がいる。

そして、人生3度目のキスが、唇に降りてきた。

1回と言ったはずなのに、離れたはずの唇が、ちゅっと微かな音をたててもう一度触れた。

(「ごういつのって、わざと音をたててるのかな……?」)

ぼんやりと霞む頭で、そんなことを考える。

唇を挟むように、松沢の唇がまた触れる。そして僅かに離れた。

「ごめん……」

至近距離でそう呟かれ、ゆっくりと目を開いた。

睫毛が触れそうな距離に、松沢の顔がある。

ごめんの意味がわからないまま、ふるふると頭を振り、もう一度唇を重ねた。

「あー……」

やっと顔が離れたと思ったら、つぶやくように松沢が言った。

「ごめん」

「……どうして、謝るんですか？」

「いや……」

ためらうように美雪の背中に戻った手が、そのまま下に降りた。

「寒いから、もう家に入れ」

そう言って、ぽんぽんと背中を軽く叩いた後、マンションへと促すように美雪の背中を押した。

「…………あの！」

「ん？」

思いきってその声をかけてみても、普通の顔をして振り向く松沢を見ると、何も言えなくなった。

ただ黙って、松沢の指をきゅっと握ってみた。

美雪を見下ろしていた目が、一瞬戸惑うように揺れた気がした。

好き。

すごく好き。

優しい目も、大きな手も、低い声も、柔らかく額にかかった前髪も全部好き。

7日間の約束よりも、今の気持ちを知りたかった。

「大輔さん、あの……………」

黙って美雪のマンションへと向かおうとした松沢に、声をかけた。

「何？」

あくまでも普通に、松沢が返事をする。

「私……………」

それ以上が続けられず、思わず俯いてしまう。

そんな美雪の様子を見かねたのか、松沢がぼんぼんと軽く頭を撫でた。

「お前、男と付き合ったことないから……、こんなことしたら好きだと勘違いしちゃうよな？」

突然自分に降りかかった、その言葉の意味がわからない。なんだか胸がざわざわする。

「どういう……意味ですか？」

声を振り絞るようにして、ようやくそう言った。

「……俺のことを好きだって、錯覚しちゃうんじゃないかと思って、そう言いながら、美雪から目を逸らした。

「免疫ない子に、こんなことしたらダメだよな。ごめん」

“ごめん”の意味は、こういう意味だったのか。

頭がグラグラする。

『好き』と喉まで出かかっていた言葉をぐっと飲み込んだ。

「大輔さんは……、誰にでもこんなことできるんですか？」

思わず、刺々しい言葉が口から出た。

こんなことを、言いたい訳ではないのに。

「……誰にでもじゃないよ」

「だったら！……私だって同じです」

訳もなく涙が浮かんだ。

「男に縁のない、免疫のない子は可愛いそうですか？」

「そんなこと言ってない」

「でも……」

自分でも、何が言いたいのかわからなくなってきた。

単純に『好き』だと伝えたい気持ちは、小さくしぼんでしまった。

「もう……いいです……」

思わず手を振り払おうとすると、

「待って」

その手を、ぐっと松沢が握りなおした。

「そういうことじゃないって」

「……」

松沢が、何を言いたいのかわからない。

「もういいです。私、勘違いなんかしませんから……」

小さくそう言った。

「松沢さんに、ご迷惑かけてるの、充分わかってます。7日間の約束も、忘れてません」

わざと読んだ名前に気付いたのだろう。
チツと小さく舌打ちする音が聞こえた。

「美雪」

「……」

上を向くと涙がこぼれてきそうので、返事もせずに俯くしかできない。

「俺をちゃんと見ろ」

ぐっと奥歯を食いしばって、なんとか顔を上げた。

「そういうこと、言ってるんじゃない」

街灯の明かりを背に立つ松沢を、まっすぐに見つめるだけで精いっぱいだった。

「今日会ったアイツみたいに……お前がちゃんと好きになる相手は、他にいるのかもしれないと思って」

“アイツ”というのが吉村を指してるのはすぐにわかった。
でもどうしてそんなに吉村にこだわるのか、わからない。

「じゃあ、なんでキスなんかするんですか？」

思わずケンカ腰な口調になってしまった。

「……したかったから」

目をかすかに細め、美雪を見つめながらそう言った。その目には、後悔と、少しだけ暴力的な眼差しが浮かんでいるように思えた。

ストレートな答えに、何も言えなくなる。

「し、したいからするって、子供ですか!？」

「そうだな」

わざとくしゃくしゃと美雪の頭を撫でる。

「じめん。俺、帰るわ」

あと少しでマンションだと言うのに、くるりと美雪に背を向けた。

「お前も早く家に入れ」

「い、言われなくても入ります!」

くるっと背を向けて駆け出す。

「おやすみなさい!」

捨て台詞のようにそう言い、マンションの入り口に入る前にちらりと振り返ると、立ち止ったままこちらを見送る松沢の姿が見えた。

（もう、何考えてるのかわかんない!）

通じ合ったかのように思えた心が、すぐに見えなくなってしまった。今日のお礼も何も言っていないことに気付いたが、戻る気にはなれない。

一目散に階段を駆け上がり、自分の家へと飛び込んでいた。

「はぁー……」

単純に嬉しいと思えない、複雑な気持ちだった。

キスされたことはもちろん嬉しかったけど、

『俺のこと好きだと、錯覚しちゃうんじゃないかと思って』

『お前がちゃんと好きになる相手は、他にいるのかもしれない』

そう言われた言葉が、頭で響いている。

まるで、これ以上好きになるなとブレーキをかけられたようだ。

(やっぱり、私みたいに経験の少ない子は、負担なのかな……)

何も考えたくない。

そう思いテレビをつけてみたけれど、新年を告げる明るいバラエティ番組は、何故か気分が滅入るばかりだった。

テレビを消し、ベッドに突っ伏して、そっと唇に手を伸ばす。

ここに、あの人の唇が触れたと思うと、途端に胸がどくどくする。よくわからなかったけど、柔らかかった気がする。

そして、温かかった。

目前に迫った、松沢の優しそうな顔を思い出すと、胸が締め付けられるようだった。

あの目で、自分だけを見てくれたらいいのに。

(メールでも、してみようかなあ……)

そう思いバッグの中から携帯を取り出すと、メールの受信を知らせるランプが点滅していた。

慌てて携帯を開くと、母親と何人かの友達から、新年を祝うメールが届いている。

そのメールの中に松沢の名を探すが、当然のようにそれはなかった。もうそろそろ、家に着いたころだろう。でも、松沢の家には友人たちがいる。

今メールしても、逆に迷惑になってしまうかもしれない。

彼氏の約束はあと2日。

今、何かを焦っても、きつと何も進まない。

(明日……いやもう今日か……夜にメールしよう……)

大切な事を後回しにするのは、自分の悪い癖だ。

でも今は、松沢へと送信する言葉が見つからなかった。

第36話 彼の親友

カーテンの隙間から、日が差し込むのが見える。
ぐっすりと眠れたような、そうでないような
時間感覚があまりない。

枕元の携帯に手を伸ばし、時間を確認する。

「もう12時かあ……」

メールの受信は、無し。その事実にしり落ち込む。
今日は、松沢との約束は何もないくて、それが当然のはずなのに、
ここ数日ですっかり彼の顔を見るのに慣れてしまっていた。
寂しく思う気持ちは、どうしようもない。

もそもそとベッドから這い出して、電気ケトルに水を入れる。
母親には申し訳ないが、冷蔵庫の中のおせち料理に手をつける気にはなれなかった。
温かい紅茶に、多めの砂糖を入れて口にする。

「あつっ……」

ぼおっとしたまま、雑誌をぱらぱらと開いてみるが、その内容は全く頭に入っていない。
このまま家にいても、何もしないまま日が暮れてしまいそうだ。
ふと、明日にせまった飲み会のことを考えていた。

(服、何着て行く……)

もしかしたら松沢とプライベートで会うのは、明日が最後になって

しまつかもしれない。
それなら、せめて少しでも、可愛いと思われたい。
ノロノロと寝室に戻りクローゼットを覗いてみるが、どの服も幼く見えて仕方なかった。

　　いっそのこと、気晴らしも兼ねて買い物でも行こうかな。

出かける支度をするのは少し億劫だったけど、気を取り直して買い物に出かける準備を始めた。

電車に乗り街まで出てきてはみたものの、初売りで沸くデパートは、想像以上の混雑だった。

なんとなく雰囲気の流れされて数点の福袋を買ってはみたものの、一番の目的である明日の洋服が買えていない。
可愛いと思う服があっても、人混みの中では試着室までが遠かった。購入した福袋を開け中身を確認してみたものの、イマイチ自分に似合いそうな服は入っていない気がする。

「はああ……失敗した……」

デパートの前で、思わず独り言が出る。

疲れ切った身体で、荷物を抱えたままコーヒーショップへと入った。甘いものが恋しくなり、キャラメルソースのたっぷり入った温かいラテを頼む。

窓際の席に座り、ぼんやりと人の流れを見ていると、人混みの中にいるのになんだか淋しい。

目の前を通り過ぎていく幸せそうなカップルを見ていると、無償に松沢に会いたくてたまらなくなった。

(今……メールしてみようかな……)

携帯を取り出し、松沢のアドレスを眺める。
でも、どんなことを書けばいいのかわからず手が動かない。

松沢のアドレスを凝視していたら、目の前のガラスを外からコンコンと叩く音が聞こえて顔を上げた。

「平岡さん!？」

優しく微笑みながら目の前のガラスをノックしていた人に、驚きを隠せない。

慌てて立ち上がろうとすると、“そこに居て”というようなジェスチャーを送ってきた。

不思議に思って見ていると、どうやら少し離れたところに立っていた女性に何やら説明をしているようだ。

こちらを見た女性と目が会う。

茶色の長い髪が、ふわりと緩やかにカールしていて、優しげなイメージだ。

背がすらりと高くて、平岡と同じくらいの年に見える。
につこりと微笑まれ、訳もわからず軽く頭を下げた。

(綺麗な人だな……もしかして、奥さん……?)

平岡はその女性と別れ、美雪のいるコーヒショップへと入ってきた。

「こんにちは、美雪ちゃん」

「こんにちは。あの、さっきの人は……」

「ああ、俺の嫁さん」

「あの、いいんですか？どこか行かれたんですか？」

「いや、気分転換にちょっと買い物に出ただけだから、タクシーで帰らせた」

初めて会った時に言われたことを思い出す。

「妊婦さん、なんですよね？」

「うん。でもまだ4カ月だから、お腹とかはまだ目立たないよ」

そうなのか。

というか、何カ月くらいからお腹が目立つのか、さっぱり美雪にはわからない。

「美雪ちゃんと、どうしても話が出たから。ちょっと待って」

そう言うと平岡は、自分の飲み物を買って行った。

「ごめんね、あの日、大輔を押しつけちゃって」

向かい合って座った途端、そう言って平岡が頭下げた。

「あの日……嫁さんから調子悪いってメール来てて、ちょっと焦ってたんだ。だからって、悪いことしたよね」

「いえ！ー引き受けたの、私ですし……」

思わず美雪もつられて頭を下げる。

「なんだか気になって朝電話したら、大輔が出たからびっくりした」

「はあ……」

なんと説明してよいかわからず、ただうつむくしかできない。平岡の驚きは、当然だと思う。

自分ですら、想像もしないような展開だったのだから。

「付き合うことになったって……何があったの？」

そう言われても、職場の先輩である成田に説明したように、スムーズに説明するのは難しい。

困ったようにもじもじしていると、平岡が顔を曇らせた。

「……大輔に、無理矢理なんかされた？」

「えっ！？まさか！」

驚いて、慌てて顔の前で手を振る。

「私みたいな色気もないガキみたいなのに……松沢さんが手を出す訳、ないですよ」

ははは……と力無く笑う。
自分で言ったくせに、なんだか空しい。

「そんなことないよ。美雪ちゃんはかわいいよ」

面と向かってそう言われ、なんだか顔が赤くなる。

「あ、ありがとうございます……」

「あ、いや……」

取り繕うかのように、平岡がコーヒーに口をつけた。

「じゃあ、何かされた訳じゃないんだね。それならよかった」

改めて平岡がそう言った。

「アイツ、一時期ひどかったから……もし美雪ちゃんに無理矢理な
んかしたなら、俺自分が許せなくなるところだった」

「そうなんですか？」

「うん。いくらなんでも、直属の部下には手を出さないだろうと思
ってたけど」

そう言いながら、優しく微笑む。

「どうして付き合うことになったのか、差し支えなかったら教えて
くれない？」

その顔に浮かぶ表情は、どうみても好奇心や冷やかしではない。どうしようかと迷ったが、平岡には正直に話した方がいいような気がした。

「実は……正式に付き合ってるって訳じゃないんです」

「え？」

美雪の言葉に、コーヒを飲む平岡の手が止まった。

「ちょっと、色々……ありまして、友達に彼氏を紹介しなきゃいけなくなってしまうって。私、男友達とかもないので、松沢さんが彼氏のフリをしてくれることになったんです」

一呼吸おいて、ぼつりと真実を告げた。

「だから……本当の彼氏って訳じゃ、ないんです」

「そう、なんだ……」

しばし何かを考えるように、平岡が顎に手をあてた。

「松沢さん、優しいから……多分、引き受けてくれたんだと思います」

「優しい？」

平岡が聞き返した。

「はい。だから別に私、彼女でもなんでもないんです」

「そっか……」

2人の間に、しばしの沈黙が訪れた。

「美雪ちゃんが、アイツのことどう思っているかはわからないけど……。アイツ、今まで友達に彼女紹介したりとかするタイプじゃなかったんだ。だから、少なくとも俺らには本気の彼女に見えたんだけど」

平岡の言葉に、美雪は静かに答えた。

「そうでしょうか……私、松沢さんの部下だから、下手に冷たくできないだけだと思いますけど」

「だったら、中途半端に引き受けるような事はしなないと思う」

やけにきつぱりと平岡が言いきった。

「平岡さん、松沢さんと本当に仲がいいんですね」

「まあ一応、高校の時から一緒に付き合いは長いからね。俺は親友だと思ってるよ」

そう言った後に、平岡が軽く息を吐いた。

「でも、アイツが俺をどう思っているかはわからないけど」

少しだけ、表情が悲しそうに見える。

「こんなこと美雪ちゃんに言うのよくないかもしれないけど。俺、アイツから女を奪ったんだ」

「え？奪った……？」

目の前で優しく微笑む平岡から、そんな言葉が出たのが信じられなかった。

普段はクールに見える松沢が奪ったというならわかるが、その逆は考えがたい。

「うん。今の嫁さん」

驚いて目を見開く。

先ほどの、優しげに微笑む女性の顔が浮かんだ。

「嫁さんも、大輔と同じで高校時代の同級生なんだ。一緒にあいつの夢を見守ろうって言ってたのに……俺が抜け駆けしたんだ。わざわざ留学先まで追いかけて……。俺って最低」

平岡が自嘲気味に笑った。

「何年も前の話だけど……俺たちの結婚が決まって。平気そうな顔して祝ってくれたけど、随分女性関係が派手になったんだ。確か、同じ会社の人にも手を出して、痛い目見たって聞いたことあるけど……きつと、総務課の江藤のことだろう。」

言われてみれば、背格好が似てるような気がする。

「美雪ちゃんという大輔は、なんだか楽しそうだったから……勝手に、すごく安心したんだ。あんな感じのアイツ、久々に見た気」

がしたから」

平岡の告白になんと言っていていいかわからず、黙ってラテを喉に流しこんだ。

「美雪ちゃん、大輔のこと……好きなの？」

「え!?!」

突然の問いかけに、思わず目が泳ぐ。

「えと、あの、なんていうか……」

「ああ、ごめん。いきなり変なこと聞いてくすくすと平岡が笑った。

「そのハートのネックレス、もしかしてアイツにもらったの？」

平岡の指が、美雪の胸元を指していた。

「あ、はい……」

「そっか。美雪ちゃんに、よく似合うね」

にっこりと笑顔で言われ、思わずうつむく。

「あの……私……」

それ以上言葉が続かない。

思わずそつとネックレスに手が伸びる。

「いいよ。言わなくて」

平岡がコップに残ったコーヒーを、飲み干した。

「俺が先に聞いちゃ、アイツにまた嫌な思いさせちゃうよ」

そう言っつて、少し淋しそうに笑った。

「長々とごめんね」

コーヒーショップの外に出て、平岡がそう言った。

外が少し暗くなり始めている。

「いえ、とんでもないです。色々お話が聞けて……嬉しかったです」

「ありがとう」

ふいに平岡が手を差し出してきたので、その手をぎゅっと握った。ふと気になったことを口に出した。

「そういえば、あの日……どうして松沢さんあんなに酔っぱらってたか、平岡さん知ってますか？」

「え？」

驚いたように平岡がそう言っつて、うーんと考え込んだ。

「その理由は、松沢本人から聞きなよ。確信はあるけど……俺もイマイチわかんないしね」

「そうですか……」

松沢が教えてくれないから聞いたのだが、それは言わないでおいた。

「それじゃあ」

「はい」

「大輔のこと、よろしくね」

「……」

何も言えずに、黙って笑うことしかできない。

「今度は、大輔と一緒にの時に会えるように。がんばってね！」

「……はい！」

一瞬迷ってから元気よく答えると、平岡はにっこりと微笑んだ後に、軽く手を上げながら駅の方角へと向かっていった。

第37話 想い

雑踏に消えていく平岡の後姿を、複雑な気持ちで見送っていた。

（大輔さん……まだ、奥さんのこと好きとか……ありえる？）

それはないとは、松沢以外の誰にも言えないだろう。

平岡は、美雪を落ち込ますために打ち明けたのではないというのはわかっているけれど、聞かされた話をすんなりと消化することはできない。

なんとも言えない気持ちだった。

ね。
好きな人が親友の奥さんになっちゃって……きっと辛いよね。

それならまだ、手の届かないくらい遠くに行ってしまう方がいいのか。

それとも、例え自分の物にはならなくても、会える方がいいんだろうか。

ふう、とため息をつく。

そんな苦しい恋愛、今の自分には想像もつかなかった。

明日は、7日間の最終日。飲み会が終われば、約束は終了。貸し借りはなしだ。

普段通り、美雪と松沢は上司と部下に戻る。

会社で会えるのなら、それでいい？

今まで、何の意識もせず側にいた、会社での松沢が浮かんだ。かっこよくてクールで、仕事が出来て頼りがいがある、皆の憧れで……。

でも、厳しくて怖くて、自分とは遠い人だと思い込んでいた。

ダメだ。きっと淋しくてたまらない。

優しい目や、包み込むような大きな手や、温かい唇を知ってしまったから。

無償に、松沢に会いたくなっていた。

今、自分が思うのは、ただそれだけだ。

今の自分の気持ちを伝えたかった。

明日、飲み会が終わってから告白しようと思っていたけれど、それはなんだか卑怯な気がした。

7日間の約束に、これ以上松沢を縛り付けるのも。

(会いに行こうかな……)

明日の服が買えてないことは、もうどうでもいい気がした。

荷物を抱えたまま、急いで駅へと歩きだした。

電車に揺られ、緊張しながら携帯を開いた。

今、松沢は何をしているんだろう。

思えば、この7日間で自分から松沢にメールしたことはほとんどなかった。

『じんばんは。今、何してますか?』

何分も考え込み、たった1行のシンプルなメッセージを送る。

ピッ。送信。

ふー……と軽く息を吐く。

画面を閉じ、ポケットにしまおうとするとブルブルと短く携帯が震える。

メールの受信だ。

すぐに返信があることに、嬉しさがこみ上げる。

『家。テレビ見てた。あいつら帰ったよ』

簡素なメールだ。

なんて切りだしていいのかわからず、携帯を口にあてて考え込んでいると、また携帯が震えた。

『お前は？何してるの？』

続けざまに届いたメールに驚きながらも、返信する。

『電車の中です。買い物に行っていました。福袋買ってきました』

『1人？』

『はい』

これじゃあまるで、松沢からの誘いを待っているみたいだ。なんと切りだせばいいのかと考えていると、再度メールが来た。

『そっか。気をつけて帰れよ』

そのメッセージに、思わず手が止まる。
まるで……このメールのやりとりを、打ち切られたようだ。

“ 会いに行ってもいいですか？ ”

そう打ちかけた送信メールを、そっと削除する。

会えなくてもいいから、松沢の家まで行きたいという気持ちが募る。

（どうせ近いんだし……通り道ではないけど……ひと駅手前で降りて、ちよっと歩くくらいだし……）

一生懸命、自分への言い訳を考える。

携帯をしまおうとバッグを開けると、赤いお守りがちらりと見えた。一緒に買った、美雪にとっては大事なお守り。

そのお守りを、そっとコートポケットに入れた。

雪こそ降っていないものの、吐く息が白い。

いくつもの紙袋を肩に掛けながら1人で歩く道は、前より少し遠く感じる。

福袋を買いすぎたことと、一度荷物を置きに自分の家に帰ればよかったこと、二つの後悔が美雪を襲う。

マンションまで行っても会える確約はないのに、胸がドキドキしてきていた。

告白しようと思気込んでいたはずが、外の寒さとしんとした冬の空気に、心がしほみそうだ。

角を曲がると、松沢の住むマンションが見える。

ポケットの中のお守りを思わずきゅっと握り締めた。

前は、手を繋いで一緒に歩いた道だ。

駐車を横切り、マンションの前に立ち上を見上げる。

(約束もないのに家まで来ちゃって……なんか、ストーカーみたい？)

勢いだけの自分の行動に、苦笑いが浮かぶ。

外からは、マンションのドアしか見ることができない。

松沢の部屋は5階だ。

首をうーんと上げ、しばし呆然と立ちすくむ。

その時携帯が震えた。

メールかと思ったが、電話の着信のようだ。

“松沢大輔”

画面に映る文字に、心臓が飛び上がりそうな気持ちになる。

「も、もしもし……」

通話ボタンを押し耳にあて、声を潜めて出る。

「美雪？」

低いけれどよく通る声が、携帯の向こうから聞こえた。

「もしかしてお前……俺のマンションの前にいる？」

「え!？」

思わずキョロキョロと辺りを見渡すと、カタツと頭上からわずかな音が聞こえた。

顔を上げると、松沢の部屋のドアの横の小さな窓が、微かに開いている気がする。

「やっぱり……。ちょっと待ってて」

そう言ってぶつっと電話が切れた。

(み、見つかったちゃった……どうしよう!?)

思わず走って逃げかえりたいような気持ちに襲われたが、それでは『待ってて』と言ってくれた松沢に失礼すぎる。

勝手にマンションまで来てしまったことを、激しく後悔した時、トントンと勢いよく階段をくだる音が聞こえてきた。

マンションの入り口に目を向けると、コートを羽織った松沢が息を切らしながら姿を現した。

その姿を見ただけで、胸がきゅゅと締め付けられたかのように苦しくなった。

「どうしたんだよ」

はあっと息を切らせながら、松沢が走り寄ってきた。

深い緑色のスウェットに、チエックのニットパンツ。

髪はくしゃくしゃと乱れ、半分寝起きのようなナチュラルなスタイルだ。

急いで出てきてくれたのがわかって、申し訳ないと思いつつも、なんだか嬉しくなる。

「あの……どうしてわかったんですか？」

「あそこの小さい窓、トイレ。用を足しながら外見るのがクセで」

少し恥ずかしそうに頭を掻きながら、松沢の住む5階の窓を指さした。

「美雪に似てる、と思って電話かけたらビンゴだったから。驚いた」

そう言いながら、立ちすくむ美雪を可笑しそうに見つめている。

「すごい荷物だな」

「あ……初売りに行つてて」

「友達と行くつて言つてたもんな」

そうだった。

松沢と友人たちにそう言ったのを、すっかり忘れていた。

「俺にお土産？」

笑いながら松沢が言った。

「あつ！ご、ごめんなさい！そうじゃなくて……」

何か手土産でもあればよかった。

こんなに荷物を持っていながら、全部自分の物だというのが恥ずかしくてたまらない。

「冗談だつて。でもそれなら……どうした？」

ふと、松沢が美雪の顔を覗きこんだ。

「さつき、来るってメールくれたら駅まで迎えに行ったのに。上がっていくか？」

当たり前のように、そう言った一言が嬉しくてたまらない。緊張して固まっていた心が、途端にすうっと溶けていくみたいだ。

「いえ、あの……ちょっと会いたかっただけというか……」

松沢の顔を見上げながら、素直な気持ちが口から出ていた。

「え？」

こんなこと、きつとたくさん女の子に言われていたに違いない。それなのに、驚いた顔をして美雪を見返す。

「そっか」

短く言うと、美雪の頭を撫でるように滑らせた手が、首の後ろにまわった。

「俺も、会いたいと思ってたよ」

にこつと軽く笑うその顔に、釘付けになった。

嬉しくてたまらないのに、照れくさくて、沈黙に耐えられなくなり慌てて話題を探す。

「あの、今日偶然平岡さんに会って」

「平岡に？」

松沢が意外そうな顔をした。

「お茶してたら声かけられて……奥さんと一緒にいて……。あ、奥さんは先に帰られたんですけど」

「ふーん」

興味がないのか、そのフリなのか、素っ気なく松沢が言った。続ける言葉が見つからず、ふと美雪の口が止まる。

「それで？」

「え？」

思いがけない冷たい言い方に、驚いて松沢の顔を見つめた。

「わざわざ俺に言っつてことは、なんか言ってたの？」

「えと……」

なんだか、触れてはいけない話題に触れてしまったようだ。

「平岡さんに……色々話聞いて……」

「色々？」

あからさまに不機嫌な様子に、この話題を出したことを悔やむ。

「あの……なんでもないです」

「なんだよ、言いかけたんならちゃんと言えよ」

たたみ掛けるようにそう言われ、ため息をつきながらも続きを話すことの覚悟を決めた。
誤魔化すのは、苦手だ。

「……高校の時の、同級生だとお聞きしました」

「他には？」

「奥さんが……同級生だって……」

「で？」

「平岡さんが……大輔さんから、奥さんを奪ったって」

「……はあ？アイツそんなことまで言ったの？」

松沢が目丸くして言った。

「……奪ったって思ってるのは、アイツだけだろ」

一呼吸置いて、吐き捨てるように松沢がそう言った。
その言葉の意味がわからず、松沢の顔を見上げた。

「え、でも……」

「そんなことを、俺に言いに来たの？」

「……いえ……」

「同情でもした？」

鼻で笑うようにそう言われ、自分の想いを伝えようとしていた気持ちだが、しぼんでいく。

「違います……」

しばし黙りこんで俯く美雪の頭を、ぼん、と松沢が軽く叩いた。

「上がってかないなら、送ってく。もう遅いし、危ない。車のカギとってくるから待ってて」

まるで、今までの話をなかったことにするかのような言い方だった。くるりと美雪に背を向け玄関に戻りかけた松沢のコートの裾を、かろうじて掴んだ。

「待ってください！」

「ん？」

振り向いた顔は、絶対に怒っているに違いないと思っていたのに、ただ優しく、美雪の目を見つめていた。その瞳の奥に隠れる感情を、知りたい。

やっぱり好き。

この人が誰を想っているように、今までどんな付き合いをしてこようと。

自分よりずっと大人で、相手にされていないかもしれないけれど、溢れそうな感情に揺られながら、気づくと自然に口が開いていた。

「本当は……明日言おうと思ってたんですけど」

「うん」

「私、大輔さんのこと」

すうっと息を吸い込んだ。

「好きです」

まっすぐに松沢の目を見つめて、そう言った。

「男の人に、免疫ないからじゃ、ないです」

そう思われても仕方ないけれど。

「優しくしてくれたからでも」

秘めていた想いを口に出すと、何故だかじんわりと涙が浮かんできた。

「わかんないですけど……私、大輔さんの側にいたいです。明日……7日間の約束が終わっても、ずっと」

沈黙が怖かった。

それでもぐつと奥歯を噛みしめた後に、顔を上げて笑ってみせた。

第38話 決意

ポケットに入れたお守りを、コートの上からぎゅっと握った。

「ごめんなさい。困らせて」

「いや……」

笑うでもなく、怒るでもなく、その瞳はただ淡々と美雪を見つめていた。

その表情から感情を読み取ることは難しく、きっと困らせてるのだとしか思えない。

「……悪いけど……」

松沢がぼつりとそう言った瞬間、

「へ、返事は、明日聞かせてください!」

被せるように、そう言う自分がいた。

続く言葉が、きつと否定的なものだろうということとは容易に想像できる。

「えっ」

戸惑うように松沢の目が揺れた。

「あの、なんだったら……明日は来なくても大丈夫ですから!」

わざと明るくそう言ってみせる。

「じゃあ、私帰ります！」

無理矢理に笑って走り出そうとしたら、

「待ってっ！」

ぐつと腕を掴まれた。

「送ってく」

「い、いいですから！」

美雪の腕を掴む力は意外に力強く、ぶんぶんと振り回してみてもほどけそうにない。

今は、一刻も早くここから立ち去りたいのに。

これ以上一緒に居たら、あの言葉の続きを聞かなければいけないかもしれない。

そしたら、泣いてしまう。

そんな惨めば姿は見せたくないし、きつと今以上に松沢を困らせてしまう。

「いいから。危ないだろーが。言うこと聞け」

じたばたと暴れる美雪にかまうことなく、松沢が手首を掴んだまま美雪の身体を引き寄せた。

覗きこんできた顔に浮かぶ心配そうな表情に、腕を掴まれたままうつむく。

「明日の約束も、まだしてないだろ？上がるのがイヤだったら、車の中で話そう」

「はい……」

“車の中で話そう”
ぎくりと身が震えるが、優しく窘めるように言われては、断る言葉が見つからない。

「鍵、取ってくるから」

ぽんつと一度だけ美雪の頭を軽く叩いた松沢が、階段を上っていくのを黙って見送った。

(かっこわる……)

思わず、このまま走って逃げかえってしまいたい衝動にかられたが、それでは明日会わせる顔がない。

悪いけど、君の気持ちは受け取れない

悪いけど、部下としてしか見てない

悪いけど、本当の彼女にはできない

悪いけど、悪いけど、悪いけど……

それに続く言葉を勝手に想像して、頭の中を駆け巡る。

(やっぱり、1人で帰りたい……)

そう思ったのと、トントンと早足だが静かな靴音が響いてきたのは、ほぼ同時だった。

「お待たせ」

そう言つて、にこつと笑う。

「はい……」

駐車場の場所も、松沢の車が止まっている場所も、もう知っている。黙つて先に歩く松沢の後に続いた。

美雪の荷物をさり気なく奪つと後部座席に置き、この後に及んで紳士的にドアを開ける。

「どうも……」

その優しさが、今はなんだかわざとらしく感じてしまう。そんな自分にも、なおさら嫌気がさす。

エンジンをかけ、静かに車が走り出した。

車で走れば、美雪の家は5分ほどだ。

(5分だけ耐えて、走つて家に逃げ込もう……)

そう思っていたのに、どうやら車は美雪の家へは向かっていないようだ。

「あの……どこ行くんですか？」

「ちよつと、遠回り？」

前を見つめながら、にこつと爽やかに松沢が笑う。

「もう、食事した？」

「……いえ、まだです」

「一緒に食べに行くか？」

「え？……ってというか、私全然食欲ないです……」

「そっか」

松沢が何故か苦笑しながらそう言った。

何を考えているのか、全然わからない。

好きだと告白して、返事は明日でいいと言ったのに、呑気に連れだつて食事に行くなんて。

「食事行くの断られるの、何回目かな」

ぽつりとつぶやかれた言葉に、違和感を感じて松沢を見上げる。彼から食事に誘われて断ったのは、初デートの時と今回で2度しかないはずだ。不思議に思った。

「美雪」

ふと松沢が呼びかけた。

「はい」

改まった雰囲気、緊張して返事をする。

「平岡に、何言われたか知らないけど……」

そう言っつて、一旦言葉を区切った。

「お前、俺のこときつと過大評価してるよ」

“過大評価”

その言葉の意味を考え込む。

「俺、結構今まで最低な付き合い方してきたし、会社でもきつと嫌な思いさせる」

一言一言、確認するかのようにはつきりと松沢が言った。

真つ先に、江藤たちに会議室へと呼び出されたときのことが頭に浮かぶ。

そんな理由で、断られてしまうのだろうか。

返事は明日でいいと言ったのに、このままでは明日の飲み会は、ドタキャンせざるを得ないかもしれない。

ああ、それなら自分の友達はともかく……小林たちはなんて思うだろう。

じわつと涙がにじんだ。

「俺に、同情したか？」

「なっなんで、私が松沢さんに同情なんてしなきゃいけないんですか?!」

泣きそうになっつてることを隠すかのように、思わずケンカ腰になる。

「なんで怒ってんの？」

「お、怒ってないです！」

ぶいっと窓の外に目を向ける。

遠回りして走っていた道だが、自分のマンションが近づいたことが、景色でわかった。

「明日、迎えにくるよ」

「……一緒に行ってくれるんですか？」

少しすねたような言い方になって、恥ずかしくなった。

違う、こんな甘えた言い方をしたい訳じゃないのに。

「当たり前だろ。それが最初からの約束なんだから」

“約束”……その言葉に、ズキンと胸が痛んだ。

(大輔さん、律義なんだな……だからきつと、ダメに決まってるのに付き合ってくれるんだ)

そう思うと、ため息が出そうになる。

「大輔さん、車で行かないですよね？」

「ん、明日はさすがにな」

「じゃあ、お店の近くで待ち合わせしませんか？」

こんな雰囲気、長く一緒にいることは辛くなりそうだ。いくら約束したこととはいえ、彼氏のフリをする時間は短い方がいいだろう。

「……わかった。じゃあアイツらと18時45分に駅で待ち合わせしてるから、その10分くらい前に」

「はい。それじゃあ……おやすみなさい」

「ごそごそと後部座席から荷物を取り、普通に車を降りようとした。

「待って」

そう言つて松沢が美雪の腕を優しくとつた。

目の端で、美雪が贈ったブレスレットの銀のプレートがきらりと光つたのがわかった。

「美雪……」

美雪の腕を掴んでいない方の手が、美雪の顎をすつとつかんだ。自分の名前を、こんなに甘く呼ばれたことが、あつただろうか。

静かに近づく松沢の端正の顔が、自分にキスをしようとしているのだと直感する。

つられるようにゆっくりと目を閉じそうになった次の瞬間、ぱつと身体を引いて口を手の甲で塞ぐ自分がいた。

「どうして……キスなんか、するんですか……？」

私のこと、好きな訳でもないのに。

「……わからない……」

甘えたように、松沢がそう言った。

微かに細められた目から、視線がそらせない。

“一時期、女関係ひどかったから”

昼間に平岡から聞かされた言葉が頭に浮かぶ。

「俺だって、どうしていいかわかんないんだよ」

そう言って、美雪の腕からすつと手を離れた。

目の前にあった甘い甘い空気を、自分で手放したことにわずかに後悔が襲う。

側にいられるのなら、それだけでいいと思っていたはずなのに。頭の片隅で平岡の言葉がちらついている。

もしかして、この6日間で、優しくされすぎたのかもしれない。だから、勘違いをしてしまうのだ。

自分は特別で、本当の彼女になれるのかもしれない、なんて勘違いを。

だから、遊びじゃイヤだなんて、厚かましいことを考えてしまうんだ。

“悪いけど”って、あきらかに否定の言葉を口にしようとしたくせに、美雪にキスをしようとしたことが、悲しかった。信じていたのに。

今までどんな彼女がいてどんな付き合い方をしてきたかなんて、自分に探る権利なんてないのに。

せめて今、自分の前にいる松沢は誠実でいてほしい……なんて、私の驕りなんだろうか？

やっぱり、告白なんてしなればよかった？

そうしたら、少なくとも明日までは、彼女気分で夢を見ていられたのに。

「明日……待ってます」

“来なくても大丈夫”なんて言ったくせに、未練がましくそう言った。

「うん」

ただ一言、松沢が答える。

「返事も……はっきり聞きたいです」

どうせなら、はっきりと切り捨てられた方がいい。

「返事？……ああ」

静かに松沢が頷いた。

荷物を持って車を降りようとしたら、松沢がふとこちらに視線を向けた。

「じゃあ、お前も明日聞かせて？」

「……何をですか？」

訳がわからず首をかしげる。

「美雪は、俺のどこが好きなのか」

咄嗟に返す言葉が浮かばずに、ぽかんと口を開けた。

「じゃあ、明日」

「は、はい」

その言葉に促されるかのように、慌てて車を降りた。

ゆっくりと走り去る車のエンジン音を後ろに聞きながら、見送りも
ずにぼんやりと歩きだす自分がいた。

(どこが、好き？　なんでそんなこと聞くの？)

今まで彼がしてくれた数々の行動を、全て、自分の中で否定してみ
る。

そつだ、最初から、彼氏の“フリ”って約束で、デートだとか手を
繋ぐとか、そういうのは全て免疫のない自分への練習のようなもの
で……そして経験がないから、それに酔ってしまったんだ。

でも、それだけ…？

そんな訳ない。慌てて走り去った方向に目を向けても、もう松沢の
車は見えない。

最初はからかわれてるんだと思ってた。
そして、ただ貸しを作りたくないから彼氏のフリをしてくれるんだ
と。

でも、それだけじゃなくて。

一緒にいるとドキドキした。

温かい手に触れると、嬉しかった。

好きになるのに、理由なんてどうでもいい。
ただ、大輔が好き。それが全くな気がした。

(それじゃ、ダメなんですか?)

決意にも似た気持ちで、美雪の胸を占めていた。

第39話 7日目の始まり

新年早々の駅前には、あきらかに通勤客とは違うタイプの人々で賑わっていた。

待ち合わせをしているらしき若者たちが、新年の挨拶で盛り上がる声が聞こえてくる。

美雪たちと同じく、これから新年会にでもくりだすのだろう。

ふと、ショーウィンドウに映る自分の姿を確認する。

昨日買った福袋の中身を必死で厳選して、いつもの自分とは違う、少女の子っぱいスタイルの洋服にチャレンジしてみた。

ヒラヒラの白いチュールスカートに、胸元がやや開いたふわふわのニット。

髪も、買った方がいいもののほとんど使っていないヘアアイロンで、ゆるく巻いてみた。

慣れていないせいか時間がかかってしまったけれど、それなりに上手く巻けたと思う。

午前中には、クーポン片手にネイルサロンというものを初めて訪れ、指先を上品で落ち着いたベージュのフレンチネイルにもらった。

(これくらいなら、仕事にも大丈夫そう……)

会社は特に身なりに対する決まりがある訳ではないが、なんとなく地味なスタイルを心がけていた。

それは、新人の自分を戒めるためなどではなく、ただ単に、着飾ることに意識がいかなくなったせいだ。

自分の指先に目が行く。

かすかにラメの混じったネイルが、大人っぽくてキレイ。

ネイルを塗るだけで、指がすらりと長くなったかのような錯覚に陥

る。

彼氏や好きな人のいる女の子たちは、きっとこういう努力は惜しまないに違いない。

そうして、どんどん綺麗になっていくのだろう……

そんなことをぼんやりと考えながら、ちらりと腕時計に目を走らせた。

約束の時間より早く来てしまったのは自分なのに、なかなか松沢が現れないことにドキドキする。

多分、来てくれる。

昨日の松沢の態度から、それは確実だと思う。

でも、不安に思う気持ちはどうしようもない。

携帯を開いてみたけれど、メールや電話はない。

約束の時間まで、あと1分。

心の中でカウントダウンを始めた時に、

「お待たせ」

ぼんつと美雪の頭に手が載せられ、慌てて振り向くと、後ろに松沢がいた。

「あ……」

思わず言葉を失って見上げる。

「どした？」

「いえ……」

黒いジャケットに、シンプルなグレーのシャツに、ベージュのパンツに……

普通の格好なのに、すごく格好よく見えてしまうのはどうしてだろう。

この7日間で、松沢の私服姿にはいくらから見慣れたつもりでいたけれど、マジマジとその姿を凝視している美雪がいた。

「惚れ直した？」

冗談とも本気ともとれない口調で松沢が言う。

「べ、別に……」

なんとなく言っていていいかわからず、そう言っただけ横を向く。

「ツンデレかよ」

くすくすと笑いながら、美雪に手を差し出す。

少し迷ってから、その手に自分の手を絡ませた。

「ん」

ニコニコと笑う姿からは、その心の中は全くつかめない。昨日の今日で、どうしてこんな平気な顔ができるのだろう。こっちは何を話していいかわからないというのに。

今日で、最後かもしれない。

そんな気持ちが、いつそう美雪を硬くさせる。

「美雪？」

「え？」

ふいに問いかけられ、松沢の顔を見上げる。

「……………何考えてんの？」

「え……………今日で、7日間の約束も、最後だなあって思って……………」

素直にそう答えると、松沢はじつと美雪の顔を見つめてきた。

「あ、あの……………昨日の話は、の、飲み会が終わってから……………
……………」

まっすぐに見つめられ、その視線にドギマギしてそう言つと

「お前、余裕だなあ」

ニヤニヤと笑いながら、予想外の言葉が返ってきた。

「へ……………？な、何がですか？」

「色々彼氏設定とか決めてないけど、大丈夫なの？」

「か、彼氏……………設定？」

「いつから付き合ってるの？とか、どっちから言ったの？とかさ。女友達って結構しつこいよー」

にへらっと、意地悪そうな顔で笑う。

「え……」

確かに、この7日間でデートの経験はたくさん積みませていただいたが、肝心なこと何一つ話し合っていない。

今日、質問責めにあうことは間違いない。

特に、瑠璃の質問から逃げることは不可能だ。

それなのに、自分は何を色ぼけしていたのだろう。

「だ、大輔さん！今！今決めましょう！！」

そう言ったのと、

「おーい！！お待たせ」

やけにはずんだ声で、小林がこちらへと走ってきたのは同時だった。

「早く来ちゃった」

てへっと女の子のように、小首を傾げて小林が笑う。

「美雪ちゃん！今日はありがとう！よろしくねー！」

「は、は……」

ぶんぶん美雪の手を振り回すハイテンションな小林と、不敵に笑う松沢の隣で、ひきつった笑いをうかべるしかない美雪だった。

「いや〜合コンなんて久しぶり〜！しかもハタチ！俺ついてる！」

上機嫌の小林が、るるんと居酒屋までの道のりの先頭を歩く。

背があまり高くはなく、やや童顔なかわいい系の顔立ちのせいか、小林は松沢よりも若くみえる。

女の子に不自由はしなそうなタイプだが、どうやら会社には男性が多くほとんど出会いがないらしい。

そつえば、高校時代も男子の多い工業高校だと言っていた。

「だから、合コンじゃないって」

苦笑しながら松沢が言う。

「ハタチは早生れの私だけで、みんな21です……」

美雪もそれに続く。

「まあまあ、細かいことは気にするな！」

桐野がぼんぼんと松沢と美雪の肩を、後から叩く。

結局大晦日の日に一緒に年越しをした、3人が来てくれていた。

昨日の夜瑠璃にメールで確認したら、今日来ることになってるのは結婚の決まった理子を覗けば女5人。

それを告げると、3人のテンションは上がっていた。

松沢は、やや呆れてる様子だ。

「そりやお前らは、ラブラブまっさかりだもんなあ〜」

もう1人の友人、河原がうらやましそうに松沢と美雪を見て言う。

「え？」

振り向くと、その視線が撃いだままの二人の手に向けられていることに気付く。

はっとして思わず手を離そうとしたら、ぐっと松沢が力を入れて握ってきた。

「いいだろ。お前らもがんばれよ」

その強引な態度に、少し戸惑う。

期間限定の恋人だという自覚はあるのだろうか。

「これだから余裕のあるやつはさあ〜」

3人が笑いながら、美雪たちの前を歩いた。

「待ち合わせは19時だよな？」

時計を見ながら桐野がそう言った。

居酒屋の前についた時間は19時きっかり。

「はい、でもいつも大体ちよっと遅くなるっていつか……」

小林の質問にそう答えながら、居酒屋のドアを開ける。

「いらつしゃいませ！」

威勢のいい店員の声が響く。

「あ、木村で予約していると思うんですけど」

瑠璃の名前を告げると、すぐに置くの座敷へと案内される。

ガラスと店員が引き戸を開けた。

「あ！来た来たあ〜！！美雪！」

「待ってました〜」

途端に、個室から明るい声が聞こえる。

「あ〜……なんか、いい匂いがする……」

にへらつと、小林が小さな声でつぶやいた。

個室の中には、すでに友人たちが到着していた。

瑠璃と、ファーストフード店で目撃されてしまった結衣とさくら、それに尚美あやに彩あやの5人。

飲み会で彼氏がいらないと言っていたメンバーだ。

「ど、どうしたの？今日なんか集合早くない？」

入口の一番近くに座っていたさくらに声をかける。

「当たり前でしょお〜！第一印象が肝心なんだから！美雪のあの彼氏の友達なら、期待できそうだもん」

松沢たちには聞こえないような小さな声で、にひひとほくそ笑む。

「あつ、この前はど〜も〜」

そして早速松沢に声をかける。

「ど〜も」

にっこりと営業スマイルで松沢が微笑む。

「お前……何その笑顔……そんな顔、俺見たことない」

桐野がこそつと松沢のわき腹をつついた。

「当たり前だろ。社会人なんだから」

勧められるままに上座に座った美雪の横に、すました顔でどかっと腰をおろした。

その距離の近さに驚いたが、皆の手前離れることができない。

(いよいよ……始まった……)

友人たちの視線が二人に集中するなか、一人、臨戦態勢で体を固くする美雪だった。

第40話 飲み会・1

「理子たち、ちょっと遅れるって」

きよるきよるとする美雪に気付いたのか、瑠璃が言った。

本当の主役にふさわしい2人が来ていないとあれば、美雪と松沢が話のネタになるのは仕方がない。

「美雪美雪！まず彼氏の紹介から！」

結衣から声がかかる。

「えっ！えっど……」

急にそう言われて、慌てて立ち上がる。

「あの、松沢大輔さんです……」

美雪に続くように立ち上がった松沢にちらりと目を向け、よつやくそう言った。

「え、それだけ？」

「あっさりすぎでしょ」

途端に女子たちが不満そうな声を出す。

「え、他になにを……」

そんなことを言われても、何を説明したらいいのかがわからない。

「あゝもう！松沢さんが話した方がよくない？」

しびれを切らしたように瑠璃が言った。

「美雪の彼氏の、松沢大輔です。28歳。同じ会社で働いてます」

おどおどする美雪を余所に、にっこりと笑いながら松沢が後を続けた。

“ 彼氏 ”

その単語に、なんだか顔がにやける。

「先輩？」

「先輩っていうよか……上司、かな」

瑠璃の質問にそう答えると、おおゝと何故か女子からどよめきが起こった。

「なんか……『上司』って大人な響きだわあゝ」

そう言ったのは、短大卒業後に看護師を目指して、もう一度学校に通いなおしている尚美だ。

「ハイハイ！付き合っつきっかけは？」

来た。

身体が固まり、汗がにじむ。

「まあまあ。とりあえず、飲み物でも頼んで、全員の自己紹介から先にしようよ！」

にっこりと笑ってその場を仕切ったのは、小林だった。

飲み会の仕切りは慣れているようだ。

思わずほっと身体力が抜ける。

「大丈夫かよ」

ふうつと小さく息を吐いた美雪の様子を、松沢は見逃してはいなかった。

口角を上げて軽く笑いながら、耳元で囁く。

「まあ、困ったら俺にまかせておけて」

「はい……」

それでいいのか？私。

そう思いつつ、ちらりと隣の松沢を見上げると、なんだか楽しそうにしている気がする。

彼氏のフリをしていることが、そんなに楽しいのだろうか。

(昨日のこと……どう思ってるんだろ……)

決して気持ちよく別れた訳ではないのに、今日の松沢の機嫌の良さがなんだか不思議な感じがする。

近いというより、ほぼ身体が密着するくらいの距離が、美雪を一層

緊張させていた。

「ごめえーん、遅れちゃって〜」

全員の飲み物の注文が終わったところ、ニコニコと笑いながら、理子とその結婚相手が個室に姿を見せた。

これで少しは自分たちから注目が逸れる。少しほっとした気持ちだった。

「おめでと〜！」

途端に、皆から拍手が起こった。

隣には、理子より少しだけ背の高い、優しそうな男性が寄り添うように立っている。

「も〜、やめてよお！恥ずかしいじゃん！」

照れくさそうに笑いながらも、嬉しそうに隣の男性の腕にくっつく。その自然な姿に、当たり前だけど自分と松沢との違いを感じていた。

「じゃっ、カップルは奥に奥に〜」

理子と婚約者が、松沢と美雪の向かい側に誘導されてきた。

「理子、おめでと〜」

座ろうとした理子にそう伝えると、にこっと幸せいっぱいに笑う。

「あっ、その人が美雪の彼氏？」

「松沢です。初めまして」

にっこりと笑って松沢が軽く会釈をした。

「わー、美雪の彼氏さん、イケメンですね」

婚約者の前でいいのだろうか、と思ってちらりと目やるが、隣の男性はニコニコと微笑むばかりだ。

さすが、恋多き遊び人の理子の旦那さんになる人なだけある。器が大きい。

「じゃ、部外者の俺が仕切るのもなんですが、自己紹介に行きましようか！」

小林が立ち上がって皆にそう声をかけた。

「じゃっ、まず本日の主役の4人から」

全員の簡単な自己紹介が終わった後は、予想通りの質問タイムが始まった。

理子の婚約者の佐々木という人は、偶然にも松沢たちと同じ年齢だった。

「そうだよなあ……俺らも結婚とか考えるような年だもんなあ」

淋しげに桐野がつぶやく。

「どこで出会ったのー？」

アパレル系に就職して、少しギャルっぽさの残る彩が質問した。

「同じ会社なの〜」

にっこりと笑いながら、理子がそう答えた。

確か理子は製薬会社の受付をやっているはずだ。

「へえ、俺らと一緒にだな」

さらっと松沢が言った。

（よ、余計なこと言わなくていいのに！）

自分たちに話題がまわってこないように祈っていただけに、思わず焦ってしまっ。

「同じ会社って言っていましたもんね！！」

案の定、瑠璃が食いついてくる。

「そういえば俺ら、2人の出会いとかきっかけとか全然聞いてなかったな」

ビールを飲みながら小林が言った。

「どっいつきっかけで付き合っようになったんですか〜？」

美雪の横に座るさくらが、松沢の方に身を乗り出すようにして聞いてきた。

「わ、私たちのことはいいからさっ！まず理子たちの……」

慌てて質問を遮ろうとしたが、そう上手くはいかない。

「いやー、短大時代にあんなカタブツだった美雪の彼氏だからさ、興味わいちゃって」

「そうそう、しかもこんな大人でカッコイイ人を連れてくるなんて、まさか思わなかったからさ」

「なんか未だに信じられない！」

その言葉に、ぎくつとする。

なんだか、自分の嘘をあばかれたようで、居心地の悪い気持ちだ。

ああ……本当みんなゴメン。

この人が彼氏なのは、今日までで、明日からは彼氏でもなんでもなくなる人なんだけど……

心の中に、ちくつと罪悪感が宿っていた。

「理子と佐々木さんの、きっかけは？」

友人たちの中では、一番の常識人とも言える尚美がそう聞いた。

「理子は受付嬢だから、入社早々から会社の華だったんだよね」

自慢げなニュアンスで、佐々木が話を始めた。

「えーそんなことないよ」

ほのかに顔を赤くして理子が謙遜してみせたが、彼女の雰囲気や美貌からすれば、本当である可能性が高い。

「新入社員歓迎会の帰りに、偶然にタクシー相乗りすることになって……。それがきっかけといえばきっかけかな」

思いだすように斜め上を見ながら、理子がそう言う。

「まあ……偶然じゃないんだけどね」

佐々木が言った言葉に、理子が目を丸くした。

「え？ そうなの？」

「そうだよ。飲み会の時に全然話せなかったから、これはなんとかしなければと」

すました顔で、佐々木がビールを流しこんだ。理子が、なんだか感動したような表情で佐々木を見上げている。うらやましいな、と純粹に思いため息が出る。

「美雪たちは、どっちからだったの？」

さくらが美雪の顔を覗きこむ。

「え？ あの……」

「俺だよ」

松沢がさらりとそう言った。

「どついうきっかけですか？」

目をキラキラさせて、さらに瑠璃が身を乗り出す。

「彼氏になってやるよって、言ったの」

そう言って、にやつと笑いながら松沢が美雪の顔を覗きこんだ。

「なっ……はあっ!？」

思わず顔が尾赤くなる。

その言葉は、間違っではない。

7日前、ファーストフード店で確かに松沢が口にした言葉だ。間違っではない。間違っではないが、意味合いが違う。

「うわっ！松沢さん俺様ですね」

「かつこいっ！」

美雪の友人たちがきゃーきゃーと騒ぎ、

「お前……何様だよ……」

松沢の友人たちが、軽くひいた表情を見せた。

質問タイムはまだまだ続きそうだ。

下手なことはいえない。

そう思って、黙々とビールを喉の奥に流し込む。

「お前……ピッチ早いよ」

松沢の手がすつと伸び、美雪のビールを奪った。

「悪い、ウーロン茶頼んでもらっていい？」

そう言って、追加注文をしようとしていた小林に声をかける。

別に自分は、お酒が特に弱いわけではない。

松沢が見せた、わざとらしいとも思える気遣いが、なんだか癪に障った。

「大丈夫です！」

ふんつとビールの入ったジョッキを奪う。

「……何怒ってんの？」

「お、怒ってないです！」

ぐびつとビールを飲みながら、つい向かいに座る理子たちに目が行く。

理子の左手の薬指には、ダイヤらしき石のついた指輪が輝いている。キラキラと輝く指輪に見とれながらも、つい自分の胸元のネックレスに、そつと手を伸ばした。

大切に大事なネックレスだが、理子の指輪のホンモノの煌めきにはかなわない気がする。

「結婚式はいつの予定？」

「新婚旅行、どこ行くの？」

理子たちへの質問タイムが続いてるなか、少しだけアルコールがまわってきている気がした。

（ヤバ……なんかちょっとふわふわする……）

いつもはこれくらいの量で目が回ることはない。

ここ数日、緊張や不安やドキドキで、上手く眠れてないのが災いしているようだ。

しかし、先ほど強がってみせたのもあり、酔っている様子は見せられなかった。

ふーっと息を吐き、背もたれによしかかっていると、ふいに松沢がテーブルの下の美雪の手を握ってきた。

驚いたが、皆の手前そんな態度を見せることもできない。

「手、あつ。お前、酔ってるだろ」

「……酔ってないです……」

横を向き、ふてくされたように言ってしまう。

「今日はなんか反抗的だな」

「……そんなこと、ないです」

「俺にそんな態度とってて、いいの？」

どういう意味？と思い、松沢を見上げる。

「はいそこ、隙を見ていちゃいちゃしないー！」

二人を指さして小林が言った。

至近距離で見つめあう体勢では、そうとられても仕方ない。

「い、いちゃいちゃって……」

弁解するように美雪があたふたとそう言うと、どっと笑いが起こった。

松沢のように平気なフリをすればいいのに、つつい反応してしまう自分。

経験不足なのだから、仕方ないのだけれど。

恥ずかしさをごまかすために、つい目の前のお酒に手がのびる。

「だからこっち飲めって」

美雪の前に、すっと先ほど頼んだウーロン茶が差し出される。

そろそろ、言う事を聞いていた方がよさそうだ。

黙ったままビールをテーブルに戻し、代わりにウーロン茶を持った。

「いい子だな」

からかうように笑いながら、美雪の顔を見おろす。

美雪だけに向けられたその笑顔が、ひどく優しく見えて胸が苦しくなる。

テーブルの下で繋いだ手が、なんだか熱い気がした。

第41話 飲み会・2

「さー、次は美雪たちの番だよー」

多少お酒も入って陽気になった理子が、そう言って美雪と松沢に笑顔を向けた。

「もーいいでしょ」

思わず弱気な言葉が自分の口から出る。

「まあまあ、照れない照れない」

小林がそう言って美雪を茶化した。

「で、美雪はともかくとして……松沢さんは、美雪のどこがいいんですかあ？」

瑠璃の遠慮のない発言に、ぶっとウーロン茶を吹き出しそうになる。

「私はともかくって……どついう意味？」

少し不満に思いながら、そう尋ねる。

「だってねー、松沢さんみたいな人だったら、惹かれるのは分かるけどさ」

「うんうん」

さくらと結衣が、ためらうこともなく頷く。

「どうなんですか、松沢さん！」

ずいずいっと、瑠璃が大輔の方へとさらに身を乗り出した。

予想していた通りの反応ではあるが、ふと思う。

みんなは、自分がこんな大人でイケメンな人を『彼氏です』と連れてきても、何も疑わないんだな、と。

真実ではないだけに、不思議な気持ちになる。

そんな事をぼんやりと考えていると、松沢が美雪の手を握ったまま口を開いた。

「素直そうで、いじめがいがありそうだったから」

えっ、と一瞬場が静まる。

「というのは冗談で」

松沢はにこにここと笑っているが、美雪にとってはあながち冗談には聞こえない。

「最初は、一生懸命仕事がんばってるなって印象だったんだけど」

そう言っつて、少し間を置いた。

「男慣れしてなくてオドオドしてるところが、なんとなく可愛くて」

ひゅっ　と誰かが低い口笛を吹いた。

「俺に対しても、まっすぐに素直で、汚れてなくて。俺にはもった

「いないです」

その言葉に、は？と思わず松沢の顔を見上げる。
お酒のせいか、少しだけ赤い顔をした松沢が、優しい顔で美雪を見下ろしていた。

（演技にしても、言いすぎでしょ。そう、演技……だよな？）

照れるのも忘れ、まじまじと松沢を見つめてしまう。

「おい大輔……ノロケるのもいい加減にしろよ」

にやにやと桐野が笑った。

「すごいな〜」

向かいに座る佐々木が、感嘆したように松沢を見つめていた。
演技とはいえ自分に対して言われた言葉が急に恥ずかしく思え、俯きながら目の前のウーロン茶を喉に流し込む。

「美雪は？」

「……はっ？」

他ならぬ松沢にそう言われ、驚いて顔を見つめた。

「俺のどこが好きなの？」

こ、この人……

昨日の返事を、こんな時に聞くつもりなんだ。

先ほどの優しい表情とは一転して、にやにやと、なんだか意地悪で楽しそうな顔をしている。開いた口が塞がらない。

「……みんな……別に私の話なんか、いいよね……？」

思わず周りの友人たちに、助け舟を求めたが、

「俺、まだ美雪からハッキリ聞いてないしな」

たたみ掛けるような松沢の発言に、美雪の味方をしてくれる人はない。

「そういうことはちゃんとやわらないとー、美雪ちゃん！」

「え、あ」

「松沢さんには言わせといて、美雪だけ逃げるなんてずるいでしょ」

「そう言われればー、あんなに男に対して消極的だった美雪の、心境の変化なら聞きたい」

「ええっ！」

自分にみんなの視線が集中するのがわかる。誤魔化せる状況ではないらしい。

「あの一……なんていうか……」

渋々と口を開いた。

本当は、こんなところで話したくないのに。

「……優しくして……大輔さんだと、話す時にそんなに緊張しないというか……」

「なにそれえ」

彩が途端に笑いながらつつこむ。

「大人で、一緒にいると安心できるっていうか……」

こんな話を聞いて、みんなや松沢は楽しいのだろうか？
何故か不安な気持ちになる。

「わかんないけど……とにかく全部？　なのかな……」

静まった場に耐えきれず、ウーロン茶ではなくビールを手に取り、「くごく」と飲んだ。

飲まないと、恥ずかしすぎてやってられない。

「おおー美雪ちゃん！いい飲みっぷり！」

「ていうか、全部だってー！さすがラブラブ」

沈黙の後に、ワツと場が盛り上がった。

冷やかす皆の声を聞きながら、はふつと息を吐く。

皆の前で、こんなことまで言うつもりなかったのに。

やっぱり、ちよつと酔ってるのかもしれない。

そろつと隣の松沢の顔を見上げる。

(結構、本気で言ったんだけど……どう思ってるんだろ?)

しかし松沢は、淡々とした表情で自分のジョッキに口をつけていた。

自分から話題ふったくせに。

どうしてそんな、当たり前みたいな顔してるの?

情けないような悔しいような、気持ちが湧く。

やっぱり、この状況を楽しんでからかわれているとしか思えなかった。

「なに?」

美雪の視線に気付いた松沢が、軽く言った。

「……いえ」

ふっと松沢の手をほどこうとしたら、繋ぎとめるかのようぎゅっとな握りなおされた。

「本気?」

「え?」

「酔ってる?」

「……酔ってるのかも、しれません……」

といつか、もうそういつ事にしてしまいたい。

小さな声でそう言つと、ははつと松沢が笑つた。

「本当に酔ってるやつは、酔ってるって認めないから。大丈夫だな」
そう言つて、繋いだ手の親指で、美雪の手のひらをゆっくりと撫でた。

「嬉しいよ。マジで」

「じゃあカップルはほつといて……」

小林がそう言つて、女の子たちに声をかけている。
どうやら、小林の中でようやく合コンがスタートしたようだった。

理子と婚約者の佐々木、そして一応カップルの美雪と松沢が、他のメンバーから離れて一緒に料理を囲むことになった。

「へえ！松沢くんも北海道なの？俺も同じ！」

どうやら佐々木は、松沢と同じ北海道の出身だったようだ。
美雪や理子にはわからないローカルな話で盛り上がっている。

「美雪美雪」

理子が目配せして、顔を寄せてきた。

「美雪の彼氏つていうからどんな人かと思つたらさ、かっこよくて気さくな人だね」

「そ、そう?」

「今度さ、ダブルデートでもしようよ! 私したことなくて、ちょっと憧れてたんだあ」

ニコニコとそう言う。

そりゃ美雪だって憧れていた。

「彼の年齢がちょっと離れてるから、さすがに同年代の彼氏がいる子とは遊びにくくて。二人つきりも楽しいけどさー、友達と一緒にするのもいいじゃない?」

でも、二人の関係は今日までかもしれないのに、そんな約束をする訳にはいかない。

「そ、そういえばさ、式場とかもう決めたの?」

話題を変えようと、あわてて言った。

「ん〜まだ……」

少し憂鬱そうな顔をして、理子がチューハイの入ったグラスに口をつけた。

「式場とかプランとかたくさんあって。楽しみなんだけど、なんか結構大変なんだ」

「そっかあ……」

結婚式すら二、三度しか出席したことのない美雪にとっては、なんだか想像もつかない話だ。

綺麗な花嫁さんの裏側には、人知れず苦勞があるようだ。でも、理子のウェディングドレス姿はきつと可愛いだろっと思う。

「彼の親戚はほとんど北海道だからさー、どうせならリゾートウェディングもいいかな〜とかも思ってたりにして」

急に顔をキラキラと輝かせて、理子が言った。

「へえ、そんなのがあるんだ」

「そうそう！自然の中で、やるんだよ〜。パンフ見ただけなんだけど、すごく素敵なの！」

幸せ絶頂にいる理子は、キラキラと輝いていてすごく綺麗だ。

指につけているダイヤの輝きにも、全然負けていない。

そんな姿に、思わず笑顔が浮かぶ。

「なしたの？ 美雪。にやにやしちゃって」

「にやにやって失礼な……。理子、幸せそうだなあって思って」

「何言ってるの〜！ 美雪だってこんな素敵な彼氏できて、幸せでしょ〜！」

理子が照れながら、テーブル越しに美雪の肩をバンバンと叩いた。

「美雪は、結婚とかどうなの？」

理子の言葉に、口に運ぼうとしていた海老のから揚げを、箸からぽとりと落とす。

「な、何言ってるの？ そんなの……まだ全然考えられないよ！」

「あ、それって男には何気にショックな発言だなあ」

急に佐々木が話題に入ってきた。

「松沢くんも俺と同じ年なら、そういう事考えたりしないの？」

「ちよっ……佐々木さんやめてください！」

慌ててパタパタと手を振る。

「さっ！ 次、何飲もうかな？」

場を取り繕うために、メニューを手にする。

「あー日本酒！ 私日本酒飲もうかな？」

「お前……大丈夫か？ 会社の飲み会でも、そんなに飲まないだろ」

心配そうな顔をして、松沢が美雪からメニューを取り上げる。

「だ、大丈夫ですから！ 注文お願いします！」

丁度通りかかった店員を呼びとめ、さっさと注文をすませた。

もう少し。

もう少しで、飲み会もお開きだ。
そしたら、みんなの質問や視線から逃れられる。
でもそうしたら、7日間が終了してしまう。
終わってほしい。
ほしくない。

胸がざわつく。

「同じ職場だとき、声かけるのに勇気いらない？」

佐々木がふと松沢に問いかけた。

「勇気？」

「そうそう。断られたらどうしょー、気まずいなー、とかさ」

「あぁ……それはある」

松沢の返答に、驚いて口の動きが止まる。

「俺ら特に……直属の上司と部下だから」

「へえ、すごい。俺は一応理子と部署違ったからさ。玉砕してもまあなんとかなるかと思ってたんだけど。松沢くん、よく声かけられたね」

佐々木が感嘆の声を上げた。

「偶然、会社の外で会えたから……その機会を利用したってところかな」

「へええ、そうなんだ！」

いつの間にか、理子が食い入るように松沢の話を聞いている。

「それに……コイツ自覚がないから」

そういつて松沢が、美雪の腕を肘でコツンとつつく。

「ほつとくと、他のやつに言い寄られたりしてるし」

「へ?! そんなことないです！」

「ほらな、自覚ないし」

松沢と美雪のやり取りに、佐々木と理子がニコニコと微笑む。
なんだか自分1人が子供みたいだ。

(そりゃそつか、私一人で恋愛初心者だし)

不貞腐れ気味に、運ばれてきた日本酒に口をつける。

「ん！これおいし」

「おい、ホント気をつけるよ。明日仕事はないけど……」

「大丈夫です」。一人で帰れますから」

へろっとそう口にした。

「ばか。送ってくつて」

「そつだよ美雪、何言ってるの？」

松沢と理子が、心配そうに美雪の顔を覗きこんだ。

隣のテーブルでは、小林と尚美が赤外線連絡先を交換しているのが見える。

あーあ……、私、何やってるんだろう。

ふいに、なんだか例えようもない淋しい気持ちかわいてきた。

この人、私の彼氏じゃないのに。

明日からは、ただの上司なのに。

佐々木と理子が幸せそうに並んでいる姿を見ると、何故だかじんわりと涙が浮かびそうになった。

(やだな。私、泣き上戸だったっけ……?)

「私……ちょっとトイレに行ってきます」

松沢の隣をふらりと立ち上がった。

「大丈夫か？」

そう言って立ち上がるうとした松沢を手で制す。

「大丈夫。1人で行けますから」

「あ、私もトイレ行こうと思ってたの。一緒にいこう」
盛り上がっていると思っていたのに、遠くで急に瑠璃が立ち上がった。

「結構飲んでるからな……」

「だから大丈夫だってば」

それでも心配そうに声をかける松沢に、思わずタメ口が出る。

「大丈夫ですよ、私も一緒に行きますから　美雪、いこう」

(……参ったな。1人で行きたかったのに……)

心の中でそう思いながらも、まさか断るわけにもいかず、結局瑠璃と一緒に個室を出た。

第42話 飲み会・3

「美雪、大丈夫？ 結構飲んでるんじゃない？」

「んー、平気だよ。全然……」

瑠璃と並んでトイレへの道を歩く。

確かにほんの少し足がふらつくような気もするが、ほろ酔いというところだ。

肩を並べて歩いていると、学生時代によくこうやって一緒にトイレに行ってたことを、懐かしく思い出す。

「それにしても……本当だったんだねー。美雪の彼氏」

トイレをすませて鏡の前で化粧直しをしていると、隣に並んだ瑠璃が明るい声で言った。

「強がってんのかと思ったよ。ふふ」

凶星なだけに、何も言えない。

曖昧な微笑みを浮かべて黙ったまま、とれかけのグロスを塗りなおす。

「本当……よかったねえ……」

あまりにもしみじと言つので、なんとなく隣に目を向けると、瑠璃はじつとこちらを見つめていた。

「あのさ、高校の時の……吉村くんのこと。覚えてる？」

「うん？」

いきなり何を言うのかと、きょとんとした。

吉村のことと言っより、むしろ卒業式に撮られた写真が出回ったことを指しているように思える。

なんと言っていいかわからず黙りこむ美雪に、瑠璃が複雑な顔で口を開いた。

「美雪さ、ずっと気にしてたっけ……あの事があってから、明らかに男に対してなんか一線ひくようになったじゃん？」

「そうだね……それは否定できないかも」

素直に、そう言って頷いた。

「あの写メを流した子たちとさ……私クラス一緒に。吉村さんのファンやってるのも知っってたんだ」

パチン、とファンデーションのコンパクトを閉じながら瑠璃が言った。

「だから、幼馴染っけいうか、小さい頃からの知り合っけこと……美雪に変な嫉妬してるのも知っけ」

彼女たちがそんな風に見ていたとは、全く知らなかった。今教えられても、複雑な気持ちだ。

「美雪にその子たちの事、教えた方がいいのかなって思っけつも言えなくて……だから、ずっとなんか、罪悪感みたいの感っけ」

「そんな……瑠璃は関係ないじゃん？ 私、別に誰がメールを流したかとかなんて、知りたいとも思ってたよ」

「うん……そう言うとは思ってたけどさ」

そう言いながら、バツが悪そうにモジモジとバッグの中にコンパクトをしまいこんだ。

「美雪かわいいのに、全然彼氏作ろうとしないから……ずっと心配だったんだ。でも今日ほっとした。あんなイケメンつかまえちゃってさー！」

にっこりと、心底嬉しそうに微笑んで言った。

「本当よかったね！ さ、行こっ！」

美雪の背中をぽんと叩き、瑠璃がトイレのドアを押し開けた。

どちらかというと、気が強くて姉御肌で。

ケンカ友達とまではいかないが、何かとツンツンしてて、言いたいことが言いあえて。

そんな瑠璃の屈託のない笑顔に、胸がずきつと痛んだ。

吉村のことで傷ついた気持ちを、影で見守ってくれてる人がいるなんて、考えたこともなかった。

（私、騙してるんだ、瑠璃のこと……）

こんなに心配してくれていたのに。

気づくと、ぼろっと涙がこぼれていた。

美雪の様子に気付いた瑠璃が、こちらを振り返り慌てて声をあげる。

「ちよつ美雪!? どうしたのよ? 私なんか変なこといった?」

「ちが……ごめん……」

お酒の影響もあるのだと思う。

トイレの前だと言つのに、一度流れ出した涙が、止まらない。

「どうしたのー!?! やっぱり吉村くんのこと、まだ地雷だった?」

「違……う……瑠璃……」

どうして、嘘なんかついていたのだろうか。

いや、自分一人でついた嘘だけならまだいい。

どうして、松沢に彼氏のフリなんか頼んで、ここに連れてきてしまったのだろうか。

全て自分の責任だ。

ずっと影で心配してくれていた友達を騙しているのだと思うと、どうしようもない罪悪感が湧いてきた。

「瑠璃……ごめん……」

「どっしたの?」

はあっと深い息をついて、取り出したハンカチで涙をぬぐった。

「じめん。違うの。松沢さんは……」

“彼氏じゃないの”

そう言おうとしたのに、口が動かない。

「美雪……ホントどうしたの？」

心配そうに瑠璃が見つめている。

言わなきゃ、ちゃんと。

そう思って息を吸い込んだ時、瑠璃の肩越しに、通路の向こうから松沢がこちらに向かって歩いてくるのが見えた。

「どうした？」

「あ、松沢さん！」

ほっとしたように瑠璃が声をかけた。

「なんだか遅いから、もしかして気持ち悪くて吐いてるのかと思って」

心配そうに、松沢が屈みこんで美雪の顔を覗く。

「……え？泣いてるのか？」

「ごめんなさい！ 私……変なこと言っちゃったかも」

瑠璃がオロオロとそう言っつて、松沢にすまなそうな顔を向ける。

「違う！ 瑠璃、違っつてばー！」

そんな瑠璃の様子に、慌てて顔を上げる。

「松沢さんは……彼氏じゃなくて……」

言い訳のように呟いた言葉は、尻つぼみに小さくなった。

「え？ 何？」

美雪の顔を屈みこんで覗く瑠璃を余所に、松沢が何か気づいたようだった。

「……ごめん、瑠璃ちゃん。ちょっと二人にしてもらっていい？」

「え？ あ、ハイ……」

「瑠璃ちゃんのせいじゃないから、大丈夫だよ」

にっこり笑って、松沢が瑠璃の肩を軽く叩く。

「そうですね……。それじゃあ、先に戻ってます」

ぺこりと軽く頭を下げ、瑠璃は心配そうにこちらを振り返りながら、通路の向こうへと消えていった。

「どっしたんだよ？」

瑠璃が完全に見えなくなったことを確認してから、松沢が声をかけた。

美雪を気遣うような声色にさらに罪悪感がわき、なんと答えていいかわからずハンカチを握りしめたまま下を向く。

「泣き上戸だったの？」

「ち、違います！」

そう言いながら、ぐっと唇を噛みしめた。

「みんなを……瑠璃を、騙していると思うと、なんか……たまらなくて」

「騙してる？」

「松沢さんは……本当の彼氏じゃないのに。本当に良かったね、って言われて」

瑠璃の、嬉しそうな顔が浮かんだ。

「瑠璃は……私が高校時代に色々あって、男の人が苦手になったのを知ってるから……すごく喜んでくれて。ずっと心配してくれてたのに、それなのに、騙してるんだと思うと……」

思い出すと、またじわりと涙が浮かんできた。

「俺、まだ返事してないけど？」

戸惑うように、ぼつりと松沢が言った。

「……そんなの、聞かなくても想像つきます」

強がりではない。

でも、昨日の言い方では、断られるのは目に見えている。

「あの、同情とかしないでください」

再び泣いてしまいそうになるのをこらえ、わざときっぱりと言いつつ放った。

「そういう問題じゃ、ないですから」

一瞬の沈黙の後、呆れたような声が聞こえた。

「意外と強気なんだな。男が苦手で、大人しい子だと思ってたのに」

「わ、悪かったですね！」

幻滅してしまったのかもしれない。そのことに少なからずショックは受けたが、顔には出さずにぶいっと横を向く。

「何のための7日間だったんだよ」

はあっとため息をついた後に、松沢が言った。

そつだ。

今日のための7日間だったのに。

今日のために、デートしたり、手をつないだり……

でも結局、それになんの意味があったのだろうか。
自分で友達に嘘をついて、その手助けを松沢に頼んで、そしたら
今度は嘘をついていることが苦しいだなんて。
勝手にもほどがある。

最初から間違っていたのだ。

やっぱり、みんなに謝らなければいけない。

もちろん、松沢にも。

「お前、なんかよからぬ事考えてない？」

急にすつきりと顔を上げた美雪に、松沢が訝しげにそう問いかけて
きた。

「……みんなに、ちゃんと話そうって思っただけです」

「アホか。場の雰囲気読めよ。それ聞いて、理子ちゃんと佐々木く
んはどう思う？」

そう言われて、ハツとした。

理子と佐々木の、幸せそうな顔が浮かぶ。

ここで美雪が自分の意地を通して皆に謝れば、せつかくの2人のお
めでたい話に水を差してしまうことは容易に想像できた。

「冷静になれよ。気持ちはわからなくもないけど」

そう言って、ぽんと軽く美雪の頭を撫でるように叩いた。
それでも、気持치를治めることができない。

「でも、このままじゃ……。松沢さんにも、こんなことお願いしたの間違っていたんです。松沢さんだって迷惑……」

「大輔”だろ”」

頭を撫でていた手が、ぴんっとおでこをはじいた。

「落ち着け。俺は迷惑だなんて言ってない。そもそも引き受けたのは俺だ」

そしてその手は、美雪の首元に降りてきて、ネックレスの鎖をなぞった。

松沢の手に触れると、不思議と気持ちが悪く落ち着くのがわかった。

「美雪。お前がどう思おうと、今は俺がお前の彼氏だ。言うこと聞け」

彼氏だから、言うことを聞かなければいけないなんてない。

けれど、その有無を言わさない言い方に、何故かほっとしたような安心感を覚えていた。

「戻るぞ」

「……はい……」

差し出された手にそっと自分の手を重ねる。

手を繋いだだけで、胸がうずく。

歩き出しかけた松沢が、すぐに立ち止まりキョロキョロと辺りを見回した。

どうしたんだろう？　と思った次の瞬間、振り向きざまにチュツと軽い音をたてて、美雪にキスをした。

「……機嫌直った？」

美雪の顔を上から見下ろしながら、優しく小さな声で松沢が言った。

「は……ハイ？」

つい、声が裏返り目が泳ぐ。

そんな美雪の様子を軽く笑った後に、松沢は手を握ったままスタスタと歩き出した。

顔が熱いのは、繋いだ手が熱いのは、きつとお酒のせいじゃない。

ばか。

主任のばか。

部下に、こんなことしていいんですか？

ぎゅっと繋いだ手に力を入れると、同じように握りかえしてくれる。

この手を、離したくない。

どう考えても、この人のこと好きだし、ずっと一緒にいたい。

やっぱり、ダメなのかな？

今日という日を数時間残して、そんな往生際の悪い感情がわいてくる。

「……大輔さん？」

「何？」

「好き」

ぽつりと言った。

「知ってるよ。酔っぱらい」

そう言って振り向いた松沢の顔を、見ることができなかった。

第43話 飲み会・4

「美雪ちゃん、大丈夫？」

個室のドアを開けた美雪と松沢の耳に飛び込んできたのは、なんとも緊張感のない小林の声だった。

ちらりと瑠璃に目をやる。

心配そうな表情をひた隠し、チューハイを口にするのが見えた。

ただならぬ美雪の雰囲気を感じても、皆には黙っていてくれたのだろっ。

感謝の気持ちとともに、今まで見守っていてくれたことも気づかなかった自分へと、さらに情けない気持ちがあわく。

「はい、大丈夫です。ちょっと飲みすぎたみたいで……」

にこつと笑いながら席につくと、当たり前のように松沢が隣に腰をおろした。

「お前、こつちな」

目の前に置いてあった日本酒はさげられ、半分しかないウーロン茶のコップが置かれた。

「はい……」

先ほどの失態があつては、そう返事をするしかない。

ウーロン茶を手に取りうとした瞬間、ポケットに入れていた携帯が震えたのがわかり、そつとテーブルの下で開いた。

『大丈夫？ 松沢さんと、うまくいつてないの？』

瑠璃からのメールだった。

さっきのやりとりでは、心配をされても仕方がないと思う。騙していることへの罪悪感よりも、今は、心配をかけたくないという気持ちが勝っていた。

『大丈夫。ちょっと色々不安で、情緒不安定気味かもしれないけど、大丈夫だから』

少し考えた後に、こっそり返信する。

大丈夫。

その言葉は、自分へ言い聞かせているようなものだ。相変わらず、松沢は涼しげな顔で佐々木と会話を交わしている。さっきのこと、どう思ってるんだろう？
思わず唇に手が触れる。

「ん？どうした？」

「いえ、別に……」

ふと自分を見ている瑠璃の視線を感じ、少しだけ松沢との距離を詰めた。

そんな美雪の様子に、松沢が驚いたように一瞬だけ眉をひくつと反応させた。

「あ、いや、別に、ふ、深い意味は……」

もしかして、嫌だったのかもしれない。
そう思い身体をこわばらせると、くしゃくしゃと松沢が美雪の頭を撫でた。

自分を見下ろす優しい瞳に、また勘違いしそうになる。

「そろそろ、次の店にでも行きますか？」

誰かが発した言葉にあわてて腕時計を確認してみると、店に入ってからいつの間にか2時間以上が経過していた。

「私たちはこれで。明日から、うちの方の実家に行かないといけな
いから」

そう言ったのは理子たちだ。

「大変だね」

「色々とねえ……決めとかないといけないこととか、挨拶周りとか、結構たくさんあってね。お正月休みのうちに、やれることはやって
おこつかと」

肩をすくめながら素っ気なく言っているが、理子の顔はやっぱり幸
せそうに見えて、ちっとも面倒そうな感じはしなかった。

「えっと……」

どうしようかと口を開こうとした瞬間、

「俺らも帰るわ」

松沢が一方的に言った。

「え？」

「そつか！じゃあ次は……」

美雪たちのことなどおかまいなしで、小林たちは次の店の段取りをつけ始める。

「帰るんですか？」

「どう考えても、俺らは邪魔ものだろ」

そう言ってあごで隣でテーブルを指さす。

確かに、形ばかりではあるが恋人同士でもある自分たちが、合コン状態の小林たちに混ざるのは邪魔かもしれない。

「そつか……」

こんなにアツサリと、あっけなく解散になるとは思わなかった。

あんなに悩んだ友達との約束、そして松沢との7日間は、今日のためだったのに。

結局、美雪が『彼氏ができた』と言ったから皆それに興味があっただけで、深い意味なんてなかったのだ。

（本当……なんのための7日間だったのかな……）

たった2時間強で終わってしまう今日の飲み会より、この日までに松沢と過ごしてきた時間の方が、ずっと意味があった。

最初は違っただけなのに。

友達に強がることよりも、彼との距離を縮めることの方が、大切に思えた。

もしかして、松沢もそれをわかっていたのだろうか。

(そんな訳……ないか……)

まだ酔っているかと心配しているのだろう。

肩を抱くように支えてくれる松沢に、寄りかかるようにして店を出る。

私、ずるい。

わかってても、彼の体温を少しでも側で感じたかった。

「今日はありがとう」

理子がにこにここと皆に声をかけた。

「まだはつきり日にちとか決まってないけど……式にはみんな呼ぶからね〜!」

道路の真ん中だというのに、おお〜!と皆で雄たけびのような声をあげていた。

「ねーねー、みんなって俺たちも!??」

「バカお前、空気読め!」

小林と桐野の、漫才のようにつっこみにどつと笑い声がおこる。

「美雪」

理子が美雪の手を握った。

「美雪も、幸せになるんだよ！」

「もー、何言ってるのぉ？」

瑠璃を、みんなを、心配させたくない。
そんな気持ちで、酔ったフリをしながらただ明るく笑顔でそう答えた。

否定も肯定もできないから、これでいいのだ。

「……大丈夫？」

いつの間にか、瑠璃が隣に来ていた。

「うん、大丈夫。ごめんね？」

瑠璃を安心させるために、わざと松沢の側へと寄り添ってみせた。
美雪の意図がわかったのか、松沢も黙ったままにつこりと瑠璃に笑いかけた。

その笑顔を見た瑠璃が、ほっとしたように顔を崩す。

「みんな次に行くの？」

「彩は明日仕事だから帰るって。あとのみんなは行くよー！」

松沢の友人たちなら、何の心配もいらなだろう。

「みんなのこと、よろしくお願いします」

一応、松沢の友人の3人の中では一番落ち着いてみえる桐野に頭を下げた。

「お前らどうすんの？」

桐野が、松沢に軽く聞いてきた。

「ヒ・ミ・ツ。邪魔すんなよ」

松沢はそう言って、にやりと笑う。

「いやあ〜大輔、なんかエロ〜」

小林が茶化しながら大輔の腕にまとわりつく。

「お前こそしつかりやれよ、このバツイチ男」

「それを言うなよ〜」

その言葉に、一瞬自分の耳を疑う。

驚いた美雪の顔に気付いてか、小林がバツの悪そうな顔をした。

「あれ……美雪ちゃん、大輔から聞いてない？」

「あ……はい……」

「俺ねー、去年色々あって離婚しててねえ……まあもう立ち直って

るけど」

「小林さん！ 行きますよお！」

珍しくほろ酔いの尚美が、その声を上げる。

「おっ！」

小林が、ノリよく返事をした。

「じゃあまた！ 今日ありがとうっ！」

「……はい」

“また”という言葉に微妙にひっかりながらも、返事をした。本当に、また会えることを願わずにはいられない。

「ばいばーい！ 美雪！ 松沢さん！」

「お幸せにっ！」

大声で言われて恥ずかしかつたけれど、松沢と並んで手を振った。理子たちがタクシー乗り場へ、他のみんなが繁華街へと消えて行くのを、2人で黙って見送っていた。

皆に手を振りながら、美雪の心に疑問がわいてきた。

このまま、皆と別れたということは……松沢ともお別れなのだろうか？

「……わっっ」

隣でうーんと伸びをした松沢の言葉に、びくつと身体が硬くなる。

「どっしするっ。」

「え………?」

なんと答えていいかわからず、言葉に詰まる。

昨日のことがあるからか、“帰りたくない”と、何故だか素直に言うことができない。

「お前は、どうしたい?」

「………」

そう聞かれても答えることが出来ず、ただ視線を逸らして唇を噛む。無言の美雪にしびれを切らしたのか、松沢がわざとらしく言った。

「そっか、特になら帰るか」

そう言っつて、スタスタと駅の方へと歩き出した。

「え、あ」

「行くぞ」

美雪と松沢の家は、ひと駅違いだ。

このまま電車に乗ってしまえば、間違いなくそれでサヨナラだ。

「ま、待って!」

気づけば精いっぱい手を伸ばし、松沢のジャケットの裾を掴んでいた。

「何？」

「か……帰りたく……ないです！」

何故必死。

心の中で突っ込みを入れつつも、どうしようもできない。少しでもかわいく見えたらいいのにと、祈るような気持ちで上目づかいに松沢を見上げた。

フツと彼が笑うのがわかった。

「ごめん、意地悪だったな」

その笑顔に、心底ほっとする自分がいる。

「飲みなおすぞ。どうせなら歩いて帰れる距離がいいだろ」

「え、あ」

「ひとまず、俺の家の側の居酒屋でいいか？」

「は、はい……」

勢いよくそう答え、つい自分から松沢の手を握ってしまった。

思えば、自分から松沢の手を握ったのは初めてだった。

第44話 帰り道

二人で並んで座席に座り、電車の振動に揺られる。

新年二日目の中途半端な時間だけあって、乗客はまばらだ。

「そう言えば……路線一緒なのに、電車の中で一緒になったことってなかったですね」

「引越してまだ浅いし……俺とお前じゃ、終業時間が違いすぎるからな」

松沢がかかるく欠伸をした。

「ねむい」

一言そう言つと、軽く美雪の方へともたれかかってくる。

松沢の重みにドキドキしながらも、ふと懐かしさに似た感覚を覚える。

(そういえば、最初の日……)

酒に酔った松沢をタクシーに乗せたときも、こういう風に美雪にもたれかかって目を瞑っていた。

あの時と、体勢は同じでも状況は随分変わったと思う。

眠っているのかと思つたが、繋いだ手の指がわずかに動き、美雪の指をなぞっている。

「大輔さん？」

「……ん？」

「今日のはあんまり……飲んでないですね」

「お前の友達の前だからな。俺だって人並みに緊張くらいする」

目を瞑ったまま、松沢がそう答えた。

「緊張？」

松沢には似合わない言葉だと思い、ついくすくすと笑ってしまう。

「何がおかしい」

気に障ったのか、かすかに目を開く。

「いつ、いえ」

思わずしゃきつと背筋が伸びるのは、4月から培った上司と部下という関係のなせる業だと思う。

再び目を瞑った松沢に、ほっと胸をなでおろす。

「お前……なんで俺が好きなの？」

「え？」

何の前触れもなく、突然松沢が口を開いた。

思わず横から松沢の顔を見るが、目は閉じられたままだ。

伏せたまつ毛が、目元に影を作っている。

それを、ぼんやりと見つめていた。

「飲み会するとき……言いましたよね？」

「あれ、本音？」

「あんな急に話をふられて、本音と建前を使い分けられるほど器用じゃありません」

信じてもらってなかったのだと思うと、軽く凹む。

「大輔さんって……何考えてるかわかりません」

「俺？」

「……なんか、嘘くさいというか」

はあーつと盛大なため息が聞こえた。

「同じだな」

「何がですか？」

「まあ……いいや」

そこで会話は途切れた。

「……意地悪」

ついぼそっと呟いてしまふ。

「ありがとう」

「誉めてません」

なんだかわからないが、笑いそうになった。

ふと向かい側に目が行く。

電車のガラス窓にうつった自分と松沢は、恋人同士にしか見えない。そんなことを嬉しく思いながら、自分にもたれかかる松沢の頭に、そつと頬を寄せた。

改札を通り、手を繋いでぶらぶらと歩く。

時計に目をやると、時刻は22時を過ぎていた。あと2時間もしないうちに、今日が終わる。

（大輔さん、何を考えているのかな……？ 7日間の約束に縛られているのって、私だけ？）

もうどうにでもなれ、という気持ちと、ハッキリスツキリさせたい気持ちと、美雪の中で揺れている。

「ん？どうした？」

視線に気付いて、松沢が美雪を見下ろした。

「い、いえ……」

思わず俯く。

「昨日は雪が降ったほどの寒さだ。それなのに、薄いチュールスカートなんて履いてきてしまったことを少し後悔する。繋いだ手だけが、温かい。」

「あ」

「え？」

駅を出て数十メートル進んだところで、松沢が驚いたような声を上げた。

「参ったな」

そうつぶやく松沢の視線の先へと、自分も目を向ける。

小さな居酒屋さんのシャッターは下ろされ、そこには“新年は1月3日まで休業します”の張り紙があった。

「そっか……新年……当たり前か。なんで気づかなかったんだろ」

困ったように松沢が頭をかいた。

仕事中は、どんな時でも冷静沈着で、取り乱したり混乱する姿などは見たことがない。

何事もスマートに事を運ぶ松沢にしては、こんな姿は貴重とも言える。

「行きつけなんですか？」

「そこまですらないけど。何回か来て、結構旨いし感じも良かった」

んだよな」

「でも……お休みなんですね」

周りを見渡してみても、新年早々から営業しているのはファミレスやファーストフード店ばかりだ。

ここは閑静な住宅街だから、駅前と言えども仕方ないだろう。

「あそことか？」

学生時代にはよくお世話になっていた、全国チェーンの居酒屋を指さしてみたが

「俺あそこ嫌い」

と、一蹴されてしまった。

「じゃあ……どうしましょうか？」

別に、二人で飲みに行かなければならない理由なんてない。

このまま別れを告げて帰ればいいのに、往生際が悪くも、そうしたくない自分がいる。

だけど、これからどうしたらいいのか提案するだけの度胸もない。

卑怯だな、と思いつつも、決断権を相手に委ねるしかなかった。

「んー」

そう言いながら、松沢はキョロキョロと周りを見渡し、諦めたように美雪に視線を落とした。

「……俺の家、来る？」

そう言ってくれるのを、どこかで期待してる自分がいたんだと思う。以前の美雪だったら衝撃的な発言のはずなのに、どこか冷静に松沢を見つめられる。

「えっと……」

「大晦日に買った酒……結構残ってるし……食うもんもあるしな……」

そう言う松沢の言葉が、なんだか言い訳がましく聞こえるのは気のせいだろうか。

恐る恐る見上げると、いつか見たように微かに目を細めてこちらを見下ろしている。

その瞳に、鼓動がドキドキと早くなる。

「帰り、送っていくよ」

すぐに返事をしないのは、緊張だけじゃない。

「……はい……」

小さくそう答えて、もう一度松沢を見上げた。

期待しちゃいけない。

そう思いつつも、ほっとしたように優しく笑った松沢を見てしまったら、無理な気がした。

「コンビニに寄ってく？」

「はい！」

また並んで歩けることが嬉しい。

コンビニですら、松沢と一緒に行くのだったら嬉しくてたまらない。

(私……振られたら、立ち直れないかも……)

そつと、おまじないのように自分の唇に手を触れた。

ポイポイト、松沢がなんのためらいも無くコンビニのカゴに商品を放りこんでいく。

お菓子、つまみ、ジュース、缶チューハイ……その数の多さに、圧倒される。

コンビニでたくさん買い物するのは男性の方だと聞いたことがあるが、それは本当かもしれない。

「そんなに買うんですか？」

「え？」

松沢が手を止め、美雪の顔を見つめた。

「あの……あるですよね？お酒とか、食べるものとか一応」

「まあ、そうだけど」

そう言いつつも、スイーツ売り場の前で立ち止まる。

「なんか食べる？」

「え、あ……ハイ」

松沢が、ティラミスを手取るのを横目で見つめる。

「甘いもの、好きなんですか？」

「ん。たまにだけど、食べなくなる時がある」

意外だ。

甘いものなんて、全く食べなさそうに見えるのに。

学生時代は、お菓子作りをするのが好きだったが、社会人になってからは、食べてくれる人もいないのでほとんど作っていない。

友達と違い、会社の先輩方に自分の作ったお菓子を差し出すのはためらわれたからだ。

(なんか作ったら……食べてくれたりして?)

クレープを手を取ったまま考え込んでいたら、松沢が横からひよいっとそれを奪うとカゴにいれた。

「あっ、あの、自分で買いますから！」

そう言ってカゴの中に手を伸ばそうとしたが、ひよいっと上によけられてしまう。

「いって」

無愛想にそう言って、スタスタと雑誌コーナーへと歩いて行く。仕方なくその後に残きながら、ふと生活用品のコーナーで立ち止まる。

『お泊りスキンケアセット』

その文字に、ドキッとする。

(い、いらないよね……送ってくれるって言ってたし……。ていうか、なにを期待してるんだか！)

一人で赤くなったり首を振ったりしてしていると、最後に何かをカゴに入れて松沢がレジに向かうのが見えた。

やっぱりお金を払った方がいい気がして後を追おうとした。

「大輔さ……」

「お前、外に出て待ってて」

「え、あ、はい……?」

きっぱりとそう言われてしまったのは、従わない訳には行かない。

渋々一人でコンビニの外に出て、店の外からガラス越しに会計を済ませる松沢を見つめる。

(やっぱりかっこいいよなあ……)

会計が済んで松沢の視線がこちらに移りそうになり、ぱっと慌てて目を逸らした。

「何見てんの？」

自動ドアが開いた瞬間、にやっと笑って松沢が言う。

「み、見てないです」

何故かそんな強がりを書いてしまう。

「ははっ、行くぞ」

くしゃっと美雪の髪を撫で、スタスタと先を歩く。
後に続こうとしたら、松沢が立ち止まった。

「ほら」

そう言って、袋を持っていない方の手を差し出す。

その手の意味を、今の美雪は知っている。

手を重ねた瞬間、ずきっと胸がうずく。

二人の間に特に言葉はなく、何故かお互い黙ったまま松沢のマンションまでの道のりを歩いていった。

何か話さなくてはいけないと思うのに、口が開かない。

飲み会のこと。

今日のこと。

これからのこと。

それら全てが“7日間”という約束へと繋がりそうで、とにかく、怖かった。

第45話 彼の家・再び

松沢のマンションにつくと、相変わらずエレベーターを使わずに階段に向かう。

「あの……大輔さんって、会社でもどうしていつも階段なんですか？」

ようやく、当たり障りのない会話が見つかった。

「ん。前はジムとか行ってたんだけど……最近はあるまり時間が取れないし。普段からなるべく、身体動かすようにしてるんだ」

でも、結構飲んでいる美雪にとって、この階段はちょっとキツイ。

「運動不足」

笑いながら、松沢が握ったままの美雪の手をひっぱるように階段を上っていく。

「ちが、います！ 飲んだ、後だから……」

強がってはみても、息が切れているだけに説得力はない。

「ハイ、おつかれさん」

ようやく5階についた。

涼しい顔をして、松沢が家の鍵を取り出したと思うと、その手が急に止まった。

「どろしたんですか？」

「……忘れてた。家、超汚い」

この間は、とても片付いていたのに。

「そうなんですか？ 別に気にしませんけど……私、ここで待ってますか？」

「いや……それは悪い」

諦めたように松沢が鍵を回してドアを開けた。

2日前に来たときは、段ボールが置かれているとはいえ、割と片付いているように見えていた。だが、今日はなんだかひどい。

「ど、どろしたんですか、コレ」

洗い物は、2日前に美雪や他の友人が来たときのままのようだ。

脱ぎ捨てられたかのように、衣服も散らかっている。

何かを出そうとしたのか、開いた段ボールからは書類らしきものが覗いていた。

「あー、今日……連れてくるつもりはなかったから」

言い訳のようにそう呟きながら、買ってきたものをテーブルの上に投げ出し、ガサガサとゴミ袋を広げている。

きつと二日前は、一生懸命片付けをしていたからこそ、あの状態だ

ったのだろつ。

そう思うと、なんだかおかしかった。

「手伝いますね」

そう言つて、テーブルに置かれたままの食器を運ぼうと手をつけた。

「いいつて」

「だつて、このままじゃ落ち着かないですよね？」

「悪い……１人でグダグダしてたら、なんだか色々と面倒になつて」

ため息をつきながら、松沢が手荒に袋にゴミを入れた。

「大輔さんは、洗濯物とか……私が触らない方がいいような物を片付けてくださいね」

ソファの上に放置された衣服には、下着も見える。

それはさすがに、どうにもできない。

腕まくりをして、食器洗いにとりかかる。

「そこまでしなくていいつて」

「いえいえ」

正直、何かをしている方が気がまぎれる。

何事にも完璧に見える松沢が、普段はこんな生活をしてるといふのが、なんだか嬉しく思えるから不思議だ。

こんな姿、きつと自分しか知らない。

そう思うと顔がにやけてくる。

「休みが長いと、だらけちゃってダメだな」

「そうですか？」

「ん……明日でもいいやって思うと、どんどん散らかってく」

「大輔さん、完璧に見えてたから意外です」

「そんなことないよ。むしろ……だらしない方だ」

ぽいっと衣服を脱衣所にほおりこんだ。

「お前、俺のこと美化してるだろ」

「そんなこと……ないつもりですけど」

「俺、結構だらしないよ。お前と会う約束がなかったら、ひげもそらないかも」

「別に……気になりません」

「女だって……結構遊んでた方だと思うし」

ぽつりと呟くような、声が聞こえる。

そう言われても、何と言っているのかわからない。

聞こえなかったフリをして、ただ無言で、食器を洗っていた。

それなりに満足する程度に片付いた頃には、時計は23時をとっく

に過ぎていた。

「こんな時間になっちゃったな」

軽くため息をつきながら、松沢が立ったまま缶ビールの蓋を開ける。

「お前は？」

「あ、チューハイもらっていいですか？」

部屋に入った時は緊張していたはずなのに、片付けているうちにそれなりに気持ちが落ち着いていた。

ソファに腰かけ、喉がかわいていたこともあり、グビグビと一気に喉に流し込む。

「いい飲みっぷりだな」

ほほえましそうにそう言いながら、当たり前のように美雪の隣に腰を下ろす。

一瞬、身体がビクリとする。

「何？」

にやつと意地悪そうに笑う。

「い、いえ……」

忘れかけていた緊張がよみがえる。

ふと時計に目をやると、あと30分もしないうちに今日が終わるとに気付く。

「もう帰りたい？」

美雪が時計をちらりと見たことを誤解したのか、松沢がそう尋ねてきた。

「いついえ、違います！」

ぶんぶんとう首を振った。

「飲み会、たいしたことなかっただろ？」

ふいに松沢が話題を変えた。

「え？たいしたことないって……」

「お前、7日前はこの世の終わりとはばかりに沈んでたからな」

確かに、そうだった。

あの時は、女友達に対する意地のようなもので頭がいつぱいだった。でも今は違う。

むしろ、見守ってくれていたことへの感謝の方が大きい。

「そんなもんなんだよ。友達なんて。たとえお前が“やっぱり別れた”って言ったとしても、そんなに変わらなかったと思う」

「そうでしょうか……」

「いい友達じゃん。お前、深く考えすぎなんだよ」

笑いながら、美雪の頭をぽんぽんと叩く。

「まあ今日は特に……合コンみたいになってたしな」

そう言いながら、バリバリとつまみの袋を開けた。

「正直良心は痛みましたけど……でも、大輔さんみたいなカッコイイ人を紹介できて、嬉しかったです」

そう言葉にしてから、自分の中で何かひっかかりを感じた。

「そりゃどうも」

「あ……違つかも」

「は？」

「大輔さんみたいな人ってことじゃなくて……自分の好きな人だからかも」

お酒の勢いもあるのだろう。

何のためらいもなく、ふいにそう言葉にしていた。

「お前……な……」

はっと顔を上げると、柄にもなくわずかに赤面する松沢がいた。

「よく普通に、そういう事言えるな……」

「あっ……ふ、深い意味はないっていうか……」

松沢の赤面が伝染してしまったようだ。
顔を赤くして、思わず下を向く。

「で、でも、わかってたなら、最初からそう言ってくれたらよかったのに」

「何を？」

「飲み会にワザワザ彼氏役として行かなくても……別に、大丈夫だつて……」

そこまで口にして、先が続かない。

「ふーん」

松沢が手にしていた缶ビールを、テーブルの上にコトリと置いた。

「本当に、そう思ってる？」

「え？」

そちらに目を向けなくても、松沢がじつと自分を見ているのがわかる。

何故だか、嫌な汗がタラツと流れた。

「それでも、よかったの？」

少し甘えたような口ぶりなのは、気のせいだろうか。
横から伸びてきた手が、美雪の首元のネックレスに触れるた。

「よ……よく、わからないんですけど……」

頭がクラクラする。

このまま、何かわからないものに流されてしまいそうだ。

「あ、今頃みんな、盛り上がってますかね！」

慌てて急に話題を変える。

「さあ。どうぞだろ」

素っ気なくそういいながら、鎖をなぞっていた指がツツーっと首を下から上に向かってなぞった。

途端に、指先から頭の先までがゾクつと鳥肌が立つような感覚に襲われる。

「あ、あの……小林さんと尚美、なんかいい感じだったような……」

「そっ？興味ないし」

肩膝を抱えてこちらを見ている仕草に、ドキドキする。

「あー！」

「何？」

「き、昨日の返事を」

今、この状態で聞くのがいいかどうかはわからない。

でも、このままよくわからない何かに流されてしまふのは怖い。
今日のうちに返事が聞きたい。
それは、美雪の意地のよなものだ。

「俺、今はまだ美雪の彼氏だから」

「……は？」

質問の意味がわからず、なるべく目を向けないようにしていたのに、
思わず真正面から松沢を見つめてしまった。
見ないようにしていた気持ちをあざ笑うかのように、かすかに細め
られたその目から視線が離せなくなる。

「日付が変わったら、教えてやるよ」

首を辿って顎に辿りついた指が、美雪の頬を撫でるように触れた。

「ど、どうしてですか……？」

松沢との距離が、いつの間にか近くなっているような気がする。
肩越しに、ちらりと時計が見えた。

頭に浮かぶのは、平岡から教えてもらったことばかりだ。
松沢の今までの女性関係など、自分には想像もつかない。知りたく
もない。

だからこそ、考えないようにしていたのに。
何度かキスされたことが、脳裏に浮かんた。

「今は、彼氏だから……私に何をしてもいいんですか？」

この7日間で、ひどいことをされたことはない。
でも、この状況では、何をされても文句は言えない。
それでもいいという気持ちと、そういう人であってほしくないとい
う気持ちがせめぎあう。

「お前……、なんか誤解してる」

「だって……」

不安になる気持ちもわかってほしい。

「昨日は、“悪いけど”って……断ろうとしてたくせに」

「それは」

何かを言いかけた松沢が、ふいに口をつぐんだ。

美雪の目から、ぽろっと涙がこぼれたからだった。

こんなことで、泣きたくない。

そう思っでぐっと唇を噛みしめても、止まらなかった。

「私、経験ないから、からかってるんでしょ？」

「そんなこと言っでないだろ」

「じゃあ……」

声を荒げそうになった時、松沢が美雪の肩を強引に掴んだ。

その力強さに驚く間もなく、唇が重なっていた。

手の力強さと裏腹の、優しいキスだった。

第46話 通じた想い

「悪いけど」

静かに唇を離し、松沢が小さな声で言った。

「俺、お前の初めての彼氏にふさわしいとは、言えない」

頭からずっと離れなかった言葉の先を、ようやく聞くことができた。でも、その言葉の意味が否定なのか肯定なのかわからず、ただ口をつぐむ。

「今までの女関係は最悪だったし、お前が考えてるほど大人でもない」

唇をわずかに曲げて、自嘲気味に笑った。

「でも、過去は変えようがないしどうしようもない。きつと嫌な思いさせる」

かすかに歪んだ松沢の顔が、何故か悲しそうに見えた。

「そんなのが初めての彼氏で……お前はいいのか？」

そう言いながら、骨ばった指の背で美雪の頬を撫でる。

「その聞き方……ズルイです」

ふいに恥ずかしさがこみ上げ、松沢の目をまっすぐに見つめられず

うつむく。

「こっち見ろって」

顎をつかまれ、クイと上を向かされた。

美雪をまっすぐ見つめるガラスのような目に、吸い込まれそうになる。

「もう……無理、です……」

さっきまで止まらなかった涙が、衝撃のせいなのか止まっていた。

「何が？」

わずかに首を左に傾け、松沢がそう問いかける。

「そんなこと、なんとも思わないくらい」

松沢の目を、意を決して見つめ返した。

「好きなんです」

美雪の言葉に、彼の瞳が僅かに揺れたような気がした。

少し長い沈黙の後、松沢が静かに口を開いた。

「俺も、好きだよ」

想像もしなかった言葉に、思考が停止する。

「嘘」

「……は？」

「だって……大輔さんが、私を好きになるはずなんて、ないです……」

恥ずかしさでどうしようもなく、顎に手は添えられたままなのに無理矢理目を逸らす。

「お前……こんな露骨な態度でわからなかったの？」

呆れたようにそう言って、顎から手を離してくしゃくしゃと美雪の髪を撫でる。

その時、テーブルの上に置かれたままの松沢の携帯から、機械的な音が聞こえてきた。びくっと身体が縮こまる。

「メール、ですか？」

「いや、アラーム……」

美雪から少し離れ、手を伸ばして携帯を手に取り、ピッとボタンを押しながら松沢が言った。

壁にかけられた時計に目をやると、時刻はちょうど0時を指していた。

「あーあ。狙ってたのに」

「え？」

「約束は、これで終わりだな」

ぽんつと携帯をソファの上に無造作に放り投げ、美雪の頭の後ろに手をかけた。

「7日間って約束にお前を縛ったまま……言うのはズルイ気がして」

「え？……ズルイって……」

「……断れないだろ。約束果たす前だったら。それなのに、まさか先に言われるとは思ってなかったし」

「あの、どういう……」

「あー！だから、もう、いい」

くしゃくしゃと首の後ろを搔きむしるようにしてから、心なしか赤い顔で美雪の目を覗きこんだ。

「……美雪。今度は、無期限で俺の彼女になるか？」

無理に笑顔を浮かべているような、不安そうな顔には見覚えがある。それは、今まで泣きそうな気持ちで鏡を見つめていた自分と同じだから。

（大輔さんも、同じ気持ちだった……？）

以前の美雪だったら“自惚れ”とおこがましくて到底受け入れられなかったような感情が、すんと胸に落ちる。

「……よ、よろしくお願ひします」

気づくと、泣き笑いの顔で、ぺこっと頭を下げていた。

頭を上げた瞬間、首の後ろにまわっていた松沢の手が、ぐっと力強く美雪を引き寄せた。

急なことで力が入らず、どんと松沢の胸に飛び込む形になってしまっ。

「わっ！」

色気も何もない声が出る。

背中にまわった手にぎゅうっと力が入り、ソファの上で抱き締められているのだと気づく。

「かわいい」

頭上から松沢の声が聞こえて、その信じられない言葉に顔が熱くなる。

いや、顔だけじゃなくて、全身が。

キスは何度かしていたけれど、抱き締められたのは最初の夜以来だ。温かい体温を感じて、あの時のことを思い出す。

突然の状況にドキドキしながらも、なんだか落ち着く気がして、松沢の胸にそっと顔を寄せてみた。

「今日は……送っていくからな」

美雪の髪を優しく梳きながら、松沢が言った。

胸からダイレクトに聞こえる低い声に、酔いしれる。

「はい……」

何も考えられなくて、ただそう返事をしたら

「素直だな」

思いがけず、拗ねたような声が聞こえた。

「え？だって……最初から、送っていくって言ってましたよね？」

「そりゃそうだけど……帰りたくないです」とか、あるのかと思っ
たのに「

「はっ？！そ、そんな」

思わず身体を起こして松沢から離れる。

「も、もう、いっぱいいっぱいで……これ以上は……」

「わかってるって」

じりじりと後ずさる美雪を、おかしそうに眺めながら松沢が笑った。
その笑顔すらなんだか可愛く見えて、夢みたいな気持ちだった。

「明日……ていうかもう今日だけど、デートする？」

唐突に松沢が言った。

この7日間で何度かデートはしているが、今までとこれからはまる
で違う。

嬉しさのあまりにすぐに頷こうとして、はっと元旦に届いたメールのことを思い出した。

「あ！でも……」

「予定あるのか？」

「今日で両親が温泉から帰ってきているので……1泊だけでも実家に顔を出そうかと……」

母親からのメールは、二日には温泉から戻ることと、できればお土産を取りに来てほしいという内容だった。

実家と言っても電車で1時間半くらいの距離で、そんなに遠い訳ではない。

明後日にはもう仕事が始まってしまっし、お土産の受け取りもかねて両親の顔を見に行くつもりだった。

「そうか。それなら仕方ないな」

「あっさりですね……」

引きとめられなかったことが淋しくて、つい拗ねた言い方になる。

「俺はお前と違って、色々考えなくちゃいけないの」

「……色々、って？」

「色々は色々」

ずるい言い回しに、さらに膨れた顔をしてしまう。

「それなりに年もとってる分……突っ走ったりはできないんだよ」「美雪のむくれた顔にくすくすと笑いながら、むにと美雪の頬を両手でつまんだ。

「もう……ひやめてくraisai!」

ブンブンと顔を振り、松沢の手を振りほどく。

「なあ」

笑いながら美雪を見つめていた松沢が、ふと真顔になった。

「お前、いつから俺のこと好きだった？」

「へ？」

唐突な質問に、つままれていた頬を手で押さえたまま固まる。

「えと……かつこいいなあとは……入社してすぐから思っていましたけど」

「けど？」

「あ、なんか……仕事中は、怖くて」

思い切って白状したが、松沢は顔色ひとつ変えない。

「仕事に優しさは必要ないからな」

「まあ……もうちょっと優しくしてほしいって思うこともありますけど……」

「で？」

間髪入れずに突っ込んでくる問いかけに、たじたじとなる。

「えと、多分……“彼氏になってやる”って、言われた時から……かも」

初日から恋に落ちていたことを打ち明けるのが恥ずかしくて、つい俯いてしまう。

「ふーん。そっか」

しかし、松沢の言葉は素っ気ない。困惑を覚えて顔を上げた。

「じゃあ……大輔さんは？」

「……秘密」

「え。どうしてですか？」

「癪だから」

シヤク？

その言葉の真意がわからず、間抜けにも松沢の顔をぽかんと見つめ返す。

「じゃ、癩って言われても……」

「まあ、いつからかはまだ教えてやらねーけど」

言葉を区切って、美雪の目をまっすぐに見つめた。

「お前のことは、ずっと見てたよ」

ヤ、ヤバイ。

ドキドキと鼓動が速くなる。

にやけて緩みそうになる頬を、必死に手で押さえていた。

「じゃあ行くか。俺の理性があるうちに」

すくつと松沢がソファから立ち上がり、美雪も慌ててスカートの裾を直しながらそれに続く。

ふわふわと膨らむチュールスカートは、意外にもほとんど皺にはなっていないかった。

見かけで判断して、今まで試着すらしなかったことを後悔する。服装だけじゃなくて、化粧や髪形もそうだ。

（この人の隣が似合う、素敵な女性になりたいな）

ジャケットを羽織る松沢の背中を見つめながら、強くそう思っていた。

「……やっぱり、泊まっていくか？」

美雪の視線に気付いたのか、振りかえった松沢が言った。

「だ、大輔さん！」

「冗談だよ」

そう言つて、慌てる美雪のおでこに軽くキスを落とす。

どこまでが本気で、どこからが冗談なのか、イマイチわからず困惑する。

（私だつて……本当は帰りたい訳じゃないのに……）

そんなことをされると、この場に留まりたくなってしまう。

美雪の心の一瞬の変化を読み取ったのか、松沢が高い背をかがめて美雪の顔を覗きこむ。

「あ、帰りたくなかった？」

「か、帰ります！ 明日の用意とか、してないんだから！」

一気にそうまくしたてると、コートを羽織り、ソファの下に置いたバッグを勢いよく手にした。

するとその拍子に、バッグの金具にひっかかったのか、ソファの下に隠すように置かれていたレジ袋が、ガサツと音を立てて転がり出た。

「あ………」

美雪が凝視するモノに気付いたのか、松沢が慌てたようにレジ袋を再びソファの下に押し込んだ。

「コンビニで、最後に隠すように買ったのって、もしかしてコレ…
…?」
いくらかういふことに疎い美雪だって、その四角い箱がなんなのか
くらいの性知識はある。

(「ねって、いわゆる、あの、「……」)

「……行くぞ」

ぶっきらぼうに松沢が美雪の手をひっぱった。

「はっはっ……」

思いがけないモノの出現に、赤面するしかない美雪だった。

第47話 7日間の終わりに

美雪のマンションまでの道のりは、あっという間だった。

何かを話そうと思っても上手く言葉が浮かばず、もどかしい想いで松沢を見上げる。

それを知ってか知らずか、松沢は美雪に横顔を向けたまま、微笑むばかりだった。

「じゃあ明日……気をつけて帰れよ」

「……はい」

マンションの前で、離れ難くて、ついジャケットの裾をつかむ。

「ん？どうした？」

「いえ……」

言葉にしなければ、きっとわかってもらえない。

でも、言葉にできるだけのボキャブラリーがない。

唇をきゅっと結んで、どうしようもない気持ちで目を上げると、優しく笑いながら美雪の髪に触れた。

「そういう顔、するなよ」

首の後ろに手を回し、松沢が美雪の頭をそつと引き寄せる。

「やっぱり……明日帰るの、やめようかな」

松沢のジャケットに頬を寄せながら、思わずぽそつと本音が漏れた。

「嬉しいけど、ダメ」

「……………どうしてですか？」

「約束してるんだろ？」

「そうですね……………別に明日じゃなくてもいいし……………」

（大輔さんは……………私と一緒にいたくないのかな……………）

好きだとは言ってくれたけれど、その気持ちの容量は自分の方が大きいに違いない。

そんな気持ちがあわく。

それとも、恋愛経験値の差だろうか。

彼くらい大人で余裕があれば、好きという感情と、しなきゃいけないことの優先順位を、間違えるようなことはないのだろう。

松沢の腕の中で、小さくため息をつく。

「お前、わかってないな……………」

「何が、ですか？」

「俺より先に約束してるのに、それを破らせるわけにはいかないだろ」

「意味がよくわかんない……………」

「お前のこと、大事にしたいっていう意味だよ。それくらい判れ」

こつんと頭を小突かれた。

「これから先、いつだって会えるだろ」

淋しくて不安だった気持ちが消えて、くすぐったさとあたたかさが胸に広がる。

「……はい！」

マンションの前だということも忘れ、その胸に顔を埋める。

「じゃあ……俺、帰るぞ」

「はい」

「明日、何時に出るんだ？」

「えと……10時……くらいかな。お昼は向こうで食べる予定なので」

「気をつけていけよ」

「はい」

美雪の頬に、大きな手が包み込むように触れた。

その意味を悟って、そっと目を閉じる。

ふんわりと降りてきた唇が一瞬で離れた後、今度は下唇を挟むようにゆっくりと重なる。

それを、いつの間にかうっとうしと受け入れている自分がある。

キスが、こんなに気持ちがいいことを知らなかった。

（　　こうやって、キスすることに慣れていくんだ……）

それは、何故か誇らしいような気持ちだった。

「部屋まで送るのは、やめとくよ」

名残惜しそうに唇が離れた後、松沢が言った。

「どうして、ですか？」

「上がらないって決心が揺らいだら、困るから」

冗談のように明るくそう言ったが、半分以上は本気な気がした。実際自分も、“上がっていきませんか？”なんて言ってしまうかもしれない。

「じゃあここで……おやすみなさい」

「うん。おやすみ」

こんなありきたりで当たり前の挨拶を、こんなにも愛しい気持ちで交わす日が来るとは、思ってもいなかった。身体を離すと、途端に冬の寒さが身にしみる。

それでも、心はあたたかい。

後ずさりながら軽く手を振り、マンションの中へと入った。一人で上る階段は、深夜だというのに足取りが軽い。

部屋の前でバッグの中の鍵を探りながらマンションの入り口に目をやると、壁に寄りかかりながらこちらを見ている松沢が見えた。どうやら、ちゃんと家に入るまで見守ってくれているらしい。美雪が振りかえったことに気付き、軽く手をおでこの位置まで上げる。

少し迷った後に、同じポーズをとって見せたら、遠くで松沢が笑いを堪えるかのように顔を歪ませたのがわかった。笑いながら鍵を開けた後に、後ろ髪をひかれるような思いを隠して、そっとドアに自分の身体を滑りこませた。

パタン

閉じたドアに、寄りかかる。

(1、2、3……)

ゆっくりと10まで数えた後に、小さくドアを開け隙間から外を覗いた。

こちらに背を向け、歩いていく松沢が見える。

背の高い後姿を、見えなくなるまで見送っていた。

角を曲がる時に一度、こちらを振り向いたような気もしたけれど、その姿はすぐに消えていった。

今度こそ本当に、静かにドアを閉めて鍵をかける。

もっと一緒にいられると思っていたのに、そうできなかったことに淋しさはあるけれど……

今日一日ことを思い出すと、顔はゆるんでしまう。

こんなことになるなんて。胸をぎゅっと抑えつけて、大きく息を吐く。

嬉しさで叫び出してしまいそうだ。

ニヤニヤしながら靴を脱いでいると、コートのポケットの中の携帯が震えた。

「え？」

こんな夜中に、と思ってあわてて画面を開く。
メールの受信だ。

“松沢大輔”

その文字に、胸が高鳴る。

『こっそり見てんじゃねーよ。』

ちゃんと鍵かけろよ。

おやすみ』

そっとドアの隙間から覗いていたのが、バレていたらしい。
それすら嬉しく思えてしまうなんて、末期症状だ。

少し考えて、コートも脱がずにメールを打つ。

『後姿も、かつこよかったです。』

早く会いたいです。

おやすみなさい』

ためらいもなくこんなメールを送ってしまう自分は、間違いなくこの恋にハマっている。

自分の口に、そっと手をあてる。

あの人の唇が、ここに何度も触れた。
その体温を思い出し、身体が熱くなる。

「……明日の用意、するかな……」

嬉しさと訳のわからない身体の熱さで、今日は眠れない気がした。

第48話 これから

翌日、眠い目をこすりながら荷物を抱えて家を出たら、マンションの入り口に見覚えのある車が停まっていることに気付いた。

あの黒いワゴンは、もしかして。

はやる気持ちを抑え急いで階段を降りると、美雪が入口に姿を現したのとほぼ同時に、運転席のドアが開いた。

「よし」

「大輔さん!!」

「駅まで送ってやるよ」

昨日、家を出る時間を聞いてきたのは、もしかしてこのためだった？
胸がいつぱいになって、お礼の言葉を言わなければと思うのに、声が出ない。

そんな美雪にかまう様子も見せず、松沢が歩みより美雪の荷物を手にとった。

「ほら、早く乗らないと遅れるぞ」

「は、はい!!」

わざわざ開けてくれた助手席に乗り込む。

「今日は眠れたか？」

運転席に乗り込んだ松沢が、美雪の顔を覗きこんだ。

「だ、大丈夫ですから、見ないでください……」

思わず目のふちを抑える。

昨日は、やっぱりなかなか寝付けなかった。

知らず知らずのうちに手が止まり、ぼんやりと松沢のことを想う自分がいて、そんな自分に一人でうろたえる。

実家に帰る準備も遅々として進まず、ようやく支度を終えてベッドにもぐりこんだ頃には、空が白々と明るくなっていた。

それでも化粧のノリがいいのは、きっと恋の力だと勝手に納得している。

松沢がくすつと笑い、ハンドルを握り前を見据える。

「行くぞ」

「……どうして急に来てくれたんですか？」

「急じゃねえよ」

ぶっきらぼうにそう言って、助手席の美雪の頬に手を伸ばす。

「早く会いたい」ってメールしてきたのは、どこの誰でしたっけ？

「あーあれは！」

「社交辞令？」

「そ、そういう訳でも……ないですけど」

赤くなった顔を隠すように俯く。

「……わざわざ、朝に来てくれるなんて……そんなつもりじゃ……」

「わかってるよ。俺が来たくて来たんだよ」

ぼんつと頭に優しく手が乗せられた。

負担をかけてしまっただろうか、と不安に思った気持ちだが、その仕事と言葉ですうつと晴れる。

大人の余裕だな、と思う。

その余裕が心地よくて、つい底なしに甘えてしまいたくなる。

(私……こんなんでいいのかな……)

幸せな予感に、心がふわふわする。

この心地良さを知ってしまったら、もうきつと戻れない。この人から、離れられない。

ぽーっとその顔から目が離せない美雪に困ったように微笑みかけ、松沢がゆっくりと車を発進させた。

静かに駅へと向かう車の中、松沢の左手は美雪の手をゆったりと包んだままだ。

時折、微かに美雪の指をなぞったり、確認するかのよりにきゅっと握られる。

指の長い骨ばった手に、どうしようもない愛しさがこみ上げる。

「あ、それ」

もう少しで駅につくという時に、ふいに後部座席の紙袋を顎で示さ

れた。

「え……その紙袋ですか？」

「ん。取って」

言われるままに手に取り中を覗くと、菓子折りのような包みが入っている。

「……なんですか？これ」

「親御さんに、お土産」

「ええっ！ そ、そんなことしてもらう訳には……。第一、なんて言って渡せば……？」

「“彼氏から”って言えば？」

松沢がニヤニヤと笑っていた。

「そこ、早朝からやってる知る人ぞ知る和菓子屋。塩大福が絶品で、営業にいるときにはよく手土産に利用してたんだ。まだ3が日なのに、やっててよかったよ」

「それはそれは……あ、ありがとうございます……」

わざわざ自分を迎えに来る前に買ってきてくれたのだと思うと嬉しかったが、素直に受け取っていいのか、そして両親にうまく渡せるのか……考えると動揺は隠せない。

そんな美雪の不安を見透かしたように、松沢が言った。

「どうせいつかは言うんだから、早いとこ言っとけ」

「は、はい」

「外堀から埋めるのも、大事な作業ですから」

「は？ はあ……」

松沢の言っている意味が頭に入って来ないが、ひとまず返事をして紙袋を抱え込む。

彼の言うことに逆らえないのは、仕事の関係のせいだけではないと思う。

「なんなら、このままお前の実家まで送って行ってやるのか？」

「い、いえ！！ それはまだ心の準備が！」

慌てて顔の前でブンブンと手を振ると、ははっと松沢が軽く笑った。

「それは残念だな」

冗談なのか、そうじゃないのかわからない。

でも、悪い気はしなかった。

ほどなくして、車は駅前の送迎用スペースに静かに停車した。

「じゃあ、あの……行ってきます」

「うん」

「あの、メールしていいですか？」

「いつでもしていい」

「電話も？」

「ああ」

明日の夕方には帰ってくるのに。

明後日からは、また会社で会えるのに。

わかっているのに、切ない気持ちになってしまふのは何故だろう。離れ難くて、その手を握りしめたくなるのは何故だろう。

そう思いながらも、無理矢理笑顔を作る。

「ばーか」

美雪の頭を、ぐいっと力強く引き寄せた。

車の中とはいえ、朝10時すぎの駅前にはたくさんの人がいる。

普段なら気になるはずの人目が、気にならない。

恋って、怖い。

「そんな顔してたら、本気で実家までついてくぞ」

松沢の身体を通して聞こえる低い声が、心地いい。

何故だかじんわりと浮かんでいた涙が、ひいていく。

黙ったままその胸におでこをくっつけていたら、松沢の手が美雪の髪をすくい、その手が耳を掠めた。

一瞬触れただけのはずなのに、途端に耳が熱を持ったのがわかる。

「キスしていい？」

「……こんなところですか？」

「誰も見てないよ」

胸の中に抱き入れた美雪を、隠すように屈む。

顎に手が添えられて、啄ばむようにチュッと軽くキスを交わす。

「これから、だから」

唇を離れた松沢が、静かにそう言った。

「これから？」

「うん。帰ってきたら、一緒にいられる時間はたくさん作れるだろう？」

「……はい」

「焦る必要も、不安に思う必要もないから」

胸に顔をつけるようにして、こくと頷いた。

たかが一日実家に帰るくらいで寂しいなんて……そう思っていた気持ちに、遠まわしで理解を示してもらえたのが嬉しかった。

多分、赤い顔をしていると思う。
もう、それでもいい。

「じゃあ」

「うん」

繋いだ手を離して、助手席のドアに手をかけた。

「あ」

思い出したように、松沢が声を出す。

「どうかしましたか？」

「一つだけ……教えといてやるよ」

そう言っつて松沢は美雪の方に向き直る。

「俺はこの7日間で、絶対にお前を落とそうっつて思ってたよ」

自信たっぷりのその言い方に、つい笑いがもれた。

「まんまと……ハマちゃったんですね」

もしかして、自分を安心させるために言っているのかもしれない。そんな気持ちが一瞬心をかすめたけれど、例えそうだとしても嬉しいことに変わりはない。

「じゃあ本当に行きます」

まっすぐに松沢を見て笑ってみせた後に、車をおりた。

“これから、だから”

その言葉が、何よりも心強かった。

一度だけ振りかえると、ハンドルにもたれかかったまま、松沢がひらひらと手を振った。

自分も真似をして、ひらひらと手を振る。

（　　）　　そういえば、最初の夜のこと………ちゃんと聞いてなかったな

ふと、そんな疑問が頭をかすめる。

“　　ずっとお前を見てた”

昨日言われた言葉が蘇る。

美雪のベッドに入ってきたことは、もしかして、寝ぼけてたとか間違えたとかじゃなくて、わざとだったのだろうか。

（　　）　　今度ちゃんと聞かなくちゃ

あえて自分の弱みともなりうるようなことを、松沢が言つとも思えないけれど

人目も気にせず、ニヤニヤと思い出し笑いが浮かんだ。

まっすぐに前を見て、背筋を伸ばして階段を上った。

行く前だというのに、帰ってくるのが楽しみで仕方なかった。

早く、会いたい。

7日前とは全く違う世界が、自分の目の前に広がっているような気持ちだ。

軽はずみな約束が、こんなに自分の世界を変えたことに、驚いてい

る。

（彼氏ができるってことは、ゴールじゃなくて、始まりなんだな…）

もっとキレイになりたいくて、もっと大人になりたいくて、ずっと好きだと言ってもらいたくて。

引っ込み思案の自分には珍しい、そんな感情にも少し戸惑う。きつと、これから自分がやらなくちゃいけないことは、たくさんある気がした。

あの人の、無期限の彼女でいたい。

胸元のネックレスにそつと手をあてた。

陽を浴びたハート型のダイヤは、美雪の目の前を照らすようにキラキラと煌めいていた。

7日間彼氏 ｝ miyuki side ｝ 【完】

第48話 これから(後書き)

「miyuki side」 完結です。

次回から、「daisuke side」 スタートです。

第49話 はじまり(前書き)

daisuke side スタートです。

第49話 はじまり

駅構内へと消えていく美雪の後姿を、ハンドルにもたれながら見送っていた。

せつかく手に入った愛しい存在を、慈しむ暇がなかったのが少しもどかしい。

でも、仕方ない。

（さすがにねえ……親に会いに行きますって言われたら、何も言えないっつうの）

今までの遊びの恋愛ではなく、大切にしたいと思う。

だからこそ、彼女のことは尊重したいし、家族がからむことは慎重になる。

一度だけ振りかえった美雪にひらひらと手を振りながら、にやけそうになる口元を手で隠した。

7日間の約束をした時から、その間に絶対に自分のモノにすると決めていた。

ただその途端に、こんなおあずけを食うとは思ってもみなかったけれど。

思い通りになりそうで、実はそうでもないのかもしれない。

そんな芯の強さのようなものを、感じていた。

そして、それでもいいかと思える自分がいることにも驚く。

美雪の姿がすっかり見えなくなってから、大輔はゆっくりと車を発進させた。

昨日までは寒かったが、今日は日差しがあたたかい。

まるで春のような陽気だ。

ふいに、初めて美雪に会った春のことを思い出していた。

春。

今年も、新人研修の時期がやってきた。

新入社員への研修は各課持ち回りで行うことになっていて、大輔の所属する情報課も例外ではなかった。

「松沢くん、今回の新人研修は君に頼んでいいか？」

課長の笹谷から呼び出されてそう告げられた。

正直、面倒くさいという気持ちが無い訳では無いが、断る訳にはいかない。

「わかりました」

「私のようなおじさんがやるより、少しでも年齢が近い松沢くんの方がうまくやれるだろう」

「俺だって、新人から見たらおっさんですよ」

はははっと軽く課長が笑う。

情報課に配属になったのは去年のことだった。

それまでは営業課ですつと仕事をしていた、ある程度の実績も残していたつもりだった。

それが突然の異動命令。

正直驚いた。

蓋を開けてみれば、情報課で長年主任のポストで勤続していた社員が急に退職することになり、即戦力が欲しいと笹谷課長が直訴しての異動だと聞かされた。

基本は社内や顧客の情報やシステムを扱う仕事ではあるが、場合によっては広報や営業との連携も必要だし、最近は社外との取引も多い。

そのために、営業で経験を積みながらも、情報処理技術の資格も持つ大輔が選ばれたのだ。

営業の適正を否定されたのかと落ち込みそうにもなったが、そういう事であればここでもある程度の実績を残して力をつけたい。

そう思って、意欲的に仕事に取り組んでいるからか、課長からは様々な仕事を引き継がれている。

今回の新人研修も、いい勉強になるだろう……その程度の気持ちだった。

「主任、新人研修ですか？いいなあ〜」

新人研修の日の朝に資料を揃えていると、課のムードメーカーではあるが、ある意味“チャライ”山田がそう言ってきた。

「何がいいんだ？」

「若くてかわいい子と、いち早く仕事できるじゃないですか」

「アホか」

思わずため息が出る。

「そんなのと言ってる暇があったら、この資料営業に届けてこい」
デスクの上の書類の束を、山田の机の上にバサッと放り投げる。

「ここも一人、配属になる予定ですよね？」

入社3年目にしてすでに山田よりしっかりしている成田が、その声をかけてきた。

「一応その予定」

「是非ともかわいい子を〜！」

へらへらと笑う山田に心底嫌そうな顔を向けて、成田が言った。

「素直で即戦力になりそうな子、見つけてくださいね！」

「まあ、努力するよ。後は頼む」

資料の束を抱えて、フロアを出た。

社会人としてのマナーや基本的な考え方・姿勢などは、総務課が派遣した外部の講師により行われる。

大輔がするのは、それぞれの課の基本的な仕事内容の講義にすぎない。

この就職難の時代に無事就職を勝ち取った面々は、例え新人であっても非常識な態度は見られない。

自分が新入社員の時より、ずっとしっかりしている。

講義はスムーズに終わり、それぞれの情報処理能力を見るために簡単なパソコン処理をさせていた。

(コイツ……なかなかスピーディだし手際がいいな)

一人の男性新入社員が目につき、新入社員名簿に視線を落とす。

(営業課志望、か……。まあ、当然だろうな)

どうしても、見た目が華やかな営業や広報に志望が偏るのはいつもの事だった。

新入社員に目を向けゆっくりと机をすり抜けて歩きながら、ふいに一人の女性社員が目に入った。

打ちこむ手先がスムーズで、しかも要領がいい。

(情報課、志望。珍しいな。まあ……商業系の短大みたいだし、得意なんだろうな)

さり気なく名簿に目を通し、名前や資格をチェックする。

大卒が多い中で短大卒ということは、在学中の成績も優秀だったのだろう。

隣の同じ新人女性社員から質問され、それにも的確に答えているようだ。

(コミュニケーション能力も、問題ナシか)

『藤崎美雪』という名前の頭に、ピツと赤ボールペンでチェックを入れる。

「早いな」

後ろに周りこみ、声をかけた。

「！！！！！！」

すると、その女性社員は必要以上に驚いた顔をして、ひきつった顔でこちらを見てくる。

（な、なんだ？）

その反応に、思わずこちらがたじろぐ。

「あ、ありがとうございます……」

消え入りそうな声だった。

小さな身体はいつそう縮こまり、目を逸らすようにして申し訳なさそうに作業を続けている。

（なんだ？ この子……）

自慢ではないが、大輔は女性にはモテる方だ。

学生時代だけではなく、入社した時からバレンタインのチョコも義理や本命も含めて数多い。

イケメン主任と、影で呼ばれているのも知っている。

そんな自分が、こんな態度を取られたのは初めてに近いかもしれない。

なんだか納得いかない気持ちで、ひとまずその社員の机を離れた。

なんとなく遠くから見守っていると、反対隣の男性社員に話しかけられて、同じようにびくついてる様子が見えた。

(男、苦手なのか……？　なんか面倒そうだな……)

それが、藤崎美雪との出会いだっただ。

数日後。

「成田、ちよつといいか？」

「はい」

作業中の手を休め、成田がデスクにきた。

「今度の新人の教育係、お前にお願いできるか？」

「え……私、ですか？」

入社3年目の成田は、驚いたように目を見張った。

「嫌か？」

「いえ、とんでもないです！　でも……もっと適任の人もあるんじゃないかと思って」

成田の言う通りだ。順当で行けば、新人の教育係には山田あたりがふさわしい。

「いや、多分なんだけど……ちょっと男が苦手みたいなんだ。今度の新人」

「本人がそう言ったんですか？」

「新人研修の時に、情報課配属希望だったから少し見ていたんだけど、なんとなく、な」

「そうですか……」

少し考えるような素振りを見せてから、成田が言った。

「わかりました。うまく指導できないときには、サポートをお願いします」

「うん、よろしく」

情報課には、元々2年か3年の約束での配属だった。それまでに、部下をもつと育てなければならぬ。

まだ若いし勤続年数も浅いが、成田は信頼できる部下の一人だった。彼女に任せておけば大丈夫だろう。そう思っていた。

「本日より情報課に配属になりました、藤崎美雪です。よろしくお願ひします!!」

緊張のためか顔を強張らせながら、ぺこりと美雪が頭を下げた。期待通りの若い女性社員に、複数の男性社員が色めき立つのがわかる。

「じゃあ藤崎さん、指導係は成田さんだから、彼女に色々教えてもらってね」

課長が優しくそう言い、成田の顔を見た美雪がほっとしたように笑った。

朝礼が終わり、彼女が席についた途端、周りの男性社員から質問責めにあっている。

「藤崎さん！俺、山田です！よろしくね」

「何歳？ どの大学出身なの？」

矢継ぎ早に浴びせかけられる質問に、美雪が顔を真っ赤にして目を白黒とさせている。

「お前ら、仕事ちゃんとすすんでるのか？」

ぴしゃりと大輔がそう言うと、フロアが一瞬しんとなった。

「そういう話は、歓迎会の時にでもしろ」

冷たくそう言って、自分もパソコンに向かう。

助けたようとした訳ではないが、ほっとけなかった。いや、上司として当然のことをしたに過ぎない。

「もー……主任はクールだなあ……」

ぶつぶつと言う声が聞こえるが、関係ない。

成田だけがにっこりと微笑み、美雪に話しかけていた。

「主任、情報課のロッカーとか色々、案内してきてもいいですか？」

「ああ」

そう言うと、二人は連れだってフロアを後にした。

「若いですね。主任、いい子ひっぱりましたね」

「ひっぱった訳じゃない。元々情報課希望だったんだ」

「そうなんですか？」

余計な噂を立てられてはたまらない。

そこはきっちりと言っておいた。

ただでさえ、総務課の江藤沙希を振ってからというものの、よくない噂が流れているのは知っていた。

自分の軽はずみな行為が招いた結果だから、別に言い訳などするつもりはない。

だからといって、これ以上『軽いオトコ』や『遊び人』というイメージがつくのも面倒だった。

「何歳なんですか？」

「……山田」

「年くらい、いいじゃないですかあ」

へらへらと笑う山田に、ため息をついて答える。

「20歳だ。短大卒だからな」

「へえ〜！」

「じゃ、これ持って企画と打ち合わせしてこい」

山田の机の上に資料を載せる。

そろそろ話を切り上げて仕事に集中したかった。

「せっかく可愛い新人が入ってきたっていうのに。主任は仕事の鬼だからなあ……」

「なんか言ったか？」

「い、いえ……」

ギロリと睨みをきかすと、山田が資料を手にフロアからこそこそと出て行った。

その背中を見つめながら、ふつつとため息が出る。

大輔だって、恋愛がしたくない訳ではない。

ただ、遊びの恋愛からは何も生まれないことに、そろそろ気付き始めていた。

結婚している友人だって、少なくともない。子供がいるヤツだっている。

自分だって、どうせなら真面目な恋愛がしたい。

本当はどちらかというと、黙って自分についてきてくれるような控えめな女性が好みなのに、気づけば自分の周りには、遊びなれてるような軽いノリの子しかない。

(まあ……俺がそうだから仕方ないのか……)

類は友を呼ぶ、という。

恋愛だって、同じなのかもしれない。

本気で恋愛をするのなら、きっと自分が変わらないといけないのだらう。

でも、仕事に追われる毎日で、余計なことに気をとられるのはイヤだった。

『連絡をくれない』

『冷たい』

『何を考えているのかわからない』

そんなやりとりを何度か繰り返し、嫌気がさして自ら別れを告げるのがほとんどだ。

そのうち、不必要な特定の彼女を作るくらいなら、身体だけの関係の“女友達”が数人いた方がいいという結論にいたった。

それが、みすみす理想の恋愛を遠ざけていることもわからずに。

俺って最低？

そう思うことはあっても、忙しい毎日の中ではそれすらどうでもよくなっていた。

第50話 はじまり・2

「主任、チェックお願いします」

美雪が、控えめに書類を差し出す。

書類を差し出すその白い手の爪は、短く切りそろえられマニキュアも塗られていない。

黙って書類を受け取り目を通しながら、ちらりと美雪を見上げる。

数日前に、同期の盛永に言われたことを思い出していた。

休憩をしようと自動販売機に缶コーヒーを買いに行った時、ばったりと営業課に居たときの同僚、盛永に会った。

「よう！ 松沢。忙しそうだな」

「毎日外回りのお前ほどじゃないよ」

同期でもある彼は、同じ課にいたときは良きライバルでもあった。髪を嫌味がない程度に茶色く染めて軽くパーマをかけ、細身のスーツをおしゃれに着こなす盛永は、どちらかと言うとかたくてクールな大輔とは正反対のタイプのイケメンで、いわゆる若い子にウケがいい。

それでも不思議と話が合い、ライバルと言いつつも争う訳ではなく、むしろ行動を共にすることが多かった。

休憩コーナーのベンチに並んで腰をおろし、お互いの仕事からみの情報交換をしていると、ふいに思い出したように盛永がぺちんと膝を叩いた。

「そうそう、お前にずっと言おうと思ってたの思い出した！ 今年の情報課の新人の子、いいじゃん！」

「は？ そうか？」

「特別可愛いつて訳じゃないんだけど……なんかこう、透明感があるっていうの？ 何にも染まってないような真っ白な感じで、俺色に染めたい、みたいなの？」

「おっさんが、お前は」

呆れたようにそう言いながら、缶コーヒーを一口飲む。

「今年はアタリが少ないから、結構評判なんだぜ？ 短大卒ってことはまだハタチだろ？ いいよなあ、そそる！」

「まあ……年の割には落ち着いてる感じだけだな」

「で、どうなんだよ？」

「……何が？」

「少しは話したりだとか、してるだろ？ 彼氏いるとかさ、そういうコミュニケーションはとらないの？」

「それはコミュニケーションじゃなくて、ただのセクハラだろうが」

「おー、部下に対してはオカタイんだな」

ケラケラと笑いながら、盛永もペットボトルのスポーツ飲料に口をつける。

「声かけたいけど大人しそうだからかけづらいつて、ウチの部の若い連中が言ってたわ」

美雪は、あえて若い男性を避けている節がある。

そのことを言おうかと一瞬迷い、それを告げたことでさらに盛永の関心が美雪に寄せられるかもしれないことに、何故だか微妙な不快感がわいた。

「イマドキの子なら、彼氏くらいいるだろ」

きつと美雪なら、彼氏はいないだろうという確信があった。でも、それを盛永に告げようとは思わなかった。

「まあそうだよな」

拍子抜けするほどあっさりと引きさがり、盛永はグビグビとスポーツ飲料を流し込む。

「うちは例年通り、ヤローばかりだからな。まっ、そのうち親睦会でもしよーぜ！」

「……考えておくよ」

一気に飲みきったペットボトルをゴミ箱に放り投げて、軽く手を上

げ盛永は去っていった。

「このところ。間違っているな。ちゃんと見直したのか？ 15時までに直して」

「は、はい。すみません……」

戻した書類を手に、そこまで怯えるか？と思うほどに、美雪が顔を青くして身を縮める。

大輔の無愛想な表情や言い方が、そうさせているのだということは充分わかってる。

でも、これが社内での自分のスタイルなのだから仕方ない。

美雪は新人にしては要領もよく、飲み込みも早いと思う。

成田の指導力もあるが、きっと本人の頑張りもあるのだろう。

「でも……他はよく出来てる」

思わず、付け足すようにそう言っていた。

「え、あ……ありがとうございます！」

驚いたように顔を上げた美雪が、大輔をまっすぐに見つめてにこっと笑った。

ふいに向けられた笑顔に、不覚にも目を奪われる自分がいた。

「あの……主任？ なにか？」

おずおずと美雪が問いかけてくる。

「……なんでもない。戻っていい」

そう言つて、パソコンの画面へと視線を戻した。

“透明感があるっていうの？”

盛永の言葉を思い出す。

女性の笑顔なんか、見慣れているはずだ。

でも、色目や損得のからまない、純粋な笑顔をまっすぐに向けられたのは久々な気がした。

（やべえな……俺、欲求不満か？ 最近遊んでないからな……）

パソコンの前で眉間に手をあてながら、そんなことを考えていた。

新年度早々、新しいプロジェクトが始まり仕事がたまっていく。

例え遊びたくても、しばらくそんな暇は無さそうだ。

というか、今はそんな気持ちはあまりないけれど。

目の端で、ちらりと成田にアドバイスされながらパソコンに向かう美雪が見えた。

学生と言ってもまだまだ通じるような、幼い顔立ちだ。

（まだ子供みたいなものだろ……）

言い聞かせるように、そう考えている自分がいた。

駅からの帰り道、美雪との出会いを思い出していると、ふいに携帯が鳴った。

人通りの少ない道だったので、急いで車を路肩に寄せて携帯を開く。美雪かと一瞬期待したが、違ったことにわずかに落胆する。

ディスプレイには、『平岡』の文字が浮かんでいた。

「もしもし」

「おっ、めずらしく出るのが早いな」

「そうか？」

「そうだよ。誰かからの連絡を待ってた、とか？」

その言い方に、微妙な含みを感じる。

「待ってねーよ」

「……美雪ちゃんは？」

結局のところ、それを聞きたいのだろう。

「いないよ。実家行った。つうか、今、駅まで送ってった帰り」

「へ？ そうなんだ！」

妙に嬉しそうな声が、携帯の向こうから聞こえてくる。

「なあ、今日の夜時間あったら、飲みに行かないか？」

急に平岡がそう切り出した。

「……なんでだよ」

「まあ色々。聞きたいし」

美雪のことを、色々と聞かれるのだろうと思うと少し気が重かった。でも、これもいい機会なのかもしれない。

「わかった。でも小林も誘っていいか？さっきからメールがしつこいんだ」

嘘ではない。

どうやら昨日の飲み会で美雪の友達と何かあったらしく、今朝目覚めた時からしつこく会えないかとメールが来ていた。

「俺は全然かまわないよ。じゃあ19時にいつものところで」

学生時代からよく飲みに行っていた場所で、約束をした。

「なんだか飲み会続きだなあ……」

電話を切ってから、思わず独り言がもれた。

少しだけ面倒ではあったけれど、美雪に会えない日の予定が埋まったのが救われた気もする。

本当ならば、今日はデートでもしようと思っていたのだから。

それすら予定に組んでいたと知ったら、美雪はどんな顔をするだろう

う。

大輔の顔に、知らず知らずのうちに笑顔が浮かんでいた。

早く自分だけのものにしてしまいたい。

でも、出来る限り大事に扱いたい。

もどかしい、相反する気持ちだけど、悪い気はしなかった。

第51話 男たちの夜・1

「出会っちゃったんだよ！ 俺。俺のナイチンゲールに！」

のっけから、小林のテンションは高かった。
うんざりとした気持ちで、チビチビとビールを口にふくむ。

「それ、もう何回も聞いたよ」

普段は愛想のいい平岡でさえ、若干嫌そうな顔をしているように見える。

昨日、大輔たちと別れてからも続いていた飲み会で、小林は美雪の友達の1人と意気投合した挙句、どうやら恋に落ちたらしかつた。尚美という、確か短大卒業後に看護学校に通っていると言っていた子だ。

五人の中では、一番落ち着いているように見えた。
が、正直あまり彼女のことは覚えていない。

「なーなー。俺、美雪ちゃんから尚美ちゃんのこと色々聞きたいんだけどお」

会ってから、何度となくこのセリフを聞いている。

「だから……実家帰ってるって言うてるだろ」

「電話とか！」

「ダメ」

まだ遅い時間という訳ではないが、こんなテンションの高い小林と電話をさせる訳にはいかない。

美雪のことだから、迷惑であっても迷惑とは言えないだろうし、小林が長々と話しこむ様子が目に見える。

「けち！」

ふくれたように小林が枝豆をぶちぶちと口に入れた。

「お前ら、急に春づいてるな」

焼酎の入ったグラスをカラカラと回しながら、平岡が言った。

「平岡だってもうすぐパパになるくせに」

小林がふざけながら小突く。

「まあな……。で、大輔は？ どうなんだ？」

平岡がはにかむように笑いながら、急に大輔に話題を振った。

「もくラブラブだよな〜！ 俺、正直うらやましかったもん！」

「そっなの？」

小林の言葉に、平岡が驚いたように目を見張る。

「小林……余計なこと言うな」

威嚇するよつにちらりと視線を飛ばすが、小林は全くかまう様子が

ない。

「あのクールな大輔がさあ、美雪ちゃんの隣べったりだもん。途中、気持ち悪そうにしてたらわざわざトイレまで行ってさ。まあトイレで何してたか知らないけど」

「アホ。何もしてねえよ」

何もしていないとは、言えないけれど。

ふと、トイレの前でぼろぼろと泣きだしていた美雪を思い出す。本当は、その小さい身体を抱きしめたかった。

場所が場所だけに、隠れるようにキスをするだけで我慢したのだ。

「そっか……そりゃ嬉しいわ。あの子、いい子そっだもんなあ」

「そっいえばお前、美雪に変なこと言っただろ」

しみじみと呟く平岡に詰め寄ろうとした時、テーブルの上に置かれた小林の携帯から、着信を告げるけたたましい歌声が流れてきた。

「うるせえよ、ソレ」

「ふおっ！ 尚美ちゃんからだあ〜！」

小林は慌てて携帯を耳にあて、店のサンダルを履いて外へと出ていく。

「今？ 全然平気〜！」

テンションの高い声に、思わず2人で顔を見合わせて笑っていた。

「どんな子なんだ？ 尚美ちゃんって」

「……悪いけど、あんまり覚えてないんだよな。でもすっかりした大人っぽい子だった気がする」

「小林にはそういうタイプが似合うのかもな。前の奥さんみたいな、幼いというか可愛い系は合わない気がしてたよ」

焼酎のおかわりを注文しながら、平岡がそう言った。

「……じゃなくて！」

つい、平岡のペースに流されていた。

「お前、美雪に余計なこと言っただろ」

「余計なことって？」

「……麻友のこと」

麻友は平岡の妻であり、大輔と平岡の高校時代の同級生でもある。

「元気か？麻友」

「ああ、4か月入って、ようやくつわりが落ち着いたみたいだ」

「そうか」

避けていた訳ではないが、しばらく麻友とは会っていない。

「もちろん、仕事は辞めたんだろ？」

「立ち仕事な上に力仕事だからな……辞めたくなかったみたいだけど、諦めてもらった」

平岡が小さくため息をついた。

「俺……お前に、ずっと謝らなきゃいけないと思ってたんだよ」

「何言ってるんだ？」

軽く笑い飛ばさそうと思ったが、平岡の真剣な眼差しに口をつぐんだ。

「あの時……本当に、お前には悪いことをしたって、ずっと思ってたんだ」

ぼつりと平岡が呟いた。

平岡と麻友とは、高校の時からよく三人でつるんでいた。

グループ学習が一緒になったのがきっかけで、三人にこれといった共通点はなかったけれど、ウマが合ったのだと思う。

いつの間にか三人一緒にいることが当たり前になっていき、それと同時に明るく前向きな麻友に魅かれていった。

視線の先が同じだったから、平岡が自分と同じく麻友に好意を寄せていることにはすぐ気付いた。

本当に、好きだと思っていた。

だからお互い、軽はずみに手は出せなかった。
三人の微妙なバランスが崩れるのが、怖かったのかもしれない。

大輔と平岡が北海道を出て偶然にも同じ大学を第一志望に決めた頃、麻友は大学に行かず外国へ行くと言いだした。

「本気で勉強したいから」

実家がケーキ屋を営んでいる麻友は、日本の製菓専門学校に進むのではなく、外国で勉強をしようと張り張った。

中学の時に家族で訪れたフランスで食べたケーキが、どうしても忘れられないのだと言う。

並々ならぬ決意の前では、担任の教師はおろか、大輔も平岡もどうしようもなかった。

ただ、がんばれと背中を押すことしか。

“アイツが自分で帰ってくるまで、俺たちは見守ってやろう”

二人でそう誓い合ったはずだったのに

大学3年の夏、何も言わずに平岡は麻友の元へと旅立っていた。

大輔は、何も知らなかった。

大学の卒業式の時、麻友が目の前に現れた時には心底驚いた。

フランスでの修行が終わって帰ってきたのだと思い、本当に嬉しかった。

そして、懐かしかった。

高校を卒業したときよりも、ずっと長い髪。

凜とした表情。

その顔は、この4年間での成長を容易に想像させていた。

“綺麗になつたな”

そんな当たり前の誉め言葉が喉の奥で止まってしまったのは、当たり前のように麻友が平岡の腕を取ったからだだった。

「いつ……帰ってきたんだ？」

わずかに、自分の声が掠れているような気がした。

「一昨日。大輔、卒業おめでとう」

一昨日。

仲間うちでの飲み会に、平岡が顔を出さなかったことを咄嗟に思い出した。

自分の顔に、きっと戸惑いの表情が浮かんだのだろう。

平岡がわずかに大輔から視線を逸らした。

「勉強、終わったのか？」

「うん。春から、こっちで働かせてもらう予定」

目をくりくりとさせながら、まぶしいくらいの笑顔で麻友が言った。

「聞いてるんでしょ？」

「……何が？」

「私たち、もうすぐ結婚するの」

平岡の腕を取って微笑むまるで花のような笑顔に、大輔はただひきつったような笑いを浮かべるしかなかった。

「抜け駆けみたいな卑怯なことをして……ずっと謝ろうとは思って
いたんだ」

項垂れるようにして、平岡がさらに言葉を続けた。

「何言ってるんだよ、今さら」

「今だから、だよ。ずっと……言いたくても言えなかったんだ」

肘をつき、顔を抱えるように下を向きながら平岡が言った。

「お前が、まだ麻友を好きだったら……。そう思うと怖くて」

何も言わずに、話の続きを待った。

「知ってた？ 高校ん時は、麻友、お前のこと好きだったんだぞ」

平岡の言葉に、目が丸くする。

「……全然知らなかった」

大輔は高校時代から割とモテる方で、ちょっとしたでも可愛い子から告白されると気軽に付き合っていた。

その度に麻友は、“こんなかい男はやだ！”といつも言っていたのに。

「だから……お前を誘うのが怖くて、一人でフランスまで会いに行つたんだ」

運ばれてきた焼酎に、平岡は静かに口をつける。

「お前との約束を破つてでも、俺は麻友に会いたかった」

「……」

「今でもたまに不安になる。あの時会いに行つたのが、俺じゃなくて大輔だったら、麻友は……って」

何も言えず、つられるように自分もビールを口に含んだ。ふと、自分は本当に麻友を好きだったのかと考えていた。

確かに急に二人から婚約を報告された時には、置いて行かれたような喪失感があった。

少しだけ、裏切られたような気持ちがあったのも否めない。

でも

自分は大学生生活を、それなりに満喫していたのだ。

たびたび飲みに出かけ、夜の街に遊びに行き、それ以外にも男同士でリュックを背負って旅行に行ったりもした。

彼女も何人もできた。

でも平岡は違った。

いつも、どこか淋しげで、いないはずの麻友の姿を追っていた。

大学4年間で、言い寄られることはたくさんあったはずなのに、彼女を作ることもなかった。

想いの差は、歴然だ。

「お前がどう思つかは勝手だけど、俺を巻き込むのはやめてくれ」
思わずぶっきらばうな言葉が口をついて出ていた。

「これ以上美雪に余計なことといって、不安にさせないでくれよ。まだ八タチの初心者なんだから」

そう言って、にやつと笑ってみせる。

これは、ある意味本心でもある。

「大輔、でも」

「俺は……奪われたなんて思ってねえよ」

話を区切るようにそう続けた。

「お前の方が、それだけ麻友のことを見てたってことだよ。俺は会いに行こうなんて考えたこともなかった」

いや、考えただけならある。

でも、言葉もろくに通じるとは思えない国に、一人で行くほどの勇氣や情熱がなかったのだ。

「だから……麻友だってお前を選んだんだよ」

「……ありがとう、大輔」

「俺に変な遠慮してないで、麻友と子供を幸せにしてやれよ」

にこつと笑って、テーブルに置かれたままに平岡のグラス自分のジ
ヨッキをぶつける。

カチン、と軽やかな音が響き、2人で顔を見合わせて笑う。

二人の結婚以来、少しだけお互いの心に残っていたわだかまりが、
グラスの氷とともに溶けていくようだった。

（美雪に、感謝しなくちゃいけないのかもな）

そう言えば、“メールしてもいいですか？”とやってたわりに、来
たのは『実家つきました』の1行だけだった。
あまりにも素っ気ない。

ふいに、美雪の声が聞きたくなくなった。

第52話 男たちの夜・2

「……お前、美雪ちゃんと本気で付き合ってくんだな」

「あ？ 最初からそう言ってただろ」

あまりに平岡がしみじみとした口調で言うので、不思議に思いながらそう返す。

「いや……俺、美雪ちゃんからお前らの約束のこと聞いてたからさ」

「は？」

「本当は、美雪ちゃんに頼まれて彼氏のフリしてただけなんだろう？」

その言葉に、一瞬ひるむ。

「お前……そんなことまで美雪から聞き出してたのか？」

「人聞きが悪いな。相談にのったんだよ」

そんなことまで、美雪が打ち明けてたとは思わなかった。きつと、麻友のことを聞いたときに美雪が言ったのだろう。まるで弱みを握られたような気持ちだ。

「相談ってなんだよ」

「教えない」

にやりと笑う平岡に、何故かいらつく。

「俺は別に……最初から“彼氏のフリ”で終わるつもりはなかったよ」

「だったらきちんと言ってあげればよかったのに」

「さすが、恋愛に前向きなヤツの意見だな」

二人の関係を知られていた悔しさも手伝って、思わず嫌味が口をつく。

「美雪ちゃん、大輔は優しいから彼氏のフリを引き受けてくれてるだけだって言ってたぞ」

「……………」

美雪は、どんな気持ちでその言葉を平岡に伝えたのだろう。そう思うと、少しだけ胸が痛んだ。

「まあでも、ちゃんと付き合うことになったんなら、いいんだけどさ」

平岡の言葉になんと答えていかかわからず、黙ったままジョッキに口をつける。

しかし気づけばビールは入っていないなくて、そのままコトリとテーブルに置いた。

「すみません、生ひとつ」

通りかかった店員に声をかけた。

「ちよつとトイレ。小林の様子も見てくるよ」

平岡が静かに席を立った。

急に一人で取り残され、手持ちぶさたで無意識に携帯を手に取る。

『miyuki』

携帯のアドレスを表示させて、しばし考え込む。

いきなり電話をしてもよかったが、何故だかそれを躊躇する自分がいた。

“何してる？”

結局、様子を伺うようなメールを送信してしまうあたり、少しだけ“らしくない”と思う。

ふうつとため息をついて携帯をテーブルに置こうとしたら、すぐにマナーモードの携帯が震えた。

『部屋でテレビ見てました。どうかしましたか？』

すぐに返ってきたメールに嬉しくなりながらも、何もなければメールをしてはいけないのか、というなんだか訳のわからない感情がわく。

考える暇もなく、気づけば通話ボタンを押していた。

プルルルルル……

耳の奥で響く呼び出し音が、少しだけ大輔を緊張させる。

『も、もしもし?』

3コール目で、ようやく美雪が電話に出た。

メールが来たということは、すぐそばに携帯はあったはずなのに。携帯を手に緊張する美雪が目に見えるようで、思わず笑みが浮かぶ。

「ようっ」

『ど、どうしたんですか?』

「用がなきゃ、かけたらダメなのか?」

『いいえ! そういう訳じゃ……』

うろたえる様子が携帯越しに伝わってくる。

あまりいじめてはいけないとは思っただけけど、ついからかいたくなくなってしまっ。

『大輔さんは、何してたんですか? なんか周りが騒がしいですけど……』

「あー。平岡と小林と飲みに来てる」

『えっ、また今日も飲みに行ったんですか?』

「しょうがないだろ。お前がいないんだから」

少し酔いもまわっているせいか、甘えたような言葉が出る。

『そ、そういえば……お母さんが、お菓子ありがとございますっ
て』

話題を逸らすように美雪が言った。

まだまだ、甘い雰囲気には慣れていないらしい。

「そう。なんて言ったの？」

『え？ あ……ちゃんと、か、彼氏からって言いました』

美雪の語尾が小さくなる。

「へえ、ちゃんと言えたんだ」

『それくらい言えます！』

むきになる様子がおかしくて、くすくすと声をおさえて笑う。

「俺からも、“おせち美味しかったです”って伝えておいて」

『え……あの、言えたら……言います』

「ちゃんと言えよ」

念を押すようにそう言うと、携帯の向こうで美雪が黙りこんだ。

「……どうした？」

『だって……夕方にお菓子を渡した途端いっぱい質問責めにあっちやあって、なんとか誤魔化してさっきようやく部屋に逃げてきたんで

す。もー、本当しつこくて』

「かわいい娘に初めて彼氏が出来たんだから、聞きたくて当然だろ」

『そりゃ、そうなのかもしれないですけど……』

「話せばいいだろ」

『え?』

「ちゃんと話せよ」

『……はい』

わずかな間のあとに、控えめな、小さな声が聞こえてきた。

『あの』

「なに?」

『い、いえ……やっぱり……』

「言いかけたんなら言えよ」

『……』

電話の向こうで、躊躇する様子が伺える。

何事かと、その緊張がこちらにまでうつりそつだ。

「……どうした?」

声を潜めて低く呟いたら、やっと美雪が思い切ったように言葉を続けた。

『あの、大輔さんの、電話の声って、かっこいいなって思って……』

ふいに言われた言葉に、柄にもなくドキっとする自分がいた。

美雪のこういうところに、正直弱い。

「そりゃ……どうも」

駆け引きなしの率直な言葉だからこそ、うまく返すことができない。美雪の言葉は、いつもそつだ。

まっすぐに、自分へと投げかけられる。

その素直さゆえに、誤魔化しがきかない。

「……美雪？」

『はい？』

「電話でお前の声を聞くのも、悪くはないけど……やっぱり会いたいな」

つい、大輔も本音が漏れた。

『そつ……それ……反則です……』

あきらかに動揺する様子が伝わってきた。

そんなスレてない反応が、大輔にとっては新鮮にうつる。

もっと話していたい　そう思っているのに、向こうから小林と平

岡がこちらへと戻ってくるのが見えた。

「悪い、こっちからかけといてあれだけど……もう切るわ」

『え、どうしたんですか？』

「いや、ちょっと」

「大輔！もしかして美雪ちゃんと！？」

大輔を携帯を耳にあてているのを見て、小林が目を輝かせた。

「またかけるかもしれないけど、眠たかったら寝ていいから。じゃ」

小林が隣に急いで座ったのと、大輔の方から一方的に携帯を切ったのは、ほぼ同時だった。

「なーんで切るんだよー！」

その声を荒げる小林を無視して、いつの間にか運ばれてきていたビールをぐびぐびと飲む。

「アホ。お前と電話で話なんかさせねーよ」

「あれ、大輔ってそんなタイプだったっけ？」

何故か嬉しそうに平岡が笑っているが、気にはしていられない。

「小林こそ、随分電話長かったな」

「まあね〜 俺、今年はいい年になるかも」
すっかり上機嫌のようだ。

「大輔！ 今度グループデートしようぜ！」

「……イヤだ」

「なんで!?!」

「グループデートなんかする時間があったら、二人で会う」

「うわっ！ いいよ、美雪ちゃんを誘って来てもらおうようにするか
ら！」

ムキになる小林に、思わずぷつと吹き出した。

「お前、必死だなあ〜」

「そりゃそうだよ。俺、一回失敗してるんだから」

去年、小林は3年間の結婚生活にピリオドを打っている。

「ああ……俺の“ちーちゃん”、元気かなあ……」

小林がしんみりと呟きながら、ぬるくなったチューハイをチビリと飲んだ。

二人の間に子供はいなかったが、可愛がっていたタイプドールを奪われたのが相当辛かったらしい。

「まあ……とりあえず、今年はみんないい年になるといいな」

一番落ち着いている平岡が、そう言った。

一人は新しい家族が増える予定で、一人は本当に好きな彼女ができ、一人は新しい恋が始まった。

28歳というのは、まだ若いような、そうでもないような、そんな年齢なのだろう。

「今年はどうとう俺らも30代に王手だもんなあ〜」

小林がしみじみと言った言葉に、ハッと重要なことを思い出した。

「……小林」

「ん？ どうした？」

メニュー表を見ながら、小林が気のない返事をする。

「尚美ちゃんに、もう1回電話して」

「は？ 急になんなんだよ？」

「美雪の誕生日、いつなのか聞いて」

「はっ？ お前、彼女の誕生日も知らないの？」

「……まだ付き合っただけだよ。早生まれだっていうのは、聞いてただけだ」

「本人に聞けよ！」

先ほどの仕返しとばかりに、小林がイヤな顔をする。

「まあまあ、小林、聞いてやれよ。また尚美ちゃんに電話できるんだし」

大輔に助け舟をだすかのように、平岡が会話に入ってきた。

「俺、さっき最高にかっこつけて電話切ったのに……」

「キャラじゃないってことだな。早くかける」

大輔の強い口調にブツブツと文句を言いながらも、小林は若干嬉しそうに携帯を開いた。

「あ、尚美ちゃん？ ごめんね、しつこくて……大輔が美雪ちゃんにベタぼれでさあ」

いらぬことをベラベラと話すのを、ぐっところえて会話の続きを待つ。

「美雪ちゃんの誕生日ってわかる？ 本人に聞けないんだって」

あまりに余計なことばかり話すので、ついにこらえきれず軽く脇を小突く。

「うん、ごめんね……あ、1月……24日ね。……うん、わかった！ ありがとう」

咄嗟に携帯を開き、カレンダーを確認する。
運がいい。土曜日だ。

「じゃあ、ホントありがとう！ またねー」

小林が携帯を切った。

「聞こえた？ 1月24日だって」

「うん。サンキュ」

素直にお礼を言うと、小林はにかつと笑った。
なんだかんだ言っても、気のいい頼れる友人だ。

「すぐだなー」

焼酎を飲みながら、のんびりとした口調で平岡が言った。

「土曜日じゃん」

大輔と同じように、携帯を開いてカレンダーを確認した小林が言う。

「そう……だな」

美雪にとっては、彼氏が出来てからの初めての誕生日に違いない。

（さて、どうすっかな……）

自然と、顔がにやけてくるのを止められなかった。

「俺明日仕事だし、この辺で帰るかな」

0時まであと数分と迫ったところで、突然小林が言った。

結局、小林は特に言いたいことや相談したい事がある訳でもなく、ただ尚美との関係を誰かに話したかっただけのようだった。

「日曜日なのか？」

「今日で3が日は終わりだからなあ」

ふああつと腕を大きく上に伸ばしながら、軽く欠伸をする。

システムエンジニアの小林は現在大きな仕事を抱えているらしく、土日祝と関係なく働きづめらしい。

3が日に休みが取れただけでも、奇跡のようなものだと言っていた。

「美雪ちゃんに、尚美ちゃんのこと色々聞いといてな！」

(俺の方こそ、尚美ちゃんとやらに美雪のことを色々聞いてほしい)

もう少しで口に出しそうになるのを、ぐっとこらえる。

「まあ……考えとく」

「冷てえな」

唇をとがらせて小林が非難の目を大輔に向けたが、無愛想な顔でビールを飲んだ。

平岡だけが、何かを察したようににやにやと笑っていた。伝票を見て金額を確認した小林が、きつちり三分の一分のお金を伝票の上に置いた。

「じゃ、また！ 今日はあるがとな！ また飲もうぜ」

軽やかにコートを羽織り、上機嫌で大輔たちに背を向けて店を出て行った。

騒がしい小林が去ると、途端に静かになった気がする。

「これからどうする？」

「俺？ ー明日はまだ休みだけど……あんまり麻友を一人にするのも不安だから、もう少ししたら帰るかな」

大輔が尋ねると、名残押しそうに平岡が言った。

「そうか」

「今度、美雪ちゃん連れて遊びに来いよ。麻友も会いたがってる」

平岡も麻友も、今は大切な友人だ。できればそうしたい。

ただ、過去のこととはいえ、麻友と平岡と自分の微妙な関係を知った美雪が、果たしてついてきてくれるだろうか。それを思うと、軽はずみに返事はできなかった。

「考えとく」

「お前、そればっかだな」

平岡が苦笑した。

「大輔が思ってるより美雪ちゃんはしっかりしてると思うし、お前のことを好きだと思っぞ」

「……知ってる」

はははつと平岡が笑った。

なんだか赤くなってる気がして、左手でガシガシと熱くなった首元を掻いた。

「じゃあ、また」

「ああ。麻友によろしく」

会計を済ませて店の外に出たあと、あっさりと別れを告げくると背を向けた。

男同士の別れなんて、こんなものだ。

しかし、駅に向かって数歩歩きだしたとき、

「大輔！」

ふいに平岡に呼び止められて、振り返った。

「なんだ？」

「聞くの忘れてた」

そう言いながら、なんだか顔を緩ませながら小走りで平岡が近づいてきた。

「大輔、あの日……」

「は？」

「あの日だよ。お前がしこたま酔っぱらって……美雪ちゃんが連れて帰ってくれた日！」

触れられたくないところに触れてきやがった。

思わず表情がぐっとキツくなるのが自分でもわかる。

「そ、そんな顔すんなよ」

大輔の無愛想な顔など見慣れてるはずの平岡ですら、少し怯んだように口ごもる。

ひどい顔をしてるのだろう。

だがそんなことはどうでもいい。

「お前……美雪に余計なこと言うなよ」

睨みをきかせて低い声でそう言うと、平岡が途端ににやっと口角を上げた。

「やっぱり凶星か」

「……」

「風邪気味だっていうから、あんまり飲むなって俺は散々言ったの

にさあ……」

確かに、あの日は少し風邪気味で薬を飲んでいた。飲みに行くには、適していない体調だったことは認める。それでも飲まずにいられなかったのは

「美雪ちゃん、なんだろ？」

思わず無言で平岡を睨みつける。

「平岡、本・当・に、美雪に余計なこと言つなよ」

平岡は美雪のメールアドレスはおろか、携帯の番号も知っている。そのことが余計に大輔を焦らせていた。

「なんでだよ？ 美雪ちゃん知りたがってたぞ」

「……知ってる」

「大輔、それを言ったからって、別に美雪ちゃんはひけらかしたり優位に立ったりとかは……」

「あー！ いいんだよ！」

平岡の言葉を無理矢理打ちきる。

「そのうち……言つよ」

仕方なくそうは言ったものの、自ら美雪に告げる気などさらさらなかった。

それをうつす平岡だつてわかつているに違いない。
ぼん、と軽く大輔の肩を優しく叩いた。

「まあ、俺はお前らの幸せを祈っているよ」

何が幸せだ。

思わずふんと鼻を鳴らしたが、悪い気はしなかった。

「じゃあ本当に、またな」

軽く手を上げて、平岡が大輔に背を向けた。

はあっと軽いため息をついた後に、大輔も駅へと歩き始めた。

第53話 残業・1

電車に揺られ、ぼんやりと車窓を眺める。

昨日は、隣に美雪がいた。

その小さな身体にもたれることは、大輔の想像以上に気持ちよかった。

抱き締めればすっぽりと包んでしまえそうに小さいのに、何故かあの身体にもたれると不思議なくらいの安心感があった。

あれが 母性ってやつか？

8歳も年下の美雪に甘えなくなる時があるなんて、絶対に言えないが。

自分を見上げる美雪の不安な目を思い出して、少しだけ胸がうずく。

あの目を見ると、唇を寄せたくなる。美雪の不安を、丸ごと飲み込みたくて。

いつから、自分はこんなに美雪のことを想うようになってしまったのだろう？

昨日の電車内のやりとりを思い出すと、思い出し笑いが浮かびそうになる。

向かい側の座席に座る女の子二人の視線を感じ、少し顔をしかめて目を閉じた。

逆ナンには慣れていているが、話しかけられては面倒だ。

今は、想いにひたっていたい。

いつから、こんなに美雪が自分の中に巣食うようになったんだろう

同じ部署で働くようになって、美雪との距離は全く埋まることはなかった。

それは、大輔だけではない。

情報課はもちろん、他の部署の人間だって同じだった。

美雪に愛想がない訳ではない。

その証拠に、親子ほどに年の離れた課長とはそれなりにコミュニケーションがとれているようだ。

教育係の成田とも、仲がいい様子が伺える。

しかし、他の男性社員とは、まるで打ちとけようとする様子がなかった。

仕事で必要とされる会話以外、あまり雑談には混じらない。

むしろ、避けてるとすら言ってもいいくらいだ。

大輔にとってはどうでもいい問題だったが、他の男性社員にとってはそれも言えないらしかった。

「主任、俺、藤崎さんに嫌われてるんっすかね？」

美雪と成田がそろって席をはずしている時、情けない声で山田が言った。

「どうしてだ？」

「だって……全然話してくれないんですよ。話かけても『はあ……』とか『ええ……』とかばっかりで」

ボールペンでコンコンとおでこをつつきながら、わざとらしいため息をつく。

周りの男性社員も、山田の話を聞きながらウンウンと頷いていた。

「別にお前だけじゃないだろ。俺だって同じだ」

「えっ！ 主任も藤崎さん狙ってるんですか!？」

「アホか。そういう意味じゃねえよ」

目線をパソコンに戻し、山田の顔も見ずに答える。

最初の新人研修で感じたように、やはり美雪は男性が苦手のようにだった。

しかも、同世代の男性が特に苦手らしい。

「男嫌いって噂、本当っぽいですよねえ……」

「そんな噂が流れてるのか？」

「そうみたいです。他の課のやつに言われました。狙ってたやつ、少なくともないと思うんですけどねー」

営業課の盛永が“結構評判なんだぜ？”と言っていたのは、あなたが嘘ではないようだ。

そうだとしたら、自分の知らないところで嫌な思いをしているのかもしれない。

急にそんな気持ちかわいてきた。

「戻りました」

その時、明るい声が響き、成田と美雪が連れだつてフロアに戻ってきていた。

「ん？ どしたんですか？」

直前まで美雪の話をしていたことで、皆が沈黙して二人に注目してしまい、その少しおかしい雰囲気成田が察知していた。相変わらず、カンがいい。

「なんでもない。仕事に戻れ」

「あつ、俺、営業から資料もらつてきまーす」

そそくさと山田が退散する様子を、成田と美雪だけがきょとんとした顔で見送っていた。

532

「すみません、今日どうしてもはずせない用事があつて……」

就業時間が過ぎちらほらと社員が帰り始めた頃、成田が大輔のデスクに来た。

「ああ。帰っていいぞ」

素っ気なくそう言つて自分の仕事を続けようとしたが、成田が大輔のデスクから去る気配がない。おかしく思い顔を上げる。

「どつした？」

「あの……明日までのデータ入力、まだ終わってないんです。量は、そんなに無いんですけど」

そう言いながら、成田がちらりと美雪に目をやる。

自分の話をされているとは思っていないのか、美雪はパソコンのモニターに集中している。

「藤崎にやらせてるのか？」

「はい。彼女1人でも、充分に扱える量だと思いますし」

「そうだな。成田がまかせていいと思うなら、それでいい」

そんなに時間がかかる仕事でもないし、美雪一人にやらせるのも仕事のステップアップとしては必要だろう。

大輔がそう答えたことに、成田はほっとした表情を見せた。

「じゃあ、主任、美雪ちゃんのことお願いします！」

「俺もまだ帰るつもりはないから。藤崎が終わったらチェックしてくよ」

「違いますよ」

成田が急に声を潜めた。

「私がいなくなると、声をかけたい人も多いと思うんで。その辺、

ちゃんとフォローしてくださいねっ」

「ああ、そういうことが」

あっけらかんとしているが、成田が周りの男性社員たちの様子に気付いていない訳などなかった。

「まあ……一応引き受ける」

「頼みますよ。では、失礼します！」

にっこりと笑って大輔のデスクから引き上げると、成田が帰り支度を始めた。

「ごめんね、美雪ちゃんに押しつけちゃって……」

「大丈夫です！」

美雪がにっこりと笑って成田に答える。

(なんだ、成田相手だとあんな笑顔も見せるんだな……)

ふと仕事の手を休めて、成田と美雪を見つめていた。

「全部終わったら、主任にチェックしてもらってね」

「えっ！？ 主任にですか!？」

何故か驚愕した表情を浮かべ、美雪がちらりとこちらを見る。ばちっと視線が合うと、美雪が慌てて下を向いた。

「藤崎……それはどういう反応だ？」

つい不満が口をつく。

「えっ！ いえ、そ、そんな、深い意味は……」

もごもごと口ごもり、小さな身体を一層縮こませている。

「最終的なチェックはどうせ俺なんだ。わかったら早くやれ」

「はっはい！」

慌てたようにパソコンに向かった。

何故かその様子がおかしくて、口元を手で覆いこみ上げる笑いをこらえていた。

「主任……じゃあお願いします……美雪ちゃん、ごめんね……」

大輔のそんな様子など知らない成田が、申し訳なさそうにフロアを後にした。

一人、二人と退社していくなかで、パチパチと美雪のタイピングの音がフロアに響く。

集中すると、あまり周りが見えないタイプなのかもしれない。

なんとなく気になり美雪の様子を伺うが、まるでこちらを気にしない様子に、大輔も安心して自分の仕事に没頭していた。

「あれ！ 藤崎さん、一人で残業！？」

突然すつとんきょうな声を上げて山田がどこかから戻ってきた。そうだ、コイツがいたのを忘れていた。思わずちつと舌打ちをする。

「成田さんはどうしたの？」

「あ、あの……今日は、どうしても用事があるそうで……」

もじもじと下を見ながら、言いにくそうに返事をしている。

「そうなんだ。まだかかりそうなの？ 俺、手伝おうっか？」

「え、あの……」

はっきりしない態度に、何故だかイライラとした。

「山田」

静かに声をかけると、ひつと声を上げてゆっくりと山田が振りかえった。

「しゅ、主任……いたんすか」

「居て悪いか？ 随分暇そうだなあ」

そう言いながら目の前の資料の束丸めて、ぼんぼんと自分の肩を叩く。

「藤崎を手伝う余裕があるなら、俺の仕事を手伝ってもらおうか？」

「いっいえ……めっそもない……」

山田が慌てて美雪の側を離れ、あたふたと自分の机の周りを片付けた。

そして大輔の様子を伺うように、小さな声で言った。

「あの……藤崎さん、一人で大丈夫ですか？」

「どういう意味だ？」

「一人でやらせて、可哀そうじゃないですか」

「可哀そう？」

思わず顔がびくっと動く。

「藤本はもう充分一人でできる。いつまでも成田とセットじゃない」

「そ、それはそうですけど……」

「いつまでも新人扱いするな。用がないなら帰れ」

ぴしっと言ってパソコンに向かう。

黙りこんだ山田が、申し訳なさそうに鞆に手をかけた。

「お先に……失礼します。藤崎さんも……がんばってね」

ハイ、と答えた美雪の小さな声だけがフロアに響いた。

実力がある人間の仕事能力は上げてやらなければならない。
大輔が情報課にいるのは期間限定だ。

だから、例え新人であっても見込みがあるのならどんどん仕事は与えて、課全体の能力をアップしたい。
ふうつとため息をついた。

(山田も、もうちょっと落ち着いて仕事に取り組んでくれたら……)

「あの」

美雪の控えめな声がすぐ傍から聞こえて、驚いて顔を上げた。
いつの間にか財布を手に、大輔のデスクの側に立っている。

「……………どうした？」

「ちょっと……………缶コーヒー買ってきてもいいですか？」

「ああ」

「主任のも、よかったら買ってきましょうか？」

「いや、俺はいい」

カチカチとキーボードをタイプしながら、そっけなく返事をした。

「……………はい」

気のせいかな、少し残念そうな顔をした美雪が静かにフロアを後にした。

第54話 残業・2

遅い。

自動販売機に缶コーヒーを買いに行っただけなら、5分ほどで戻るはずだ。

だが、正確な時間はわからないが、15分は経過しているような気がした。

トイレに寄っているのかとも思ったが、それにしても遅すぎる。

大人なのだしそのうち戻るとも思ったのだが、

『ちゃんとフォローしてくださいね』

成田の言葉が頭に響いた。

今日は課長が出張で不在だったため、大輔自身も多くの仕事を抱えている。

しかし、面倒であっても頼まれた以上、一応様子は確かめなければならぬ。

仕方なく立ち上がり、パソコンにロックをかけてフロアを後にした。

自動販売機が並ぶ休憩コーナーが見えてきたころ、人の話し声が聞こえてきた。

男性の声に混じってボソボソと聞こえるのは美雪の声のような気がする。

ため息をつきながらも、歩みを速めた。

「俺さあ、今年の新人のなかでは藤崎さんがイチオシだっと思ってたんだ！話ができて嬉しいよ」

「……………あの……………はあ……………」

一人の男性社員を前に、壁においやられている美雪が見えた。緊張のためか、下に向けた顔がほんのり赤くなっている。

そんな美雪の様子は、迷惑というよりは恥じらいいに見えなくもない。大いに、相手の男を誤解させているようだ。

「一人で残業？ 何時くらいに終わるの？ よかったら親睦深めるために、どう？」

にやにやと美雪を見つめる社員は、名前はわからないが広報課だったと思う。

「え……………あの……………何時に終わるか、わからなくて……………」

断ろうとしているつもりなのだろうが、むしろ思わせぶりに見える。大輔だって普段の美雪の様子を知らなかったら、ただ照れているだけだと誤解するかもしれない。

どうするか一瞬迷った後、すたすたと自動販売機へと歩いていった。

チャリンチャリン

すました顔で小銭を入れると、気配に気付いた男性社員がこちらを振り返った。

「あつ……………松沢主任！」

自分の名前を呼ばれたのでちらりと目をやるが、大輔にはその社員の名前はわからない。

「……何やってる？」

「え？ あ？」

慌てたようにその社員が美雪から2歩後ずさった。

「急ぎの残業の最中だ。彼女に用があるなら俺を通してもらおうか？」

その声色の冷たさに、男性社員はびくつと身体を縮こませた。

「いえ、あの……失礼しました！ 藤崎さん、またね！」

そそくさと退散する後姿を見ながら、思いっきりコーヒーのボタンを押していた。

ガコン

落ちてきた缶コーヒーを手に取り、ちらりと美雪に目をやる。

「行くぞ」

一言声をかけてスタスタと歩きだすと、小走りで美雪がついてくるのがわかった。

『ガードが甘い』

そんな小言でも言っただけの気持ちだったが、自分とは関係ないと思えばその言葉を飲み込む。

「あの」

背中から声がかかる。

「なんだ？」

お礼でも言いたいのだろうか。

立ち止まり、首だけを動かし後ろを振り返った。

「あの、主任もやっぱりコーヒー飲みたかったですか？」

「……はあ？」

「言ってくだされれば、私、いつでも買いに行きましたのに」

呆れて美雪を見下ろす。

まさか、大輔が自分の様子を見に来たなどとは、露ほどにも思っていないらしい。

礼を言っただけだと思っていたわけではないが、その言葉には驚いた。

(……つつか、買いに行かせたらまたさっきみたいな目にあうだろうが)

やっぱり一言何か言ってやろうと思って、ふと美雪の手元に目があった。

ぎゅっと財布を握り締めた手が、微かに震えている気がする。

確かに先ほどの男性社員は、壁に美雪を追いやるほどの勢いだったが、それが震えるほどのことなのだろうか。

本当は、怖いのか？
ついまじまじと美雪の顔を見つめた。

「え？ あ？ 何か？」

きよとんとした顔で、首をかしげる。

多分、自分の置かれている状況がわかっていないのだろう。

「……部下をパシリに使ったりはしない」

そう言つて美雪にくるりと背を向けたが、なんだかもやもやとした
気持ちは晴れなかった。

余計な邪魔が入ったせいもあるのか、大輔が予想していたよりも美
雪の仕事が終わるのには時間がかかっていた。
何故だかこつちの仕事もはかどらない。

終電まではまだまだ余裕があるが、今日はもう帰した方がいい気が
していた。

「藤崎、もういいぞ。残りは俺がやる」

美雪のデスクの後ろに周り、進行状況を確認する。

「……ん？ 終わってるんじゃないか」

「あ、ハイ……最後の確認を、と思ひまして」

美雪が慌ててパソコンを操作し、ファイルを保存して共有フォルダ

へと移す。

「確認、お願いします」

「わかった」

自分のデスクに戻り、仕事を続ける。

ふと美雪に目をやると、手持ちぶさたな顔でちらちらと「ちらちら」を見ていた。

「どうした?」

「ミスがあったらいけないので……」

「今日はもういい。帰っていいぞ」

「……はい」

小さく返事をして、美雪は帰り支度を始めた。なんとなくしゅんとした態度に、ピンときた。こういうことのカンは、いい方だと自分では思っている。

(もしかして、俺が終わるのを待ってる?)

そう思った次の瞬間、美雪に声をかけていた。

「送ってくか?」

「え?」

ひどく驚いた顔に、こっちが戸惑う。

「あの、主任……電車ですよね？」

「今日は寄るところがあつたから車だ」

(なんだか俺が誘ってるみたいじゃないか)

調子がくるつ。

「いえ、大丈夫です。まだ電車ありますし」

予想外のきつぱりとした断りの言葉に、何故かむかついてきた。

さつきは別の課の人間に声をかけられたくらいでオドオドしていたくせに、自分に対してのその態度はなんなんだ。

なんだかイライラする。

「じゃあ帰れ」

思わず冷たくそう言つと

「でも……ミスがあつたらと思うと、落ち着かなくて」

しょんぼりとした顔で美雪が言った。

ただの責任感か……いや、いいことじゃないか。
ため息をついて、ふるふる頭をふる。

「もしミスがあつたら今日は俺が直す。いいから帰れ」

「あの……頭痛いんですか？」

「痛くない。いいから帰れ」

つい強くなった口調に、びくつと美雪が身体を縮こませる。

「あの……失礼します……すみませんでした」

ぴよこんと頭を下げ、美雪がフロアを出て行った。途端に、大輔しかいないフロアに静けさが襲う。

(俺は……何をやってるんだ？ 藤崎が謝ることではないだろ)

申し訳なさそうにしていた美雪の顔に、震える手をぎゅっと握りしめていた姿が重なる。

言いすぎた。

そう思って立ち上がると、急いでフロアの外に出た。

「わっ!」

廊下に出ようととして、何故だか引き返してきたらしい美雪とぶつかりそうになった。

「な、どうした?」

「あの、これ」

おずおずと差し出す手のひらに、二錠の薬がのっている。

「頭をぶっていたので……もしかして痛いのかなって……」

多分、自分のロッカーにでも取りに行っていたのだろう。
手に取ると、銀色のフィルムに“頭痛薬”の青い文字が見えた。

「……………ありがとう」

気づくと、素直に感謝の言葉が自分の口から出ていた。

「あと……………先ほどは、すみませんでした。勤務中なのに……………あの、立ち話してて」

大輔のイライラの原因が、自分にあると感じたのかもしれない。
だが、微妙に勘違いをしている。
違う、と言いかけてから、思い直して静かに口を開く。

「これからは……………気をつけろよ」

「はい」

神妙な面持ちで、美雪がコクリと頷いた。

「あの、主任どこへ？」

「総務課だ」

咄嗟に嘘をつく。

「では、お先に失礼します。最後までやれなくてすみません」

深々と頭を下げた後に、まっすぐに大輔を見つめてにこっと美雪が

微笑んだ。

ふい打ちだ。

恋に落ちる瞬間とやらがあるのならば、もしかして今、なのだろうか。

二錠の頭痛薬を手に、大輔は落ち着かない気持ちで、美雪の後姿を見送るはめになっていた。

ブーツブーツ

ポケットに入れた携帯のバイブで、ハッと目を覚ます。

どうやら、電車の中でついウトウトと眠ってしまったようだ。

少し焦った気持ちで窓の外に目をやるが、見慣れた風景が降車はまだまだ先だということを知らせてくれ、ホッと胸をなでおろす。

電車の中でつい眠ってしまうなんて、自分らしくない。

なんだかんだ言っても、大輔もここ数日寝不足気味だった。美雪のことは、笑えない。

ポケットから携帯を取り出してメールを確認する。

美雪からだった。

『今日はもう寝ますね。おやすみなさい』

“またかけるかもしれない”と告げて一方的に電話を切っていたことを、今さらのように思い出した。

もしかして、今までずっと待っていたのだろうか。

つい電話をかけたい衝動にかられたが、電車の中ではさすがにできない。

『今電車。ごめん、遅くなった。明日電話する。おやすみ』

送信のボタンを押してから、パチンと携帯を閉じる。

素っ気なかったかな、という気持ちがわくが、もうメールは送ってしまった。

(ホント……なんか調子くるうな)

ポケットに戻しかけた携帯が、手の中で震える。

きつと美雪だろうが、少し不思議に思っただけ携帯を開く。

『まだ、寝ません』

絵文字も顔文字もない、素っ気ないメールだったけれど、その一文にこめられた気持ちに胸がうずいた。

『わかった。降りたら電話する』

こんなに、電車が止まるのを待ちわびたことはないと思う。

ポケットに入れた携帯を弄びながら、自然と顔が緩むのを止められなかった。

改札口を出てから、携帯を取り出す。

“miyuki”

今度は、1コールも鳴らすことがなかった。

『もっもしもし?』

「なんで嘔むんだよ」

『だ、だって……』

くすくすと笑いながらも、この時間まで待っていてくれたことが、密かに嬉しくてたまらない。

『飲み会、どうでしたか?』

「ん? 別に……」

そう言いかけて、小林と尚美のことを思い出す。

「そういえば、小林がお前の友達に気があるみたいだった」

『え! 本当ですか?』

「嘘ついてどうするんだよ」

『いっいいえ、そういう意味じゃなくて……』

ひどく驚いた様子から、どうやら尚美とのことは知らなかったらしい。

『誰……ですか？』

「尚美ちゃん」

『えっ……』

携帯の向こうで、美雪が軽く絶句していた。

「そんなに驚くことか？」

『す、すみません……いい感じかも、とは思ったんですけど、まさか尚美が……と思って』

「別に付き合うことになった訳じゃないぞ」

『あ、そっか』

そう言った後に、くすくすと笑う声が聞こえる。

『でも……合ってるといえば合ってるのかも。尚美、しっかり者だし』

「そうみたいだな。“俺のナイチンゲール”って小林が言ってた」

その言葉に、こらえきれないというように美雪が吹き出した。

『あははっ……ナイチンゲールって!』

耳元で響く美雪の笑い声が、心地よくてつい耳をすませる。

『じっ、ごめんなさい……つい……』

大輔が声をひそめていたことに気付いたのか、慌てたように美雪が言った。

「いや」

楽しそうなその声を、聞いていたかっただけにすぎないのに、携帯を通しての会話が、少しもどかしかった。

「もう遅いから……そろそろ寝た方がいいんじゃないか?」

『あっハイ……そうですね……』

その声色が残念そうに聞こえるのが、自分の驕りではないと思いたい。

「実家に帰ってるときくらい、ゆっくり寝ろよ」

『はい。あの……電話くれて、ありがとうございました』

声を聞きたかったのは、自分の方だ。

美雪のその言葉に、ツンと胸の奥が刺激される。

「いや。俺が、かけたかっただけだから」

もっと何か美雪を安心させられるような気のきいた事を言いたいの
に、素っ気なくそう伝えるのがやっとだった。

「明日……何時頃に帰ってくるんだ？」

『え、あー……まだ決まってるなくて……』

少し言いにくそうに、美雪の言葉が詰まる。

『地元の友達と約束があつて……あと……もしかしたら、父親にう
ちまで送ってもらつかもしれなくて』

「なんで？　もしかして俺に牽制？」

思いもよらない事態に驚き、ついそんな言葉が口から出ていた。

『いいえ、なんか……仕事の都合で、こっちに来る予定だったみ
たいで。車で行くつもりだったから、どうせなら一泊うちに泊まる
うかなとか言い出して……』

どんなに遅い時間であろうと、帰ってくる時間には駅まで迎えに行
くつもりだった。

しかし、これでは明日は会えない確率が高い。
がっかりする気持ちはもちろんあるが、そんな態度は見せない。

「そうか。それじゃあ次に会うのは会社でだな」

『そう……ですね』

携帯越しに、軽く美雪のため息が聞こえてきた。

「いつでも会えるだろ」

『そうなんですけど……なんか夢みたいで、イマイチ信じられなくて』

可愛いことを言ってくれる。

多分、好きになったのは大輔が先なのに、美雪はそうは思っていないのだろう。

「……じゃあ、明後日の仕事、少し早めに来いよ」

『えっ？』

「仕事始めでやらなきゃいけないことも多いし、俺は元々早く行くつもりだったから」

照れ隠しに付け足した言葉が、なんとも言い訳くさい。

『いつ行きます！』

大輔が気遅れする様子など感じることもなく、勢いのいい返事が聞こえてきた。

思わず笑みが浮かぶ。

「元氣いいな」

『だって……少しでも早く会いたくて』

囁くような艶のある声が耳元で聞こえ、柄にもなく胸が高鳴った。

「うん……じゃあ、明後日の朝。会社で」

『はい！……じゃあ……おやすみなさい』

「ん、おやすみ」

静かに携帯を切った。

「俺も、会いたいよ」

携帯に向かってそう呟くと、コートのポケットにしまった。

第55話 邪魔モノその1

昨日の最後の正月休みは、特にすることがなくダラダラと過ぎた。唯一したことといえば、美雪の誕生日の計画を練ったことくらいだ。正直、片付けや家事は苦手だ。必要最低限の洗濯や料理などはするが、どうしてもすぐに部屋は散らかってしまう。

今の部屋の状態も、美雪が来たときに多少片付いたとはいえ、お世辞にも綺麗とはいえない。

家に連れてきたときには、テキパキと動く美雪に目を奪われたものだ。

仕事中でもそんなに手際が悪い訳ではないが、まだ新人ということもあり慣れない雰囲気はぬぐえない。

そんな美雪が、いきいきと家の中を動き回っている姿は新鮮でもあった。

(意外と家庭向きなのかもな……)

そんなことを考えて、車を運転しながらもつい顔がほころぶ。

長い休み明けの出勤は、いつもなら少し気が重い。

でも、今日ばかりは違う。

今日の帰りは…一緒に帰れるだろうか？

重役以外の社員は会社の駐車場を使えない。

一日パーキングに置くとお金もかかるが、それでも車で通勤することを選んだ。

自分で思っている以上に、もしかしたらハマってるのかもしれない。

フロアには案の定一番のりだった。

暖房がまだ充分にいきわたっていないらしく、肌寒い。

パソコンをつけてたまったメールをチェックし、資料を整理しながら軽く目を通す。
今日は課長と一緒に出席しなければならぬ会議もあり、仕事は山積みだ。

途中で買ってきた缶コーヒーを飲みながら、頭の中で軽く一日の予定をたてていた。

「おっ、おはようございます……」

足音に気付き目を上げると、タンブラーを片手に顔を赤らめた美雪がいた。

嬉しいような恥ずかしいような、そんな微妙な表情だ。

「ああ、おはよう」

パソコンの画面から目を離し、美雪に目を向ける。
会社だと、どうも態度が素っ気なくなってしまう。

「藤崎、資料室つきあってくれ」

デスクから立ち上がってそう告げた。

「はっはい！」

荷物をデスクに置いた美雪が、慌てて返事をした。

フロアを出て大股で歩く大輔の後ろに、パタパタという足音が続く。
振りかえりたい気持ちをこらえ、辿りついた資料室のドアを開けた。

「あの……?」

先に入るように促すと、不思議そうな顔で見つめてくる。

「いいから」

美雪に続いて、パターンとドアを閉める。

カチャ

ドアにロックをかけたことに気づき、美雪が振りかえった。

「あの……主任？」

“大輔”

会社だから遠慮して役職で呼んだのだろう。

それは充分にわかっていたが、つい訂正してしまう。

美雪の口から、自分の名を聞きたかったから。

「でっでも」

全部言い終わるより早く、キスで唇をふさいだ。唾液から、甘いコーヒーの味がする。

わざとゆっくりと唇を離しおでこをくつつけると、真っ赤な顔をしながら美雪が抗議の言葉を口にする。

「こっつ、こんなところで……何考えてるんですか？」

「こんな時間に誰も来ないだろ」

資料室は各課から離れたところにあり、通勤時にわざわざこの前

を通る社員はいないに等しい。
それを知っていて連れてきたのだが、まだ1年目の美雪にはわからないらしい。
しきりに廊下を気にする様子に、嗜虐心がそそられる。
そつと美雪の胸元に光るネックレスに手を伸ばす。
手が冷たかっただろうか。
美雪がびくりと身体を震わせた。

「あつあの……」

「時間、ないから」

何かを言いたそうな美雪を無視して、今度は深く唇を重ねた。

「おはようございますーす」

「あけましておめでとございますー！」

社員が続々と出勤してくる中、飄々とした顔でフロアに戻り仕事を続けていた。

大輔より大分遅れて、美雪がフロアに戻ってきた。

「おはようございます……」

上気した顔を見られないように時間までにゆっくり戻ってこいと言ったのに、慌てたようにフロアに足を踏み入れた美雪の顔は、まだほんのり赤かった。

一瞬大輔に恨みがましい目を向けた後に、黙ってデスクにつく。その様子がおかしくて、ニヤニヤと口の端が上がりそうになるのをこらえるように口元を引き締めた。

「主任！」

気づくと山田がすぐ横に立っていた。

「どうした？」

その様子にただならないものを感じる。

「この前……藤崎さんを連れて帰ったの、どういことですかあ？」

周りを見渡し、声を潜めてそう言う。

この前？

訳がわからず山田の顔を見返す。

「大掃除の時ですよ！」

ああ、と言葉が漏れた。

大掃除の日、山田が美雪を誘っていたのを遮り、強引に美雪を連れ帰ったのだ。

色々ありすぎて、すっかり忘れていた。

「藤崎さんが主任の車に乗るの、見たっていう人もいるんですよ」

山田がちらちらと美雪を見ながら話すためだろつ。

大輔と山田のやりとりに気付いた美雪が、こちらを伺つように視線を送ってくる。

ため息をつき、ひとつ芝居をつつことにした。

「ああ……お前は気づいてなかったのか」

「え？ どういうことですか？」

眉をひそめながら、山田が大輔の顔をまじまじと見つめる。

「藤崎、具合悪いのに無理して大掃除に来てたんだぞ。だからああ言って送ってやったんだ」

我ながら、よくすぐにこんな嘘が出ると思う。

「そ、そうなんですか……？」

先ほどまでの勢いがシュルシュルとしぼみ、山田がバツの悪そうな顔をした。

「そう言われてみれば……お昼食べてる時に、なんかポーツとしてたかも……」

「送ってやるっていうのに断るから、無理矢理連れてったんだよ」

「そうだったんすか……」

あからさまにしょんぼりと肩を落とす山田に、少しだけ悪い気持ちもわいたが仕方ない。

「すみませんでした……俺、全然気づかなくて」

「いや、お前が謝ることじゃないよ」

「あの……」

今度は美雪が、申し訳なさにデスクの側に立っていた。

「私、何か……ミスでもありましたか？」

恐る恐る声をかける美雪に、山田が悲しそうに目を向けた。

「いや……ごめんね、藤崎さん」

「え？」

突然謝罪の言葉を向けられて、美雪が目を白黒とさせる。

「具合悪いなら悪いって、言ってくれたらよかったのに」

「あの、それはどういふ……？」

怪訝な顔をして、山田と大輔の顔を交互に見やる。

上手く切り抜けたと思ったのに、このままでは美雪自身がブチ壊しかねない。

フォローのために口を開こうとした瞬間、

「おはようございます！ お土産です〜！」

突然現れた成田が、割って入るかのように大輔のデスクにどんと菓子折りを置いた。

「おっ、おはようございます……」

その勢いにひるみながら、美雪だけが挨拶の言葉を口にする。

「大掃除に参加できなくてすみませんでした。これ、帰省したときのお土産です」

にっこりと笑いながら、大輔に菓子折りの一つを差し出す。

「ありがとうございます」

「はいこれは、山田さん」

「あ、どうも……」

「これは課長でー、これは美雪ちゃん」

ホイホイと手際よくお土産を配る姿に、圧倒される。意味ありげな微笑みなんだかひっかかるが、余計なことと言われない方がいいだろう。

「就業時間だ。仕事に戻れ」

「はいっ！」

冷たく大輔が言い放った一言に、山田が背筋をびしっと伸ばして慌ててデスクに戻った。

「会議に行ってくる」

そう言つて成田と美雪の横をすり抜けようとした時に、ニヤツと笑つた成田が大輔を横目で見上げた。

「美雪ちゃんのことば、まかせてくださいね」

「……っ」

小声ながらもハッキリと告げられた言葉は、大輔を怯ませるには充分だった。

「いつてらっしやいませ」

にこにこ不敵な笑みを浮かべる成田と、相変わらず怪訝な顔をしている美雪を残し、資料を手にフロアを後にした。

新年早々の会議は、予想よりも大幅に時間がかかった。

次年度に向けて大きなプロジェクトとして、社内全体に新しいシステムが導入されることを告げられたのだ。

その統括マネージャーとして、大輔が任命された。

前々から情報管理のセキュリティが甘いことを散々上に訴え続けていただけに、一瞬感動に似た気持ちが沸き起こる。

思わず隣に座る課長を見ると、ウンウンと大輔に向かって小さく頷いていた。

普段の業務もこなした上でのプロジェクトになるため、残業続きの日々になることは必至だ。

もしかして、大輔にとってはこれが情報課での最大の仕事になるかもしれない。

そんな予感に、興奮に似た感情がこみ上げた。

仕事はやりがいがあるし、課長や上の人間から頼りにされているのも充分にわかる。

それでも、美雪と過ごす時間がしばらく取れないことがほんの少し頭をかすめた。

昼休憩をはさみながらの会議が終わった頃には、日が落ち始めていた。

しばらくこんな日が続くかもしれないと思い、うーんと大きく伸びをしながら会議室を後にした。

まだまだ仕事が残っている。

「お先に失礼します」

ためらいがちにかけられた声に、ハッとパソコンの画面から顔を上げた。

少し不安そうな顔をした美雪が、こちらの様子を伺っている。

プロジェクトのスケジューリングに没頭してしまい、いつの間にか就業時間が過ぎ、社員もまばらになっていることに気付かなかった。

「ああ……お疲れ」

そう言って、目頭を押さえる様子を、美雪がじっと見ていた。

「……なんだ？」

「あの……」

キョロキョロと周りを見渡し、誰もこちらを見ていないことを確認してから声を潜めて言った。

「後で、メールします……」

「……わかった」

ペコリを頭を下げ、フロアを後にする美雪の後姿を、もどかしい気持ちで見送った。

あくまで今は、上司と部下だ。

二人の付き合いを隠すつもりはなかったが、美雪の性格を考えるとおおっぴらにするのは憚られた。

江藤沙希のようにいらぬ攻撃をする女性社員がいなくても限らないし、何より、彼女がそれを望んでいるのかわからないからだ。

会話が足りない。

そう思わずにはいられない。

ブツブツ

缶コーヒーでも買いに行こうと椅子から立ち上がった時、胸ポケットに入れていた携帯が震えた。

急いで携帯を開くと、立ち去ったばかりの美雪からメールが届いていた。

『成田さんに、大輔さんのことを話してもいいでしょうか？』

美雪がワザワザ話さなくても、成田が気づいていることは間違いないのに。

(こづいうところは、疎いんだな)

ふっと笑みが浮かぶ。

『お前が言いたいのなら、誰に言ってもいいよ。隠すつもりはないから』

送信してから自動販売機へ行こうとすると、すぐに返信のメールがきた。

『ありがとうございます。今日は遅くなりそうですか?』

少し考えてから、正直なメールを送る。

『ごめん。しばらくは残業が続くと思う』

ありのままに話すのが一番だろう。

2人きりで会えない寂しさともどかしさがよぎるが、どうしようもない。

仕事人間と周りに言われている自分が、まさか仕事を邪魔に思う日が来るとは……。

首をガシガシと掻きながら、フロアを後にした。

第56話 邪魔モノその2

「山田、このデータ目を通しておいて。あと各課のパソコンの配分台数、総務に確認しといてくれ」

「わかりました」

「課長、業者との打ち合わせに行ってきます」

「ああ、頼む」

コートを手にフロアを後にする。

ちらりと美雪に目をやるが、パソコンの画面を前に成田から指導を受けているようだ。

美雪とろくな会話もできないまま、一週間を終えようとしていた。課長とだったり他のメンバーとだったり、いつも終電ギリギリの残業が続いている。

新しいプロジェクトが始まり、忙しいのは責任者の大輔だけではない。

美雪も同じだ。

お互いがお互いに気を使っているのか、眠る前に送るメールは簡潔で、どうにももどかしい日々だった。

(今日……金曜日くらいは、少しは早く帰ろう)

まだまだ忙しい日々には変わりないけれど、週末くらいは少し早く帰ってもいいだろう。

会社の階段を小走りで下りながら、そう考えていた。

打ち合わせが終わって会社に戻ると、大輔の机には仕事の資料が山積みになっていた。

普段の仕事もおろそかにはできない。

提出された部下の仕事のチェックや承認をしながら、黙々と作業をこなす。

気づけば、他の課との打ち合わせに行っている課長をのぞくと誰もいなくなっていた。

美雪も、いつの間に帰ったのかわからない。

「よし、ひとまず終了つと……」

誰もいないフロアで、つい独り言が漏れた。

ふつつと軽いため息をつきながら、データを保存する。

終電にはまだ時間がある。

美雪は、もう家に着いているだろうか。

仕事に追われ大した変化のない一週間だったが、話したいことはたくさんある気がする。

時間は遅いが明日は休みだし、少し美雪の顔が見たい。

家に寄らせてもらおうか、それとも……

そんなことを考えながらパソコンを終了させ、帰り支度を始めてた。

「松沢くん、今日の仕事は終わったのか？」

「課長」

打ち合わせが終わったらしく、課長がファイルを抱えながらフロアに戻ってきていた。

「ひとまず今日のノルマは。まだまだ……やることは山積みですけ

どね」

「そうか。君には苦勞をかけるなあ」

デスクの上にきちんとファイルを並べ、課長にしては珍しく小さなため息をついた。

「ハードワークなのは、課長だって同じじゃないですか」

「いや、新システムの導入に関しては、君に丸投げしてるようなものだし」

帰るタイミングを失い、なんとなく机の上の資料やファイルを整理する。

「どうだ？ 軽く飯でも食べていかないか」

「えっ」

手が止まった。

「何か用事でもあったかな？」

「いえ。課長から誘っていただくの、珍しいなあと……」

課の誰もが認める愛妻家で、仕事が終わると直帰が常の課長が、自分を食事に誘ったことに驚いた。

どうしようか。

サラリーマンにとってこういう付き合いが大事なのは痛いほどわかっているが、正直疲れはピークだ。

何より、恋人になったはずの美雪と会社以外で全然接点がないというフラストレーションもたまっている。

この時間からでは、食事だけで終わるといふ訳にもいかないだろう。

「何か予定があつたのならいいんだが……少し、君にも話しておきたいことがあつて」

課長がそんな含みのある言い方をするのは珍しかった。何か、自分に大事な話があるのかもしれない。

ほんの少し迷つた末に、

「では、ご一緒させてください」

そう言つてぺこりと頭を下げていた。

またしても、邪魔が入ってしまった。

課長の運転する車で、会社から離れたところにある日本料理店へと案内された。

聞けば、課長の自宅から割と近いらしく、奥さんとよく訪れるらしい。

カウンターに並んで座りながら、自分がかかり空腹だったことに気付いた。

「君が来てくれるからもうすぐ二年だな。想像以上にがんばつてくれる。周りの評価も高いよ」

「ありがとうございます」

謙虚にそう言っつて、運ばれてきた生ビールに口をつける。
冷えたビールが喉を通りぬけるのがたまらない。
目の前に置かれたからりと上がった天ぷらに、勧められるがままに
箸をつける。

「……………うまいです」

「そうか」

課長が、嬉しそうににっこりと笑った。
あつという間に天ぷらの皿が空になり、今度は煮魚がカウンターに
並んだ。

若い頃は洋食が好きだったはずなのに、年を重ねることにこういう
和食が好みになっていく気がする。
ためらう事もなく、今度は煮魚に箸を差し込もうとした。

「部下のことは、どう見ている？」

唐突な質問に箸が止まり、咄嗟に美雪の顔が浮かんだ。

「どっ……とは？」

「松沢さんに鍛えられて……………山田くんあたりは大分実力がついてき
たと思うんだが」

仕事のことが。

当たり前前に、ほっと胸を撫で下ろす自分がいる。

「そうですね……………。山田はもうちょっと地に足をつけてくれたら」

「まあ性格もあるから、仕方ないだろうな」

課長は、ちびちびと本当に美味しそうに日本酒を飲む。
車の運転は、代行を呼ぶつもりらしい。

「成田は、想像以上ですね。部下を指導する力もあるし……このまま、仕事の幅を広げてがんばってほしいです」

うんうんと頷く課長を見ながら、なんだか妙な違和感を感じていた。他の部下たちの話をしながら、大輔の話をじっくりと聞いている課長を見ていると、その感情がさらにふくらむ。

「藤崎さんは、どうだ?」

「藤崎は……」

一呼吸おいて答える。

「がんばっていると思います。人づきあいが苦手なのが少し気にかかりますが……本人が持っているスキルは高いと思います」

「そうか」

満足そうに腕組をした課長が、大輔のための生ビールを追加で注文した。

「君には、本当に頑張ってもらっている」

「いえ……まだまだです」

申し訳ないと思いつつ、空腹には耐えられない。
話の合間を見ながら、目の前に置かれた料理を平らげていく。

「よく食べるなあ。仕事では本当に頼りになるが、君もまだまだ20代の青年なんだな」

課長はというと、刺身やおひたしをゆっくりとつまみながら、相変わらずチビリチビリと日本酒を口に行っている。

大輔の前にいくつもの空の皿が並んだ頃、ようやく一息ついた。

「すごく……うまかったです」

カウンター越しに、板前が嬉しそうに軽く頭を下げた。

(うちからそう遠くないし……今度美雪を連れてきてもいいかも)

もしかしたら課長夫妻と鉢合わせをしてしまうかもしれないけれど、別にそれでもいい。

課長に勧められるままに、運ばれてきた冷酒に口をつけた。

キンと冷えた日本酒は、さっぱりとしていて喉越しがよくて、いくらでも飲めてしまいそうだ。

飲みすぎないように気をつけようと、頭の片隅で考える。

「実は」

大輔が日本酒に口をつけるのを待っていたかのように、課長が口を開いた。

「まだ先の話だが……君に異動の話が来ている」

「…………え？」

小さなグラスを持った手が止まった。

「異動……ですか？」

「本当なら三年、もう一年うちの課にいてほしいところだけだな」

元々営業にいた大輔にとって、情報課は二年か三年の約束での配属だった。

とはいえ、新しいプロジェクトが持ち上がったこともあり、まさか二年でその話が出るとは思わなかった。

「君は営業でも期待されていたからな。君が抜けた後には、別の支社から情報専門の人物をなんとかまわしてくれるらしい」

そう言いながら、課長はぐくりと静かに冷酒を飲んだ。

つられたように大輔も口に含む。

（異動……か……）

咄嗟に返事が出来ず、しばし黙りこむ。

情報課に来たときから、期間限定の約束だった。

それは、その頃営業で順調に成績を伸ばしていた大輔を手放すのが惜しくて、当時の営業課長が人事に押しつけた約束だ。

だから、いつか異動になるのは当たり前なのに、このタイミングで話が出たことに少し戸惑いがあった。

まだまだ課長から教えてもらうことはたくさんある気がするし、部

下に教えなければならいことだっただけである。

それに、このタイミングで情報課を去るのは中途半端な気がした。

(どうして今……)

そう言おうとして、口をつぐんだ。

課長に言ったところでどうにもならないだろうし、それが会社の命ならば、仕方ない。

美雪と同じフロアで仕事ができなくなるのは少し残念でもあるが、同じ会社にいることは変わらない。

むしろ、別の課の方が周りの目を気にしなくていいかもしれない。

それでも、パソコンに向かう美雪の横顔を堂々と眺められる特等席を奪われるのは、ひどく寂しい気がした。

「異動は、やっぱり営業課ですよね？」

当然と思われるが一応そう口にしてみたところ、課長が微妙な顔をしたのがわかった。

(なんだ?)

大輔の心に、一抹の不安がよぎる。

「いや」

少しの間を置いて、きっぱりと課長が否定した。

「え……」

途端に頭の中が混乱した。

（営業以外って……今さら……広報とか？ まさか総務とか……）

そんな大輔の不安をくみとるかのように、課長がゆっくりと口を開いた。

「君に来てる異動の話は……本社での異動じゃない」

「というと」

「転勤だ。大阪支社に」

思いも寄らない事に、言葉が出ない。

口元に運ぼうとしていたグラスを、飲むことなくコトンとカウンタ―に置いた。

第57話 久しぶりの逢瀬

「驚くのは無理ない。だが、これは君にとって悪い話ではないと思う」

淡々と課長が話を続けている。

「営業課にいたところに……辻くんに世話になっただろ？ 彼からの打診だ」

「辻さんから……」

入社したばかりの頃、教育係としてお世話になったのが辻だった。数年一緒に仕事をした後、彼は希望を出して実家のある大阪へと転職になっていた。

“いつか、機会があればまた一緒に仕事をしよう”

そう言われて、柄にもなく目頭が熱くなったのを覚えている。大輔にとって、数少ない尊敬できる先輩だった。

「彼は大阪支社で営業課の課長に就いてるんだが……今、大阪の方はあんまり成績がよくなってね」

その噂は聞いたことがあった。

「辻さんがいても、ですか？」

「彼一人で営業をする訳じゃないから」

眉をしかめて、言いにくそうに課長が言う。

「ずっと大阪、という訳じゃない。それは辻くんもわかっていると思う。2、3年でできつと戻ってくることになるだろう」

また期間限定か。

思わずそう言いそうになる。

本当に、ちゃんとこちらに帰ってこられるのだろうか。

今、こうやって転勤の話が出ている自分には信じがたい。

「まだ正式な話ではないんだ。辻くんから営業の方に打診があったばかりだな。君が情報課に来たのを、知らなかったらしい」

今日、課長が打ち合わせと言って営業課に行っていたのは、少なからず自分のこともあったのだろう。

この忙しい時期に、と申し訳ない気持ちになった。

「そうですか……」

「12月の段階での君の調書には、異動に関しては“特に希望はない”と書かれていたと思うんだが」

大輔の会社では、年に一回転勤や異動に関する自分の希望を書いた調書を提出しなければならない。

その提出期限は11月末日で、当然美雪と付き合う前のことだ。

課長の言う通り、『特に希望なし』で提出していた。

「それは……そうですけど、いきなり大阪とは思っていなかったの
で」

言い訳がましく言ってはみたものの、その後の言葉が続かない。黙ってごくりと日本酒を流し込む。

「当然、断る権利もある。私だって、君を出したい訳じゃない」

「……」

「ただ、今大阪に行くことは、きっと君にもプラスになると思う」

「そつでしようか……」

「ひとまず、今月いっぱい考えてみるといい。そのうち辻くんからも直接連絡があるだろう」

あの人と直接話したら、なおさら断れる気がしない。

「何か、ひっかかることでもあったかな？」

一瞬、美雪のことを話そうかと心が揺れた。だが、今週末ともに美雪と会話をしていないことが、大輔の気持ちを鈍らせていた。

「いえ」

きっぱりとそう告げて、軽く頭を振った。

「突然だったもので、考えがまとまらないだけです」

今この状況で、美雪とのことを課長に話してどうなる。

仕事と彼女とを、結びつけて考えてはいけない気がした。

「確か、君は引越したばかりだったなあ」

「そうだ。」

年末にやっとの思いで見つけたあのマンション、二年契約だったのに……

大輔の気持ちを知ってか知らずか、課長がぼんぼんと励ますように背中を叩いた。

「本当に、送らなくていいのか？」

代行業者に車のキーを渡しながら課長が言った。

「はい。ここからだと言ったと近いんです。課長の家からだと言ったと反対方向になりますし……」

丁寧にそう答える。

一人で頭を整理したい気持ちもあった。

それがわかるのか、課長も強引に誘うようなことはなかった。

「そうか。松沢くん、今日の話は課のみんなにはまだ……」

「わかっています」

そう言って軽く笑って見せた。

「君には本当にがんばってもらっている。できれば、君の望む最高

の形でうちの課から出してやりたかった」

少し淋しそうに課長が言った。

「私の力不足だな」

「そんな、とんでもないです！」

慌てて手を振る。

「ゆっくり考えてくれ。断ってくれても、悪いようにはしないから」

「……ありがとうございます」

課長の心遣いが胸にせまり、深々と頭を下げた。

最後に大輔の方に優しく手を置いた後、課長は自分の車の後部座席へと乗り込んだ。

二台の車が夜の街から消えていくのを、ぼんやりと見送っていた。

はーっと長い息が漏れる。

腕時計に目をやると、もう日付が変わる寸前だ。

もう、美雪は寝てしまったらどうか。

顔が見たい。

声が聞きたい。

さすがの自分も、疲れと衝撃で頭がパンクしそうだ。

スーツのポケットから携帯を取り出すと、メールが来ていた。

課長と一緒にの時にはサイレントにしていたので、全然気づいていな

かった。

1時間以上も前のメールだ。

『今日も遅いですか？ 身体に気をつけてくださいね』

相変わらず絵文字も何も無いそっけないメールだが、このたった一言に、美雪のどんな気持ちがかめられているのだろうか？

もう寝てるかもしれない。

そう思ったけれど、気づくと美雪の携帯へとコール音を鳴らしていた。

プルルルルルル……

『ひゃっ！ ガチャガチャガチャッ』

携帯が繋がったと思った途端、耳元で美雪の驚いたような声と不快な衝撃音が聞こえてきた。

「オイ！」

慌てて声をかけるが、返事はない。何かあったのだろうか。そう思った数秒後に、

『もっ、もしもし？』

ようやく、慌てたような美雪の声が聞こえてきた。

「どっしたんだ？」

『ちょっと……お風呂上がりで手がすべって、慌てちゃって』

「手がすべって？ お前、服は着てるのか？」

『あーいえ……』

「5分後にかけて直すから、とりあえずちゃんと身体を拭いて服着ろ」

そう言ってプツリと切ボタンを押す。

少し冷たい言い方になってしまったが、風邪でもひかれたらたまらない。

ひとまず駅の方へ歩き出していると、5分も立たない頃に美雪からの着信があった。

『もしもし……すみません』

「なんで謝るんだよ」

久しぶりに、美雪の声を聞いている気がする。
口が緩む。

「今大丈夫か？」

『ハイ！ 全然！ 主任……じゃなかった、大輔さんはもしかして今帰りですか？』

「ん……課長とちよつと飲んでて」

『課長と？ 珍しいですね』

一瞬、ドキリとした。

「まあな」

何も慌てることはない。冷静に返事をする。

「なあ、今何してた？」

『お風呂上がって……特に何も』

(風呂上がりか……)

一瞬迷ったが、一応聞いてみる。

「これから、行ってもいい？」

『えっ、今から……ですか？』

明らかに動揺してるようだが、ここは強引に押そう。

「ん。うちに来てくれてもいいんだけど、風呂入ったんなら冷える
だろうし」

『えと……あの………ハイ』

小さな声が、携帯越しに耳に響いた。

(よしー！)

「10分で行くから」

そう言って、一方的に電話を切った。

コンビニで、チューハイと一緒に女の子が好きそうなスイーツを何個か買った。

タクシーに乗り込み、美雪の家の住所を告げる。

美雪の家に着くまでの間、課長から告げられた事をぼんやりと考えてはみるもの……イマイチ、実感がわかない。

ひとまず今日は、今週一週間の疲れを癒したかった。

ピンポン

ぱたぱたと廊下を走る音が、ドアの向こうからかすかに聞こえる。そんな音までが聞こえてくるなんて、もしかしてドアや壁が薄いのかも知れない。

これは何かと心配だ。

カチャリとドアのロックをはずす音が聞こえたかと思つとそろつとドアが開き、美雪の顔がのぞく。

「お、お疲れ様です……」

風呂上がりと言っていただけあって、ほんのりと頬が赤い。化粧のしていないナチュラルな姿に、思わず顔がにやける。

「これ」

コンビニの袋を手渡して、ズカズカと玄関の中に入る。

なんだか、すごく久しぶりに美雪の部屋を訪れたような気がする。

付き合ってから初めてだ。

「わ、嬉しい……美味しそ」

ビニール袋の中を覗きこんだ美雪が、ふわっと嬉しそうに笑った。その顔を見た途端、玄関先にも関わらず美雪のことを抱きしめていた。

「ちょ……大輔さん？」

「なんか……すげえ久しぶりな感じがして」

「毎日、会社で会ってたじゃないですか」

「あれは会ってたとは言えないだろ」

美雪の髪から、瑞々しいシャンプーのいい香りがして、無意識に顔をうずめてしまう。

「大輔さん……シュークリーム、つぶれてしまいました……」

そう言いながらも、ちっとも嫌そうではなく、大輔の胸に頬を寄せてくれたのが嬉しかった。

居間でソファに寄りかかりながら、缶チューハイを開けた。目の前で、美雪が嬉しそうに皿の上やや潰れかけたシュークリームをのせている。

「な、なんですか？」

「いや……こんな夜中に、よくそんなもの食べるなあ、と」

「……買ってきてくれたの、大輔さんじゃないですか」

ぶつと口をとがらせながらも、食べるのをやめる気はないらしい。ぱっくりと半分に分ったシュークリームに、躊躇なく食いついた。その行動に、思わず笑いが漏れる。

「なんですかあ？」

「いや別に」

にやにやと笑いながら、美雪の頭をくしゃくしゃと撫でる。怒った顔をしようとしているのだろうけど、大輔の手の下のその顔は、口元が緩んでいる。素直なその態度に、何故かものすごく癒される自分がいる。

「今日……泊まっていこうかな」

チューハイの缶を口に咥えたまま、そう言ってみた。

「え……」

ほんのりと赤い顔を驚きでいっぱいにしてながら、美雪がこちらを見た。

「帰るの、面倒くさい」

その視線の意味を知るのが怖くて、横を向きながらわざとぶつきらぼくに言った。

「め、面倒くさい、って」

あたふたとしながら、美雪が大輔の言葉を繰り返す。

「き、着替えとか……どうしますか？」

「いいよ、別に。明日の朝帰るから」

「パジャマとか……うち、ないです……」

「シャツとパンツで寝るよ」

「風邪でもひいたら……そ、それに、なんというか目の毒というか……」

「毒？」

「いついえー！」

大輔が睨むように向けた視線に、美雪が無条件に背筋をぴしっと伸ばす。

半分本気で、半分冗談だった。

すんなり『ハイどうぞ』なんて言葉が返ってくるとは思っていなかったけど、ある意味予想どおりの反応に少しだけ落胆する。

「嘘。帰るよ」

「え……」

彼女は目を大きく見開き、しょんぼりとしたような、ひきつった表情を見せた。

「……また、からかってるんですか？」

「は？」

「だから、私がアワアワするのを、楽しんでるのかなあって……」

少しムツとした。

「だから、からかってないって。お前が困ってるみたいだから」

そこまで言って、口をつぐむ。

「困ってはいないです……どうしていいか、わかんないだけで……」

「それが困ってるってことだろ」

イライラと声が大きくなる。

ヤバイ。

こんな事を言うために来たんじゃない。
ふうつと深いため息をついた。

「ごめん、やっぱり帰る。疲れてるのかもしれない」

そう言ってコートに手を伸ばした瞬間、バツと大輔のコートを美雪

が抱えた。

「か、帰らないでください!」

予想外の行動に、目が点になる。

「困ってないです! 本当に。ただ」

「ただ?」

「……ちょ、ちょっと緊張してるだけです!!」

顔を真っ赤にして、美雪が声を張り上げた。その真剣な顔に、ぷつと笑いがこみ上げる。

「な、なんで笑ってるんですかあ」

ふにゃ、と顔を歪ませながら美雪が言う。

「ごめん……つい、可愛くて」

手を伸ばして強引に美雪を腕の中に抱きこむと、しっとりとした髪を優しく撫でた。

まだ20歳で、彼氏いない歴も20年だった美雪。緊張したって当たり前だ。

気づけなかった自分が悪い。

「うん。泊めて。何もしないから」

“何もしないから”

口に出した途端、気恥ずかしさで顔が赤くなった気がした。
まるで高校生の言い訳のような、なんて情けないセリフなんだ。
今までの自分の恋愛歴の中で、こんなカッコ悪いことを言ったこと
はない。

しかし美雪にそんな大輔の気持ちなどわかるはずもなく、ただ腕の
中でこくこくと首を縦に振っていた。

第58話 慣れない夜、なじむ夜

「布団、ベッドの下に敷きますか？」

「なんで？」

「な、なんでって……」

困ったように小首をかしげる美雪を、ベッドの上で頬杖をつきながら見つめていた。

明らかに美雪が挙動不審になった。

でもその気持ちはわかるから、あえてつつこまない方がいいだろう。本当に、今日は何もするつもりはなかった。

ただ美雪の顔が見たかっただけで

ただ美雪の声が聞きたかっただけで

それだけなのに。

それを伝えようとすればするほど、なんだか嘘を重ねるみたいで、黙っていた。

「あ、私……寝る用意します！」

勢いよく立ちあがった美雪が、ぱたぱたと洗面所へと消えていく。と、思ったたら戻ってきた。

「あの、お風呂入ります？」

「え、いいよ。着替えないし、明日帰ってからシャワー浴びるから」

「歯ブラシなら、使っていないのありますけど」

「ん」

よつこらしよ、と立ち上がって洗面所へと向かった。

大輔が洗面所で歯磨きをしている間にも、居間ではたばたと無駄に歩きまわる美雪が目端にうつる。

（やっぱ……今日は来ない方がよかったのか？）

そんな気持ちが頭をかすめたが、「帰らないで」と言った美雪の言葉にすがりたかったのも事実だ。

口をすすいで、はあっとため息をつく。

「お前……もっと落ち着け」

居間の入り口にもたれかかり、無愛想にそう言った。

「へっ……お、落ち着いてます！」

どこが。

鏡をつきつけて、自分の顔を見せてやりたいくらいだ。

「ちょっとこっち来い」

ベッドの上にとっかかりと腰かけて、ぼんぼんと自分の隣を叩いた。唇をきゅっと結んで、美雪がそろそろとこちらへ歩いてくる。

怖がらせるつもりなんてないし、無理矢理何かをするつもりだってない。

大輔の隣に恐る恐る座った美雪の肩にそつと手をまわすと、びくつと身体を強張らせたのがわかった。

「お前なあ……………」

無理矢理こちらを向かせてから、その小さな身体を抱きしめた。

「何もしないって、言ってるだろ」

「……………」

腕の中で、美雪が顔を動かして大輔を見上げている。

「信用できない？」

「そ、そういう訳じゃないですけど……………」

「けど、なんだよ？」

「だって」

美雪の目が、何故だか涙でもこぼれそうに潤んでいる。

「だって？」

「大輔さん……………今まで色んな人と付き合ってただろうし……………」

「だからなんだよ」

「ぶ、不安っていうか、緊張っていうか、なんていうか」

美雪が、はーっと長い息を吐いた。

「こんなことすら、びくついてる自分が情けなくて」

そう言って、大輔の胸に押しつけるように顔を隠した。

大輔の鼓動が早くなっていることに、美雪が気づけばいいのに、と思っただ。

不安も緊張もお互い様で、長く生きている分隠すのが上手いだけではない。

随分経験豊富だと思っっているらしいが、お互いの気持ちが不確定な時には、誰だって不安なのに。

「俺は……美雪にただ会いたくて来ただけだから」

ぽつりと、自分の正直な気持ちを告げた。

「それだけなのに、こんなに不安にさせるなら、来ない方がよかった？」

「ち、違います!」

伏せたままの顔をぶんぶん動かす。

「来てくれて……すごく嬉しかったです……」

小さく聞こえたその言葉が嬉しくて、思わず美雪を抱きしめる力が強くなる。

「うん。ありがとう」

「あの……呆れてませんか？」

「……そんなに俺、余裕無く見えるか？」

「や、そうじゃないですけど」

「ゆっくり、ついてきてくれればいいから」

「……」

隠していた顔を、少し上げて大輔を見つめる。

「おっさんだから。多少は我慢できます」

大輔の言葉に、はにかむように美雪が笑う。

「……キスは、していいか？」

我ながら、ずるい聞き方だと思う。

頬を赤くして僅かに頷いた美雪に顔を寄せ、その小さな唇を挟むように口付けた。

角度を変えて何度もキスを重ねているうちに、強張っていた美雪の身体からゆっくり力が抜けていくのがわかった。

一瞬唇を離して見下ろすと、いつものふんわりとした顔とは違う、少し大人びた表情にどきつとする。

ヤバイ。

何もしないって言ったのに。

これ以上は、理性が保てなくなってしまうかもしれない。
最後にゆっくりと、気持ちを落ち着けるように美雪に長めのキスを
した。

「月末くらいになったら……仕事も多少は落ち着くと思うから」
耳元で囁くように言いながら、もう一方の耳を軽く指でなぞる。

「旅行ってほどでもないけど……泊まりでどこか行こうか？」

「えっ」

美雪がぱつと顔を上げて、大輔の顔をまじまじと見つめる。

「月末って……いつですか？」

「ん、土日で行きたいから……24日。かな」

ベッド脇にかけられたカレンダーに、わざと目を向けながらそう告
げた。

美雪の誕生日を知っているということは、当然伏せる。

「は、はい！」

腕の中で美雪が嬉しそうに微笑んだ。

「どっか行きたいとこ、あるか？」

どこに行こうか大輔なりに考えてはいるものの、イマイチ決定しか

ねていた。

美雪が行きたいところがあるのなら、何よりそれを優先したい。

「どこでも……どこでも楽しみです」

ふにゃふにゃとしまりのない顔をしながら、美雪が言った。

「大輔さんと、一緒にお出かけだから」

相変わらず、美雪の言葉はストレートだ。

恥ずかしそうに目を逸らした美雪を、少し力をこめて抱きしめた。

「仕方ないから、その時までには我慢してやるよ」

この場の思いつきではなくて、それはずっと考えていたことだった。間違いなく、美雪には身体を重ねた経験はないと思う。

だからこそ、自分の勝手な感情や欲望で強引に初めてを奪うようなことはしたくなかった。

もし、泊まりで出かけようと言ってもついてきてくれるなら……都合のいい考えかもしれないけれど、その時は美雪の心が許してくれたという事だ。

それまでは、待とう。

「え、えっと……それは……」

美雪がモゴモゴと言葉を濁す。

「わかんないなら、今教える？」

背中にまわしていた手を、ゆっくりと背骨をなぞるように動かす。その手を前にまわそうとしたとき、

「け、結構です！」

どんつと大輔の胸を押して、美雪の身体が離れた。

「大輔さんっ！」

真っ赤な顔をしてるのがおかしくて、声を出して笑った。

「それ以上は、待つつもりないからな」

そう言つて、離れた美雪の身体を強引に自分に引き寄せた。

「いい？」

「うっ……」

いつもは白いうなじが、赤く染まっていた。

大輔が贈ったネックレスの鎖が見える。

思わずその鎖の上をなぞるように、舌を這わせる。

ぴくつと美雪の身体に力が入り、その後ゆっくりと力が抜けて大輔へと身体をあずけた。

「わかり、ました……」

大輔の胸に顔をうずめながら、美雪がつぶやくようにそう言った。

美雪が寝る支度をするのを横目に、さっさと下着姿になってベッドにもぐりこんだ。

正直、疲れもピークだ。

部屋着に着替えた美雪が、そんな大輔に躊躇するようにならないうちにベッドサイドに立っている。

その手を優しく掴んだ。

「おいで」

安心させようと笑いながらそう言うと、こくと頷いてそろそろと美雪が布団の中に身を入れてきた。

美雪の首の下へ自分の腕を通してから、そっと抱きよせる。

「大輔さん……あつたかいですね」

「そうか？」

アルコールを飲んでいたからだろうか。

言われてみれば、美雪の身体はひんやりとしている気がする。

「お前、冷え性？」

「あー、そうかも。平熱、36度ないですもん」

「マジで？　じゃあ俺と1度くらい違うのか」

緊張が解けたのか、美雪がぴったりと身体を寄せる。

「ふふ……あつたかい。湯たんぽみたい」

くっつかれたらくっつかれたで、それはまた別の意味で困るのだが。下半身をわずかに離しつつ、美雪の髪の毛に顔をよせた。

シャンプーのいい香り。

今まで付き合ってきた数々の女性たちと、こんな風に何もせずただ寄り添って眠ることなどあっただろうか。なんだか不思議な感じがした。

「そついえば、あの……」

「……んー？」

妙な安心感から、トロトロと眠気が襲ってきていた。美雪の問いかけに、ぼんやりと答える。

「最初につちに泊まったとき……どうしてベッドで寝てたんですか？」

「……ああ……」

なんて答えよう。

今となっては別に隠さなくてもいい気はしていたが、それでもなんとなく言いつらい。

「……大輔さん？」

美雪が腕の中でそつとこちらを見上げるのがわかる。

「眠いんですか？」

「ん……今週、なかなかハードだったからな……」

誤魔化すつもりでなく、本当に眠くなってきた。
美雪の背中にまわした手を、ゆっくりと動かす。

「ごめん……眠い……」

「もう……」

美雪がためらいがちに大輔の背中に手をまわし、きゅっと力を入れた。

「おやすみなさい」

「……うん」

返事をして、美雪の頬にキスをした。

(転勤の話も、結論を出してきちんと話さなきゃ……)

半分眠った頭で、ぼんやりと思う。

「……今度、ちゃんと聞かせてね」

眠りに落ちる瞬間、囁くような美雪の声が聞こえた。

第59話 誘いにのらない彼女

美雪と一緒に残業をして、思いがけず頭痛薬をもらってからというもの 何かと意識している自分に気付いていた。

そっけない態度をとっているものの、気づくと視線が美雪にいく。まるで、高校生の恋愛のようだ。

度々仕事の様子を見るふりをして声をかけてみたりするものの、彼女は大輔をただの上司としか思っていない。

それが何故だか苛ついて、つい厳しい言葉をかけることもあった。

(何やってんだ俺……ガキじゃあるまいし)

仕事かたてこみ遊ぶ暇もないから、欲求不満なのだろう。

そう思いこんでいたある日の仕事で、一通のメールがきた。

『久しぶり！ 今日ヒマだったらうちに来ない？』

思わず顔をしかめる。

いわゆる“身体の関係がある”女友達だった。

彼女を作るのが面倒で、でも、したい時にはしたい。

そんな時用の、便利な友達のつもりだった。

『彼女ができたからもう行けない。悪い』

簡素なメールを送る。

彼女なんて、いない。

でも何故か、女友達を抱くことを想像できなくなっていた。

(欲求不満じゃないなら……俺、なんなんだ?)

返信メールが来ないことにほっとしていた。

モデルのような容姿でプライドの高い女性だったから、きっと大輔のメールにカチンと来たのだろう。

それで、別にいい。未練なんて全くない。

名前だけではピンと来ないような相手と、気まぐれに身体を重ねていたことに、今さらのように嫌悪感がわく。

どうして、好きでもない相手とベッドに入ることが楽しかったんだろう??

ひどく自分が汚れてるような感覚にとらわれていた。

「主任！ 終わりました！」

「おー。悪いな」

成田に、急ぎの仕事を残業で対応してもらっていた。提出されたデータを、ひと通り確認する。

「ん、問題ないな。ありがとう」

「ハイ！」

ほっとしたように成田が返事をした。

「藤崎もそろそろ切り上げろよ。急ぎの仕事じゃないだろ？」

成田の残業に付き合っていたらしく、並んでパソコンに向かっていた美雪に声をかける。

「あ……ハイ！」

ぴっと背筋を伸ばして返事をする、成田と共に手早く仕事を終える準備を始めた。

そんな二人の後姿を見て、ある考えが浮かんだ。

「成田と藤崎……この後予定あるか？」

「へ？」

成田が驚いたようにこちらを振り返った。

「いや、急ぎの仕事まわしたお詫びに、飯でも行くか？」

言い訳のようにそう言った。

美雪だけを誘っても、ついてくることは100%ない。

でも、成田が一緒なら……

そんな、淡くてズルイ下心だった。

「わ〜！ 行きます行きます！」

手をパチンと叩いて、成田が嬉しそうな声を上げた。

「美雪ちゃん！ せっかくだから主任にじゃんじゃん奢ってもらおうよ〜」

「成田……お前本人を目の前にして、そういうこと言うか？」

たしなめるようにそう言うが、いたって気にする様子はないようだ。そんな成田の様子に困ったような顔をしながら、美雪が少し考えるように人差し指を軽く唇にあてた。

見慣れないその仕草に、約束でもあるのかと少しだけ焦る。

「あの……成田さんが、一緒なら……」

（お？）

何故だかものすごく嬉しくなる。

湧きあがる高揚感に自分でも違和感を感じながら、なるべく素っ気なく聞こえるように言葉を選ぶ。

「じゃあ用意して下で待ってる」

「はい！ 美雪ちゃん、いこっ！」

ウキウキとした様子で、成田が美雪の背中を押した。

フロアを出る直前に取引先からの電話があり、その対応で少し遅くなくなってしまった。

息が切れない程度に、急いで階段を下りる。

人を待たせるのは、好きじゃない。

それが、運よく約束を取り付けられた相手ならなおさらだ。

走り出す一歩手前の早足でようやく玄関が見えた時、そこに佇んで

いるのが美雪1人だということに気付いた。
不思議に思いながらも、歩調を緩めて美雪に歩み寄る。

「悪い、遅くなって」

「あ、いえ……」

もじもじと下を向いて美雪が答える。

それなりにコミュニケーションが取れるようになってきたと思っていたが、やはり一歩仕事を離れてしまうとダメらしい。

「成田は？ トイレか？」

周りをキョロキョロと見渡しても、その姿を確認出来ない。

「あの……」

困ったように美雪が大輔を見上げる。

縋るようなその視線に、何故だかドキつとする。

そんな大輔の気持ちなど知るよしもなく、美雪がおずおずと話だした。

「成田さん……多分、彼氏さんだと思うんですけど、携帯に体調が悪いつて連絡が来たみたいで……。申し訳ないけど、今日は帰らせ
てほしいと」

「は？」

そういえば、学生時代から付き合っている彼氏と、同棲していると

聞いたことがあった。

「そうか」

首の後ろをカリカリと掻く。

己のタイミングの悪さを、呪いたくなる。

居心地が悪そうにしている美雪に目を向け、声をかけた。

「どっするっ？」

「え？」

「俺らだけでも行かないか？ 食事」

きつと断られるだろうと思ってはいたが、一応誘ってみた。

「え？ あ、いいえ、とんでもないですー！」

美雪がぶんぶん顔の前で手を振る。

「あの、私、帰ります」

「そうか」

全身で拒否をしめす美雪の態度に、自分の自信が喪失する。

イケメン主任だとか言っていたやつ、誰だよ？

思わず舌うちしそうになる。

「送っていくか？」

「いえ、まだ電車ありますから。そんな、主任のお手をわずらわせる訳には」

取りつく島がないとは、このことだ。

なんだかどつと疲れが押し寄せ、軽いため息をついた。

「…………お疲れですか？」

大輔の気持ちなど全く知らない美雪が、心配そうに首をかしげる。

「いや」

誰のせいだ？

そう言ってしまうたい衝動にかられるが、言っても無駄だと思い口をつぐむ。

大輔が何かを言っても、美雪の心境が変化するとは思えなかった。

「じゃあ、今度成田が空いてる時にでも、またな」

きっぱりと諦めて、くるりと美雪に背を向けた。

「あ！ あの」

「ん？」

その途端に呼び止められ、首だけで振りかえる。

「あの…………気を使っていたいで、ありがとついでいきました」

美雪が恥ずかしそうに笑った。

気を使つて？

一瞬頭の中にたくさん「？」マークが並んだ。

「では、失礼します」

ぺこりと頭を下げ、大輔と反対方向に美雪が歩き出した。その華奢な後ろ姿を見て、ようやく意味がわかった。

（あいつ……自分が誘われてるとは、思わないんだな）

ふう、とまたため息が出る。

どうしてあんなに自信がなさげで、あんなに男に対して距離があるんだろう。

新人の中でも評判が良かったのは、もう過去の話となりつつある。あまりに親しみのない態度に、手っ取り早い展開を望む社内の男たちはとつとつに諦めたらしい。

“親睦会しようぜ！”

そう言っていた盛永でさえ、美雪への興味はとつとつに薄れているようだった。

（充分、かわいいのにな）

小さく消えていく後姿を見ながら、はにかみつつもまっすぐに大輔を見つめる美雪の笑顔を思い出していた。

遊び慣れていなくて自分に自信がない、間違いなく今までの自分とは縁のないタイプだ。

だからこそ気になるのか、本当はああいうタイプが好きなのか、よくわからない。

あまりに手頃な恋愛や女性関係が続けていたせいで、好きという気持ちもストリートにわからなくなっていた。

とにかく、距離を縮めたい。

駆けていってその腕をつかみ、強引に飲みにでも連れていきたいけれど、それにブレーキをかけるのはやはり「上司と部下」という関係のせいだった。

そんな気持ちを抱いてること自体、いつもの大輔とは違うのに。

結局、断られた事と大輔の真意が伝わっていない事によるもどかしさを感じながらも、重い足取りで帰宅するしかなかった。

第60話 イブと自分の気持ち

12月に入り、年末特有のあわただしさと仕事に追われる日々が続いていた。

特に大輔には、個人的に大問題が降りかかっていた。

住んでいたマンションの耐震補強に問題があったという理由で、不動産会社から強制的に立ち退きを迫られていたのだ。

引っ越し先の敷金や礼金などもるもるの出費が不動産会社もちとはいえ、こんな忙しい時期に引っ越しをしなければならいという事實は、かなり大輔を打ちのめしていた。

しかし理由が理由なだけに、引き延ばす訳にもいかない。

年末の忙しさの中で新しい住まいを見つけるのは、なかなか大変だった。

それでも、落ち度は不動産会社側にあるせいか、いい物件をかなり優先的に紹介してもらえたと思う。

仕事の昼休み中、不動産会社から送られてきた数枚のFAXを見ているときに、その中のひとつの住所に何かひっかかるものがあった。思わず、新人講義のときに使った社員名簿を取り出す。

（ あ、やつぱり ）

そこは、美雪の住んでいるマンションからほど近い場所だった。

家賃が多少高くなるが、その分間取りが広い。

1人で住むには、勿体ないほどだ。

駅からの距離も今とさほど変わらないようだし、近くにコンビニや小さいスーパーもある。

もしかしなくても、通勤路線も同じになりそうだ。

(……こんな不純な動機で決めていいのか?)

そんな気持ちが一瞬よぎるが、自分の中で慌てて否定をする。時間がないんだし、どうせこの中から決めなきゃいけないなら……他の物件のFAXを改めて机に並べてみたが、もう迷う余地はない気がした。

バタバタと引越した新しいマンションには、開けてすらいらない段ボールが何個も転がっている。

スーツとパソコンさえあれば、仕事なんてなんとかなるものだ。とはいえ、片付かない部屋で眠ることは想像以上に身体が休まらないらしく、12月に入ってからはなんとなく体調不良が続いていた。

特に仕事に追われていなくても、あつという間に月日は過ぎていく。結局、成田や美雪と食事に行くことはないままだ。

せめてランチでもと思い声をかけてみても、そんな日に限って成田か美雪が弁当持参であったり、もうこれは縁がないのだと半ば諦めかけていた。

自分のものにはならなくても、誰のものにもならなければそれでいい気もしていた。

クリスマスイブが一週間後に迫ったある日、山田が神妙な面持ちで大輔のデスク脇に立った。

「主任、クリスマスイブの日……有休とつてもいいですか?」

「お前、何言ってるんだ?」

あまりに空気の読めない山田の発言に、呆れてしまった。

「彼女でもできたのか？」

「いえ、合コンっす!!!」

山田の鼻息が荒くなるのと同時に、大輔の頭が痛くなった。

「なんなら主任も一緒に」

「アホか」

わざと乱暴に、山田の机に文書を投げつける。

「却下。お前休ませるくらいなら、妻子持ちを休ませる」

「あー、それってひいきです！俺の方が必死です！」

そんな山田の様子を、成田がうんざりとした顔で見つめていた。美雪は、どうやら席をはずしているようだ。

「定時で上がらせてやるから、それで我慢しろ。どうせ夜なんだから？」

「マジですか？主任！その約束忘れないくださいよー！」

仕方なくそう告げると、山田が顔をキラキラとさせている。

「つつか山田さあ、藤崎さんのこと狙ってたんじゃないっけ？」

別の男性社員が、山田に声をかけた。

「まーそうなんだけど……藤崎さん、あまりに素っ気ないんだよねえ」

気まずそうな顔をして山田が言うと、周りから賛同するような頷きがあがる。

こんなオープンな性格の山田でさえも、美雪と打ちとけることは難しいらしい。

半分ほっとしたような気もするが、

(俺、コイツと同じかよ……)

そう思うとなんだか情けなかった。

クリスマスイブ当日、予想もしないアクシデントが起きた。

正確に言うと、その前々日に起きたシステムトラブルだった。

前日が祝日で休みと言うのが災いして対応が遅くなり、全てが後手後手にまわっていた。

朝からその復旧作業にかかりきりで、気づくと定時近い時刻になっていた。

昼食もとっていない。

年内に仕上げなければいけない仕事もたまっている。

「最悪のクリスマスイブだな……」

思わず愚痴が口をついて出た。

「あのおー……」

申し訳なさそうに、山田が大輔に声をかけた。

「ああ、いいぞ。帰って」

「へ？」

素っ気ない大輔の言い方に、山田の目がテンになっていた。

「い、いいんですか？」

「合コンだろ。いいぞ。行け」

「だ、だって、主任、昼もとってないですよね？」

「自分の仕事は終わってるんだろ？ 俺のことは気にしないでいい」

大輔一人の判断ではない。

打ち合わせのために朝から外出中の課長に連絡を取った時に、話し合っただけのことだった。

復旧作業だけなら大輔だけでなんとかなるし、他の仕事の埋め合わせは明日以降でも対応できる。

クリスマスイブに社員を拘束しても、士気が下がるだけだ。

「どーしても残業したいって言うなら、いくらでも協力するけど？」

「いつ、いえ！……ありがとうございます！」

やや大げさに山田が頭を下げた。

「成田もいいぞ。きりのいいところで帰って」

「え？」

驚いたように成田がこちらを振り返った。

「いいんですか？」

「ああ」

何かを言いたそうな顔をしていたが、それ以上は何も言わない。

言わない方が、この場合は利口だと気づいたのだろう。
そりゃそうだ。

誰だって、クリスマススイブの日に残業などしたくはない。

皆がそそくさと帰り支度をするのを横目に、パソコンのモニターに集中していた。

間違いなく終電どころかタクシーコースになりそうだ。

けほっ

喉が痛い。

梱包された荷物をほどくのが面倒で、布団を出さずにソファに毛布で寝てるのがマズかったか……

熱はないと思うが、なんとなく頭も痛い。

ふと、以前美雪にもらった頭痛薬を、そのまま財布に入れていたことを思い出した。

(勿体ないけど、アレ飲むか……)

勿体ない？

慌ててそんな考えを否定する。

どこにでもある頭痛薬じゃないか。

軽く頭を振りながら給湯室へ向かい、冷たい水で薬を流し込む。

思えば、水分もろくにとつてないことに気付いた。

「はー……」

ため息をつきながら、給湯室のシンクに手をつく。

去年は、どんなクリスマススイブだったっけ？

確か誘われるままに女友達と食事に行つて、プレゼントを強請られてホテルに行つて……

その後が、思い出せない。

今年も誘いが無かつた訳ではないが、どれも気乗りがしなかつた。

（どうでもいって思うのは、年つてことなのか？）

薬の包みをゴミ箱に投げ入れようとして、一瞬躊躇した後にはスーツのポケットにしまった。

特に意味なんて、ない。

課長が、もうすぐ取引先との打ち合わせから戻る予定だ。

（そしたら申し訳ないけど作業を分担して……）

頭の中で手順を整理しながら給湯室を出ると、フロアへと向かう思いがけない姿が目につつた。

「藤崎？ 何やってんだ？」

突然の呼びかけにびくっと身体を強張らせて、美雪が恐る恐る振り返った。

「あ、主任」

そう言うと、ほっとしたように笑う。

「どうしたんだ？」

「残業っていうか、何かお手伝いできないかと思ひまして」

ふと手元を見ると、缶コーヒーを2つ手にしている。

「私……皆さんと違って、特に予定もないので」

そう言いながら、えへへと笑って缶コーヒーを大輔に差し出した。

「……いいのか？」

「はい」

「でも藤崎、さっき帰ったんじゃない……」

そう言いかけて、言葉を止める。

あの場で美雪が「残業をする」と言えば、山田や成田が帰りにくくなる。

それがわかって、一旦帰るふりをして戻ってきたのだろうか。

「主任？」

大輔がふいに言葉を止めてじいっと見つめたためか、首を傾げて美雪が不思議そうな顔をしている。のほほんとしているように見えて、意外と周りに気を使っているのだ。

「……助かる」

ただ一言そう言って差し出された缶コーヒーを手に取り、すたすたとフロアへ向かって歩き出した。

パタパタと、大輔の後をついてくる足音が聞こえる。心なしか、大輔の足取りが軽い。

美雪に限っては、きっと自分に気があつての行動ではない。

わかってはいるつもりだけれど、手渡された缶コーヒーは大輔が好んで飲んでいる銘柄で、それがなんだか特別なことのように思えていた。

戻ってきた課長とともに、3人で無言の残業が続いていた。

「この辺で終わらせよう。ひとまずシステムの復旧はできたし……後は明日でも大丈夫だ」

ふう、と息を吐いて課長が言った。

もう少し続けたい気持ちもあったが、相変わらず喉は痛いし首筋もぞくぞくする。

これ以上続けても、逆に効率が悪いかもしれない。

「そうですね」

ちらりと時計を目にやると、なんとか終電には間に合いそうな時間だった。

「こんな日に残業させて、悪かったな」

美雪の方に目をやりながら、意識して優しい言葉をかける。

「いえ、大してお役に立ててなかったかもしれませんが……」

美雪が疲れた表情を見せながらも、照れたように笑った。

「埋め合わせはするよ」

「そんな……あ、でも」

考えるような顔をして、美雪が大輔を見つめた。

「今週の金曜日……定時で帰ってもいいですか？」

「金曜日？」

美雪がそんなことを言うのは初めてだった。

「お？ 藤崎さん、デートか？」

課長が珍しくニヤニヤとしながら美雪にからむ。

「いついえ、そんなんじゃない……」

「課長。セクハラですよ」

さらりと言ってはみたものの、何故か気になった。
クリスマススイブに残業なんて引き受けるくらいだ。

普段の男に対しての態度もそうだが、決まった相手なんているはずがないとタカをくくっていた。

困ったような顔をしつつも、美雪は言葉を続けない。

「帰っても寝るだけだし……飯でも食べていくか？」

何故かあせりのようなものを感じて、ダメもとで声をかけてみた。
課長の前ではあったが、その方が美雪の警戒心も多少は和らぐかもしれない。

「あー……でも、今だとギリギリ終電に間に合いそうなので」

申し訳なさそうな顔をしつつも、またしてもきっぱりと断られた。

「タクシー代くらいは出すぞ？」

「いえ本当に……気を使わないでください」

にっこりと笑う。

（お前こそ、むしろ俺に気を使え）

そう言ってやりたい気分だ。

「課長はどうですか？」

体裁をたもつため、一応課長にも声をかけみてる。

「悪いな。妻が、多分クリスマス用のディナーを用意してくれてると思うんだ」

「そうですねか……」

何が悲しくて、イブの上司にまで振られなければならないのだ。なんだかむなしくなった。

「じゃあ、お先に失礼します！」

気づくと身支度を済ませた美雪が、そそくさとフロアを後にしていた。

そんなに急ぐことはないのに。

終電の時刻がせまっていることはわかっていたが、なんだかムカムカとする。

引越しをしたから帰る方向が一緒なんだと、声をかけるタイミン
グさえ失っていた。

こんな時、「上司」という関係に囚われている自分が憎い。

「松沢くん、私たちも帰ろう。よかったら送っていいこうか？」

「……いえ、お気になさらずに」

疲れが一気に押し寄せ、すっかりぐったりとしてしまった。
何気なくポケットに手をつっこむと、頭痛薬の包みの角が、ちくんと大輔の指を刺した。

(くそっ)

やけくそな気持ちで、課長と別れてタクシーを止めた。行き交うカップルや街に彩られたクリスマスイルミネーションを見てみると、電車に揺られて帰る気は起きなかった。暖かいタクシーの中に入り込むと、途端にすぎずきと喉が痛むことを認識する。

(あいつ、金曜日に何があるんだろう？)

ただの用事かもしれないのに、冷静な判断ができないのは、きっと体調の悪さのせいだ。

(俺、なんでこんなに藤崎のこと考えてるんだっけ……)

窓の外を見ながら、ぼんやりと思う。

部下だから……だな。

あと、男嫌いなのが、不憫っていうか……
何も考えてなさそうに見えて、意外と気がつくんだよな。
そのくせ、誘われてることとか全然わかってなくて。
計算してないんだろっけど、たまに可愛く笑ってたり……

(ああ、俺、藤崎のこと好き、なのか？)

げほげほっ。

変な咳が出た。

「お客さん、風邪ですか？」

「あ、いえ」

タクシーの運転手が心配そうな視線を向けるのがわかり、慌てて横を向く。

（　　なんで俺が、二十歳そこそこの小娘を好きにならなきゃいけないんだ）

そう思いつつも、自覚してしまった気持ちは、どうしようもない気がしていた。

第61話 真相・1

金曜日。

大輔の体調は、一向によくなくなる気配がなかった。

常用している市販の風邪薬が、効いていないのかもしれない。

明日から週末で仕事が休みになるのが、せめてもの救いだ。

痛む喉を抑えつつ、誰よりも早く出勤してパソコンに向かっていた。

「おはようございます!」

いつもより、明るい声が聞こえた。

ふと顔を上げると、普段とは雰囲気の違い美雪がフロアに入ってきたところだった。

あきらかに、とまではいかないが、気合が入っている。

普段がリクルートスーツと言ってもいいくらい地味だけに、華やかな服を着ているのが目立つ。

「おはよう、藤崎さん」

「おはようございます」

にっこりと挨拶を交わす課長を尻目に、他の社員の若干の戸惑いがある。

「おはようございます」

「……おはよう」

いつも通りに挨拶をしたものの、数日前に交わした約束が思い出さ

れる。

“金曜日、定時で帰ってもいいですか？”

きつとなんでもない。

きつと、友達との約束とかで……

そんな大輔の心の声がまるで聞こえたかのように、山田が声を潜めて通りかかった成田に声をかけた。

「ちよつとちよつと！ 今日、藤崎さんどうしたの〜？」

「どうしたのって……何がですか？」

不思議そうな顔をして、成田が身をかがめる。

「今日の格好、あきらかにいつもと違うじゃん。もしかしてデートかなんか?!」

そんな山田を一瞥して、成田がちらりと美雪に視線を送る。

「さあ？ 美雪ちゃん、あんまり自分のこと言わないですからねえ」。興味あるなら自分で聞いてくださーい」

ニヒヒ、と笑って成田はさっさと自分の席へと戻る。

「聞けないから聞いているのに……ねえ？主任」

話題を振られて、何故だかきくつとする。

「……そんなことより、イブの埋め合わせ頼むぞ」

ひっと声にならない叫び声をあげて、山田が慌ててパソコンに向かった。

この様子からして、クリスマスイブの合コンでは大した収穫はなかったらしい。

はあ、とため息をつく。

聞きたいのはこっちの方だった。

昼休みになっても、体調の悪さは変わらない。

このままでは仕事の進みも悪いので、ほとんど利用したことのない医務室に行き少し強めの風邪薬をもらうことにした。

「眠くなるかもしれませんが、その時は無理をしないで仮眠しに来てくださいね！」

やけに馴れ馴れしいナースから、二回分の風邪薬をもらう。

なんとか営業用の愛想笑いを浮かべて、医務室を後にする。

昼食もろくに食べていないから、胃に悪そうだが仕方ない。

自動販売機でミネラルウォーターを買い、ベンチに座りこみ薬を飲んでみると、不意に胸ポケットの中の携帯がメールの受信を告げた。

平岡からだった。

学生時代の友人の一人の結婚が決まり、これを機会に地元へと帰ることになったらしい。

急ではあるけれど、今日の夜に忘年会もかねて集まるうという誘いのメールだった。

仕事の忙しさから、最近は学生時代の友人たちとは疎遠になってい

た。

今日も、体調は悪いし正直気乗りはしない。

どうしようかと返事に迷って携帯を見つめていると、タイミングよく美雪が自動販売機へと現れた。

大輔が座っていることに少し驚いた顔をしたが、ぺこつと軽く会釈をするだけで自動販売機へと向かう。

ほんの少し迷ってから、りんごジュースのボタンを押す。

ガコン

ジュースを拾おうと腰を曲げた時に白い太腿がちらりと見えて、いつもより短いスカートをはいているということ嫌でも意識させられた。

(つつか俺……、セクハラおやじかよ！)

自分で自分に突っ込みを入れる。

美雪が振りかえる前に素早く視線を逸らすと、そんなことは知らない彼女は恐る恐るという風に大輔に声をかけてきた。

「あの、主任、今日……」

定時で帰りたいた言っていたことだろう。

「ああ。今日は急ぎでやっってもらう仕事もないし、いいぞ」

事務的に返事をする、美雪がほっとしたような顔をした。

「失礼します」

軽く頭を下げると、ぱたぱたとフロアへと戻っていった。その足音を聞きながら、釈然としない気持ちでミネラルウォーターを喉に流し込んだ。

「あれー？ 今の藤崎さん？ なんか今日、雰囲気違つくね？」

入れ変わるかのように、営業課の盛永がやってきた。思わずちつと舌打ちをしながらベンチから立ち上がる。

「知らねえよ」

「なんだよお前、なんで不機嫌モード？」

怪訝そうな顔をしてスポーツドリンクのボタンを押した盛永の横をすり抜け、飲み終えたミネラルウォーターをゴミ箱に放り投げた。何故だかむしゃくしゃとする。

こんな日は

“ わかった。遅くなるかもしれないけど、必ず行くよ ”

フロアへ戻る道を歩きながら、平岡へとメールを送信していた。

薬のおかげか、喉の痛みやだるさが大分おさまったものの、ナースに言われた通り眠気がひどい。

しかし来週になれば正月休みに入ってしまうだけに、ある程度の仕事は終わらせておかねばならない。

なんとか眠気をこらえて、午後からの仕事をこなしていた。

「すみません、今日はちょっと……お先に失礼します」

定時をむかえ、成田にその声をかけてさっさと自分のデスクを片付ける美雪が見えた。

「お疲れ様」

皆に声をかけられ軽く会釈をしながらも、いそいそとフロアを後にする姿に、山田がため息をつく。

「やっぱりデートつすかねえ……」

「そりゃあ、二十歳の女の子なら、ボーイフレンドの一人や二人はいるんじゃないのかい？」

偶然後ろを通りかかった課長が、まるで親戚のおじさんのように微笑みながら美雪を見送る。

「うわっ、課長！何か知ってるんですか？」

「いや、私は何も」

珍しく山田と談笑を交わす課長を、ついうらめし気に見つめてしまう。

自分より、ずっとうまく美雪とコミュニケーションがとれてる課長なら、もしかして何か知ってるのかもしれない。

大輔の知っている“藤崎”は男と話すのが苦手で、だからこそ男の気持ちなんかもまるでわかってなくて、彼氏がいるとは到底思えないのだが。

そう考えてから、思わずハツとする。

(あほらしい……俺にそんな詮索をする権利はないだろ)

もう今日は、何も考えずに飲みたい気分だった。

「おお〜！大輔え！久々！」

メールで教えられた店に行くと、男ばかりの集団が目についた。
1時間以上遅れてしまったため、すでに出来上がっている友人も何人かいるようだ。

「まあまあまあ、かけつけ3杯！」

勧められるままにビールを一気飲みすると、わっと場が沸いた。

「珍しいな」

座敷に腰を下ろすと、平岡が隣に移動してきた。

「別に」

ふいに喉の痛みを感じて、けほつと咳きこんだ。

「風邪か？」

「ちよつとな……仕事がたてこんでて」

テーブルに置いてあった誰かの水を手にとり、ごくりと流し込む。

「風邪薬、飲んでるのか？ 薬と酒は、一緒に飲んだらまずいぞ」

「大丈夫だよ」

会社を出る直前、昼間医務室でもらった風邪薬を飲んでいたことを思い出したが、それを告げずに曖昧に返事をした。

風邪薬とアルコールを一緒に服用してはいけないことなど当然知っているが、もう遅い。

それに今日は、誰に止められようがとことん飲みたかった。

「大ちゃん、最近どーお？」

本日の主役で、結婚の決まった友人・西野が隣へやってきた。

「幸せそうな顔しやがって」

“結婚おめでとう”

そう言っつてグラスをカチンと合わせる。

「お前に先越されるとは思わなかったよ」

「モテないやつの方が、チャンス逃さないんだよ」

へへつと西野が笑う。

モテない訳ではないが、西野はイマイチ女運のないタイプだった。

相手の女性のことは全く知らないが、幸せそうな顔を見てると純粹に祝福の気持ちがあわく。

「大輔、今彼女いないのか？」

「ん、いない」

反対隣の平岡の心配そうな視線を感じつつも、一気にビールを流しこむ。

「おー、いい飲みっぷり……ていうか、お前なんかあったのか？
そんな飲み方して」

西野が驚いたように大輔を覗きこむ。

「別に」

「また“別に”かよ」

ため息をつきながらも、平岡が大輔のために追加のビールを注文してくれた。

気のきく男だ、と思う。

文句を言いつつも、なんだかんだと面倒見がいいのだ。

「西野、幸せそうだな。うらやましいよ」

気づくと、普段は言わないような言葉が口をついていた。

「お前の会社、俺と違って女の子多いじゃん！ 出会いはなんかいくらでもあるだろーが」

男ばかりの会社で働く小林が、いつの間にか話の輪に入ってきた。

「そりゃ、誰でもよければたくさんいるけど」

ふいに、昼間の慣れ慣れしいナースが頭に浮かぶ。

「もうそういうの、やめたんだ」

「そういうのってなによ！ 大ちゃん鬼畜！」

小林のオネエ言葉に、皆がどつと笑った。

そんな様子を眺めながら、頬杖をつく。

気心の知れている仲間というのは、ほっとする。

「っていつか……お前、そういうタイプだったっけ？」

西野の言葉に、ぼんやりと目を向ける。

「……何がだよ」

「どっちかっていうと、女なんか面倒くせえって感じじゃなかったっけ？」

なあ、と周りに声をかけると、うんうんと何人かが頷く。

微かに、平岡が反応する様子が見える。

もう、麻友のことなど、こっちは全然気にしてないのに。

「あー、面倒っちゃ面倒だけど」

そう言つと、ふいに美雪の顔が浮かんだ。

「ちょっとな」

「なんだよそれ〜!!」

大輔の微妙な反応に、小林が突っ込みを入れてきたが無視をした。この年になつて、『好きな子ができたかもしれない』など、口が裂けてもいえない。

美雪は今頃、どこで何をしているのだろう。

社だけの付き合いでは、それを知る術はない。

イケメン主任だなんだと騒がれても、何の役にも立たないのだ。ぼんやりと携帯をいじってはみるが、そこに美雪のアドレスはない。ふう、とため息をつく様子を、平岡がじっと見ていた。

「大輔？　なんか連絡待ってるのか？」

「……連絡なんか来ねえよ」

長い付き合いだからこそ、つい冷たい言い方をしてしまう。

「何かあったのか？」

「むしろ……何もない」

そう答えると、すぐ近くにあつた誰のかわからないチューハイをぐつと飲み干す。

「風邪ひいてるくせに、あんまり飲むな」

「お前……俺の彼女だったか？」

口に出してから、何故がおかしくなってふふっと笑う。

「……送っていくか？」

「あー、俺引っ越したから……お前んとこと逆方向だわ」

「え！ 大輔引っ越したの？」

向かい側にいた小林と桐野が、驚いたようにこちらを見た。

「いつ？」

「つい最近。12月に入ってから」

「なんでまた、こんな忙しい時期に急に？」

「あー……説明するの面倒くさい」

「女か!？」

「違っつっつの」

うんざりとした気持ちで、チューハイに手を伸ばす。

「オイ、大丈夫か？ ピッチ早くないか？」

「大丈夫だっつて」

平岡の言葉に強がるように、グラスに残った分を飲み干した。

「お、ヤケ酒かあ？」

ニヤニヤと笑いながら小林に言われ、思わず睨み返す。

「そんな顔すんなって！　じゃあ引っ越し祝いも兼ねて、年越しは大輔んちってことで！」

どうやら、小林と桐野は大晦日の話をしていたらしかった。

「引っ越し祝いってなんだよ」

「大輔も今フリーなんだろう？　淋しいもの同志、盛り上がるうぜ」

「……………」

面倒くさい。

それでも返す言葉が見つからない。

別にどうでもいいか……という気持ちになっていた。

1週間後に迫った年越しが、どこか人ごとというか遠い話のようだ。このまま仕事に明け暮れて、何の変化も刺激もない年明けを迎えることになるのだろう。

皆の話をぼんやりと聞きながら、手はその辺にある飲み物へとのびる。

相変わらず食欲があまりないため、空きつ腹にアルコールが滲みる。頭が少しクラクラしている気もしたが、“こんな量で酔っぱらう訳がない”という自負が感覚を鈍らせていた。

「次、何飲む？」

大輔の空のジョッキに気付いた友人が、気を利かせてメニューを渡してきた。

「んー……ウーロンハイにしとくか」

酔ってもあまり顔に出ないのが、災いしていた。

どうして酔うとなんだか淋しい気持ちになるのだろう。

西野の幸せそうな顔を見ながら、ふと自分の生活を思う。

恋愛。

彼女。

結婚。

その気になればすぐに手に入ると思っていたのに、案外遠いものだ。

(俺、淋しいのか?)

ふいに、今日の着飾った格好をした美雪が脳裏に浮かぶ。

どこかで、デートでもしてるのだろうか。

何故かむしゃくしゃとして、目の前のウーロンハイを煽るように飲んでいた。

「次どうする〜?」

誰かの声に、ハッと時計を見る。

どうやら少しウトウトしていたようで、気づけば時間は23時をまわっていた。

「俺、パス……」

携帯を見ていた平岡がつぶやいた。
きつと、麻友からメールでも来たのだろう。

「この愛妻家め！」

皆に茶化されても動じる様子はなく、カチカチとメールの返事を打ち続ける。

こういう一途なところは、昔から変わっていない。

「大輔、お前も帰った方がいいって」

「は？」

思わず平岡を見上げる。

帰る気など全然なかった。

明日は休みで予定もないし、なんなら朝まで飲んでいたっていいくらいなのだ。

「何言っちゃってんの？ まだまだ行けるよなあ！」

小林が大輔の肩を組み、そう促す。

「体調悪いんだって。今日は帰してやって」

「え？ そうなの？」

平岡と小林の会話を、口も挟まずに聞いていた。
返事をするのが面倒なのではなく、本気で瞼が重くなってきた。

結局、二次会には行かずに平岡に促されるままに帰ることが決定していた。
渋谷外に出た途端、クラクラと回る視界が想像以上に酔っぱらっていることを表している。

(なんか……ヤバイな)

例え気心の知れた友人であっても、失態はさらしたくない。
冷たい空気を吸い込み、なんとか背筋をしゃんと伸ばす。

最後に店を出た平岡が、スーツのポケットに手をつ突っ込んで何かを探しているようだ。

「あれ？ 携帯……。悪い、忘れてきたみたいだ。待ってて」

「……んだよ。酔ってんの、お前の方じゃないの？」

ケラケラと笑い、電柱にもたれかかる。

「じゃあまたな！」

「大晦日、連絡するわ〜！」

「おう」

軽く手をあげて、友人たちが繁華街へと消えていくのをぼんやりと見送っていた。

立っているのがしんどくなり、つい座り込む。

「学生じゃねえんだから……」

そう呟いてはみたものの、立てる気がしない。
眠い。

仕事の疲れ、片付かない部屋、体調の悪さに、よくわからない部下
……
全てが頭の中をぐるぐる回っていた。

ああ、なんだか面倒くさい

気づけば、ゆっくりと、瞼を閉じていた。

「ん……」

なんだか、暖かい。
車に乗っているようだ。

ああ、きつと平岡がタクシーに乗せてくれたのだろう。
でも、大輔がもたれかかっている身体は、なんだか小さくて柔らか
くて、いい匂いがする。

麻友？　な訳ないか。

平岡が許す訳がない。

「……ですか？」

なにか言ってるが、よく聞こえない。

その声がなんだか美雪の声に似ている気がして、うつすらと目を開けてみる。
ぼんやりとした表情で窓の外を眺める女性は、やっぱり美雪に見える。

その顔はなんだか悲しそう……というか、つまらなそうだ。

そっか。

これは夢なんだな。

美雪と一緒に車に乗ってるなんて、どう考えたってありえない。
そして、夢の中ですら彼女との距離は遠く感じる。

夢の中くらい……もっとこう……いい展開になってもいいのに

そんな都合のいい事を考えながら、再び深い眠りに落ちていった。

第62話 真相・2

(あれ……俺のマンションの階段、こんなに短かったっけ……)

夢うつつの中で、階段を登らされていることに気付く。

誰かが大輔の肩をがっちりと支えているようで、その力強い腕は男性に間違いなく、やっぱりさつき美雪の気配がしたのは夢なんだと思ひこむ。

この手は、きっと平岡だろう。

(麻友が待ってるのに、悪いことしたな……)

そう思いつつも身体は言うことをきかず、投げ出すように乱暴にどさっと玄関に横たえられたのがわかった。
なんだか、話し声がある。
誰と誰が話してるんだろう。

『俺なら大丈夫だから、帰っていいよ』

そう言おうと思ったら、ボタンとドアが閉じた。

きつと、平岡が帰ったんだ。

ああ、眠い。

このままここで眠ってしまおうと決めた次の瞬間、ぱたぱたと部屋を歩き回る音がすることに気付いた。

(帰ったんじゃないのか？)

「主任？」

ふんわりといい香りが、自分に近付いてくる。
いい香りといっても香水のようなわざとらしいものではなくて、洗
濯物みたいな香り。
煌々と灯る蛍光灯の下で、うつすらと目を開けた。

「ん……藤崎……？」

大輔の傍らに佇むのは、やっぱり美雪本人だった。

これは夢か現実か。

ぼんやりと身体を起こしてみたものの、頭がはつきりしない。
なんとか美雪と会話を交わしてみるものの、内容が頭に入ってい
かない。

それでも。

「平岡さんが……」

ふいにその単語だけが頭に入ってきた。

平岡？

どうして、美雪が平岡のことを知っているのだろうか？

「なんでお前……平岡のこと知ってるんだ？」

何故か急にイライラとした気持ちがかみ上げた。
本物が幻かわからない美雪に手を伸ばす。

「ひゅ、ひゅにん……いひゃい……」

大輔にがつちりと顔を挟まれた美雪が、もごもごと口を動かす。ふわふわと柔らかい頬は、夢にしては手触りがいい。微かに涙を浮かべる目が、大輔だけを見つめている。

誰だ？

泣かせたやつは？

「お前……今日、誰と飲んでたんだ？」

「ひよ、ひよつとまって……」

大輔の手に挟まれてジタバタと動く美雪からは、大輔の問いに対する返事は聞こえない。

きつと、その質問の意味すらわかっていないのだろう。

手の力を緩めると、それを待っていたかのように美雪は大輔の手を振りほどいた。

ふと周りの景色に気付く。

ここは、大輔の家ではない。

そういえばさつき、「私の家」とか言っただけ？

ぐるぐると回る頭で必死に考えをまとめてみる。

ここが美雪の家だとしたら……どうして自分は美雪の家にいるのだろう？

連れてこられた？

そもそも美雪はどうして平岡を知っている？

元々知り合いで、呼び出したのか？

「……なんで俺がお前んちにいるんだ？」

その疑問をそのまま美雪にぶつけてみても

「だっ、だからですね、主任が酔っぱらって道端で座り込んでいて……」

必死に説明をしているつもりなのだろうが、さっぱり要領を得ない。ぼんやりと美雪を見つめていたら、突然尿意をもよおしてきた。あれだけ飲んだのだから、当然だろう。

「まあいいや。トイレ……トイレ、ここか？」

立ち上がると、なおさらクラクラする。

呆れた顔をしている美雪をよそに、トイレへと向かった。

用を足した後、ふいに足元がふらつきしゃがみこんだ。

(ここ、マジで藤崎の家?)

大輔と美雪と平岡を結ぶ線はどう考えても繋がらず、どうしても「これが現実だとは思えなかった。

というか、現実の訳がない。だとすると、都合のいい夢を見てるか、妄想だ。

そう思うと、なんだか笑いがこみ上げてきた。

眠い。

ぺったりと床に座りこみ目を閉じた。

今なら、どこでだって眠れそうだ。

そして意識が途切れていった。

なんだか、寝苦しい……。

ぱちつと目が覚めた。

今、一体何時なのだろう。

携帯に手を伸ばそうとしたが、いつものように枕元には置かれていない。

自分に目をやると、上着こそ着ていないものの、スーツのままだと気づく。

(あー……俺、着替えないで寝たのか)

頭はガンガンと痛い、意識はクリアだ。

良いことと悪いこと、半々の夢を見ていたような気がする。

水でも飲もうと起き上り、そして見慣れない景色に気付いた。

(ここ、どこだ?)

キョロキョロと周りを見渡す。

かわいい雑貨が並ぶ雰囲気からして、女性の部屋だということはある。

(もしかして、久しぶりにやらかした?)

サツと血の気がひいた。

20代前半の頃は、酔った勢いで会ったばかりの女の子と関係を持つことが多々あった。

一度だけ、その相手にしつこく執着されてひどい思いをしてから、やめていたけれど。

慌てて隣を確認するが、シングルの布団に人の気配はない。ほっとすると同時に、なんだか心にひっかかるものを感じる。

(なんか……藤崎がいた気がするんだけど……)

頭の整理をしようと立ち上がった時に、暗闇の中で部屋の隅にベッドがあることに気付いた。

まさか。

そおつと息を殺してベッドに近付き、壁に向かって眠る姿に声をかける。

「……藤崎……?」

「ん……」

ころん、とこちらに寝返りを打ったその顔は、間違いなく美雪だった。

痛む頭を駆使して、記憶の整理をする。

確か、自分は居酒屋を出た後に路上で眠ってしまったはずだ。

そして、何故か乗っていたタクシーに美雪がいた気がする。

さらに、辿りついたどこかのマンションで、美雪が「私の家」と言っただけ……

総合的に判断して、ここは美雪の家に間違いない。

しかし、どういいう経緯でこうなったのかがわからなかった。

なんで？ 平岡はどこに行った？

(そつだ、携帯……)

枕元に丁寧に置かれた上着のポケットから、携帯を取り出した。

『メール 1件』

すぐるようにメールを開く。

『大丈夫か？ ちゃんと帰れたか？』

平岡からの短いメールでは、大輔の疑問は何も解決しなかった。

「くそ……」

暗闇の中で小さく毒づいた。

この時間にメールを出しても、すぐに返事が来ることは期待できない。

天を仰いで携帯を放り投げ、半ばやけくそな気持ちで勝手にキッチンに行つて水を飲んだ。

冷たい水が喉を通りすぎていく感覚に、少し冷静な気持ちももどる。

大事なものは、美雪の同意のもとに自分がここにいいのかどうか。それなんじゃないか？

ふいに胸がドキドキと高鳴った。

身体の中にまだ残るアルコールが、自分を大胆にさせているようだ。

「……………美雪？」

そろそろとベッドに近付き、名を呼びながら軽く頬を撫でる。ぴくっと眉が動いた後、すり寄るかのように手の中に顔が収まった。

(こいつは……)

どうして大輔がここにいいのかはさっぱりわからなかったが、仮にも大の男を部屋に引き入れ、よくもこんな無警戒に寝ていられるものだ。

上司として、信頼されているから？

それとも、何とも思っていないからだろうか。

自分だったからいいものの、違う男だったらどうするんだ。

無防備なその姿に、むくむくと懲らしめてやりたいというような気持ちかわいた。

改めて室内を見渡す。

ベッドから、少しだけ離れたところに敷かれた布団。

枕元にたたまれたスーツの上着。

それは都合のいい解釈かもしれないけれど、大輔を受け入れている証に思えた。

少し考えた末に、ぽいつと衣服を脱ぎすてた。

まさかこのままスーツで寝る訳にもいかない。

もしかして、チャンスなのかもしれない。

一向に縮まらない距離に、諦めかけていたくらいだ。

これは、いちかばちかの賭けだ。

美雪の寝顔を見ていたら、少なくとも大輔が強引に迫ったのではな

く、ある程度の好意をもたれてここにいるような気がした。

覚悟が決まったら行動は早い。

ごく自然な体勢で狭いベッドに身を滑らせた。

「う……ん……」

起きるかと思っただが、美雪は軽く身をよじっただけだった。

そっと抱きよせてみても、何の抵抗もない。

眠りが深い方なのだろう。

すっばりと自分の腕におさまる感覚は、あまりにも心地がよかった。無意識なのか、ぺったりとこちらに体重を預けてくる様は、まるで子供のようなものだ。

柔らかい身体が、気持ちがいい。

あまりの反応の無さに再び眠気に襲われ、うとうと現実と眠りをさまよっていると、ふと腕の中の美雪が身体を硬くしたのがわかった。

（あ、気づいたか？）

数秒後、もそもそと自分から抜け出ようとする感覚がして、思わず腕の力を強める。

しばらくたってから、ためらうかのようにそっと声がかかった。

「しゅ、主任……」

うつすら目を開けて見下ろすと、真っ赤な顔で大輔を見上げている。

「……なに……？」

「あ、あの……誰だかわかってます？」

おかしい質問をするやつだと思った。

「ん、藤崎……だろ」

その名前をはつきり告げると、途端に身体がさらに硬くなる。しかし、もじもじとこちらを見上げる顔には大輔に対する嫌悪などは見られなくて、それが随分と自分をほっとさせていた。

かわいい。

素直にそう思う。

今までは思ったとしても態度に出すことができなかつたから、この状況がなんだか嬉しかった。

「あ、あの……」

「……まだ眠い……」

さらに続きそうな質問をやんわりと遮ると、硬くなつた身体をほぐすかのように柔らかい身体をゆっくりと撫でた。

眠くなると、何故だか相手をすりすりとお撫でまわしたくなる。

触られるより、触る方が好きだ。

マッサージのような動きに、美雪の身体から少しずつ力が抜けていくのがわかつた。

(本当……かわいいやつ)

いたずら心で背中より下に手を回そうとしたら、途端に身体が強張る。

ふっと大輔の顔に笑みが浮かんだ。

一線を越える気は、さらさらなかった。

酔った勢いでそういうことをするほど、経験が無い訳じゃない。

どちらかというと、美雪の反応が見たかったのだ。

もう少しこの状況を楽しみたかったけど、そろそろ眠気が限界だった。

仕事の疲れとアルコールの力は強大で、何より美雪から拒否されていないという安堵感が、さらに眠気を誘っていた。

「ダメだ……やっぱ……ねむ……」

残念。

もう少し、こうしていたかったのに……

明日、目が覚めたら……

絶対、俺のものにする。

「えっ？」

驚くような小さな声が腕の中から聞こえてきた直後、大輔は本格的な眠りについていた。

第63話 二度目の朝

美雪の家で迎える、二度目の朝。

最初のあの日と決定的に違うのは、二人が今は恋人同士ということ。随分とゆっくりと眠った気がしたが、大輔の隣の美雪はまだまだ夢の中だ。

ぷにっとなんて頬をつまんでみる。

「う……」

ぴくっとなんて眉をひそめたが、起きる気配はない。

あの日は、この寝顔を見ながらも何も手が出せなかった。

それだけになんともいえない征服感がこみあげ、自然と口の端がにやりと上がる。

起こしたいけど、起きてほしくない。

そんな子供のようないたずら心がわく。

軽く開いた口元に自分の唇を重ね、猫のようにぺろりと唇を舐めた。

「……………」

ぷっくりとした唇を、なぞるように舌を動かす。

抱き寄せていた腕に、少し力をこめて、摩るように腰のあたりを撫でた。

「ふ……………ん……………?」

瞼をひくつと震わせた後、ゆっくりと美雪が目を開けた。

「おはよ」

鼻と鼻とがくつつくくらいに近い距離で微笑みを浮かべ、わざと音を立てるようにちゅつとキスをした。

「お……」

一気に目が覚めたらしく、顔を真っ赤にして口元をわなわなと震わせている。

「な、何してるんですか!？」

「何って」

突き飛ばすような勢いで身体を離そうとした美雪を、ぐいっと引き戻す。

力で負ける訳なんかない。

「朝の挨拶」

「が、外人じゃないんですから!」

がっちりとホールドされた状態でも、なんとか抜け出そうとジタバタしている。

そんな美雪の様子にさらに嗜虐心がそそられ、抱き締めていた腕を艶めかしく動かした。

その動きに、彼女の身体がぴくつと反応する。

「ちょ……大輔さんってば！」

「何？」

いくら経験が無いとはいえ、その動作が意味することはわかるらしい。

「な、何もしないって言ったじゃないですかぁ……」

「何もしてないよ？」

身をよじって涙目で見上げる美雪を見ると、さらにいじめたくなる。

「俺、なんかしてるか？」

「は……!!」

必死でなんとか背を向けた美雪の白い首筋に、これ幸いとばかりに唇を落とした。

「少しずつでも、慣れてもらわないとなぁ……」

耳元でそう囁いてからパツと腕の力を緩めると、逃げ出そうともがいていた美雪がベッドから転げ落ちた。

「もっつ!!!!」

全力で怒る姿に、笑いがこみ上げる。

「はは。おはよう」

あらためてそう言って手を伸ばすと、一瞬ためらった後に美雪が大輔の手を取った。

その腕を少し強引にひっぱり、再びベッドへと引き入れる。

「おはよう……」といます……」

不貞腐れたような顔をしながらも、布団の中から上目づかいに美雪が言った。

「よく眠ってたな」

「大輔さんこそ」

くすくすと笑いながら、顔を見合わせる。

二週間前、お互いに牽制しあいながらベッドに座っていたのが嘘のようだ。

ついその類に手を伸ばして甲で軽く撫でると、うつとりと美雪が顔を寄せた。

「朝メシ、どっか食べに行くか？」

「あ、簡単なものでよかったら、私作りますよ」

するり、と美雪がベッドから抜け出す。

「寝ててもいいですから」

そう言いながら、美雪が大輔の額へと手を伸ばし、まるで子供にす

るように優しく撫でた。

(8つも年下のくせに……)

そう思いながらも、悪い気はしなかった。

美雪の用意した朝食を、向かい合って食べた。

バタートーストにハムエッグ、少しの野菜とコーヒー。

焼き立てのトーストはしゅわしゅわとバターが泡立ち、ハムエッグはまわりがかりっとしていいる。

簡単な朝食ではあったが、手を抜かずにきちんと作られている気がして嬉しかった。

「うまい」

「そ、そうですね？」

ぱっと花が咲いたように笑う。

「前みたいに外に食べに行ってもよかったですんだけど……やっぱりゆつくり家で食べれるのはいいな」

「あ、ありがとうございます」

『これからも家で食べたい』という遠まわしな牽制を感じるわけもなく、美雪が照れたようにもじもじと言った。

「今日の予定は？」

香ばしいトーストをあつという間に平らげながら、美雪に聞いた。

「えっと……特には、決まってるないです」

「一回家に帰らなきゃいけないけど……その後、どっか行くか？」

「大輔さん、仕事、大丈夫ですか？」

不安そうな顔をして、大輔の顔を覗きこむ。

「休日にわざわざ出勤するほどでもないよ」

そうは言ったものの、正直仕事の進み具合は芳しくはない。でも、2週間後の美雪の誕生日のために、来週は休日出勤も辞さないつもりでいたので、今週くらいは美雪と過ごしたかった。

「そう、ですか……」

「なんだよ？ 嫌ならいいけど」

わずかに顔をくもらせた美雪に、少し不安になる。

「ちつちが……あ、もう1枚食べますか？」

「うん」

立ち上がってパンをトースターにセットすると、再びテーブルにいた美雪がためらいがちに言った。

「嬉しいんですけど……大輔さん、今すごく忙しそうだし、負担になるのはイヤなんです」

伏し目がちに、コーヒーを啜る。

「負担って……そんなこと言ったことないだろ」

「それは、そうなんですけど」

大輔にとっては、美雪と過ごす休日が安らぎでもあることを、気づいてないらしい。

「来週はもしかしたら仕事になるかもしれないから。今週くらいは休みたいんだ」

「あ、そうなんですか……」

それはそれで淋しいのか、ちょっと残念そうな表情になる。

「淋しい？」

「べ、べつに……」

手を伸ばして、ぷいっと横を向いた美雪の頭をくしゃくしゃと撫でる。

「あんまり余計なこと考えるな。大丈夫だから」

ふと、転勤の話を出す。

きちんと考えて結論を出さなければいけないのに、つい後回しにし

てしまう。

大輔の手の下で赤い顔をした美雪を見つめながら、気づかれないようにため息をついた。

遅めの朝食の後、美雪の家を出て大輔の家まで歩く。

さり気なく美雪の手を取ると、無言できゅっとその手を握り返してきた。

小さくて、柔らかい。

「どこに行きたい？」

「えっと……」

困ったように美雪が考え込んでいた。

「あ、お前にはまだそんなレベルは無理だったか」

「ど、どついう意味ですか？」

ぷうつと口をとがらせて、大輔の顔を見上げる。

ベージュのミニスカートに、ピンヒールのブーツ。

黒いカットソーは胸元がやや広く美雪の細い身体にフィットしていて、実際の年齢より少しだけ大人っぽく見える。

最初のデートで、自分の姿を「幼い」と言った美雪だ。

大輔に合わせるために、彼女にとっては少し背伸びをしているのだろつ。

「なんか……変、ですか？」

じっと大輔が見つめていることに気づいたのか、慌てたように美雪が自分の姿を見下ろした。

「いや。胸元のあたりが気になるけど」

正直にそう言うと、美雪がハツとした表情でコートの前を掻きよせた。

「なんだよ、気にするくらいならそんな格好してくるな」

「だ、だって……」

またしても口をとがらす。

どんな格好をしていようが自分にとってはかわいいし、彼女が気にしている「幼い」ということだって、魅力のひとつでもあるのに。

“乙女心がわからない”などと反論されてしまいそうだから、そこは何も言わないけれど。

「あ、そうだ。理子への結婚祝い、まだ決めてなかったから……一緒に買い物に行ってくださいませんか？」

大輔のマンションが見えてきた頃、美雪がそう提案してきた。

「何買うか、決めたのか？」

「いえ、全然……。友達が結婚するのって初めてだし、何を買えばいいかわからなくて」

そう言いながら、困ったように俯く。

「俺も、そういうの疎い方だから、自信ないけど」

「一緒に行ってくれるだけでいいですから」

「そっか。じゃあ買い物行くか」

「はい！」

にこにこ美雪が笑った。

「そう言えば……結婚式、北海道でやるかもしれないって言った
した」

新郎の佐々木は、大輔と同じ北海道出身だった。

飲み会で話した時に、親類がほとんどあちらだと言っていたから、
その方が都合がいいのだろう。

「どうしてもジューンブライドにしたいらしくて……6月の北海道
は、梅雨もないからいいって」

「へえ……」

「理子が、よかったら大輔さんも一緒に式に出てくれませんかっ
て言っていましたよ」

「え、俺？」

突然の美雪の友人からの誘いに驚いた。

「ハイ。とりあえず今度、佐々木さんも交えて食事でもって」

「……考えておくよ」

確かに佐々木とは意気投合して盛り上がったが、まだ一度しか会ってないのに結婚式に出席っていうのも……

一瞬そう思ったが、美雪と一緒に北海道へ旅行できると思うと、なかなか悪くない気がした。

佐々木の友人粹というよりは、美雪の彼氏として招いてくれているのだろう。

“今度また飲もう！”

帰り際佐々木と交わした約束は、半分くらいは社交辞令のつもりだったが、近々実現させた方がいい気がした。

「6月か……じゃあその時、一緒に俺の実家に行くか？」

「えっ！！」

大輔の手を力強く握り締めながら、美雪が目をまんまるにしてこちらを見上げた。

「……そんなに驚くことないだろ」

「え、あ、いや、そうですね……い、いいんですか？」

何気なく言った一言に過敏なまでの反応をされ、なんだか腑に落ちない。

「……お前が嫌なら、別に行かなくてもいい」

「いっいえ！ 行かせていただきます！」

ぴんと美雪が背筋を伸ばした。

「あ、あの……そういうの、初めてなんで……びっくりしたというか、なんというか」

「まだまだ先だろ」

「そ……そっか。まだ……半年もありますもんね」

ぼんぼんと頭を軽く叩くと、ほんの少し顔を赤らめながらも美雪が柔らかく笑った。

そう言えば、しばらく実家に帰っていない。

こここのところの仕事の忙しさや転勤のことを考えると、きっと6月前に帰省することは難しいだろう。

(いきなり美雪を連れて帰ったら、驚くだろうな)

今までは意識的に避けていたそういうことが、楽しみに思えるのが不思議だった。

「あれ……」

大輔の部屋に入ると、玄関で美雪が呆然とした声をあげた。

「どうした？」

「どうしたって……この前からそんなにたつてないのに、随分散らかりましたね」

「どうやら大輔の部屋の散らかり具合に驚いているらしい。」

「そうか？」

「そうか？ って……この部屋の状態、会社の女の子たちが見たらびっくりですよ」

「何気にキツイことを言う。」

「ふんつと無視してクローゼットのある部屋に行くと、ぱたぱたと部屋を歩きまわる音が聞こえた。」

「いいって。片付けなんかしないで」

「あ、触らない方がよかったですか？」

「部屋から顔を出してそう言うと、美雪が慌てて手に持っていたお菓子やつまみのゴミを手放した。」

「そういう意味じゃなくて……そんなこと、いいよ。お前だつてせっかくの休みなのに」

「でも……」

「その顔にはありありと、『このままでは落ち着かない』と書いてある。」

前回連れてきたときもはつきりそう言われて、黙々と片付けをされてしまっていた。

意外と頑固なところもあるし、言っても聞かないだろう。

「……いいけど、出かけるまでな」

「あ、はい！」

半ば諦めてそう言つと、嬉しそうに片付けを再開しました。

大輔にとっては面倒で仕方ない作業を、嬉々としてやるのが理解できない。

昨日から着ているスーツをハンガーにかけ、ワイシャツとTシャツを脱ぐ。

シャワーを浴びようと、ついいつもの感覚で上半身裸のまま脱衣所に向かった。

「わっ！！」

キッチンでゴミ袋を出していた美雪が、大輔を見てなんとも色気のない声をあげた。

「な、何してるんですか？」

「何って……シャワー浴びるんだよ」

不審に思いながら、棚からバスタオルを引っ張り出す。
ふと美雪に目をやると、耳まで真っ赤だ。

「……何？ 恥ずかしいの？」

「ひゃっ！」

腕を伸ばし、背中側から美雪の首に手を回し抱き締める。

「ちょ、大輔さん！」

「なに？」

恐る恐る大輔の腕に触れながらも、どうしていいかわからない様子を見てると、ついからかいたくなる。

何も着ていない身体の、直に美雪を感じる。

まわした手で耳をすりすりすると、ぴくつと顔を震わせた。

顎に手を添えて無理矢理こちらに向かせると、頬を赤くしながらも上目遣いで見つめてくる。

『やっぱ、今日出かけるのやめるか？』

昨日の決心が脆くも揺らぎそんな言葉を言っつてしまいそうになったとき、居間に置きっぱなしの美雪の携帯から軽やかなオルゴール音がした。

「あ、メール！！」

ハッと気づいたように言うと、助かったとばかりに慌てて大輔の手をふりほどく。

ほどこかれた腕が、行き場をなくす。

「……シャワー、浴びてくるから」

「はっ、はい！」

照れかくしもあるのだろう。

誰からのメールかはわからないが、真っ赤な顔で携帯を握りしめている。

邪魔が入ったことを少しうらめしく思いながらも、風呂場へと向かった。

第64話 Wデート・1

「メール、誰から？」

シャワーを浴び終えて頭をタオルで拭きながら、聞いてもわからないかもしれないのに、つい聞いてしまう。

「え？ あ、ええと尚美です」

あっさりと答えてくれたことにほっとしつつ、尚美尚美……としばらく考えて、ああ、と気づく。

「ナイチンゲールか」

「ふふっ、そうです」

シャワーを浴びて出てくる間の短時間だが、見渡すと部屋は随分すっきりしている。

自分も、こまめにこれだけ片付けられたら、そんなに汚くはならないはずなのに。

わかっていても、できないものは仕方ない。

「尚美ちゃん、なんだって？」

「今どこで何してる？ って」

「ふーん。で、なんて返したの？」

「え……あの、大輔さんの家に居て、後から出かけるところって…

…」

なんてことのないやりとりだったが、なんだか心にひっかかるものを感じた。

「……尚美ちゃんちって、どこ？」

「うーんと……どの辺だったかな。住所的には、うちからそう遠くはないですけど……」

その言葉を聞きながら玄関まで歩いていき、細くドアを開けて下の様子を伺った。

マンションの入り口前に、見覚えのある車が一台。

嫌な予感が的中した。

「え？ 大輔さん??」

濡れたままの髪にもかまわず手早く上着を羽織り、美雪を置いて玄関を飛び出し急いで階段を降りた。

「わお〜！ 大輔！」

そう言いながらにやにやと車から降りてきたのは、小林だった。

「お前……なんでここに」

テンションの高い小林に怯みながらそう言うと、助手席のドアがガチャッと開き、慌てたように女性が降りてきた。

「尚美！」

慌てて大輔を追いかけてきた美雪が、階段の上の方から声をかけてきた。

「ごめんなさい、松沢さん、美雪。小林さん、声大きい！近所迷惑！」

尚美が“しゅ！”と口元で指を立てたが、全く反省のしていない様子の小林がアハハと笑った。

「……何しにきた？」

心底嫌そうな顔を小林に向けてみたが、悪びれる様子は全くない。

「デートしようぜ！ Wデート！」

“ねっ！”と可愛らしく首を傾げているつもりらしいが、まるで可愛くはない。

むしろそんなふざけた様子に、不機嫌がMAXになる。

大輔の顔を見た尚美が、ひきつったような顔をして後ずさった。

「こ、小林さん……お邪魔みただし、ホラ、帰りましようよ……」

「え、どうして？ 人数多い方が楽しいって、尚美ちゃん言ったたでしょう？」

ようやく大輔の隣に並んだ美雪が、なんだかわからないといった表情で小林と尚美に目を向ける。

「一体どうしたの？ 尚美」

「あ、いやあ……」

無愛想な大輔を前にしてか言いよどむ尚美に変わり、そんな大輔な
ど見慣れている小林が美雪に声をかけた。

「美雪ちゃん、今日なんか予定あった？」

「え、あ、買い物に行こうかと思ってましたけど……」

そう言っただけでちらりと大輔の様子を伺う。

「あの、でも、絶対そうしようって決まってた訳じゃないです」

「じゃあ良かったら俺たちとWデートしない？ なんなら予定通り
買い物でもいいし」

「あ、そういえば……理子の結婚祝いを探しに行こうと思ってたの
で、尚美がいた方がいいかも」

「ホント!？」

小林が目をキラキラさせたのと対照的に、大輔の顔は苦虫を噛み潰
したようだ。

「はい。いいですよ……ね？」

当たり前のような顔で見上げられては、何も言えない。

「……………ああ」

「え、いいんですか？」

ため息をつきたい気持ちをぐっとこらえてそう言つと、尚美が驚いたような顔で大輔をマジマジと見つめてくる。

突然のことでイラ立ったとはいえ、美雪の友人に気をつかわせてしまったことを反省した。

「うん。でもまだ何も用意できてないから、少し待ってて」

尚美に優しく笑いかけてから、くるりと背を向けて階段を上り始めた。

「あ、私もバッグとコートとってくる。待っててね」

慌てて美雪が大輔の後を追った。

ボタン。

少し乱暴にドアを閉めて、ドスドスと居間に向かって歩く。

「あの……………大輔さん……………」

背後から、すまなそうな声がかかった。

「……………何？」

無愛想な顔で後ろを振り返った。

「お、怒ってます?」

「別に」

シャワーを浴びたばかりの髪は、まだ少し湿っている。

オロオロと立ちすくむ美雪を余所に脱衣所に向かいドライヤーで髪を乾かしていると、身支度を整えたらしい美雪がそろっと脱衣所を覗いた。

「あの……本当に怒ってないですか?」

「……」

それを聞いたところで、どうするつもりなのか。

美雪は、突然やってきた自分の友達と大輔の友達に気を使っただけで、腹を立てるなんて大輔の方が間違っている。

でも、やっぱりイライラする。

カチツとドライヤーのスイッチを切った。

「怒ってるよ」

「……」

怒っているかと聞いたのは自分のくせに、ハッキリ答えると彼女はショックな顔をした。

「……ごめんなさい……」

しょんぼりとうなだれ、大輔にぺこりと頭を下げる。

「どうして謝る？」

「だって……尚美に“大輔さんの家にいる”なんてメールしたから……」

「普通はこんな展開になるなんて思わないだろ。それに、けしかけたのは間違いなく小林だよ。尚美ちゃんは悪くない」

「で、でも、一緒に行ってもいい、なんて勝手に返事しちゃったし……」

「尚美ちゃんの気持ち考えたら、あの場ではああ言うしかない。むしろ俺は自分の友人が情けない」

「……」

美雪は、俯き加減で唇を微かに唇を噛んでいる。そんな顔をさせたい訳じゃないのに。

「お前のせいじゃない」

「……でも」

「わかってるんだけど」

そう言って、美雪の腕を素早くとりバンザイの姿勢で壁に力強く押

し付けた。

「ムカつくんだ」

子供じみた嫉妬にかられる、自分自身に。

「……今日くらいは二人でいたいと思ってたのは、俺の方だけ？」

壁に押し付けられた美雪が驚いたように目を見開く。
そして、間近で見つめたその瞳が、揺れた。

「ち！ 違い、ます……けど」

「けど？」

真っ赤な顔でぱくぱくと口を開けてはいるものの、言葉が出てこないようだ。

首元のネックレスのダイヤに、唇を落とす。

「けど、なんだよ？」

美雪の首元に顔を埋めたまま、低く囁く。

「……あっあの……下で、二人が待ってますから」

やっと出てきた言葉は、余計に自分を煽るだけだった。

「ほー、そうですか」

「え？」

「俺は別に遅くなっただってかまわないけど？ 二人が呼びに来たっていいし」

「そ、そんなっ」

じたばたと手を動かしてはいるが、離してやるつもりはない。

意地の悪いことを言っているという自覚はある。

でも、止められない。

むしろ、もっと困らせてやりたいと思う。

(いつそのこと……)

掴んでいた腕をひとつにまとめ、片手で頭の上の壁に押し付ける。

そうして空いた方の手を、美雪の胸元へと伸ばした。

しかし。

「ご、ごめんなさいごめんなさいごめんなさいっ!」

まくしたてるような言葉に、手が怯んだ。

「……だから、お前のせいじゃないって言ってるだろ」

「だって……大輔さん、怒ってるじゃないですか。どうすれば……許してくれますか？」

そう言って、涙目で大輔を見上げた。

そもそも許す許さないの話ではないし、泣かせたい訳でもないのはあーっとため息をつき、頭をガシガシと搔いた。

「……じゃあ、お前からキスしてくれたらいいよ」

「へっ?」

「ほら」

そう言って、顔を突き出す。

間近に迫った大輔の顔を、美雪は目を見開き見つめてくる。

「ほら、急いでるんじゃないのか?」

「そっ、それは……そうですけど……」

「あ、無理ならやっぱり」

今度は太腿に手をまわすと、

「わっ、わかりましたからっ!」

焦ったようにそう言って、美雪はぎゅっと目をつぶった。

どうせ、無理矢理唇を押しつけるようなキスしかできまい……

そう思ってニヤニヤとしていたのに。

予想に反して、ゆっくりと丁寧に、大輔の唇に美雪の小さな唇が触れた。

ためらいがちに触れた唇は、かすかに震えていた。そして、熱い。その柔らかい感触が静かに離れていくことに、どうしようもない寂しさが襲う。

自分の幼稚な嫉妬を誤魔化したくて、美雪の困った顔がみたくて、そんな気持ちでふっかけた要求だったのに。大輔の体温が、一気に上がった気がした。

「……終わり？」

「えっ？」

ぱちつと目を開いた美雪が、驚いた顔をしている。

「もう、終わり？」

「え、あ、えと……」

「じゃあ俺からしてもいい？」

返事を待たず、大輔の方から貪るようなキスをした。

この小さな唇を、飲み込んで自分の物にしてしまいたい。

そんな気持ちだった。

今まで何度も交わしてきた軽いキスとは違うことを、美雪だって気づいているはずだ。

息を吸うために僅かに開けられた唇に舌を滑り込ませたが、どうしたらいいのかわからないのか、抵抗もなく大輔のなすがままだ。

もう止まらないかも。

ていうか、止める必要あるのか？

そう思った時、美雪の足元に置かれたバッグから携帯の着信音が流れてきた。

ついさっきまで惚けたような顔をしていたのに、ハッとしたようにジタバタとし始める。

「だっ大輔さん！ 離して！ 電話です電話っ！」

「……知ってる」

「で、出ないと！ 尚美かも！」

「うん」

「は、早く……！」

仕方なく手を離すと、慌てて屈みこんで携帯を取り出した。

「い、ごめんっ……じゅ、準備に手間取っちゃって」

やっぱり尚美だったようだ。

なかなか降りてこない大輔と美雪に、業を煮やしたのだろう。

ちっと舌打ちをして壁にもたれかかり、足元にしゃがむ美雪を見下ろしていた。

「あ、大丈夫だって！ ちょっと、探し物してただけで……」

髪の間隙からのぞく美雪の白い首筋をそっと人差し指でなぞると、びくっと身体を強張らせて、頬を赤らめながらも顔で睨むようにこ

ちらを見上げてきた。

「すぐ行くから！ 待っててね」

ピツと電源ボタンを押したかと思うと、ザザーッと大輔から遠ざかった。

「もう行きますよー！」

「……わかってるって。なんでそんなに離れる？」

「だ、だって……身体に力が入らなくて、へによってなっちゃうからー！」

へによ？

美雪らしい表現に、ぷつと吹き出してしまった。

「くっ……あはは」

「もー！！ 先に行っちゃいますよー!？」

「悪い悪い」

ソファに放り投げてあったジャケットを手にとり、玄関に向かった美雪の後を追う。

先に行ってしまったいのだろうが、慣れないヒールのブーツを履くのに手間取っているようだ。

その後ろ姿に近づき、背中を曲げてうなじに唇を落とした。

「！！！！」

バツと首を抑えて、振り向く姿がまた笑える。

「もう、本当にダメ！」

「あはは、ホラ行くぞ」

ぽんぽんと頭を叩き促すと、真っ赤な顔をして口をとがらす。

「そんな顔してると、尚美ちゃんに疑われるぞ」

「う、疑われるって……誰のせいですかあ！」

笑いながら階段を下りると、待ちきれないのか車の外で手を振る小林と尚美が見えた。

第65話 Wデート・2

結局、大輔の意に反して、4人で買い物に出かけることとなってしまった。

運転手は、大輔。

何故か助手席には、小林。

美雪と尚美は、後ろの座席でガールズトークに花を咲かせている。

どうして、こうなってしまうのか。

イライラを通り越し、うんざりとした気持ちでため息をつく。

「どうせなら1台で行きますか？」

そんな美雪の申し出を小林と尚美は喜んで受け入れ、必然的に大きい方の大輔が車を出すことになった。

だからといって、いくらなんでも美雪が後ろに乗ることはないだろう。

さっさと尚美の隣に乗り込んだことに、一番驚いた顔をしていたのは尚美だった。

美雪は、こういうところの気は利かないらしい。

「結婚祝いつて、どんなものがいいのかな？」

「んー、圧力鍋とか？」

「えー、理子、使っかなあ」

車を止めたショッピングモールで、わいわいと話をしながら歩く二人の後を、小林と一緒に歩く。

「どんなものかいいと思います?」

くるりと美雪が振り返って、大輔に声をかけた。

「は? …… っていつか結婚祝って、結婚式のとくに渡すもんじやないの?」

「そうかもしれないですけど……とりあえず、お祝いの気持ちを表したいってどうか」

ねえ、と美雪と尚美が顔を合わせる。

(女ってこういうの好きだよなあ……)

申し訳ないが、友人の結婚祝いに現金以外は贈ったことがない。隣の小林に話をふるうとして、はたと気づいた。

「美雪!」

「はい?」

「俺ら……あんまりいても意味ないだろうから、ちょっと小林と家電見てくる」

前を歩く美雪に声をかけると、驚いたように振り向いた。

「そっちの買い物が終わったら、携帯に電話して」

「えっ……ど、どうしてですか?」

「理子ちゃんに贈るなら、女の子同士で決めた方がいいだろ？」

「そ、それはそうかもしれないですけど……」

慌てて大輔のもとに駆け寄り、何うようにちらりとこちらを見上げる。

「あの、退屈ですか？」

「違っつて」

軽く笑いながら、不安そうな顔をしている美雪の頭をぽんと叩いた。

「怒ってる訳じゃない。マジで見たいものがあるんだ」

「松沢さん、家電男子だったんですか？」

尚美のコメントに微妙な笑顔で答えながら、小林を促す。

「悪い、付き合っつて」

「お、おう」

美雪と尚美に背を向けてスタスタと歩きだすと、二人から大分離れたところで小林がぽつりと言った。

「大輔、もしかして結婚祝い選びだからって……俺に気い使っつてくれたの？」

「……」

「いいのに。俺、もう離婚のことは笑いのネタにできるくらい立ち直ってるよ?」

ちらりと小林に目をやるが、強がってるようにも見えなかった。かといって大輔の配慮を迷惑だと思った訳でもないらしく、わずかに感謝の色をにじませている。

「言ったのか? 尚美ちゃんに。バツイチだってこと」

「んー、まあ一応……」

小林が、はあっとため息をつく。

「驚いてたよー。ハタチそこそこの女の子には、ちょっとショックだったみたい」

「そりゃそうだろうな」

「……子供もできなかつたし、感覚的には付き合ってた彼女と別れたくらいって言ったら、ひいてた」

「お前、そんなこと言ったの?」

呆れてマジマジと小林の顔を見つめてしまう。

「“そんな簡単に、結婚とか離婚とかできるんですか?” だって」

そう言って、はははっと乾いた笑いを響かせた。

「……そんな簡単なもんじゃなくて、そりゃ色々大変だったんだけどさ……。深刻に思っただけじゃなくてそう言ったのに、逆効果？ みたいな」

「尚美ちゃん、しっかりしてそうだし、前途多難だな」

「そこにひかれたただけだね」

明るく前向きではあるがどこか抜けたところのある小林には、しっかり者の尚美は合っているように思えた。
友人の新しい恋が、上手くいくことを願わずにはいられない。

「なーなー、大輔」

「なんだよ」

「あのさ……感謝してるから」

家電コーナーへと向かいながら、小林が照れたようにぼそつと言った。

「は？」

「勢いでデートの約束したのはいいけど……どうも緊張しちゃってさ」

小林が小さくため息をつく。

「お前でも緊張するなんてこと、あるんだな」

「そりゃあ、あるさ。俺、今は慎重派だし」

大輔の言葉に、小林が自嘲気味に笑って見せた。

「もしかして、久しぶりのデートだった？」

「まあ……な」

久しぶりどころか、正式に付き合っようになってからは初のデートだとは、とても言えない。

「美雪の誕生日を聞いてくれたから、その借りだな」

「あ、そういえばどこ行くか決めたの？」

「んー……まだハッキリとは。美雪には何も言ってないし」

「そう言えば、学生時代はよく遊園地とかテーマパークとかに行ってたらしいよ。美雪ちゃん、女の子チックな夢のある場所が好きなんだって」

思いがけず、いい情報だ。

「サンキユ。参考にする」

候補の一つではあったが、少し遠いテーマパークに泊まりで行くのがいいかもしれない。

そう思いながらも、ショッピングモールに併設されている家電ショップに、二人で足を踏み入れた。

「家電って、何見たかったの？」

「んー、せっかく今までより広いところに引越したんだしな……色々と」

今日の朝、美雪の家で食べさせてもらったトーストが脳裏に浮かぶ。そういえば、大輔の家にはトースターすらない。買ってもしいかも思えないと思いつつピンからキリまでの商品が並ぶトースターを眺めながら、ふと足が止まる。

(でも、また春には引越するかもしれないのか……)

もし転勤が決まり引越すなら、今は買い替えない方がいいのかもしれない。

「何？ どした？」

「あ、いや……」

「っていうかさ、今は買い替えない方がいいんじゃないの？」

その言葉にぎくっとして小林を見た。

「な、なんでだよ？」

「ホラ、“結婚”とか！」

ああ、そっちのことか。

思わずぽつと胸を撫で下ろす。

「それは……まだまだ先だろ」

「あれ？ そうなの？ 意外と慎重派……」

転勤の話が出ていることを、小林に話そうかと迷った。

（いや、でも小林が尚美ちゃんに話して……美雪の耳に入らないとも限らないし）

「大輔？ どうした？」

「いや、なんでもない……」

結局、何も買わずにブラブラと見ていると美雪と尚美からの電話が入った。

それぞれのいる場所の中間あたりにあるコーヒーショップで、待ち合わせをすることにする。

コーヒーショップに行くと、甘そうなホイップクリームに乗ったコーヒーが、美雪と尚美の前に置かれていた。

夢中で話している二人のそばに、めぼしい荷物は見当たらない。

「何か買えたのか？」

カウンターで受け取った“本日のコーヒー”を手に、向かい側に腰を下ろす。

「それが……」

そう言っつて美雪が口をつぐんだ。

「やっぱり私たちだけじゃ決められなくて……どうせならみんなに声をかけて、お金を出し合っつていいもの買おうかっつて」

美雪の代わりに、尚美がそう言っつた。

「大輔さんは、買わなかつたんですか？」

手ぶらで戻つてきた大輔と小林に、美雪が不思議そつな顔をする。

「ん？ トースター買おうかと思っつたんだけどな。どうせならお前も一緒に選んだ方がいいかと思っつて」

「え、どうしてですか？」

大輔の言葉に、驚いたように美雪が目を見張つた。

「お前が使っつこともあるだろ」

半分以上は、本音でもある。

「あつ、そ、そつです……ね……」

慌てたように、美雪がごくごくとコーヒーを飲む。

「いいなあ、美雪。愛されてるねえ……」

尚美が、うらやましそつな視線を美雪に投げていた。

「あ！ 俺の家のレンジ、尚美ちゃん選ぶ！？」

「……結構です。そういうとこ、軽いんですよえ」

身を乗りだした小林に向かって、はあーっと深いため息を尚美がつき、大輔と美雪は思わず顔を見合わせて笑っていた。

昼食や他の買い物を終えて、再び大輔の車に乗り込むころには日が傾いていた。

「あ、さくらと結衣、明日空いてるって」

相変わらず後部座席に乗り込んだ美雪が、携帯をいじりながら尚美に声をかける。

「明日、私は午後からなら空いてるけど……美雪は大丈夫なの？」

「うん！ 平気だよ」

明日？

ということとは、明日も友達と買い物に出かける気か。

やれやれ。

後ろの会話に耳を済ませながら、落胆を隠してエンジンにキーを差し込む。

(本当に、コイツは俺と付き合ってるって意識あるのか?)

むくむくと苛立ちと不安の混じった気持ちかわいてくる。

「じゃあまたね〜！ お二人さん」

「突然すみませんでした！」

大輔の家につき、小林の車を見送りながら隣で無邪気に手を振る美雪を横目で見ていた。

「え？ どうしました？」

大輔の視線に気付いた美雪が、きよとんと首をかしげる。その態度に、イラツときた。

「……………どうしました、だ？」

突然向けられた鋭い視線に、彼女がひつと小さな声をあげる。

「え……………あの……………た、楽しかった……………ですよ？」

「は？」

楽しかった？

思いがけない言葉に、驚いた。

大輔の驚きを知ってか知らずか、遠くに消え去る小林の車を見つめながら、美雪が言った。

「私、Wデートっていうの、初めてで」

「……………へー」

大輔の冷たい言い方に、ぷうつと頬を膨らます。

「そりゃあ大輔さんは、こんなこと経験済みでしょうけど」

「まあ、一応はな」

「学生時代、こういうの憧れだったんですね。友達同士が彼氏と一緒に出かけるの、いいなあっていつも思ってた」

何かを懐かしむような顔をしながら、にこっと笑った。

「だから、今日は短大時代の友達と一緒に出かけられて……すごく嬉しかったです」

「……」

イライラとささくれだっていた気持ちが、すっと静まるような気がした。

「大輔さんは、あんまり……団体行動とかって、好きじゃなかったですか？」

「……お前が楽しかったなら、いいよ」

ぼつりと呟き、情けない気持ちで隣の美雪を見つめた。

今日のWデートを、何故もっと楽しめなかったのか、そんな後悔が襲っていた。

気が小さいのは、自分の方だ。

二人の関係は、美雪に合わせてゆっくり進めようと思っていたのに

「……悪かったな」

「え？ なんですか？」

風のせいで聞こえなかったのか、美雪が大輔の顔を覗くように見上げた。

「……なんでもない。寒いな」

「そうですね」

ぴゅうつと北風が吹き、美雪が縮みあがってコートの前を寄せた。

「うち、上がってください？」

「えと……ハイ！」

ほんのり頬を赤らめながら、美雪が大輔の手を取った。その手を強く握り締めながら、マンションの階段をゆっくりと上った。

第66話 突然の来客

週が明けて、また仕事に追われる日常が始まった。

日曜日は結局美雪と会うこともなくダラダラと過ごしてしまったが、そのせいか仕事の疲れは随分と取れた気がする。

今週は、お互いさらにハードな1週間になりそうだった。でも、それも仕方ない。

仕事が終わってから電話をしたり、たまに時間があえば夕食を外でとったり、そんな些細なことが日々の糧となっていた。

週の半ば、課長と簡単な打ち合わせをしていると美雪から声がかかった。

「主任、総務課から内線で……お客様が見えているそうです」

「俺に？」

今日は取引先や業者との約束はない。

営業課時代とは違って、今はアポなしで突然の訪問などほとんどない。

「誰だっけって言った？」

「それが……こっちに向かったからって」

美雪が受話器を戻しながら、困惑した表情を向けてきた。

アポなしなのに、こっちに向かっている？

思わず眉をひそめたとき、

「松沢！」

フロアの入口から、大きな声が響いた。

「つ、辻さん！」

姿を見せたのは、大輔が入社したての頃営業課で指導係として世話になった、辻信二つじしんじだった。

慌てて立ち上がると、まっすぐに大輔と課長の元へと歩いてきた。

「笹谷課長、お久しぶりです」

「久しぶりだね、辻くん」

課長が差し出した手を、辻ががちりと握った。

「突然すみません、本社に用事があったもので」

「いや、こちらはかまわないよ」

美雪や成田が、不思議そうな顔でこちらを伺っているのがわかった。辻が大阪に異動になったのは成田が入社した時期とほぼ同時期のため、彼女たちが知らないのも無理はない。

「どなたですか？」

「ああ……前に営業にいて、大阪支社に異動した辻さんだよ」

山田が説明している声が聞こえる。

本社にいた頃はかなりの実績を上げたやり手だったために、古い人間で彼を知らないものはほとんどいなかった。

「松沢さんと久しぶりに話したいんですが……ちょっと時間、いいですか？」

辻が、そう言っつて課長に伺いをたてた。

「松沢くん、どうだ？」

「はい、大丈夫です」

新人時代を思い出し、つい背筋が伸びる。

「今の時間なら、第2会議室が空いてるんじゃないか？」

フロアにも簡易的な応接スペースはあるが、会話はほぼ筒抜けになる。

事情を知っている課長が気を利かしてくれたのだろう。

「そうですね。ではそちらで」

先に立って歩こうとすると、バシッと背中を叩かれた。

「いてっ！！」

「お前、すっかり一人前になったなあ！」

ニツと歯を見せて笑う姿は、数年前と全く変わっていない。背が高くがっしりとした体型で、真っ黒い髪を営業マンらしくさりげなく流している。

会うのは久しぶりだったが、相変わらず気さくで人を惹き付ける魅力のある人だ。

緊張していた気持ちが緩み、大輔の顔に笑顔が浮かんだ。

「まあ座れよ。って、俺もう部外者だったか」

にやっと笑いながら、辻が会議室の椅子にどかっとな腰をおろした。

「松沢、いつの間に情報課に異動したんだ？ 驚いたぞ」

「あー、去年……じゃなくて、一昨年の春ですね。ちょっと、声かけていただいて」

「大体は総務課で聞いてきたけど。お前の希望って訳じゃないんだな」

「まあ……はい」

辻がわざわざ大輔を訪ねてきた理由は、検討がつく。つい、歯切れの悪い返事をしていた。

「どうですか？ 大阪」

「うん？ それは仕事の話か？ それともプライベートの話か？」

「とりあえず、後者で」

「はははっ。まあ俺は元々あっち出身でもあるし、それなりに楽しくやってるよ」

「その割には、関西弁じゃないんですね」

「こっちに来るとなあ。自然に戻っちゃうんだよ」

笑うと浮かぶ目じりの皺が、以前より深くなったようだ。時の流れを感じる。

でもそれは、決して辻を老けて見せる訳ではなく、むしろ親しみやすさを与えているような気がした。

「呼び出した理由を何も聞かないところを見ると……聞いてるんだな？」

「……はい」

誤魔化しても仕方ない。

辻の顔を見ながら、はっきりと答えた。

課長から転勤の話が聞かされてから、もう数日が経過している。でも、自分の中で答えを出すことも出来ず、当然美雪にも話すことができないでいた。

「……で？ 少しは前向きに考えてくれるのか？」

「相変わらずストレートですね」

「そりゃそうだよ。こう見えても必死だよ」

はははっと笑いながら、辻がバッグの中から資料を取り出した。

「これが、今の大阪支社の現状だ。正直、営業の成績はよくない」

手渡された資料に、ざっと目を通す。

確かに、数か所ある支社の中でも成績が落ち込んでいるのはあきらかだった。

「松沢」

渡された資料を真剣に見つめる大輔に、辻がまっすぐに向き直った。

「俺と、もう一度一緒に働いてみないか？」

その真剣なまなざしに、言葉が詰まった。

まだ答えを出せていない大輔に、その視線は鋭く突き刺さるようだ。

なんと答えようと口を開きかけた時、“コンコン”と会議室のドアをノックする音が聞こえて、ハッと我に返った。

「はい」

慌てて立ち上がりドアを開けると、そこにはトレイにコーヒーを載せた美雪が立っていた。

(マズイ、もしかして聞かれた?)

一瞬、自分の顔に、動揺が走ったのがわかった。
しかし美雪は、きよとんとした顔をして微かに首をかしげている。

「あの……？コーヒーお持ちしました」

「あ、ああ……ありがとうございます」

ドアを開けて入りやすいように抑えると、スタスタと美雪が会議室へと足を踏み入れた。

「どうぞ」

カチャリ、と小さな音を立てながら、辻の前に静かにコーヒーを置く。

「ありがとうございます。若いね。新人？」

「あ、ハイ……1年目です」

きこちないながらも、最近身に付けた営業スマイルを浮かべている。

「あの……大阪支社の方、ですか？」

美雪には珍しく、初対面の辻におずおずと話しかけた。

「うん。まあ、何年か前までは本社にいて、松沢の指導係だったんだよ」

「え、そうなんですか？」

何も知らない辻がニコニコと笑顔で美雪の質問に答えると、指導係という言葉に興味を持ったのか、美雪が途端にキラキラとした目で辻を見つめた。

「そうそう、こんな偉そうで無愛想なやつにも、新人時代ってのがあつたんだよ」

「無愛想だなんて……そんなことないですよ？ 皆に慕われてますし」

「そうなの？ それは俺の指導の賜物かな〜！ こいつを連れて営業に連れてくと、先方の女性社員の食いつきがよくてね。俺も随分といい思いをさせてもらって……」

「辻さん!!」

いくらお世話になった先輩と言えども、余計なことはいわれないで欲しい。

軽く睨みつけると、辻はバツが悪そうに笑った。

「藤崎、ありがとう。戻っていい」

「あ……ハイ」

間に入って美雪に声をかけると、何故だか残念そうな顔をしている。

「失礼しました」

トレイを抱えたままぺこりと頭を下げ、ちらりと大輔の方を見ながら会議室を後にした。

パタン

美雪がフロアへ向かうのを確認してから、しっかりとドアを閉める。

「可愛い子だなあ」

思わず辻のことを盗み見てしまったが、特に意味はないようだ。

「……女性社員の食いつきって何なんですか。そんなんで大阪に呼ばれても、嬉しくないですよ」

「冗談だよ。まあ事実だけだな」

コーヒーに砂糖を入れて、静かにすすっている。

「話を戻そう。で、考えてくれてるのか？」

美雪の登場で中断していた話を、すぐに戻された。

「考えてはいますが……すみません。まだ結論が出せません」

辻相手に、嘘はつけない。だから、正直にそう言った。

「何もずっと大阪にいろと言ってるわけじゃないんだぞ」

「そうですが……俺、情報課に異動になった時も同じようなこと言われて」

「はははっ。約束の期間が終わって、蓋を開ければ“大阪異動”っ

てか。まあ確かに……2年後3年後のことなんて、誰にもわからないか」

軽く笑いながら、辻がコーヒーを飲んだ。

正直にそう言ってくれただけ、まだマシなのかもしれない。

「こつちに残りたい理由でもあるのか？」

「え？」

突然ながら大輔の核心をつく言葉に、コーヒーカップを持つ手が止まった。

「お前、田舎は北海道だったよな。ここに、そんなに思い入れがあるのか？」

「そういう訳では……」

「女か」

“違う”とも“そうだ”とも言えず、思わず沈黙する。

「あれ、まさかまだ総務課の子と付き合ってるんか？」

「……いつの話ですか、それ。辻さんがいる間に、とっくに別れます」

呆れた顔でそういうと、辻が申し訳なさそうに笑った。

「そうか。最近忘れっぽくてな」

「奥さんと子供さんは、お元気ですか？」

大阪に転勤になった後、元々付き合っていた女性と結婚して子供が出来たと八ガキをもらっていたことを思い出した。

「おー。3歳の生意気盛り。ホント困るわ」

困る、と言いつつも、目尻は下がってすっかり父親の顔だ。辻のそんな顔を見たのは初めてで、なんだかこちらまで微笑みが浮かぶ。

そんな大輔の様子を見ながら辻が言った。

「連れて行けばいいんじゃないか？」

「え？」

突然の言葉に、なんのことかわからず聞き返す。

「もし、お前が転勤に躊躇する理由が女なら、さ」

“連れて行く”

全く考えもしなかった発想に、思わずぽかんと口を開いた。

「っ、連れていく？」

「おお」

大輔の反応が面白いのか、辻が椅子にふんぞり返った。

「……」

「なんだよ？ お前みたいな男に『ついてきてくれ！』って言われ
たら、誰でもついてくるって」

「いや……そういう問題じゃ」

「連れていきたいほどの女じゃないのか？ なら別れてもいいだろ。
あっちにもイイ女はたくさんおるぞ」

「……まだ付き合ってから日も浅いので」

「そうか、やっぱり女か」

ぐっと言葉に詰まる。

どうやら、辻に乘せられてしまったらしい。

なんと説明しようかと、ガシガシと首を掻いた。

「辻さん、ちょっと待ってください。俺は、大阪に行かない理由は
彼女がいるからだとは言ってますん」

「ほー。そうか、そうだな。お前はそんなに彼女に固執するタイプ
でもなかったもんなあ」

心外な言葉に、ムツとくる。

「じゃあなんだ？」

「突然の話だったもので……まだ決めかねています」

「実際の異動は春だ。こんなに余裕を持って話を聞けるなんて、お前は幸せもんだな」

「どうして……俺なんですか？」

美雪のことももちろん気がかりではあるが、本心はといえばこれだった。

自分にしては弱気な発言かもしれないが、でも本当に、ずっと疑問だった。

評価してくれるのは嬉しいが、大輔が営業を離れてからもうすぐ2年たつ。

本社でバリバリと実績を積み上げている他の社員を差し置いて、何故自分が指名されたのかがわからなかった。

それは、知らず知らずのうちに感じているプレッシャーなのかもしれない。

「1人、誰か希望の人材をまわす。そう言われたから、お前の名前をあげたまでだ」

資料をバッグに戻しながら、辻が言った。

「俺は、もう一度お前と一緒に仕事がしたいと思っていた。迷惑だったか？」

「そんな……光荣だと思っています」

「大変かもしれないけれど、若い時に一度本社を離れて他の支社を経験することは、きつとお前のためにもなる。しかも、必ず本社に戻すって確約もあるんだぞ。こんないい話、俺はないと思う」

大輔のために言ってくれているのを、痛いほど感じる。

自分が第三者の立場であつたら、迷わず背中を押すだろう。

「情報課でも頼りにされているのはわかる。でも、お前は営業向きだ。今のままじゃ、勿体ない」

自分を直接指導してくれた先輩だからこそ、その言葉には重みがあった。

「気がかりは、彼女のことか？」

「……」

辻相手では強がる気もおきず、ただ無言で自分の手元を見つめていた。

「入社したての頃は、女関係だけは乱れているイメージだったんだが……今は違うみたいだな」

「……大事にしたいと思っている、女性がいます」

ついぽつりと本音が漏れた。

「彼女の生活もありますし、まだ付き合いも浅い。ついてきて欲しいと話せる間柄でも……」

「そうか」

「でも俺だって……、もう一度辻さんと一緒に仕事をしたいと思っ
ていました。それは本当です」

「そうか。ありがとう」

二人の間に沈黙が流れた。

「松沢」

辻が立ち上がって、大輔の肩をぼんと優しく叩いた。

「決めるのはお前だ。まだ時間もある。どのみち異動は4月だし……
俺は気長に待つ」

「はい……。ありがとうございます」

立ち上がって深々と頭を下げた。

「やめろや。頭を下げられる理由はない」

にかつと笑いながら辻が言った。

「今日は泊まりですか？」

「いや、こつちには昨日から来てたんだ。今日はこのまま帰る」

時間の無い中、無理に自分の元に寄ってくれたのだろう。

自分のことを評価してくれただけでも嬉しいのに、わざわざ説得の

ために足を運んでくれたというだけで、胸が熱くなる想いだっただけ。

「いい返事、期待してるけど……俺はお前の幸せも純粋に祈ってるよ」

「幸せ……ですか」

「なんや、遠い目して。新人の頃に比べたら、いい顔してるけどなあ」

ばしんと力強く背中を叩かれた。

「いたっ！」

「がんばれや。仕事だけじゃなくて、私生活もな」

「……はい」

「お前が本気になるような彼女なら、見てみたいなあ。もしかして、社内か？」

「それは……まあ追々」

「つれないヤツ」

ふっと笑みをこぼしながら、辻がドアに向かった。

「もう一度、笹谷課長に挨拶してくよ。情報課のホープを奪うことになるかもしれないんだもんな」

「ハイ！」

辻の後に続きながら、今後のことを考えずにはいらなかった。

第67話 少しだけ

情報課に少し顔を出した後、大阪に帰るといって辻を玄関まで見送った。

「いいつて。勝手知ったる元職場なんだから。仕事、たてこんでるんだろ？」

「大丈夫ですよ。腕はいいんですから」

軽口を叩きながら玄関まで一緒に歩くと、一緒に働いていた頃のことか思い出された。

「じゃあ。時間はあるし、ゆっくり考えてな」

玄関を出たところで、辻が手を差し出した。

「はい。ありがとうございます」

辻の顔をまっすぐに見つめ、その手を力強く握り締める。

「期待、してるからな」

大輔の背中を、ばしばしと少し強めに辻が叩いた。

「何かあったら、すぐに電話してくれや。迷ったら相談に乗るし、向こうでの世話も俺が全部引き受けるからな」

「はい」

タクシーを止めて乗り込む姿を見届け、再び深く頭を下げた。後部座席で辻が軽く手をあげ、そのままタクシーは走り去った。

「はあ……」

タクシーの姿が見えなくなると、何故か深い息がでた。知らず知らずのうちに、緊張していたのだろうか。くるりと踵を返して社に戻り、いつも通りに階段を登りながらも、考えることと言えば異動のことばかりだった。

『連れていけばいいんじゃないか？』

辻は軽くそう言ったが、その言葉は予想外に重く大輔にのしかかっていた。

美雪と付き合いだして、まだ1カ月もたっていない。

付き合いの長さが愛情の深さと比例するとは思わないが、それにしてそんな発想は思いつかなかった。

唐突すぎるし、自信もない。何より彼女は、まだ若い。

ふと、遠回りをして資料室へと足を運んだ。

案の定、室内やその周辺には誰もいない。

灯りをつけずに暗い室内に足を踏み入れてドアを閉めると、ポケットから携帯を取り出し美雪にメールを打つ。

『今、資料室。来れるか？』

メールの返事が来るまでと思い、壁にもたれかかって目を閉じてた。最近、忙しさや心労のせいか、あんまりよく眠れていない気がしていた。

それでも、今はまだいい。

もし、大阪に行くことになったら

壁の向こうから、パタパタと走るような足音が聞こえて目を開ける。その足音に、聞き覚えがある。

カチャツと控えめにドアノブを回す音が聞こえ、美雪がこつそりとの中を覗いた。

「よう」

「大輔さん！」

ほっとしたような顔をした後、キョロキョロと廊下を見回してから室内に身体を滑り込ませた。

「なんて言っただけだ？」

「え、あ、成田さんに、トイレに行ってコーヒー買ってきますって」

よく見ると、手には小さな財布が握られていた。

「じゃあ5分くらいだな」

「わっ」

恐る恐る大輔に近付いてきた美雪を、素早く自分の腕に抱きすくめた。

「ど、どうしたんですか？」

「別に」

普段ならジタバタ逃げようとするくせに、何かを察したのかじつと大輔に身をまかせている。

その首筋に顔を埋めると、甘い香りがすることに気付く。

「お前……なんかつけてる？」

「え、なんかつて？」

「香水とか」

「いえ、特につけてないですよ？」

「甘い香りがする」

その言葉の意味がわからないのか、不思議そうな顔で大輔を見上げている。

「大輔さん」

「ん？」

そろそろと伸びてきた手が、大輔の頬に優しく触れた。

「お疲れですか？」

「ああ……そうかも」

自分の頬に触れた柔らかい手を、その上からそっと握り締める。恋愛に不慣れな彼女との距離は、少しずつ縮まればいいと思っていた。

元々、ラッキーな幸運が重なって付き合うことになっただけで、あの7日間がなければ、二人の関係はいつまでたっても上司と部下のままだったに違いない。

美雪は元々自分に特別な興味があった訳ではないだろうし、大輔にしても淡い気持ちを無理矢理押しすすめて仕事上の関係を壊すほどの意気込みもなかった。

あの夜、美雪が不用心にも自分を連れて帰らなかったら、きっとこの関係はない。

でもそれが、自分じゃなかったら？

大輔の腕にすっぽりと収まる美雪を、ぎゅっと力をこめて抱きしめた。

彼女の気持ちを疑っている訳ではない。

でも、まだ二十歳の彼女を、自分の人生に巻き込む勇気はなかった。心配そうに大輔を見上げる顔を見ていたら、当たり前のようにキスがしたくなった。

「いい？」

「え？」

返事も聞かずに、美雪の口を自分の唇で塞いだ。

「んー！」

わずかに抵抗するような声を上げたものの、無駄だと思ったのかすぐに大人しくなり大輔に身を委ねてきた。いつもより少し成長したその反応が可愛く思えて、思わず深く唇を合わせる。

社内恋愛の経験はあるが、会社でこんなことをしたのは初めてだった。

あと5分

5分だけ

そんな言い訳を頭に浮かべながら、美雪との甘いキスに溺れていく。

その時、“ガチャツ”と資料室のドアノブが回る音がした。

(マズイ!!)

咄嗟に唇を離し、美雪を自分の背に隠した。

夢中になるあまり、廊下を歩く音に全く気付かなかった。

普段は人があまり近づかないとはいえ、社内の施設であることには変わりないのに。

完全に、自分の不覚だ。

ついさつきまで頬を赤らめていた美雪の顔が、さっと血の気を失うのがわかる。

そんな二人の様子など知る訳もなく、ドアを開けた人物が何のためらいもなく資料室に足を踏み入れた。

「ん？ あれ……松沢？」

抱きあうような形の二人を見つげ、目を丸くしたのは
大輔の営業時代の同僚の、盛永だった。

「な、何やって……」

そこまで言いかけて、ハツとした顔をした。

「ごめん！ 邪魔した！」

「待ってっ！」

慌ててくるりと廊下に出ようとした盛永を、必死に呼び止める。

「とりあえず……中入って」

「え、あ、わかった」

ためらいがちに、盛永がぱたんとドアを閉めた。

「美雪、フロアに戻れ」

「え……でも」

「大丈夫だ」

不安気に揺れている瞳を落ち着かせるかのようになり、ぼんぼんと背中を優しく叩いた。

その唇は先ほどまでの余韻を残すように艶やかで、自分の不覚とは

いえその姿を盛永に見せなければならぬのが、ひどく嫌な気持ちだった。

美雪の背中に手を回し促すように軽く押すと、ためらいがちにドアへと向かいながら、俯き加減にぺこりと盛永に頭を下げた。つられたように、盛永も軽く会釈をする。

そして、一度だけ大輔の方を振り返ると、静かにドアを開けて資料室を出て行った。

「おい……どういうことだ？」

美雪の足音が消えたのと同時に、声を一段と低く潜めながら盛永が言った。

興味本位、というよりは驚きの方が大きいようだ。

このタイミングで入ってきたのが、まだ盛永で良かったと思う。名前も知らないような女性社員だったら、美雪を庇うこともできなかっただろう。

「盛永、資料室になんか用か？」

「あ？ ああ……ちょっと古い取引先を洗い直そうかと思ってて資料を……」

そこで、はたと思いついたように大輔の顔を見つめた。

「違う！ そうじゃなくて」

大輔の肩をつかまえばかりの勢いだ。

「……いつからなんだ？」

「何が？」

「藤崎さんだよ。全然興味ないみたいなの顔してたくせに、いつの間に手え出してるんだよ」

その顔は、大輔を責めるような表情だった。

「お前……最近落ち着いてると思ってたけど、まさかまた社内の子に手え出すつもりか？」

「違う」

「違うってどついう意味だよ」

「……」

「あんな純粹そうな子……本気ならいいけど、後々面倒になるんじゃないのか？ 何より可哀そうだよ」

盛永の勢いに圧倒されて、軽いため息をついた。

「だから……違うって」

「何が違うんだよ？」

盛永の眉が、イライラとしたように真ん中に寄って深い皺を作った。

「今回は、マジだから」

「……はあ？」

思いがけない大輔の言葉に、盛永が気の抜けた声を出した。

「ま、マジって……どういつ…」

「そのまんまだよ。遊びで付き合ってるつもりはない。ちゃんと考えてる」

「ちゃんと考えてるって……え、マジなの？」

「だからそう言ってるだろ」

すぐに信じることのない様子に、こっちがイライラする。

「別に隠すつもりはないんだけど、アイツがあまり広まってほしくないみたいだから。盛永も、できれば黙っていてくれたら助かる」

「そりゃあ……いいけどさ」

ためらうように盛永が口をつぐんだ。

「松沢、お前……転勤の話が出てるんじゃないのか？」

思いがけない言葉に、さっと盛永の顔を見つめた。

第68話 弱気

「なんちゅー顔してるんだよ」

眉をしかめながら盛永が言った。

「どうして……知ってるんだ？」

「……ってことは、やっぱりそうだったのか」

大輔の口から出た返事に、落胆したように盛永が暗い顔をした。

「辻さんからの話、先に営業に来たんだよ。お前が情報課に異動になってるの、知らなかったみたいで」

そういえば、そんなことを笹谷課長が言っていた。

「辻さんがウチの課に電話かけてきたとき、俺たまたま残業で。課長の電話の受け答えで、なんとなく想像はついてたんだ。それで今日、辻さんがわざわざ情報課に顔出したって聞いて、こりゃ間違いないと思って」

「その話、他には……」

「安心しろ。多分、俺しか気づいてないよ」

盛永の力強い言葉に胸を撫で下ろしつつも、本当にそうだろうかと不安が沸いた。

噂話というのは、どこをどうやって漏れ広まっていくかが見当もつ

かない。

その怖さは、過去の恋愛で充分すぎるほどに思い知っている。

「藤崎さんとこんなことになってるなんて知らなかったから、きつと大阪に行くんだろうと思うってたんだけど。時期はいつだ？」

「次の春」

「春か……当然か。秋の異動話で、今から辻さんが動くわけないもんな」

不安に苛まれる大輔の様子に気付くはずもなく、盛永が言葉が続ける。

「……どうするんだ？ 藤崎さん、何て言ってるんだ？」

「まだ美雪には、話してない。どうするかは、まだ……」

「そうか……」

微かに盛永の顔が曇った。

「あの辻さんから直々に声がかかるなんて、正直つらやましいけど、暗いムードを少しでも吹き飛ばそうと思うのか、盛永が明るい声で言った。

「大阪支社、今あんまり成績は良くないって辻さんから聞いたよ。お前だって知ってるだろ？」

「まあなー。でも、お前ならやれるんじゃないのか？」

「気安く言うなよ」

ようやく、二人で顔を見合わせて笑った。

「オイ、とりあえずここは出ようぜ。大の男が二人でコソコソ資料室にいるなんて、変な噂でも立てられたらたまんないよ」

「それもそうだな」

盛永に言われ、資料室を後にして二人で廊下を歩く。

「それにしても……お前うまくやったなー」

「何が？」

「藤崎さんだよ。男嫌いなんだろう？」

「んー、まあ……」

「狙ってたやつも続々と脱落してたのに、やっぱり同じ課ってのは強みかな。藤崎さん、まだ二十歳だよな？ 8個下かよ。うらやましい〜」

「……声、でかいつて」

「いいなあ。俺、最近そっち関係さっぱり。藤崎さんの友達、誰か紹介してくんねえかなあ」

伸びをしながら、課に戻るために盛永が角を曲がった。

「じゃ。どうするか決まったら、必ず教えてくれよ。カノジヨの後でいいからさ」

「ああ」

お互いに、軽く手を上げた。

営業課に戻る事があれば、また一緒に切磋琢磨できると思っていた仲だった。

少しだけ寂しい気持ちで、その背中を見送った。

「あつ」

フロアに戻ろうと給湯室の前を通りかかったとき、小さな声が聞こえた。

ふと覗いてみると、辻と大輔の使ったコーヒークップを美雪が洗っていた。

「ああ悪い、そんな雑用させて」

「いえ、そんな、全然……」

そう言いながら、様子を伺うような視線を送ってくる。先ほど、盛永に見られたことを気にしているのだろう。

「大丈夫。あいつは……友達だから」

友達、と言っているのか少し躊躇いがあったが、こう言っておくほうが美雪は安心するだろう。

案の定ほっとしたような表情を見せた美雪に、周りに人がいないことを確認してから、後頭部を撫でるように手を伸ばした。

「今週は多分、ずっと忙しいと思う。週末も、仕事になると思うから」

「……ハイ」

大輔の手に少し頭をすりよせるようにしながらも、じつとこちらを見つめてくる。

「来週末、泊まりに行く用意しとけよ」

「え、あ……ハイ。どこに行くんですか？」

「イトコ」

にやっと笑って見せると、美雪の顔がほんのりと赤くなるのがわかる。

「顔、赤いぞ」

意地悪くもそう言うと、むくれたように頬をふくらます。最近は見慣れたその癖に微笑みながら、頭に添えていた手を前にまわし頬を手の甲で軽く撫でる。

もう少しこうしていたいけれど、そういう訳にもいかない。

「じゃあ」

さらつと首元のネックレスをなぞって通りすぎようとしたら、

「大輔さん!」

誰が聞いているかわからないというのに、珍しく名前で呼びとめられた。

「何?」

「あの……」

言いくそくに、ためらうように、視線をふわふわと彷徨わせている。

「どうした?」

「……いえ、あの……」

ようやくといったように大輔に合わせた視線が、微かに揺れているのを見逃さなかった。

「あつあの、たまには電話してもいいですか?」

「いいけど……」

言いたいことは、それなのだろうか。

作ったように浮かべる笑顔は、普段の美雪とは違って陰りを感じる。何かあったのかとさらに問いかけようとした時、廊下の向こうから別の課の人間が来るのが見えた。

気配に気付いた美雪が、慌てて視線を逸らしてガチャガチャとコップを洗い出す。

「連絡する」

心にひっかかりを感じながらも、短くそう言って給湯室を離れた。

その後、忙しく仕事をこなしながらも、一連の出来事が頭から離れないでいた。

ゆっくり考えろと言われつつも、なるべく早く決断しなければいけないのは、わかっている。

相談するという選択肢は、大輔の中にはない。

美雪を混乱させるだけだし、仮にも自分は8つも年上の上司なのだ。まず自分が、しっかりしなければ。

脳裏には、大輔に会うためにワザワザ来てくれた辻と、『お前ならやれる』と言ってくれた盛永の顔が浮かぶ。

そして

「お先に失礼します」

軽くと頭を下げながら、周りの同僚に挨拶をする美雪が視界にうつった。

「お疲れ」

「お疲れ様！」

最後にちらりと大輔の方に視線を送り、皆にするのと同じように首を傾げるように頭を下げる。

こちらを見つめる瞳に、ほんの少しの違和感をにじませて。

心配？ それとももしかして不信感？

「…………お疲れ」

ため息とともにそう言つと、最後ぺこりと頭を下げてから美雪がフロアを後にした。

俺は、どうしなけばならない？
どうしたい？

会社や上司に期待されているのは、わかる。もちろんそれに答えたい気持ちもある。

(アイツは…………どう思うだろう)

美雪とは、一時的な付き合いをしているつもりはない。少なくとも今までの遊びの付き合いとは違い、本気で彼女と向き合っているつもりだった。

でも、美雪自身の気持ちは？

あの7日間がなければ、美雪が友達についた嘘というか見栄がなければ、そもそも自分が酔い潰れたところに偶然美雪が通りかかったりしなければ…………

二人の気持ちに温度差があるなんて考えたことはなかったけれど、自分にとっては都合の良すぎた7日間が、少しだけ大輔の自信を無くしていた。

最近はずいぶん忙しくて、思い出すことが少なくなっていたあの日々。

“でも、俺は”

自分の心が、決まった気がした。

第69話 もつひとつの7日間・1

）

聞き慣れない着信音で目が覚めた。

メールにしては長い。きつと電話だ。

思わず枕元に手を伸ばそうとして、傍らですやすやと眠る美雪の存在に気付いた。同時に、今鳴っている携帯が自分のものではないことも。

大輔が戸惑っている間に、その音は途切れた。

この部屋は斜光カーテンではないらしく、うつすらと陽の光が差し込み美雪の顔を柔らかくに照らしている。とはいえ、まだまだ早朝と言っていい時間だろう。

美雪を起こさないように身体を少し起こし、時間をたしかめるために自分の携帯へと手を伸ばした。

早朝にも関わらず、メールが2件届いている。

マナーモードのままだったせいか、気付かなかった。

一つは、また平岡からだ。

『大丈夫か？ 本当に、ちゃんと帰れたのか？ 美雪ちゃんから返事が来ないんだけど』

“美雪ちゃん”とはどういうことだ。

思わず眉をしかめる。相変わらず内容も、短すぎてよくわからない。しかし、もう一つのメールは大輔の疑問を随分と解決してくれた。

『二次会途中で帰ろうとしたら、若い女の子と二人でタクシーに乗るのが見えたけど！ あの子だれ！？ 平岡と帰ったんじゃないかったのか！？』

驚いたような絵文字入りのそのメールは、昨日の飲み会のメンバーの一人からだった。

若い女の子というのは、状況からいって美雪に間違いない。そして側に平岡はいなかったことがこれではつきりした。

夢かと勘違いしていたが、美雪と二人でタクシーに乗ったことは間違いないようだ。

正確には、乗ったというより『乗せられた』に近いのだろうけど。

ぼんやりと美雪の寝顔を見つめながら、推理する。

平岡と美雪が知り合っていた可能性は低い。

ということは、偶然通りかかった美雪に大輔を託し、平岡が帰ってしまったということになる。

（随分勝手なやつだな。いくら麻友から連絡が来てたとはいえ……）

麻友のこととなると周りが見えなくなるのは、今も変わらないらしい。

そしてスヤスヤと眠り続ける美雪の顔を、肘をついた姿勢で見下ろした。

(こいつも……いくら同じ職場の上司だからって、連れて帰るか？
フツー)

警戒心の感じられない健やかな寝顔を見ていると、いたずらの一つでもしたくなる。

指の背で、額にかかった髪の毛をかるくはらうと、ぴくつと眉が動いた。

すすつと顔のラインをなぞって、柔らかい頬に触れる。

「ん……」

鼻にかかったその声に、ずくと胸がうずいた。

そつえばここのところ仕事と引越しに追われて、随分と欲求不満気味だった。

同じベッドに並んでいる(というか、大輔が勝手にもぐりこんだのだけれど)この状況に、手を出してしまってもいいんじゃないかという甘い期待が胸を占める。

しかし

引越したばかりの住所は、平岡はおるか誰にも教えていなかった。酔い潰れた大輔を前に平岡が途方にくれたのも想像がつくし、どういふ状況だったのかはわからないが、美雪もどうしようもなくて自分の家へと大輔を連れて帰ってくれたのだろう。

きつと、大輔を信頼して。

その信頼を裏切るのは、さすがに気がひけた。

(でも……こんな簡単に家に上げて、おまけに自分はぐっすりって……警戒心が足りなくないか?)

もし、あそこで酔い潰れていたのが大輔ではなく、山田や盛永だったら？

そう思うと、呑気に眠る美雪が、途端に腹立たしく思えてきた。

「おはよう、藤崎」

少し強い口調で声をかけると、びくつと彼女は目を開いた。

「んあ……おは、よう……っ!？」

限界まで大きく開いた目を2、3度パチパチと大きく瞬かせて、ヒツとひきつったように顔を強張らせた。

「っ……おはようございます……」

ガバツと毛布を引き上げて顔を隠しあわあわと慌てる姿を見ていると、さらに苛立ちはつのる。

後先考えずに男を家に連れ込み、何かあったらどうするつもりだった？

何も手を出していない大輔にすら落ち着いた対応ができないのでは、力づくで組み敷かれた時には、何もできないことは明白だ。

勝手にベッドにもぐりこんだ自分のことはさておき、美雪の行動は軽率という以外には考えられなかった。

それでもなんとなく感情を押し殺して会話をしていたら、美雪の口から平岡の名前が出た。

「友達……って、平岡さんですか？」

当たり前のようにのほほんと口にした言葉が、大輔の神経を逆撫でした。

「……携帯、何度か鳴ってたけど、もしかして平岡か？」

「え？ 携帯？」

もともと枕元の携帯を手にとった美雪が、待ちつけ画面を見て呑気な声をあげた。

「あー本当だ……平岡さんからメールと着信ですね」

メール？ さらに着信？

自分さえ知らない美雪の携帯番号とアドレスを簡単に手に入れた平岡に、嫉妬心がわいた。

「なんで平岡にアドレス教えただ？」

「え、なんでって……困ったら連絡くれて……」

少し責めるような口調で美雪を問い詰めてみても、彼女からはそんな大輔に対する戸惑いしか感じられなかった。

勝手に嫉妬しているのは自分の方だが、それに気づきもしないでただおどおどとされているのも気に食わない。

(少し……懲らしめてやるっか)

そんな悪戯心がわきおこった。

「そもそも、なんで俺は藤崎の部屋にいるんだっけ？」

理由は簡単だ。

酔っぱらった自分を、どうしていいかわからなかったからだろう。それを充分承知の上で、彼女にそう問いかけた。

「な、なんでって……だって、主任が道端に座りこんでて……何回呼んでもわかってくれないし、どうしていいかわからなくて」

途端に顔を赤くして、美雪が視線をうろろと彷徨させた。

大輔のことを、全く意識していないという訳ではないらしい。そう思うと、何故だか顔が緩むのを止められなかった。

「連れて帰ってくれたんだ？」

「だって！ 主任のお友達、困ってたんですよ？家もわからないから送っていけない、奥さん妊娠中だから家にも連れていけないって……。いい大人なのに、何やってるんですか？」

大輔の何が気に入らなかったのか、急にぶつくと頬を膨らまして怒ったようにそう言い放つ。

会社ではニコニコとしてあまり感情の起伏を見せない美雪が、ふくれたように自分を見ているのがなんだか嬉しくなる。

しかし、思わせぶりなセリフを言っただけで美雪を逃げられないように拘束したら、その表情はすつと変わった。

「からかってるんですよね？」

先ほどまでの慌てぶりが嘘のように、冷静に自分を見上げている。バカにされた、とも思ったのだろうか。

美雪から大輔に向けられる感情は、明らかに『拒否』だった。

確かにからかっていると取られても仕方がないけれど、美雪を軽んじて見ている訳ではない。むしろ、その逆だ。

“主任が自分なんかには何かする訳がない” 美雪のその言葉は、
妙にむなしく大輔を突き刺した。

「お前は……もう少し自分のことと、男のことをわかった方がいい
と思うな」

ため息をつきながら身体を起こし、諦めて上司として美雪と接した。
その瞬間から、二人の間に見えない壁を感じる。
会社にいる時のように振る舞ってみせる美雪は、同じベッドの上
いるのに、随分と遠い。

(このまま何事もなかったかのように終わらせるつもりか?)

そう思うと、どうしても聞かずにいられなかった。

「なんで……俺を、お前の家まで連れて帰ってくれた？」

結局、自分が望むような答えは返ってこなくて、美雪の困った顔を
前に誤魔化すしかなかったけれど。

ようやく実現した美雪との食事は味気ないファーストフードだった
けれど、7日間の約束は、大輔にとっては思いがけないラッキーな
ものだった。

時間的にファーストフード店にしか連れて行ってやれないことに空
しさはあったけれど、今思えばそれが好都合であった。

大通りに面したあそこでなければ、美雪の友達に目撃されるようなこともなかっただろうから。

彼氏だと誤解されていることはすぐにわかったしむしろそれを嬉しく思ったが、逆にそれをグジグジと気にしている美雪が気になった。そういう相手はいないだろうと勝手に判断していたけれど、もしかして。

しかし、大輔の懸念とは裏腹に、美雪が渋々と口にしたのは思いがけない理由だった。

大人しいと思っていた美雪が『彼氏がいる』なんて見栄をはったことには驚いたけれど、それを聞いてすぐに思ったことは“これを利用しない手はない”だった。

「俺が彼氏として飲み会に行けばいいだろ？」

大輔のその言葉に、目を丸くしたまま硬直している美雪を見て、確信がわいた。

このまま押せば、落ちる、と。

『借りを返す』と言えば美雪は納得するだろうし、頭を抱えている様子から見ると“彼氏役”を頼めるような相手はいないようだ。

弱みに付け込むような気も少しはしたが、このまま朝食をとって別れて、また何事もなかったかのように上司と部下には戻りたくなかった。

美雪のことだから、会社で『お礼に食事でも』と誘っても『いえいえ気を使わないください』とのらりくらりとかわされることは必ずだ。

“確実な、次の約束を取り付けるにはどうしたらいいだろう？”

そう思いつつも半ば諦めて、縮まらない彼女との距離にもやもやと
していた大輔にとっては、まさに渡りに船だった。

美雪と一緒にいて、慣れない反応に戸惑う彼女を見てるのは楽しか
った。

それが見たくてつい口調がきつくなる。

でも、本当にしたいのはそんなことじゃない。

「7日間、お前の彼氏になってやるよ」

7日間という、時間の猶予ができた。

この間だけは、例え偽りでも自分は彼氏で、その立場を利用して美
雪と繋がりを持つことも容易い。

「よっ……よろしくお願いします！主任！」

真っ赤な顔で慌てて頭を下げる美雪を見ながら、思うことはただ一
つだった。

『この7日間で、絶対に自分のモノにする』

第69話 もつひとつの7日間・1（後書き）

今回…非常に苦しかったです。詳しくは活動報告にて。

第70話 もうひとつの7日間・2

美雪と別れて家に帰り、シャワーを浴びた。どさつとソファに倒れこんでひと息つくつと、フツフツと言いつのうの感情が沸いてきた。

「俺が、藤崎の彼氏？」

口に出すと、何故だかにやにやと顔が緩む。

別れ際にダメ元で言いだしたデートの約束に、驚いた様子ではあったが勢いのいい返事が返ってきた。

大輔の予想通り、今彼氏がいないばかりかどうやらデートらしいデートもろくにすることがないようだ。

今まではどちらかという経験の少ない子は面倒だと思えなかった。経験の少なさから、自分に深入りされると“面倒”だと思っていたからだ。

でも、美雪とだったらそんな“面倒なこと”に、むしろなりたいと望んでいる。

7日間という時間が、長いのか短いのか、よくわからなかった。

入社してからの8カ月間、二人の間に何も起こらなかったことを考えると、短い。

しかし、彼氏として振る舞うことが許されていると考えると、十分な時間のようにも思える。

(まあ……出たところ勝負だな)

赤外線で交換した美雪のアドレスを表示させた。

“藤崎美雪”

その名前をぼんやりと眺めてから、徐に力チ力チと編集を始める。

“miyuki”

これで、よし。

大輔の会社では、営業課と課長クラス以外の社員には会社から携帯電話を支給されないことがない。

そのため、何人かの連絡先は交換して大輔の携帯にも登録してあるが、当然のようにフルネームが役職名だ。

仕事上に必要だからと、交換したアドレスにすぎない。

でも、コイツは違う。仕事で必要だからって、交換したわけじゃないんだ。

そんな決意の表れだった。

明確な意思を持って、相手を『落とそう』としたことってあったっけ？

美雪との待ち合わせ場所へと車を走らせながら、ふとそんなことを考えていた。

麻友と平岡の結婚が決まり、恋愛というものが遠のいてからかなりたつ。

大学時代の友人、会社（これは一度で懲りたけど）、飲みに行ったバー、特に出会いを求めてガツガツと行動しなくても、一時的な彼女や性的欲求を解消する相手を見つけるのに苦労はしなかった。でもそれが恋愛でないことはわかっている。むしろ、恋愛に発展しないように相手に対して牽制していたくらいだ。

考えてみると、昼間のデートは久しぶりだ。

待ち合わせの書店で、すぐに美雪の後姿を見つけた。

大体このあたりにしかないだろうと目星をつけ女性雑誌のコーナーを見渡すと、何故だか肩のあたりにガチガチに力をいれて、緊張感を漂わせた美雪が立っていた。

ふつと口元に笑みが浮かぶのを抑えきれずに、背後に近付き低く声をかける。

「待った？」

「いいえっ！ 今来たばっか……！！！」

どうやら、緊張のあまりに舌を噛んでしまったらしい。

間髪入れずに振り向くところを見ると、大輔が来た時から気づいていたのだらう。

真っ赤な顔で涙をにじませ口を抑えている姿がおかしくて、くっくつと笑いをこらえる。

「緊張して舌噛むくらいなら、始めから声かけろよ」

（ていうか、声かけられなかったんだらうなあ……）

目の前でちよつとだけ恨めしそうな顔で大輔を見つめている美雪は、会社で見るよりも幼く見える。

仕事中は地味とはいえスーツに身を包んでいるので、それなりに社会人として通用する。口数も少なく大人しいため、どちらかという年齢以上に落ち着いて見える。

しかし、私服に身を包んだ彼女は年相応の二十歳の女の子で、8歳という年の差をいやでも意識させられた。意識して、若い格好をしてきて正解だった。

ふと、美雪が手にしている雑誌が目に入った。

女の子の好きそうな、アクセサリーのページを開いている。

そういえば、付き合った女たちにこういうものを強請られることが多かったっけ。

「欲しいの？ それ。もはやおねだり？」

冗談半分で口にした言葉に、美雪が真っ赤になって否定をし始めた。無意識に開いていただけのようだが、慌てる姿がなんだかおかしい。

(そんなもの、いくらでも買ってやるのに……)

そう思った後に、なんだか違和感を感じる。

今まで、付き合った相手にそんな風に思ったことは無い気がした。

自分の心境の変化に微妙に落ち着かなくなりながらも、今日の作戦は“めいいっぱい甘やかす”ことにしてやろうと思っていた。

行き先を強引に流行りのアウトレットモールに決めた後、助手席に座る美雪を横目で盗み見た。

待ち合わせ直後の緊張は随分とけているようだが、それでも触れれば飛び上がりそうなほどの緊迫感を感じる。

(それは……俺が上司だからなのか、それとも単に男が苦手なのか)
二十歳そこそこの女の子の気持ちなんて、わかりそうでわからないものだ。

「あの……松沢さん」

ふいに美雪から声がかかったが、その呼び名が気になった。

「大輔」

「え？」

「まだ呼べない？」

彼氏役を引き受けたからには、彼女にもその気になってもらわないと困る。

しかし美雪からは一向にその気配はなく、むしろあくまで上司と部下という見えない線のようなものを感じていた。

「まだ……無理、です……」

途端に美雪が顔を赤くして俯き、ふわりとやや茶色い髪の毛が揺れた。仕事中はまとめていることが多いので、下ろしている姿は新鮮だ。

「可愛いもんだなあ」

思わず手を伸ばして、俯いたままの頭頂部に触れた。

やや猫っ毛気味なのか、見た目通りふわふわとしていて柔らかい。

反応もせずにされるがままになっているところを見ると、大輔の行動は嫌ではないらしい。

ほっとすると同時に、ずっと感じていた疑問をぶつけることにする。

「前々から思ってたんだけど……お前、男苦手なの？」

「え、どうしてですか？」

きよとんとした顔で、大輔を見返す。

どうしてって言われても。大輔たち同僚にしてみればあからさまに男を避けてるのように見える行動も、彼女にしてみれば普通のことなのだろうか。

「仕事の時、なんか男相手だといつも妙に固まって困ってるように見えるから」

なんと行ってよいかわからずありのままに告げると、驚いたように美雪が目を見開き、そしてそっと視線を伏せた。

「正直……苦手です。苦手っていうか、何を話していいかわからなくて……」

「もしかして、今までに彼氏できたこと、ない？」

「情けないですけど……ない、です……」

期待していた通りの返事に、思わず声が裏返りそうになった。経験が無さそうだとは思っていたが、やっぱり彼氏がいたこともなかったか。

「俺が初？」

「は、初って……一週間だけじゃないですか……」

冗談半分で言ったのにまともな反応を返してくる。消え入りそうな声でもじもじと手を弄ぶ彼女が、いじらしく見えた。

そうか。今どき、こんな子もいるんだな。

大輔が二十歳の頃を思い出せば、ろくな付き合いをしていなかった。当然、周りに美雪のような真面目なタイプもない。信じられないような気もするが、それだけ自分の周りには自分と似たタイプの女の子しかいなかったのだと痛感する。なんだかテンションが上がった。

「7日間だろうが1日だろうが、彼氏は彼氏だ」

くすくすと笑う美雪を隣に感じながら、会社では考えられないくらいい会話が弾んでいることを密かに喜んでいた。再び美雪の頭を軽く撫でてみても、彼女は先ほどのようには緊張していないようだ。

気を良くしていただけに、しばらくしてから投げかけられた言葉に戸惑った。

「松沢さんは……彼女、いないんですか？」

「え？」

驚いて彼女を正面から見つめる。信号が赤でよかった。

「あの……こんな面倒なこと引き受けちゃって、もし彼女さんがいるのなら申し訳ないなあって……」

あくまでこれは彼氏と彼女にフリにすぎない。そう言いたいのか。それとも、彼女がいても気楽に他の女の子と出かけるような男に見られているのか。 。
今までの自分の行いを考えれば否定できないが、何故だか少しだけ傷ついた。

「いたらフツーこんなこと引き受けないだろ。そんなに不誠実に見える？」

「いいえ……そんなことないです。すごく優しいし、彼女がいたら大切にしそうだなって思います」

「そりゃどうも」

社交辞令と言ってもいいような返事に、なんだか落胆した。

（まあ……そうだよな。コイツはあくまで、彼氏役としての俺を望んでいるんだし）

ちらりと横を見ると、何故だか美雪がしょんぼりとしているように見えた。

「どうした？」

「いえ……別に……」

「なんか、へこんだ？」

「えっ？ いいえっ、本当に別になんでもありません」

「……俺、なんか変なこと言ったか？」

「本当に、なんでもありませんって。気にしないでください」

慌てて作ったような笑顔を浮かべているが、それが偽りのものだと
いうことは容易に想像がつく。

大輔の何が彼女を落ち込ませたのか見当もつかないが、もしかして、
大輔が思っているように、美雪も自分に好意を寄せてくれているの
だろうか？

だとしたら。

「あ、そうか」

急に閃いた考えを、気づけば何の躊躇いもなく口にしていた。

「今は、美雪が俺の“彼女”だな」

ひくつと彼女が顔を強張らせた。

でもそれは、嫌悪じゃないと妙な確信がわく。

「俺がお前の彼女なら、お前は俺の彼女だろ？」

口をぽかんと開いた美雪の頬は、ほんのりと赤い気がした。

「機嫌直った？」

「べつ別に……」

怒った訳ではないのだろうが、必死に口元に力を入れて俯く姿が可笑しかった。

取り繕うかのように窓の外に視線を向けた彼女に手を伸ばそうとして、それを引っ込めた。

充分に、時間はあるんだ。

恋愛は、上手くいくまでが一番楽しい。

そんなことを考えられるくらい、この時の大輔にはまだ余裕があった。

第71話 もうひとつの7日間・3

今日のデートの目的地であるアウトレットモールで、思いがけない事態が二人を待っていた。

偶然再会した学生時代の友人・村西に、カップルイベントへの参加を頼まれたのだ。

頼みこまれるとイヤと言えないのは、大輔の性格でのせいではなく、どちらかと言えば村西の人徳だろう。

村西は明るくて気前がよく、いいヤツであることには間違いないのだが……学生時代から、ヤツに絡むとよいことがなかった。

思い当たる中でも一番ひどかったのは、大学の学祭で村西が所属していたサークルでカフェをやることになった時だ。

“頼む！ お前以外に頼めるやつはいないんだ！”

拝み倒されるようにして仕方なくついて行った先には、目をキラキラとさせて待ちかまえているサークルのメンバー（主に女子）がいた。

その異様な雰囲気、断れるわけもない。

村西のサークルとは全く無関係の大輔が、当時流行りだしていたシアトル系カフェの店員の格好をさせられて撮影をされ、それがサークルのカフェのポスターに使われてしまった。

白いシャツに黒いベスト、そして腰からの長いエプロンというバリスタのコスプレのような格好は、デカデカと引き延ばされてポスターになり、学祭当日はあちらこちらで目にする事となったのだ。

そして、そのうちの何枚かが女子学生によりこっそりと剥がされて持ち帰られたことは、言うまでもない。

以前勤めていた経理の仕事を、息が詰まると言って辞めたのは納得がいく。

学生時代からお祭り好きにも関わらず、先頭にたって自立つというよりは裏方仕事を好んだ村西に、イベント会社の企画・運営は天職と言ってもいいだろう。

とはいえ、自分がそのイベントに参加しなければならぬとなると、話は別だ。

“デートの練習”なんて大義名分を忘れてしまうような、楽しくて心に残るデートにしてやるつもりだったのに……大きく予定がくるってしまった。

人前で写真を撮り、さらに見世物のように投票されるなんて。

エントリーカードを無理矢理押しつけて去っていく村西の後姿を見つめながら、はあ、とため息をついた。

「ごめんな、面倒くさそうなことに巻き込んで……」

「あ、いえ……」

会社での美雪の性格を思うと、こんなイベントに参加することなど苦行に近いものがあるかもしれない。それでも、さほど落ち込んだり慌てた様子は見られないのが、せめてもの救いだ。

さり気なく渡されたチラシに目を通すと、下の方に小さな小さな文字で『なお、イベントに参加される皆様は必ずアウトレットモール内で購入した商品を身につけてください』と書かれていた。

(アイツ……何も言っていなかったくせに)

『帽子でもかぶって』の意味は、このことか。
販売促進のためのイベントだから仕方ないだろうと、思わず舌打ちしそうになるのを堪える。

「……アイツも言っただけど、帽子でも、買う？」

余計なことは言うのはやめておこう。そう思いながら美雪のふんわりとした髪に手を伸ばし、さらっと指を通した。

「あ……はい！」

自分の髪の毛を梳く大輔を意識したのか、わずかに頬を赤らめて美雪が頷いた。

その後、手近なショップでお揃いの帽子を手に入れた。

美雪は自分もお金を払うと言ったが、大輔の友人のせいでこんなことに巻き込んでおいてそういう訳にはいかない。

あくまで食い下がる彼女に対して『1年目の新人なんだから』と言って説き伏せてしまったが、その姿勢には好感が持てた。

そういえば、ここ最近は女性といたら驕るのが当たり前になっていった。年も年だから、仕方がないのだけど。

揃いの帽子を購入したことに美雪は驚いた顔をしてみせたが、特に何も言わなかった。

帽子は、ほとんど被らない。

それだけに、美雪と同じものを身に付けた自分が浮足立ってはいないかと、やけに気になった。

ふとショーウィンドウに映る大輔の顔は、にやにやと締りが無いようにも思える。

「なんか、バカカップルみたくなってないか不安」

「……今さらそれを言いますか？」

決めたのは大輔なのに、とでも言いたそうに、美雪がぶつと僅かに頬を膨らませた。

「ははっ」

思わず声を出して笑うと、つられたように美雪もぱつと笑顔になっていた。

エントリー広場は、大輔の想像を上回る人混みだった。

村西が企画したイベントが盛り上がっているのはイイことだが……
繋いでいた美雪の手は、一瞬固くなった。

しかし、ここまでできては腹を決めてもらうしかない。
手をひっぱりぐんぐんと受付まで進んだ。

村西から渡されたエントリーシートには、何も書かれていない。
スタッフから手渡されたボールペンで、必要事項を次々と記入して
いった。

「お前の住所は書かねえぞ。年は、ハタチ……か？」

美雪の誕生日を知らなかったことに、何故か後ろめたい気持ちがあ
わく。

「はい。早生まれなんで」

しかし、美雪はケロッとしたものだ。

「お付き合い歴ってなんだよ……」

そんなものまで書かなければいけないのか。というか、こんなものを聞いてどうする。

仕方なく“1カ月未満”に丸をつけようとして、“ヒミツ”という項目があることに気付き、躊躇なくそこをぐるっとペンで囲んだ。

「松沢さんって28歳だったんですね」

覗きこむように大輔の手元を覗いていた美雪が、若干の驚きを含んだ声でつぶやいた。

「……知らなかったのかよ」

上司と部下の間柄とはいえ、会社での彼女との接点はあまりない。知らなくて当然だ、と思いつつも、改まってそう言われるとなんだかムツとする。

「あ、聞く機会がなかったもので……」

「彼氏の年くらいさっさと聞け」

そつだ、自分は彼氏として美雪の友達に紹介される役回りであるのに。年齢を尋ねられたらどうするんだ。

呑気な返事につい慥然としてそう言った後、返事がないことに『あれ？』っと思いい顔を上げた。

美雪はどうやら受付脇のテントに釘付けになっているようだった。

このイベントの協賛である化粧品メーカーが、撮影に来たカップルの女性に対して簡単なメイクとサンプルの配布をしているようだった。

女の子であれば、気にならない訳がない。

「行ってくれば？」

「え、いいんですか？」

「順番まだまだだろ。俺、これ書いとくから」

「あつ……ありがとうございます！」

ぱあつと顔を輝かせた美雪が、いそいそとテントに駆け出していった。

その後姿を数秒見送った後に、再びエントリーシートへと視線を落とす。

記入漏れがないかと確認している時に、傍で同じようにエントリーシートに記入しているカップルの会話が耳に入った。

「ねえねえつ　優勝者の商品って、高級リゾートホテルのペア宿泊券らしいよ！」

「え、マジで？」

「うんっ！　しかも交通費つきだって〜」

そんな豪華な賞品が用意されているとは。

きやつきゃつとはしゃぐ若いカップルをちらりと横目で見ながら、ふと考える。

(もし……優勝なんかして、宿泊券とか獲得しちゃったら……)

美雪は、一緒に行ってくれらるだろうか。

美雪のことだから『どなたかと行ってください』なんてはぐらかされそうだが、エントリーシートの裏側を見てみるとこの手の懸賞にはつきものの『商品を第三者に譲渡することはできません』云々と書いた文面が書かれている。

(でもなあ……)

「書き終わりましたか？」

にっこりと微笑むスタッフに慌ててエントリーシートを渡し、腕を組んでしばし考え込んだ。

周りに数組いるカップルを見渡すと、どのカップルも仲が良さそうに身を寄せ合い、観客の視線に晒されても堂々としたものだ。

こんな目立つイベントに進んで参加するくらいだ。特に女性側の自信ありげな態度は、美雪には到底ないものだった。

(やつぱり……悪いことしたかな)

大輔にとっては、美雪は充分可愛くて魅力的に見える。

でも、彼女自身はその魅力には気づいてないどころか、自信もなく控えめだ。

そこが可愛くもあるが、こついった撮影においては致命傷な気もした。

「20番の方へ、そろそろ列に並んでください」

「あ」

考え事をしている間に、いつの間にか撮影の列が進んでいた。スタッフに声をかけ、急いで化粧コーナーとなっているテントへと急いだ。

「終わった？ もうすぐだぞ」

入ってすぐのパイプ椅子に腰かけていた美雪が、大輔の声を聞きぱつと振り返った。

「あつハイ、今終わりました」

(こ、これは……)

予想以上、だった。

若い子には珍しく、美雪の化粧はいつも控え目だった。

それが社会人というものなのだとか勘違いでもしているかのように。

しかし今は、瞼の上はなんだかピンク色にきらきらと輝いているし、目のふちはボルドーで彩られて艶っぽい。寝不足だろうかと気になつていた顔色は、チークのおかげかオレンジ色に染まり、随分と血色がよく見えた。

唇は誘うようにぼつてりと色づき、そしてその表情はプロにメイクをしてもらったという自信のせいかな、ほんの少しだけ力強い。

「どうですかあ〜？ 彼女さん、可愛くなったでしょう〜！」

思わず言葉を失っていると、化粧品メーカーのスタッフと思われる

女性がニコニコと大輔に声をかけた。

「はぁ、そうですね……」

素直に『綺麗だよ』とでも言っておけばいいのに、そんな間の抜けた返事しか話せなかった。

「も〜！ かわいいねって言ってあげてくださいよ〜」

大輔の言葉を単なる“照れ”だと誤解したのか、スタッフの女性はニコニコと笑顔のまま美雪にサンプルの入った袋を差し出した。

「どうぞ 撮影、がんばってくださいね」

「ハイ、あの、ありがとうございました」

美雪がこちらに向き直るより早く、くるりと背を向けてテントを後にした。

後ろから、ぱたぱたと美雪が駆けてくるのがわかる。

「あの……遅くなってすみません」

「いや、まだ大丈夫だよ」

何故だか声が掠れた。

急に、そんな一面を見せられても困る。

「……キライですか？ こついつの？」

驚いて振り向くと、しょんぼりと頂垂れた美雪の姿があった。

メイクの力でこうも華やいで見えるのか、と驚いた気持ちもあったが、観客の人混みの男性たちの視線が美雪を追っているような気がして、落ち着かない。

こんな変身を遂げた彼女なら、優勝は狙えるかもしれない。でも

「いや……」

思わず、手に持っていた帽子をかぽつと深くかぶせた。彼女の顔が、ほとんど見えないくらいに。

「あんまり……」

「え？」

「あんまり、顔出すなよ」

視線を合わさずに、美雪の手をぎゅっと握った。

第72話 もうひとつの7日間・4

撮影の列に並び順番を待っていると、二人を見つけた村西がこちらへ近づいてくるのが見えた。

「おっ！ 彼女、すごく可愛くなったね〜」

相変わらず、目ざとい奴だ。

「早く終わらせるよ。腹へってんだから」

「まあまあ、すぐ終わるからさ！ 2人なら、優勝も狙えるよ！」

「優勝？」

イベントの内容をイマイチ理解していなかった美雪が、小首を傾げて村西の言葉を繰り返した。

「そう！ 優勝をはじめとして、豪華な景品もあるからさ〜。かわいく写ってね」

簡単にイベントの説明をする村西の話を、うんうんと頷きながら美雪が聞いている。

自分よりもかなり年下の女の子が、熱心に話を聞いてくれるのが嬉しいのだろう。

どこことなく得意げな顔をしている村西を、蹴り飛ばしてやりたいような衝動にかられる。

お前があそこで現れなければ……今頃二人で、美味しいランチでも食べていたところなのに。

「別にどうでもいいし」

村西の話にも、目の前で他のカップルがいちゃついていることも、なんだか飽き飽きだ。思わず欠伸がこみ上げた。

「では次！ 20番のカップルの方」

「さっさと終わらせよう」

先ほどまで考えていた、『もしかして優勝できたらリゾート宿泊券が』なんて甘い考えは鳴りを潜め、今はとにかくさっさとこのイベントを終わらせたかった。そうだ。

何カ月か先の宿泊券より、この7日間が勝負なのだ。

大勢に見守られる形での撮影は、想像以上に恥ずかしいものだった。特に、偽りの恋人同士である自分たちには尚更。

「ハイ、もうちょっと彼女くっついて」

カメラマンから声がかかることに美雪の身体は固くなり、繋いでいる手には汗が滲んでいる。

「うーん……なんかよそよそしく見えちゃうなあ。彼女緊張しないで」

大輔だって、緊張していない訳ではない。ただ、隣に自分を上回るほどの緊張でガチガチの美雪を見ていると、反比例してこちらの緊張は薄れていく。
俯いてしまった美雪に、思わず声をかけた。

「自信もてよ」

「え？」

「充分かわいいよ。あんまり他のやつらに見せたくないくらい」

ぼぼっと音がしそうなくらい顔を真っ赤に染めた彼女が、大輔の顔を見上げた。

「あつ、彼女いいね、その見上げる感じ！　じゃ、彼氏さんは彼女の腰に手を回して〜」

言われるまでもなく、美雪の腰に背中から手を回した。

身体がさらに密着すると、ふんわりと彼女の髪の毛からフローラル系のシャンプーの香りがした。

香水ではない、自然な優しい香り。

吸い寄せられるように、彼女の帽子の上に顔を寄せた。

「いいねえ！　ラブラブ！」

カメラマンがせわしなくシャッターを押すのを眺めながら、ふと観客の中から刺すような視線を感じた。それはどうやら自分ではなく、美雪の方に向けられている気がする。

（　　ん？　どこだ？）

思わず探るように観客に目を向けるが、その視線の元をたどることはできなかった。

「はあああ………なんだか疲れましたね」

撮影が終わり遅いランチを取ろうと入ったカフェで、美雪は盛大な息を吐いた。

「悪かったな、お前目立つの苦手だろ？」

「いえ、綺麗にメイクしてもらえましたし………それに、いい記念になりました！」

記念？

水を飲む手が止まり、ぴくっと眉が動いた。

暗にこの関係が一時的なものだと言われたようで気に食わない。

しかし美雪は一向に気にならない様子で、試し撮りのポーズを眺めている。

「こうやってみると、本当に恋人同士って感じですよね！」

「……げほっ！」

予想外のセリフに、喉が詰まった。

「あつ……す、すみません……浮かれちゃって……」

「い、いや……素直すぎてびっくりした」

何も思っていないからこそ気楽にそう言えるのか、それとも計算なのか……

ごくりと改めて水を飲みこみ美雪に目をやるが、彼女は会社でミスを犯した時のように下を向くばかりだった。

「結果発表は17時からか……どうする？ それ終わるまで待つてると、帰りちよっと遅くなるけど」

「あ、そ・そうですね……」

別な話題を振ったことに、ほっとしたように美雪が顔を上げた。

結果発表が終わってから帰るとなると、時間帯的に渋滞に巻きこまれるかもしれない。

大輔としては別にかまわなかったが、明日は仕事だ。あまり遅くなるのはイヤかもしれない。

うーん、と首を傾げて考え込む美雪を見つめていたら、背後からふいに声をかけられた。

「あの！ さっきイベントに出てたお二人ですよね？」

「はい、そうですけど……」

振り向くと、絵に書いたような幸せそうなカップルがニコニコとこちらを見下ろしていた。

「お二人、とっても素敵でした！ 私たち投票したので、がんばってくださいね！」

「ど、どうも……」

「ありがとうございます」

途端に耳まで真っ赤にして言葉を嚙んだ美雪の代わりに、営業スマイルで答える。

「絶対、賞取れますよ！」

第三者からの力強い言葉に、少しだけ“もしかしたら”という気持ちがあわく。

「一応、待っててみるか」

「そうですね……一応……」

その返事は、二人でいる時間が少しだけ伸びることを表していた。

食事の後にぶらぶらとアウトレットモール内を歩いた。

興味深そうにあちらこちらをキョロキョロと見回すが、いざシヨッブに入るように促してみるとふるふるすると首を横にふる。

楽しそうな雰囲気はなんとなく感じられるが、こんなので果たして楽しいのだろうかと疑問に思う。

「あ、靴買おうかな。仕事用の」

もしかして、自分に遠慮しているのかもしれない。
そう思つてメンズのシューズショップで立ち止まった。
通勤用の革靴が少々痛んできていたので丁度いい。

「じゃあ私、この辺見てもいいですか？」

「ああ」

当たり前のように繋いでいた手を、離れた。

ショップの前でちらりと振り返ると、ふらふらと別なショップの中
へと消えていく後姿が見えた。

美雪は、一体何を思っているのだろう。

大輔のことを意識しているのは感じる。それが、悪意でないことも
好意に近いというのはなんとなくわかるが、それ以上かと言うと少
し違う気もする。

会社で部下だった女の子は、ひとたびそこを離れるとただの二十歳
の女の子で、それが自分を多いに戸惑わせていた。
そりゃそうだ。

今までは後腐れのない大人な関係が多かったから、こんなに年の離
れた女の子と付き合ったことなどない。

会社に居る時にあまり年の差を感じないのは、仕事という共通点が
あるからだろうか。

(自分で思ってるより、年を取ったってことかな……)

二十歳という年齢を告げると、大袈裟に驚いていた村西を思い出す。
反対の立場だったら、自分も同じ反応をしたかもしれない。

大輔が二十歳の頃は、まだ大学生だった。

気楽で、一番楽しかった頃。

心の中に麻友という想い人はいたが、それはさておき彼女もいたし合コンもしていた。

そんな自分と比べれば……美雪は随分と初心で、なのに落ち着いて
いる。

時代の違いだろうか。

「いらっしやいませ。何かお探しですか？」

店員の声に、はっと我に帰る。

「あ、これのサイズを……」

悩んでいても仕方がない。

気づけばいつもと同じようなデザインビジネスシューズを手にし
ていた。

外に出てキョロキョロと何軒かを見て回ると、セレクトショップの
中にいる美雪が見えた。

中に入って声をかけようかと思っただが、自分と一緒にだとも買う様
子がなかったことを思い出し、少し離れたベンチに腰をおろす。

大輔が一緒だと、買い物がしづらいのかもしれない。

かすかにため息を吐き、暮れてきた空を見上げた。

キィ、と音がしてショップのドアが開き、美雪が姿を見せた。

何も手にしていないところを見ると、買い物はしていないのかもしれない。

れない。

大輔の姿を見つけて慌てて駆け寄る姿に、何故だかほっとする。

「ちょっと早いけど、行くか？」

たっぷりあると思っていた時間もあつという間にすぎ、気づけばあと少しでイベントの結果発表に時間だ。

「あ、はい！」

立ちあがってわざとらしく差し出した手を、美雪がはにかみながら握った。

「明日明後日働いたら、正月休みだな」

まとまった休みの取れる、唯一の期間だ。

特に予定もなく過ぎ去っていくはずだった年末年始が、今は少しだけ楽しみだ。

「そうですね。松沢さんは、帰省とかされるんですか？」

「しないよ。俺の実家、北海道だから。この時期に飛行機なんて乗る気しない」

美雪の言葉がひっかかり、僅かに眉をひそませる。

「ていうか……帰省するんだったら、飲み会の約束なんてしないだろ」

あ、と声を出して美雪の顔が強張った。

「私、友達に連絡とらなきゃ」

「オイ……俺の友達、本当に連れてった方がいいのか聞いとけよ」

何のための約束だ。

呆れて肘で軽く頭をつつきながらも、次の瞬間にある考えが浮かぶ。少なくとも今この時は、飲み会のための“彼氏役”であるということとを忘れていくということだ。

思わず顔が緩みそうになり、口元をきゅっと結ぶ。

疼くこの胸の感情が何かは、とっくにわかっている。

コイツも、そうだったらいいのだけど。

第73話 もつひとつの7日間・5

イベント会場に足を運ぶと、案の定周囲からあからさまな視線に晒された。

その視線を避けるように帽子を深く被りなおした美雪に、気が紛らわせてあげたくて会話を探す。

「そういえば、優勝商品何か知ってた？」

「え？ あ、なんかいっぱいいっぱい、ちゃんとチラシ見てなかつ……」

突如キーンと鳴り響いた不協和音に、言葉の続きが聞こえなくなる。壇上に上がった司会者が発表した“高級リゾートペア宿泊券”という優勝の商品に、美雪が目を丸くした。

「そうなんだ」

「……知らなかったのかよ」

「あ、撮影ばかり気になって、終わったらほっとしちゃって……」

もし優勝商品が何かを知っていたら、美雪は出場しなかったかもしれない。

“もし優勝したら、松沢さんが宿泊券を使ってくださいね”

美雪の口からなんの躊躇いもなく滑り出たその言葉が、それを表し

ている。自覚の無い不貞腐れた表情が、自分の顔に浮かんだ。

「…………行くやついねえよ」

「松沢さんなら、すぐに相手、できますよ」

とどめのその言葉が、どんな意味を表すかわかっているのだろうか。

「ふーん…………お前はそれでいいんだ」

やっぱり自分は頼まれただけの『彼氏役』でしかなくて、美雪は大輔に対して上司以上の好意を抱いていない。

そんな何気ない言葉に軽く打ちのめされてしまう自分は、わかっているつもりで、わかっていないらしい。

ほどなくして始まった結果発表を半ば投げやりな気持ちで聞いていると、ふいに美雪がぎゅっと大輔の手を握り締めた。緊張、しているのだろうか。

小さくて柔らかい手の感触をもつと感じたくて、無意識に指一本一本を絡めていく。

盛り上がる会場を見つめながら、ふと今日の成果に思いをはせる。デートとしては、それなりに楽しかった一日だったと思う。ただ、彼女との距離を縮められたかという点、怪しい。

（イベントに参加したのは、まずかったか…………）

村西を助けるためには仕方なかったが、そのせいでほとんどの時間が潰れてしまったのも事実だ。

後悔はしていないが、タイミングの悪さは呪いたくなる。

壇上ではいよいよ優勝カップルの発表が始まった。

“松沢さんなら、すぐに相手できますよ”

その言葉がリフレインしながらも、期待しない訳でもない。宿泊券という名の、保険がほしい。

7日間あればなんとでもなる……そう思っていたはずなのに。苦笑が浮かびそうになった時、司会者がひととき大きな声でエントリーナンバーを読み上げた。

『6番!』

離れたところから、『キヤー!』と悲鳴にも似た歓声が上がった。美雪の手からふっと力が抜けたと同時に、大輔を見上げる気配がした。

「やっぱり、偽物の即席カップルじゃダメですよね」

誰に対してかわからないが申し訳なさそうなその姿が、なんとなく大輔の心を疼かせた。

自分の友人である村西に気を使って出してくれたのに……やっぱり出るべきではなかったのだ。

そう思うと、一刻も早く会場を後にしたかった。

「……帰るか？」

「ハイ!」

勢いのよい返事に添えられた笑顔に、心が軽くなる。

壇上では司会者が何かを話し続けていたが、自分たちには関係ないだろう。

美雪の手をぎゅっと握りしめくると踵を返そうとした時に、急にライトをあてられ目の前が明るくなった。

と同時に、周りが自分たちを見つめながらパチパチと拍手をしている。

『特別賞ですよー！！20番のカップルさん！舞台上に上がってくださいー！！』

何かなんだかよくわからないうちに、いつの間にか人の波に押されるように壇上へと上がっていた。

壇上でのやりとりは羞恥プレイのようだったが、思いがけない副賞が手に入った。

宿泊券が良かった、などと欲張りなことは言えない。

「どうせなら、靴を買う前にもらいたかったな」

隣を歩く美雪がくすくすと笑った。

「これ、やるよ」

副賞の商品券が入った封筒を、彼女の前に差し出した。大衆の面前でキツイ思いをさせたお詫びのつもりだ。

「えっ！？ そんな、松沢さんが使ってください！」

「いいよ。女の子の方が、色々買い物とか多いだろ？」

「でも、今すぐ買いたいものなんて決められないし……。多分、私もうここに来ることがそんなにないと思うんです。……電車だと、乗り継ぎとか結構大変で」

“ だったらまた連れてきてやる ”

喉元まで出かかった言葉を飲みこんだ。

もうここに来ることがないという言葉は、やんわりとした拒絶のようにも思えた。

「松沢さんがいたから、もらった賞のようなものなんですから」

そんなことは決まっていなと思うが、今の彼女には何を言っても受け取らないだろう。

「ふーん……。じゃあ俺がもらうか……」

それならそれで、考えがある。

落とすと決めた以上、ただで引き下がるつもりはない。

「帰る前に、ちょっと寄っていい？」

素直に返事をしをした美雪を、明確な意志を持ってある場所へとひっぱって行った。

元々このアウトレットモールに行き先を決めた時から、何か記念

に買ってやろうと思っていた。
バタバタして言いだすきつかけも選ぶ暇もなくこんな時間になってしまったが、順番が入れ換わっただけだと思えばいい。

「あの、ここ……?」

それほどアクセサリーに詳しい訳でもない大輔でさえ知っているよ
うな、アクセサリーブランドショップの前で立ち止まった。
アクセサリーを扱っているようなショップは、密かにパンフレット
で確認済みだった。

二十歳の女の子である美雪がそこを知らない訳もなく、店の前で驚
いたように立ちすくんだ。
それに構わずにぐいと手をひっぱり店の中へと足を踏み入れる。

「誰かにプレゼントですか?」

この後に及んで不思議そうな顔をしている彼女に、苦笑を浮かべな
がら答えた。

「うん。俺の横でとぼけてる誰かさんに」

「……えっ?」

大輔が今まで付き合ってきた彼女たちであれば、すぐに察して嬉々
としてショーケースを覗くに違いない。

普通の女の子であれば、それがごく当たり前な反応だと思う。
しかし、美雪は呆然とその場から動こうとはしない。
じれったくなり手をひいたままカウンターへと近づいた。

「朝雑誌で見てたやつ……こういうのだったよな」

「あ、あれは、別に欲しくて見てた訳じゃなくて……」

「いない？」

「いついえ……そういう訳じゃないですけど……」

美雪が困ったように眉をしかめた。

困らせた訳ではない。むしろ、喜んでほしいのに。

立ち読みの雑誌でアクセサリーのページを見ていたくらいだから、嫌いではないはずだ。

なのに彼女はショーケースを覗くこともなく、ただ身を縮ませている。

「あの、本当に……おねだりしたくて見てた訳じゃないんです……」
ただ贈りたいだけだということを、どうやってわかってもらえばいいのだろうか？

「うん。わかってる。俺が美雪に買ってあげただけだから」

つい漏れてしまった本音に、ハツとしたように美雪が顔を上げた。

視線が絡まりあう。

揺れる瞳の奥に隠れる感情を読み取りたかったが、逆に彼女の瞳に疑問が浮かぶ。

まるで、大輔の気持ちをさぐるのかとしているように……

探られる視線に怯み、逸らしたのは自分の方だった。

「……どれにする？」

「お好きなのをカウンターからお出ししますよ」

店内で見つめあうカップルなど見慣れているのだろう。

絶妙のタイミングで近づいてきた女性店員が、商品を選ぶように促してくれた。

「あまり派手なのは上司として認めません」

場を取り繕うように、ふざけた言葉が口から出た。

「わ、わかってます……」

その返事がようやく承諾したことを意味していて、思わず顔が緩んだ。

「これなんていかがですか？ お客様のイメージに合うと思いますよ。希少なハート型のダイヤを使っているんです」

「かわいい……」

あれこれと店員に勧められるがままに手に取っていたが、そのデザインがひと際気に入ったことはすぐにわかった。頬が少しだけ紅潮して、目がキラキラとしている。

「つけてやるよ」

もそもそと格闘している手元からネックレスを取り上げる。

「髪の毛」

「あつ、ハイ」

役得だな。

そう思いながら、髪の下に隠れていた白いつなじにほんの少し触れる。

「わぁ……とても、お似合いです」

女性店員の声に我に返り鏡を覗きこむと、つけたばかりのネックレスが美雪の表情に負けないくらいキラキラと輝いていた。

やっぱりまだ若い女の子なんだな、と変なところで納得してしまう。

「うん……似合う」

大輔の言葉に、はにかんだように美雪が笑った。

そこまでは確かに乗り気だったと思うのに、店員が離れた途端に美雪が挙動不審になった。

「……松沢さん？」

「ん？」

「あの……私、こんなを買ってもらえません……」

何も悪いことはしていないというのに、泣きそうな顔で大輔を見上げている。

「なんで？」

「いえ……あの……」

「お待たせしました」

店員がトレーに載せたネックレスにも、もう積極的に手を伸ばすことはない。

隣で見ていて少しいらいらとしながら、美雪に似合いそうなものを大輔が手にとった。

「これは？」

確か、イニシャルをかたどったネックレスが朝見ていた雑誌に載っていた気がする。

偶然にも、ネックレスのイニシャルも『M』だ。

「あの……素敵ですけど……」

強引に美雪の首にネックレスをつけると、鎖骨の下でゆらりとトップが揺れる。

「んー、かわいいですけど……お客様にはちょっとチェーンが長いかしら？」

これはこれでセクシーな気もしたが、プロである店員に言われると

なるほどという気がする。

「やっぱり、最初のがいいかな？」

「そうですね、お客様の雰囲気にもお似合いです」

ちらりと美雪の視線の先が、値札に向かっていていることに気付いた。そうか、それなら……こちらが気遅れすることはない。

店員が離れたのを見計らって、美雪が大輔の脇をつついた。

「松沢さん、本当に私、欲しくて見ていた訳じゃないんです」

「だから、わかってるって」

「こんな高いもの……いただけません」

必死に俯き首を振る。

今まで、こういつプレゼントは当たり前とする女性が多かっただけに、この反応は新鮮だ。

「こういつの、キライ？」

「えっ、キライな訳……ないじゃないですか」

断りの文句とは裏腹に、美雪の指が名残おしそくにネックレスに触れた。

「でも……私……所詮7日間だけの彼女なのに」

7日間だけのつもりはないよ。

そう言いたかったが、それはまだ早い気がして口をつぐむ。

そもそも、何度もそのことを持ち出されるのは心外だ。

こっちは、その先を見据えているというのに。

「謙虚な姿勢はいいと思うけど、こっぴつ時には素直に受け取ってくれる子の方が俺は好きだ」

大輔の理不尽な怒りを感じ取ったのか、困ったように眉根を寄せた。

「……そういう言い方、ずるいです」

こっぴつたら力づくだ。引き下がるといふ選択肢はない。何故だかそんな意地にも似た気持ちが沸き起こる。

「1年目の新人のクセに」

「関係ありません」

「美雪。俺は、美雪に笑って受け取ってほしいんだけど」

彼女だって、きつとிரらない訳じゃない。

さきほどのキラキラとした目を見ればわかる。

だったら、笑って受け取ってほしい。

どうせ……君は俺のものになるんだから。

精いっぱい穏やかな顔をして見せると、美雪はこくりと首を縦にふった。

第73話 もつひとつの7日間・5（後書き）

更新が遅れてしまい、申し訳ありませんでした。

第74話 もうひとつの7日間・6

店の外に出てすぐに渡した包みを、美雪は感慨深げに手のひらですっと包んだ。

クリスマスはすでに先週終わったばかりだけれど、ゴールドに真っ赤なりボンというコントラストは、どうみてもクリスマスプレゼントにしか見えない。

「少し遅くなったクリスマスプレゼントってことで」

「……ありがとうございます。すっごく……すっごく嬉しいです」

頬を赤らめながら先ほどまでの戸惑いが嘘のような表情を浮かべる彼女に、逆にこちらが戸惑う。

照れ隠しに、ぶっきらぼうに手を握り駐車場へと急いだ。

抜け駆けをするように後にしたイベント会場だったが、予定外の買い物をしたことでイベント終了時刻とほぼ同じになってしまった。駐車場を出るのすら時間がかかりそうだ。

車に乗り込み横を見ると、包みを前に何やら思案顔の美雪がいた。

「どうした？ 開けてもいいぞ」

「えっ、あの……手を洗ってからにします……」

予想もしなかった返事に、思わず笑い声を上げてしまった。

開ける前から大事にしようとする心遣いが伝わってくるようで、自覚なく顔が綻んだ。

「遅くなっちゃったけど……本当に、夜食べなくていいのか？」

「ハイ、昼が遅かったのであまりお腹がすいてなくて……」

「そっか」

渋滞の道すがら何度か夕食に誘うような言葉をかけてみたが、美雪の口からはつれない返事しか聞くことができなかった。

成田を巻きこんでの食事の約束は、いつ実現するのだろうかとぼんやり思う。

混んでいたにも関わらず帰りはあっという間で、気づけば彼女のマンションの前に車を止めていた。

「あ……」

美雪が、自分のバッグに目を落として小さな声を上げた。
なんだろう？

そう思っで見つめていると、ごくごくそと何かと取り出した。

「これ、あの……」

美雪の手には、小さな紺色の包みが乗っていた。

綺麗にラッピングされた包みはどう見てもプレゼントで、そしてそれはどう考えても自分へと差し出されているように思える。

「なに？」

「あの、デートに連れて行ってくれたお礼に……」

「俺に？」

「はい」

嘘、と言いかけた言葉をなんとか飲み込む。

「……ありがとう。すげえ嬉しい」

いつの間に用意したのだろう。

イベントの後は片時も離れず傍にいたので、ネックレスのお礼に慌てて買ったという訳ではないはずだ。

無意識に笑顔が浮かぶ。

「開けてもいい？……手、洗ってないけど」

照れ隠しに先ほどの彼女の言葉を借りると、ふふっと小さな笑い声が聞こえた。

「はい。喜んでもらえるか、わからないですけど」

喜んでもらえるか、なんて言われるとは。

用意をしてくれていたという事実だけでも嬉しいのに。

逸る気持ちを抑えつつ慎重にラッピングのテープを剥がすと、中から出てきたのは、シンプルなブレスレットだった。

黒い革のベルトに、銀色のプレート。プレートの上にブランド名が彫つてあるが、それ以外は主張が少なくいたってシンプルなデザイン

んだ。

「へえ……いいね」

すぐに手首にはめてみると、美雪に合わせたつもりの今日のカジュアルなスタイルに、しっくりと合う気がした。

「これ、今日買ったの？」

「はい、あの……一人で見ている時に」

一人で見ている時。

しばらく考えて、それは自分がビジネスシューズを買っている時だと気づいた。

大輔と一緒にの時に彼女が何かを買うことはなかったし、彼女が一人で買えるような時間はあの時しかなかったはずだ。

セレクトショップで何かを見ているような気配はあったが、まさか自分のものを探してくれているとは思ってもなかった。

「全然気付かなかった。すげえ嬉しい」

同じ言葉を繰り返していると、愛おしげにブレスレットを摩りながらふと気付いた。

「お前もこういうの買ってたくせに、自分は受け取るのしぶるってどういことだよ」

「あ……すみません……」

「いや、謝らなくていいけど」

顔を見合わせて笑いながらも、なんだか先を越されたような少しだけ悔しい気持ちで泣く。

「やっぱり、お前も今開けて？」

「え、どうしてですか？」

「ん、つけてるところが見たいから」

暗い中でも確認できるくらい、わかりやすく頬を赤らめた美雪が、もぞもぞとラッピングをほどき始めた。

ピンクのジュエリーケースが現れると、一瞬手が止まる。

無意識に息を止め彼女の行動を見守っていると、そろりとケースを開けた美雪がふーっと小さく息を吐いた。

「やっぱり……すごく、かわいいです……」

微かに潤んだ目元に、ふいに胸が高鳴る。

「つける？」

違った。

言うべき言葉は、つけてくれないか？ だった。

それでも間違いを訂正する余裕もなく、手元からネックレスを奪う。美雪は慌てて髪を束ねて横を向こうとしたが、それを軽く制した。

「そのまま、こっち向いてて」

こちらをじっと見据えたままの彼女を、抱きしめるように首に手を

回す。

わざとゆっくりとネックレスの留め具を止め、からまりそうになつた髪をさらりと払いのけた。

ほんのりと、柔らかいシャンプーの香りがする。

彼女の華奢の首を纏う金色の鎖が、きらりと光った。

誘うような光に、思わず手を伸ばしてその細い鎖を辿る。

目を合わさないようになのか、伏せられた瞳の上で睫毛がふるふる揺れた。

鎖骨の少し上におさまった煌めくハート型のダイヤに触れると、指先にほんの微かに触れた彼女の肌は、ヒヤリとしている。

思わず、ごくりと喉をならしそうになった。

「うん……似合うよ」

理性を働かせて、ようやく彼女から身を離れた。

距離が離れたことに安心したのか、美雪の視線がようやく自分へと戻る。

その瞳の奥の覗く感情は、戸惑いだろうか。それとも。

さきほど触れたばかりの指先の感触を求めるかのように、無意識に手が上がり指の背で美雪の頬に触れた。

想像以上に柔らかい、ふわりとした感触に胸が疼く。

戸惑いながらもまっすぐに大輔を見つめる視線の意味を、知りたくなる。

何秒、そうしていたのだろう。

まだ、手を出していい時期じゃない。

彼女からの好意を感じることはできるけど、それが状況に流されているだけなのか、それとも恋なのか。

仕事以外の自分を見せはじめて、まだ2日。

まだ、その感情が何かと決定づけるには早い気がした。

名残惜しい気持ちでそつと手を外したが、彼女の表情は惚けたように動かなかった。

「じゃあ、また明日」

「あ……は、はい！」

意識して低く呟いた声に、美雪が慌てたように膝に置いていたコートを羽織った。

「そついえば、お前こそ正月には帰省するのか？」

「いえ、あの、両親が温泉旅行に行っちゃうので……帰省したくてもできないんです」

他愛もない会話を繰り広げながら、ちらりと彼女がこちらを伺うのに気付いていた。
計算がなくまっすぐに向けられる瞳は、少し恥ずかしいくらいだった。

「今日は本当にありがとうございました」

車を下りた美雪が、運転席側までまわってきて深々と頭を下げた。

「うん、また明日。会社で。」

「はい、明日」

「あ」

ふいに耳を赤くしたままの彼女をからかいたくなり、閉めかけたウインドウの動きを止めた。

「え？」

きよとんと美雪が首を傾げる。

「俺、公私混同はしないからな」

にやりと笑いながら言うと、返ってきたのは“わかってますって”と怒ったように言う、想像通りの反応だった。

「友達に連絡しろよ」

「はい」

「おやすみ」

思わず車の中から手を伸ばし、さらりとした髪をくしゃくしゃと撫でた。

「……はい。おやすみなさい」

名残惜しさを隠すようにぴったりとウインドウを閉め、ゆっくりと車を発進させた。

バックミラーに映る彼女がどんどん小さくなっていき、そして視界から消えた。

ふう、と軽い息を吐いたが、それはため息ではなかった。どちらかと言うと、安堵に近いものかもしれない。

とりあえず一日は終了したが、前進したのかどうかは疑問だ。

再び息を吐こうとして、腕にはめたままのブレスレットが目に入った。

ああ、前進はしたのか。

28にもなつて何をと思いつつも、顔がにやけるのは仕方がない。あつという間についた自分のマンションの駐車場に車を止め、気づくと駆けるように階段を上っていた。

第74話 もうひとつの7日間・6（後書き）

この話にて、一旦「もうひとつの7日間」は終了です。
次話から大輔編本編に戻ります。

第75話 誕生日デート(前書き)

本編の流れに戻ります。

第75話 誕生日デート

「おはようございます!」

美雪の誕生日当日。

約束の時間に迎えに行くと、すでに彼女はマンションの入口まで降りて大輔を待っていた。

どこに行くかは、あえて伝えていなかった。

それを深く聞いてこないのも美雪らしいと言えば美雪らしいが、いよいよ2日前になると困ったように電話がかかってきた。

『どんな格好で行けばいいですか?』

「背伸びした格好はしないで、動きやすい格好で来てほしい」

そう伝えたからだろう。

ショートパンツにモコモコとした素材のジャケット、ヒールの低いブーツ姿の美雪は、大人っぽい格好をしたがる普段とは違い、より自然で力が入ってないように見えた。しかし、この寒さにショートパンツ。

さすがに20歳の女の子だと感じずにはいられない。

「あの……こんな格好でよかったですか?」

「ん。可愛いよ」

そう言うと、照れたように俯いた。

「俺こそ、おっさんくさくないか？」

そんなに服装にこだわる方ではないが、8個も下の彼女となるとさすがに気を使う。

あからさまに年の差を感じさせる格好はしたくない。それは男の見栄なのだろうか。

「え、そんなこと全然ないですよ？ かつこいいです」

大輔の気持ちなど想像もつかない美雪は、きよんとした顔で大輔を見つめている。

「泊まる準備は……してきたみたいだな」

「え、あ」

美雪の足元に置かれたポストンバッグを、ひょいと持ちあげた。

「あの……荷物、多いですか？」

「は？」

ポストンバッグを後部座席に放りこむと、申し訳なさそうな声が出た。

「何を持っていけばいいか、いまいちわからなくて……あの」

美雪の視線をたどると、同じく後部座席に置いてある大輔の荷物を
見ているようだった。

確かに大輔のバッグは、美雪のそれより一回り以上はコンパクトだ。

「女の子の荷物なんて大体そんなもんだろ？ 気にするなって」

ぼんぼんと頭を叩いてそう言ったが、相変わらずしょんぼりとした
ままだ。

「……………どうした？」

ここ数日、会社でも美雪の様子が気になっていた。

普段通り仕事をしているようで、なんだか元気がない。

忙しさでなかなか会う時間を作れない事に対してなのかと思ってい
たが、今日のこの態度を見てると違う気がする。

「え、あ、大丈夫です。なんでもないです」

大輔ににこつと笑顔を向けて見せるが、それが無理に作っているよ
うにも見える。

なんだか心にひっかかるものを感じながらも、今それを聞くのはや
めようと思ひ助手席のドアを開けた。

今日はずっと一緒にいられるのだから、もっと後でもいいだろう。

「よし。じゃあ行くぞ」

「ハイ！」

先ほどまでの陰りのある表情を隠し、美雪が嬉しそうに車に乗り込
んだ。

『今日のこの誕生日に、最高の素敵な思い出を残してあげよう』
強く心に誓いながら、運転席に乗り込みドアを閉めた。

高速道路に乗った車の窓に広がる景色を見て、美雪のテンションが序々に上がっていくのが手にとるようにわかった。

「大輔さん、もしかして……いや、やっぱりいいです！」

何度もそう言っっては、もじもじとした様子で車窓を眺めている。その頬は、興奮でかすかに朱に染まっている。

高速道路を降りた車が案内板通りに進んでいくのを見て、ようやく確信したようだった。

「すっごく……すっごく嬉しい！ どうしてわかったんですか？」

キラキラとした瞳で見つめられて、曖昧に笑顔を返した。

誕生日デートの行き先に決めたのは、海沿いにあるテーマパークだった。

付き合っていた女性にせがまれて、何度か来たことがある。

でも、自分の意思で行こうと思ったのは初めてだ。

“「ここなら、きっと美雪も喜ぶ」”

そう思って、小林を通して尚美に聞いてみると、学生時代に友人同

士で何度か行ったとの答えが返ってきた。

『美雪ちゃん、いつか彼氏と来てみたいなあ〜って言ってたって』
電話越しでも、ニヤニヤと笑う小林の顔が見えるようだった。

「私……いつか彼氏ができたら一緒に来てみたいなあって、いつも思ってたんです」

小林から聞いたのと同じセリフを、美雪がうつとりとしながら口にした。
興奮した面持ちで膝の上のバッグを握り締める姿を見ると、大輔までもが嬉しくなってくる。

「よかったな」

「はい！ あの、でも……駐車場、通り過ぎましたけど……？」

テーマパークの駐車場を通り過ぎたことに気づき、美雪が不思議そうな顔をした。

「泊まりだつて、言っただろ？ チェックインの時間はまだだけど、車は駐車できるから」

「ひえっ！！」

「なんだよ？」

「そ、そんな……」「こ、高いですよね？」

テーマパークに直結したホテルに向かっていると知り、オロオロとした様子で大輔の顔を見る。

「お前の基準でだろ。俺はいくつだと思ってんだよ」

丁度信号で止まったのをいいことに、美雪の柔らかい頬をふにっとなでつむむ。

「ふえ……夢みたい……れす……」

大輔に頬をつままれたまま、ふにやっとなでつむむと美雪が笑顔をこぼした。

「うわあ〜!!」

荷物を預けてテーマパークに足を踏み入れると、普段はあまり大きな声を出さない美雪の歓声が聞こえた。

「社会人になつてからは、来るの初めてなんです」

そう言いながら、大輔の手をきゅっとなでつむむ。

「でも、大輔さん、いいんですか？」

「何が？」

「ここ、正直大輔さんのイメージじゃないですけど」

「……言ってくれるな」

手をつないだまま脇を小突くと、ケラケラと美雪が笑った。

仕事中は落ち着いて見えるけれど、こうやっているとまだ20歳…

…、いや、21歳の女の子なんだということを痛感する。

「今日は美雪に付き合っよ。お前の方が詳しいだろ？」

「そうですね！ あ、まずアレを買わないと！」

大輔の手をひっぱるように、ポップコーンのワゴンへと走り出す。

その笑顔を見ていると、元気がないように見えたのは気のせいだったのだろうと思えてきた。

きっと、初めて大輔と泊まりに行くということに、緊張もあったのだろう。

「今日、どこに行くのかなーって少し不安だったんですけど」

ワゴンの行列に並びながら、美雪がぼつりと言った。

「まさかここに連れてきてくれるなんて、思ってもみませんでした」

にこっと笑い大輔を見上げる。

「温泉とかだったら、なんか緊張するーって思っ……」

「それも考えたけど」

「えっ！」

「まあ、それは次回かな」

にやっと笑って美雪を見下ろすと、微かに目を細めるように複雑な顔をしていた。

「……どうした？」

「えっいえ、なんでもない！」

ぶんぶんと首を振り、誤魔化すように笑う。
やっぱり、気のせいなんかではない。

「美雪、何が……」

「あ、次私たちですよ！ あの、ストラップ付きで……」

大輔の問いかけにかぶさるかのように嬉々として注文をする横顔を、口をつぐんで黙って見つめていた。
今は話したくないという意味表示のようだ。

（後から必ず聞こう）

そう思いながらもそのきっかけはなかなか掴めないまま、アトラクションやショーを楽しんでいるうちに、美雪のおかしな様子はきれいさっぱり吹き飛んでいた。

「大輔さん！ 次こっち！」

大輔の腕をひっぱるように、笑顔で次々と場所を移動していく。そんな美雪に苦笑をもらしながらも、結局は言われるがままについていく。

不思議と、疲れや苦痛は感じない。

今までもこのテーマパークには来たことはあるが、正直あまり楽しんだ記憶はなかった。

“ 疲れる ”

“ 別に面白くない ”

そう言っただけで早々に帰宅しようとして、付き合っていた女性に不満をぶつけられたこともある。

自分はこの手の場所が苦手なのだと思い込んでいたけれど、それは一緒に来る相手によるのだということを改めて感じていた。誘われるままに、お土産品が並ぶショップの中に入る。

「 大輔さん！ 見てー！ 」

ヒラヒラとウエディングドレスのベールのようなチュールがついたカチューシャを、美雪が頭につけて振り返った。

「 うん 」

「 うん、じゃなくて……どうですか？ 」

「 なんて言っただけいいんだ？ 」

「 え？ 」

あまりにはしゃぐ様子に、ついからかいたくなつた。

「花嫁みたい、って言ってほしい？」

「いつ……」

真つ赤な顔をした美雪が、パツと頭からカチューシャをはずした。

「どうしてはずす？」

「え、だって……もう、いいです！」

慌てて棚に戻そうとしたカチューシャを、すつと取り上げた。

「似合ってる。買ってやるよ」

「え……でも」

ちらりと睨みを利かせて美雪を見ると、ひつと縮みあがつて口をきゆつと結んだ。

7日間の間に行ったアウトレットモールで、“こういう時は黙って受け取れ”と言ったことを思い出したのだから。

「そっ。かしこいな」

カチューシャを手に持ったままレジへと向かおうとすると、つんと引っ張られるような感覚がした。

後ろを振り向くと、美雪が大輔のジャケットの裾をつまんでいる。

「あの……ありがとうございます」

「ん」

レジへと並びカチューシャを手に入れ、そしてそれを再び美雪の頭につけた。

髪が乱れないように、慎重に頭に載せる。

目を伏せていた美雪がゆっくりと視線をあげて、大輔の顔を見て目を細めるように笑った。

その視線に、どくりと欲望が疼く。

（ ヤバイ。今なんか来た ）

シヨップの壁にかけられた時計に目をやると、時刻は16時を過ぎている。

「 …… チェックインの時間すぎたから、一度部屋を見に行ってみるか？ 」

「 あ！ はい！ もちろん！ 」

大輔の邪な感情に気付く訳もなく、ぱあっと美雪の顔がさらに明るくなる。

「 ううー、嬉しい……私、あのホテルの部屋に入るの初めてです！ 」

「 俺だってそうだよ 」

「 え？ そうなんですか？ てっきり…… 」

そう言いかけて、はっと口をつぐむ。

「なんだ？」

「……いえ……」

「なんだよ。言え」

じろつと見下ろすと、困ったような顔をしてからしぶしぶ口を開いた。

「あの……今までにお付き合いしてた女の人と、きつと来てるんだろ？なあって……」

「は？」

「違うんです、か？」

確かめるように、美雪が大輔の顔を覗きこんできた。

「……ここには来たことがないとは言わない。でもわざわざ泊まったことはない。お前とが初めてだ」

「そ、そうですか……」

美雪の口の端が、嬉しさを堪えるようにひくつと歪んだ。

「大輔さん、行きましょう！ 私、早く部屋が見てみたいです！」

「あ、ああ……」

このゲンキンなまでの反応を、喜ぶべきなのだろうか。
再び、ひっぱられるようにシヨップを後にしながらも、先ほどとは
違う笑みが大輔の口に浮かんでいた。

第76話 告白

「わぁ……すごい……」

ホテルの部屋に足を踏み入れた途端、美雪が歓声をあげた。

大輔でさえ息をのむような美しい景色が、ホテルの窓いっぱい広がっている。

あらかじめ連れが誕生日だということを知っていたせいか、キャンセルが出た景色のいい部屋に変更したとフロントで言われていた。日が落ちたばかりの海に残像のように光が映り、それを補うようにぼつぼつと街灯やイルミネーションがともり始める。そんな絶好の時間にここに立っていることを実感する。

お互いに、しばらく声が出なかった。

「大輔さん……本当に、ありがとうございます」

そう言って、美雪にしては珍しく大輔に身体をくっつけてきた。

「うん」

ぎゅっと寄り添う身体に、ゆっくりと手を回す。

子供をあやすようにぽんぽんと背中を叩いてやると、くぐもったような泣き声が聞こえてきた。

「え、何？ ……泣いてるのか？」

「なんか……感動して、涙が」

そう言つて、えへへと笑いながら手で目をぬぐおうとする。
無言で涙の滲む目尻に唇を寄せると、美雪がわずかに大輔の方へと顔を傾けた。

黙ったまま身をまかせるその姿がいじらしく思えて、ぎゅっと小さな身体を抱きしめた。

「これだけじゃないんだけど」

「え？」

身体を少し離し、部屋の中央のテーブルへと視線を促した。

「え……あつこれ……」

驚いたような顔をして、大輔を見上げる。

「大輔さん……知って、たんですか？」

「秘密」

テーブルの上には、事前にホテルに用意してもらった小さなケーキが置かれていた。

小さいながらもホールの形をしたそのケーキの上には、ホワイトチヨコのプレートが乗っている。

『Happy Birthday to Miyuki』

その文字を見て、美雪がまた目を潤ませた。

「な、なんで知ってるんですかぁ……」

「当然だろ」

再び投げかけられた質問にわざと冷たく答えると、美雪はぷうっと頬を膨らませて抗議の表情を浮かべたがそれすらシマリがない。

「誕生日、おめでとう」

そう言つて、美雪のおでこにキスをした。

唇にしなかつたのは、それだけでは止まりそうになかつたから。

「これ……これ、食べてもいいですか？」

「今か？ デイナーの予約もしてるんだぞ？」

「でも、今食べるのが一番美味しいですよ、絶対。大丈夫です！
夕食もちゃんと食べられます！」

子供のような言い訳に、ぷっと思わず噴き出した。

「少しにしとけよ。冷蔵庫に入れて、夜に食べてもいいんだから」

「はい！」

ジャケットを脱ぎ、手を洗うために洗面所へと美雪がかけていったその姿をほほえましく見送りながら、どっかりとソファに腰を下ろした。

楽しんでいるつもりだったけれど、今日の休みのために仕事を詰め込んでいたのは事実で、やはり疲れが出てきたらしい。

「大輔さん？」

「何？」

ハツとして背もたれから背中を離すと、美雪が遠慮勝ちに声をかけてきた。

「あの……誕生日ってことで……ひとつ、お願いがあるんですけど」「ケーキの載った皿を手に持ち、もじもじと申し訳なさそうにこちらを見ている。

「……お願いごとにもよるけど」

「これ、このケーキ、あーんってしてください！」

「はあっ？」

予想もしなかったおねだりに、思わず不機嫌な声で返事をしてしまった。

「あ……ダメですかね、やっぱり……」

フォークを手に持ち、しょんぼりとした顔をする。

「ダメ……では、ないけど」

「ホントですか!？」

あまりに落胆ぶりにそう言ってしまったが、キラキラとした顔に思

わず怯む。

「じゃ、気が変わらないうちに！」

無理矢理フォークを握らされて、ケーキの皿を手に持ち隣へと移動してきた。

不本意だが仕方ない。ざくざくとホールのままのケーキにフォークを入れて崩す。

「ああっ！ そんなに乱暴にすると、せっかくのケーキが崩れ……」

「うるせえな」

軽くため息をつき、美雪の口には少し大き目の塊にぶすつとフォークを突き刺した。

「それ、ちょっと大きくないですか？」

「ほれ。あーん」

にやにやと笑いながら、美雪の目の前にケーキの乗ったフォークをかざす。

うつと一瞬詰まったあと、ヤケになったのか大きな口を開ける。

その口いっぱいこのケーキの塊を、無理矢理突っ込んだ。

「むっ！」

非難するような声をあげながらも、もぐもぐと口を動かし、ごっくんとケーキを飲みこんだ。

「これ……すつごく、美味しいです!」

美雪が感嘆の声をあげた。

「そうか。それはよかったな」

「大輔さんも、ちょっとだけ食べてみてください!」

そう言いながら大輔が手にしていたケーキの皿を奪い、フォークでケーキを小さく崩す。

「ちょっとだけ?」

「勿体ないので。はい、あーん」

なんの躊躇いもなく、フォークにささったケーキを大輔の口元にかざした。

……あーんつて。

一瞬眉をひそめてみせたが、あまりに自然にやってのけるので、意識した自分の方が恥ずかしく思える。

仕方なく小さく口を開くと、フォークが大輔の口の中に飛び込んできた。

「ね? 美味しいでしょう?」

「ん。甘すぎなくて……うまいな」

嬉しそうにしている美雪に目をやると、先ほど大きな塊を食べさせたせいか唇のまわりにクリームがついている。

「クリーム、ついてる」

そう言っつて、美雪の口に自分の唇を寄せた。

こらえていたはずなのに、頭から飛んでしまった。

舌で丹念に唇の周りをなぞり、クリームを絡め取る。

「……甘い」

何かを言おうとしたのかわずかに開いた唇に、そのまま舌を滑りこませた。

小さな吐息とともに吐かれた美雪の音が、部屋に響いた。

このまま。

ベッドに押し倒して、何もかも全てを奪ってしまいたい衝動にかられる。

もしかして、美雪もそれを望んではいないだろうか。

そんな都合のいい感情さえわいてくる。

でも、ダメだ。

今日は美雪の誕生日というだけではなくて、ちゃんと話さなきゃいけないこともあるはずだ。

何も話さずに抱くのは、ズルイ。

抱いてから話すのは、卑怯。

甘いケーキの味がする口内に舌をもぐらせていたのを、最初にひきあげたのは大輔の方だった。

顔を離すと、美雪がぼんやりとした顔で大輔を見上げている。

（今日は、ダメとかイヤとか言わないんだな……）

その頬に、手を伸ばす。
上気した顔が、熱い。

その熱を冷ますように、いつものようにぼんぼんと頭を叩いた。

「ディナーまで時間あるから、もう一回お土産でも見に行くか？」

「あ……ハイ……」

わずかに目を伏せた美雪が、こくと頷いていた。

テーマパークで再び時間をつぶした後に、予約をしていたレストランへと足を運ぶ。

座席の指定はできないと事前に言われてはいたが、運よく窓際の席へと案内してもらったことができた。

先ほどまではあからさまに言葉が少なかった美雪の顔が、途端に輝く。

日が完全に沈み夜が訪れたテーマパークは、色とりどりのイルミネーションで建物やアトラクションが彩られている。

そんな景色をうっとり見つめる美雪につられ、大輔も窓の外に目を向ける。

(やっぱり、女の子だよな……)

その景色は、日常の気ぜわしさを忘れさせてくれるほどに幻想的だ。二人で無言で窓の外を見つめていると、ほどなくして食前酒のワイ

ンが運ばれてきた。

「誕生日、おめでとう」

グラスを持ち上げてそう言ってから、かっこつけすぎな気がして途端に恥ずかしくなった。

しかしそんな大輔に気付く様子もなく、美雪がぼんやりとした顔で大輔を見つめている。

「……………どうした？」

「あ、いえ、なんか……………本当に夢みたいで」

慌てたようにそう言い、グラスを持った。

「ありがとうございます」

そう言って、グラスに口をつけた。

「美味し！ 甘くて飲みやすいです」

「飲みすぎるなよ。泣き上戸」

「違いますう」

美雪がふふつと笑いながら、再びグラスに口をつける。

「夢なら……………いつか覚めちゃうんでしょうかね？」

「何言ってるんだよ」

軽く笑って、同じく運ばれてきた前菜に手をつけた。
しかし、美雪の表情は晴れない。

思わずじっと見つめてみると、大輔の視線に気付いてか無理に笑い顔を作る。

「さく、今日は食べまくりですよ〜」

ニコニコと笑いフォークとナイフを手に取るが、その様子はわざとらしいと言えない。

自分の話をするのが先か。

美雪の様子を問いたただすのが先か。

悩みながら、気もそぞろに食事が進む。

大輔につられるように美雪も無口になり、楽しいディナーのはずが何故かお互いのベクトルは別の方向を向いたままだ。

あとはデザートを待つのみ、となったときに、ふいに窓際が騒がしいことに気付いた。

「……………なんだ？」

「この時間だと……………もうすぐ夜のショーが始まるのかも。多分、このレストランのテラスから見えるはずですよ」

「行ってみるか？」

「ハイ！」

デザートを運んでくるのを少し待ってもらい、他の客にまぎれてテ

ラスへと足を運んだ。

「わあっ！」

テラスへと一歩足を踏み入れた途端、大きな音がして花火が上がるのが見えた。

その幻想的な演出に、辺りが歓声に包まれる。

「すごい……綺麗ですねえ……こんなところで見るの、初めて」

うっとりと言いながら、美雪が柵へともたれかかっていた。

初めての思い出を、これからももつともつと作ってやりたい。そう思ったけれど、それには告げなければいけないことがあった。

「……美雪」

「ハイ？」

振り向いた顔が、花火で照らされる。

「お前に、話しておきたいことがあるんだ」

「……はい。なんでしょうか」

こんな時に言うのは、卑怯かもしれない。でも今じゃないと言えない気がした。

美雪がわずかに表情を硬くして、大輔を見上げた。

「俺……」

周りから、わあつとひとときわ大きい歓声が上がる。
ちらりとテーマパークに目をやると、丁度主役のキャラクターが登場したのが見えた。
そんな状況でも、美雪は変わらずまっすぐに大輔を見つめている。
覚悟を決めた。

「俺に、転勤の話が来てるんだ。次の……春になったら」
きっぱりと、そう告げた。

「場所は……？」

恐る恐るといったように、美雪がそう尋ねた。
花火が一旦やんで暗くなったテラスでは、微妙な表情まではわからない。

「……大阪」

フウ、と小さく息を吐く音がした。

「そうですか……」

沈黙が訪れた。

再び花火が上がリ、美雪の顔が照らしだされる。

意外にも、驚いたような様子はなかった。
寂しそくに目を細め、無理に口角をあげてみせる。
しかし、どうがんばってもその顔は、笑っているようには見えない。

「……驚かないのか？」

沈黙が怖くてその言葉を続けると、

「あの……知って、ました」

ぽつりと美雪が言った。

第77話 彼女の想い

え？

知っていた？

困惑した大輔の表情を汲み取るかのように、美雪が言葉を続ける。

「知ってたっていうか……予想がついてたっていうか……」

「どういうことだ？」

「大輔さんは気づいてないと思います……情報課で噂になってます。異動だって」

予想もしなかった言葉に、思わず目を見開いた。

「元々、2年か3年の約束で情報課にいらしたんですよね？」

「そうだけど」

「今年の春で2年たつから、山田さんが皆の前で課長に『どうなんですか？』って聞いてたんです。でも課長……否定しなかったので、もしかしたらって」

自分の知らないところで、そんなやりとりがあったとは。

思わずため息をつく。

でもそれも仕方ないのかもしれない。

大輔がいなくなれば、当然しばらくは周りが苦勞することになる。

いくら新しい上司がすぐに来るとはいえ、ペースを掴むまでは部下

たちの仕事が多きつくなるのは避けられない。
課長があえて皆の前で否定をしなかったのは、責任感が足りない山田に発破をかける意味もあったのだろう。

「それでも、きつと営業部への異動だろうとは思ってたんですけど」

「……………普通そう思うよな」

「この前いらしてた辻さんから、最近よく課長あてに電話がきてまして。私、何回か電話を取り次いだんです」

課への内線電話は、成田や美雪が受けることが多かった。

「成田さんが『大阪支社の営業部の人、情報課に何の用だろう』って……………よく言ってます」

成田の坎の良さからいって、訝しく思うだろうことは容易に想像できる。

普段は頼りになる部下だが、こういう時は厄介だ。

「この間、大輔さんに会いに来られたのを見て、ひよっとしてって思ったんです。あの後大輔さん……………なんかおかしかったし」

そう言って言葉を区切り、少し頬を赤らめた。

資料室に無理矢理呼び出したあの時のことを、思い出したのかもしれない。

「そうか……………」

美雪の予想もしなかった言葉に、力無くそう言うのがやっとだった。

一瞬だけ、課長以外では唯一この話を知っている盛永を疑ったことを申し訳なく思った。
状況的には、美雪に気づかれても仕方ない。

いつの間にか、シヨールは終盤へと差し掛かっているようだ。

周りの歓声に誘導されるように眼下を見下ろし、繰り広げられるパフォーマンスを見つめる。

そっと隣的美雪の手を取ると、ほんのわずかに力を込めて握り返してきた。

「入るか」

「はい」

シヨールの終わりを惜しむような拍手が沸き起こるなか、美雪の肩を抱くようにレストランの中へと戻った。

ほどなくしてデザートが運ばれてきて、美雪の前には小さなピンク色のケーキ、大輔にはレモン色のシャーベットが置かれる。

甘いものが大好きなはずの美雪が無言のままに口を動かし、その姿に胸が苦しくなる。

楽しいディナーになるはずが、全く楽しめる雰囲気ではなくなってしまうた。

言いだすタイミングを誤ったような気持ちになったが、いつかは言わなければならぬことには変わらない。

甘酸っぱいシャーベットは、半分も食べないうちにどろりと溶け出していた。

美雪がデザートを食べ終わったタイミングを見計らい、テーブルを立ち上がった。

「行くぞ」

「え？ どこへ？」

「もう一回アトラクション乗るぞ。まだ閉園まで一時間以上あるだろ」

本当は、食事の後は部屋でゆっくりするつもりだったが、このまま部屋に戻ったとしてもこのムードは変わらないだろう。このままで、美雪の誕生日を終えられない。

「え、ちょっと……大輔さん！」

戸惑うような声が背中からかけられたが、気にせずどんどん進んだ。

閉園が近づくパークは昼間のような人出はないが、それでもこの夢のような空間をぎりぎりまで楽しもうという人々はたくさんいる。

「おい！ あれ乗るぞ」

「えっ……あれですかあ？」

昼間は、どうしても気が進まないに乗らなかったホラー系のアトラクションに、美雪の顔が凍りつく。

「あ、あれ……すごい怖いんですよ。大輔さん、乗ったことないですよね？」

「ない」

「や、やめときましょ……もう夜だし……私、怖くて寝られなくな

「っちゃうかも」

「どーせ寝られないことには変わらないだろ」

「っ！ な、何……言って」

「いいから行くぞー！」

ひいひいと声にならない声を上げる美雪を、無理矢理ひっぱって入口へと向かった。

「ああ……本当にもう……」

アトラクションを出た後、大輔の腕にしがみつくようにたよたと歩く美雪の姿に笑いが漏れる。

「ははっ、所詮作りモンだろ？」

「うー！！ 大輔さんは想像力が乏しいんです！」

目につつすら涙を浮かべこちらを睨みつけてくるが、そんなものに動じる大輔ではない。

美雪をベンチに座らせ、ワゴンで飲み物を買ってくる。

「ほら」

「あ……ありがとうございます」

にっこりと微笑んで、大輔が差し出したココアを手にとった。
並んでベンチに腰かけ、しばし目の前を通り過ぎる人の流れやイルミネーションを見つめていた。

「泊まりだから、余裕ですね」

「そうだな」

「私いつつも閉園時間ギリギリに帰りながら、あそこに泊まれる人はいいな〜って思ってたんです」

「そうか」

「夢が、叶いました。本当嬉しいです」

そう言って、何かを決心したように大輔の顔をまっすぐに見つめた。

「大輔さん……異動の話、うけるつもりなんですね」

美雪の方から、言われるとは思わなかった。

その潔さに、言葉を失う。

しかし、少し時間を置いた後にはっきりと言った。

「うん。ごめん」

朝から、いやここ数日で、何度も見かけた寂しそうな笑顔を、もう一度美雪が浮かべた。

「じめん」

もう一度、しっかりと声に出した。

「どうして、謝るんですか？」

「俺が謝りたいから」

悩んだ末に、出した結論だった。

新人時代に世話になった辻に頼りにされていると感じたとき、やっぱり恩返しをしたいと思った。

『俺と一緒に支社を立て直そう。それが出来たら、いつでも本社に帰してやる』

直接会いに来てくれた後も、何度となく電話が来てそう説得された。営業の仕事に戻り、もう一度力を試したいという気持ちもある。

見知らぬ土地に行く不安はもちろんあるが、辻は全て面倒をみると言ってくれた。

それに、何年後かはわからないが、本社にも必ず戻すという。

この会社に一生勤めたいと思っている自分が、イチ企業の人間として断る理由は見つからなかった。

ただひとつ、美雪のことをのぞいては。

「謝ってもらう理由はありません」

ふいと美雪が横を向いた。

「……怒ったのか？」

「怒ってないですよ。怒る理由がありません。ただ……寂しいだけで……」

言葉尻が震えていた。

「お、おかしいなって、思ってたんです。こんなに、いいことばかり続く訳ないって……」

横顔に、涙が一筋頬をつたった。

「今までずうっと男運もない私が、大輔さんみたいな……か、かっこいい彼氏ができるなんて……いつか、お、終わりがくるだろうって……」

ためこんでいた心情を吐露するように、美雪が言葉を続けた。

「異動の噂を聞いてから、なんか、変に悟ったというか……どっかで、諦めてて……でも、やっぱり寂しくて」

ここ数日、様子がおかしいと思っていたのは気のせいではなかった。7日間ののちに付き合うようになって、二人でいる時間が充分にとれている訳ではない。

想いは同じだとしても、会話は足りていない。この何日かを、美雪はどんな思いで過ごしどんな気持ちで大輔を見つめていたのだろう。

そう思うと、ぐっとこみ上げるものがあった。

しかし、美雪は気丈にもぐいっと涙をぬぐった。

「でも、大丈夫です。大輔さんらしい、すっぱりとした決断です！私……ひとりで」

最後まで言葉を聞かず、腕を掴んで無理矢理立たせた。

「帰るぞ」

「ふ、ふえ？」

涙が滲んだ瞳で、美雪が大輔を見上げた。

「ど、どこへ？」

「ホテルに決まってるだろ。こんなところで話してたって、埒が明かない」

半ばひきずるように、ホテルへの道のりを歩きだした。

第78話 約束

エレベーターの中で二人きりになっても、お互いに無言だった。美雪がぐずぐずと鼻をすすっている。慰めてやりたい気持ちと、自分の想いが伝わらないもどかしさが交差している。

ようやく着いた部屋にカードキーを差し込み、中へと美雪の身体を押しこんだ。

「きゃっ……」

どんつと音をたてながら、美雪の身体を壁へと押しつける。

「俺が……迷わなかったとでも思うか？」

「え……」

額がくつつくほどに顔を近付けた。美雪の瞳が、動揺で揺れている。

「今までなら、すぐにでも返事をしていた。でも、今回は……俺だつて散々迷ったんだ」

美雪の瞳に映る自分の顔は、余裕なんてものは欠片もない。でも、それがかっこ悪いとももう思わない。

「すっぱりなんて、決めてない。今だって本当は迷ってる。お前が、行くなつて言ったら……」

こんな情けないことを、言うつもりはなかった。でも、言いたくもないセリフが口をついて出てしまいきりになる。

「だ、ダメ！」

大輔の言葉を遮るように、眉をしかめて美雪が大きな声を上げた。

「大輔さんは、行くべきです。辻さんが大輔さんを必要としてることくらい、支社にとって大事な異動だってことくらい、私にだってわかります！」

「でもな」

「ごめんなさい！ 私が余計なこと言ったから」

「余計なことなんかじゃないだろ」

「そんな……私ごときで、大輔さんの未来を左右したらダメなんです！」

「私ごときとか言つな！」

思わず荒げた声に、美雪がびくりと肩を震わせた。

違う。こんなんじゃない。こんな風に、話したいんじゃない。

落ち着け、俺。

知らずに壁に押し付けていた美雪の手をゆっくりと離すと、彼女の手首にはほんのりと桜色に大輔の指の痕がついていた。

興奮して、知らず知らずの間に力が入っていたのだらう。情けないにもほどがある。

「ごめん。中で……ゆっくり話そう」

彼女の手をとり、その赤く醜い痕に唇をつけた。

「お前がどう思ったかは知らないけど、俺は別れるつもりなんてさらさらない」

部屋のソファに腰を下ろすと、きっかり一人分の空間を開けて美雪が隣に座った。その距離が、今の二人の距離だ。

はつきりと自分の気持ちを告げたのに美雪の表情は暗いままで、それをどう捉えていいのかわからないまま、冷蔵庫から取り出したミネラルウォーターの蓋を開け一気に喉に流し込む。

「お前は、別れたいのか？」

「そんな事……ないです……」

「他の男に目移りするの？」

「そんな訳っ……ないです！ 何言ってるんですか?!」

怒ったように大輔を睨みつけ、そしてまたしょんぼりと頂垂れた。

「大輔さんの方が……きつと、たくさん女の人に言い寄られます」

「どうかな。不安か？」

こくん、と首が縦に振られた。こんな状況でも素直に返事をしてくれることが、嬉しい。

そっと手を伸ばし頬に触れ、涙の痕を指で辿り赤くなった目のフチ

をなぞる。

美雪はぴくりと身体を動かしたが、大輔にされるがままになっていた。

「遠距離恋愛は、無理か？」

「わ、わかりません……経験、無いですから」

「そうだったな」

手の平で包むように顔を覆うと、いつもは冷たく感じる彼女の体温が、暖かく感じた。

大輔の方が、この先に伝えるべき言葉に緊張しているせいだろうか。

「美雪、俺のマンションに住まないか？」

「え？」

突然の大輔の申し出に、きよとんとした顔で見つめ返してきた。

「……あそこ、先月契約したばかりなんだ。駅もコンビニも近いし、正直結構気に入ってる。また戻ってきて同じところに入れる保証はないし、手放すのは惜しい」

「そ、それは……わかりますけど」

「元々、一人では住むには広すぎるくらいなんだ。俺が戻ってきても……二人で住むには、充分だろ？」

え、と小さく声をあげて、美雪の目が大きく開かれた。

ずっと考えていたことだった。何を残してやれば、何を約束したら、美雪は安心して待っていてくれるのかと。何をしてもダメな時はダメかもしれないが、それでも最大限の努力はしたかった。

「向こうでは独身寮に入るつもりだから、俺の荷物はほとんど置いていく。だから」

優しく手首を掴み、ふんわりと抱きよせた。宝物でも抱くように。

「俺が帰ってくるまで……あの家で待っていてくれないか」

「ふっ……っ……」

胸の中で美雪が泣きだしたのがわかった。

「泣くなよ。泣かれると困る」

「だ、だって……大輔さんが」

「ん。俺が悪いんだな。そんなに寂しいか？」

「さ、寂しいけど！ そうじゃなくて……」

言葉にしなくても、彼女が寂しさで泣いている訳ではないことはわかってる。それをわかってからかいたくなるくらい、黙ってられない。腕に抱きしめた小さな身体が小刻みに震えてるのを、宥めるように背中を撫でる。

「遠いって、海外に行く訳じゃないんだから。休みの度に帰っ

てくるよ」

「そ、そんなの無理です！ 大輔さんが、身体壊します……」

笑いながら、美雪の目尻をつたう涙を舌ですくった。

「本当は、連れていきたい。でも、お前にもまだまだ仕事がんばってほしいし、連れてったところで向こうでは激務が待ってるだろうし……まだ、お前を連れていけるだけの自信もないんだ」

美雪の頬から唇を離し、その言葉を続けた。

「お前がああマンションに居てくれるなら……向こうでもがんばれる。帰れる時は、帰ってくる」

「……はい」

涙をこらえ、美雪が大輔を見上げた。その目に宿るのは、自分への愛情と信頼だと思っるのは奢りだろうか。

「なんなら、すぐにでも一緒に住むか？」

「す、すぐには無理です！ 色々……」

「お、意外と冷静だな」

ケラケラと声に出して笑うと、美雪もつられたように笑顔を浮かべた。

「大輔さん、片付けるのへただから……一緒に住んだら大変ですね」

「そうだな」

「引越しの準備は、手伝いますから」

「うん」

大輔の背中にぎゅっと手を回し、美雪が胸に顔を押しつけてきた。その髪を撫でながら、顔を埋める。

「返事は？」

「え？」

「ちゃんと返事、聞かせて」

大輔の言葉に、恐る恐るという風に美雪が顔を上げた。目が合う。逸らされないように彼女の頬に両手を添えたが、それが無駄だとでも言うようにまっすぐに大輔を見つめた。わずかに開いた唇が、震えた。

「……はい。待ってます」

ごめん、と言いかけた言葉を飲みこんだ。それを言うのは、間違っている気がしたから。その代わりに

「ありがとう」

そう告げると、彼女の目尻からまた涙の筋が生まれた。

第79話 もつひとつの7日間・7（前書き）

更新が遅くなり申し訳ありません。途中から、また7日間の回想に入ります。

第79話 もつひとつの7日間・7

「お前の親にも、会いに行くか」

「えっ」

ぼつりと呟いた大輔の言葉に、彼女が驚いた表情で顔を上げた。

「どうしてですか？」

「どうしてって……まさか親に内緒のまま、俺んここに住む訳にいかないだろ」

「そ、そうですね……」

「今後のためにも、イメージ良くしとかなないと」

「……営業用のキラースマイルがあれば、大丈夫ですよ」

「なんだよ、キラースマイルって」

くすくすと美雪が大輔の腕の中で笑った。

ふと目が合い、そのまま静かに唇を寄せた。

「風呂……入るか？」

このままベッドに行ってもよかったが、一日中テーマパークを遊びまわった身体では、それも躊躇われる。

「あ！ ハイ！ そう言えばバスルーム、まだ見てなかったです」
ぴよんつと勢いよく美雪の身体が離れ、パタパタとバスルームへと走っていった。

「わ、お風呂とトイレが別です〜！」

「当たり前だろ。どこのビジネスホテルだよ」

苦笑しながら、ソファから立ち上がり窓際へと移動した。

閉園時間が過ぎたにも関わらず、パークにはイルミネーションが灯り、かすかに音楽も聞こえてくる。

それをもう一度見下ろした後に静かにカーテンを閉めると、バスタブにお湯をはったらしく美雪が部屋に戻ってきた。

「先に入っていいぞ」

「えっ、あ、いえっ！ 大輔さんお先に」

「そうか？」

平気そうな顔をしていても、緊張しているのがわかる。たかがバスルーム一つにはしゃいでみせるのも、美雪なりの場の持たせ方だといふのも。

緊張はこちらにも伝染するだけに、少し厄介だ。黙って座ってる。

そう言いたかったけれど、彼女の気持ちもわかるのでぐっと堪えて放っておく。

「あ、ケーキ……」

何かを飲もうと思ったのか、冷蔵庫を開けた美雪が呟いた。
部屋に用意してもらっていたケーキが、半分以上は残っている。

「食べてもいいですか？」

「はっ？ いいけど……お前、ディナーでもデザート食べたよな？」

「あ、あれは……なんか気持ちがいっぱいっばいで、味わえなかったの。」

「腹壊すなよ」

笑いながら着替えを出そうとして、バッグの中に入っている包みの存在を思い出した。

「あ」

誕生日プレゼントを、まだ渡していなかった。

「え？ どうしたんですか？」

ケーキの皿を手に持ったまま、美雪が振り返った。

「いや、なんでもない」

そう言ってぎゅっとバッグの中へとプレゼントを押しこんだ。

「じゃあ、先に入るぞ」

「あ、はい！」

美雪はもぐもぐとケーキを食べている。

「太るぞ」

「！」

無言でこちらをじっとりと見つめる美雪を、にやりと一瞥してバスルームへ向かった。

沈黙や雰囲気には耐えられなくて、つい食べ物に手を出しているというのもあるのだろう。

それがわかっていても、あえて助けるようなことはもうしない。

俺だって、我慢の限界なんだ。

バスタブに身を沈めて思う。

この状況で、期待したり緊張したりするのは、男なら当然だ。

美雪を、自分のものする。

その気持ちを、隠すつもりもない。

いつもより多少短い入浴を終えて髪を乾かし部屋に戻ると、大輔の姿を確認した美雪がびくりと身体を強張らせた。

「お前も入れば」

「……はい」

目を伏せたまますれ違い、美雪はパタパタとバスルームへと向かった。

どさっとソファに腰を下ろす。

さすがに疲れたし、これから待つていることを考えると静かに興奮する気持ちを隠すことはできないけれど、それとは別に解放感があった。

言いたかったことは言えた。転勤して離れてしまっことを伝えても、そばに居てくれるという意思の確認はとれた。

何とも言えない安堵感。

これからも、一緒に……

気づくとソファの背にもたれたまま、うとうとと瞼が重くなっていた。

(アイツ……どうしたんだ?)

終電間近の電車で揺られながら、ぼんやりと窓の外を見つめる。

美雪とアウトレットモールでデートをした翌日の月曜日。

少しだけ浮かれた気持ちで出勤したのは事実だ。

朝、何故かいつもより早く出勤していた美雪の胸に、自分が贈ったネックレスが輝いているのを確認した時……『公私混同はしない』とほんのいたずら心で釘を刺したことは綺麗さっぱりすっかり忘れていた。いや、忘れたのではなく、無視することに決めたと云った方がいい。

彼女の好意は、なんとなくだが透けて見える。自分の一挙一動に顔

を赤くする美雪は素直に可愛いと思ったし、何より今まで何とかしたくても何ともならなかった距離が、急速に埋まったことも嬉しかった。

それが、何故。

課長との業者まわりを終え、ようやく会社に戻った後だった。

トントンと静かでゆっくりとした足音に顔を上げ、それが美雪だったことに驚いた。

いつもの、軽やかで元気な足音とは全く違う。

俯いた顔が、ひどく疲れたように見えたことも気になった。

「どうした？」

大輔の問いかけに、さっと顔を強張らせた。

自分のいない間に、何があったというのだ。何か仕事でミスでもあったのだろうか。

慌てたように挨拶をして通り過ぎようとした手を、無意識に掴んでいた。

「どうした？」

「ど、どうって……」

「なんかあったのか？」

「え……」

目を合わさないようにしてるのは明らかで、僅かに腰をかがめて美

雪の顔を覗きこむと、その顔は、まるで 傷ついたような顔だった。

「なんで、そんな顔してるんだ？」

「そんな顔って……」

「何があった？」

「……なんでもないです」

意外と頑固なのか、それとも言いたくないことなのか。冷静に考えて配慮してやればよかったのに、その時はできなかった。

「お前な……そんな顔して、なんでもないで誤魔化せると思ってたの？」

何故だか頭に血が上る。振りほどこうと揺れる腕を、掴む手に力がかもった。

「仕事のことか？」

「……いえ……」

「じゃあなんだよ」

どンドンヒートアップしていく気持ちに歯止めがきかなくて、彼女が泣きそうな顔をしていることに気付かなかった。

「あのっ、離してください！……誰かがきたら……困ります」

ぐさり、と刺されたような衝撃だった。

確かにここは会社で、彼女は自分の部下で、こうやって腕を掴んで向かいあっている姿を見られたら、あらぬ誤解を受けることは必至だ。

美雪の言葉は、明らかに自分を拒否している。こうして二人でいることを、誰かに目撃されたら困ると。

嫌われていないと思っていた。むしろ好かれているだろうと。だからこそ彼女が言った言葉が、刺さった。

「……悪い。余計な干渉だった」

掠れた声でようやく口にした後、動揺を隠すようにくりりと背を向けた。

調子にのっていたのは、間違いなく自分だ。

「……あ、あの！」

「何？」

遠慮勝ちにかけられた声に冷たく答えると、怯んだ気配がした。

「……いえ、お疲れさまでした」

小さくそう言うと、パタパタと足早に階段を下る音が消えて行った。

「……なんなんだよ」

ぼつりと呟き振り返ってみても、当然そこに美雪はいない。思い足取りでフロアに戻るしかなかった。

(朝は間違いなく普通だったのに……何があつたんだ?)

電車の中で、携帯を弄ぶ。

給湯室で『夜にメールをする』と約束をしたものの、先ほどの態度ではそれも躊躇われる。

いきなり変わった態度に正直どうしていいかわからず、どんなメールを打てばいいのかわからなかった。

偽りとはいえ“彼氏”らしく、他愛もないことをメールするつもりだったのに。

あの美雪の態度では、そんなことを望んでいるとも思えなかった。パタリと閉じた携帯を、コートのポケットに突っ込む。

近づいたかと思った距離は、一気に離れていた。

第80話 もつひとつの7日間・8

翌日、やはり美雪との距離は遠いままだった。

朝の挨拶でさり気なく目を逸らされた後も、彼女は自分をさけるようだった。確信はないが、間違っている気もしない。

もしかして一緒に帰ることになるかも　そう思って、わざわざ自分の車で出勤していたのが滑稽だ。

『男が苦手』だと話していたから、直属で自分の手伝いをさせてもいいと考えていたのに、美雪の気持ちが見えないままではその指示も出せなかった。逆に、それが迷惑になるかもしれないと怖気づく。結局、いつもの教育係の成田がいないとあつて、順当にその上である山田の作業をせつせと手伝っている。

(大丈夫か、アイツ。なんか顔、ひきつってないか……?)

美雪の表情とは対照的に、いつもの二割増しぐらい笑顔の多い山田の態度が鼻につく。

にやにやしやがって。

二人が仲良く並んで段ボールを抱えて出て行った後に、一人の社員が大輔のところへ来た。

「主任、課長から預かっていた段ボールが見当たらないんですけど

……」

「あ？」

不機嫌に返事をしたことにも気づかないまま振り返ると、段ボールを持ったままの社員が固まっていた。

「す、すみません！」

「ああ、悪い。考え事してた」

課長が不在の今日、課の責任者は大輔になる。気持ち切り替えるように頭を振って向き直ると、その社員がおずおずと段ボールを大輔に差し出した。

「課長が、大事な資料だから間違えないようにってわざわざ応接スペースのテーブルに置いてた段ボールが、見当たらないんです。これと同じくらいのものなんですけど……」

「これは？」

「資料室に保管の分です。何故か放置してあったので、これから置きに行こうかと……」

「ちょい待て。山田はどこ行った？ 資料整理の責任者はあいつだし……さっき同じくらいの段ボール持ってなかったか？」

「あ、資料室……だと思えますけど、まさか総務ってことは……」

言いかけたその社員と、目を合わせた。

「まさか、破棄しに行った訳じゃないだろうな」

課にあるシュレッダーは小型のため、たくさんの量を廃棄する時には総務課の大型シュレッダーを利用することが多い。まさかそんな凡ミスを、と思いつつも、不安がよぎった。

「俺、追いかけてきます！」

「いい、俺が行ってくる。作業続けて」

ひったくるように段ボールを奪い、足早に廊下を出た。

美雪と一緒にの作業で、山田が浮かれていることは誰の目から見ても明らかだった。

(アイツ……アホか！)

そう思ってから、唇を噛みしめる。

浮かれている山田に気付きながら、それを戒めなかった大輔にも責任がある。

美雪に、声をかけづらかった。

それを言い訳にするのは、社会人としても責任者としても、ありえないことだった。

前方から山田と美雪が並んで歩いてくるのが見えた。

年の近い二人は、傍から見れば似合いのカップルのようだ。そう思ってしまう自分にイラつく。

「あれ、主任、どうしたんですか？」

間の抜けた山田の言葉に一層苛立ちながら、二人の手にすでに段ボールがないことに気付いた。

「お前ら、今持ってた段ボール、廃棄した訳じゃないよな？」

「え？ 保管分ですよ？ 倉庫に置いてきましたけど」

廃棄した訳ではなかったらしい。ほっとしながらも無然とした表情は崩せない。

「あの小さい方の段ボール、課長の資料だよ。保管分はこっち」

脇に抱えていた段ボールを突き出すと、ハッと山田が顔を強張らせた。

「え〜！？ すみません！ 気付かなかった……」

「浮かれて仕事してるんじゃないよ」

冷たく言い放つと、山田がぐつと項垂れた。その意味を、わからないのは美雪だけだろう。

「す、すぐに取ってきますから！」

「いい。お前がいなかったら資料整理が進まないだろ。フロアで待ってる連中いるから戻れ。藤崎、お前がついてきて場所を教えろ」

「は、はい！」

これは、公私混同にならないだろうか。

ぱたぱたと自分の後をついてくる美雪にちらりと視線を落としながら、気づかれないように軽くため息を吐いた。

途中、思い出したように『あ！』と美雪が声を上げた以外は、会話らしい会話もなく資料室へとついた。

誰もいないことを確認してから、美雪を中に入れてパタンと確実にドアを閉める。

聞くなら、今しかない。

このままではメールで連絡を取ることにすら躊躇して、あっという間に7日間が過ぎてしまう。

「どこに置いた？」

「あ、こっちの棚です」

自分のすぐ前を歩く小さい頭を見つめた。

「これ、この上の……」

背伸びをして取ろうとした段ボールを横から取り上げ、とりあえず中身を確認する。間違いない。

脇に抱えていた段ボールと差し替えながら、何気ない風を装いながら美雪に声をかけた。

「……なんで俺のこと避けてんの？」

言葉を選ぶ暇も余裕もなく、直球をぶつけてしまった。

美雪の身体がびくつと強張る。

「なんの……ことでしょうか？」

白々しい言い訳　それとも、そう言わずにいられない事情があるのだろうか。

「昨日の夜から、なんだか話しかけてほしくないみたいだから、こ

「うちは気をつかってるんですが」

段ボールを棚の上へと上げながら、再び美雪を見下ろす。固く結んだ唇が、何かに耐えているのだろうということとは容易に想像できた。

何が、美雪を追い詰めているのだろう。

それとも、嫌われるような理由があったらだろうか？

「せめて、避ける理由くらい教えてくんない？」

「……避けてる……つもりはないです……」

わずかに反抗的な色をにじませた瞳が、さらに下を向いた。

「……ふーん」

情性で返事をしながらも、大輔の心は穏やかではなかった。昨日の朝までは、普通だった。いやむしろ……いい雰囲気だったと言ってもよかったと思う。

彼女からは、前日のデートの余韻すら感じられるくらいだったのに。それでは、その後になんかあったのか。それとも何かに気付いたのか。

この三日間で向けられたのは、疑いようもない好意だと思っていたのに　違うのか？

彼女が8個も下の若い女の子だということが、大輔を臆病にさせていた。

「お前が変な駆け引きとかできないのは知ってるから……俺の勘違いだったのか？」

「え？」

俯いていた頭が上を向いた瞬間、がちやりとドアノブを回す音が聞こえた。

誰かがきたらしい。それなら話は保留にして、ひとまず外へ出なければ。

そう思った瞬間、目の前の小さな身体はいきなりさらに小さくなった。

(え?)

隠れるようにしゃがみこんだのだと気づく間もなく、大輔もつられるように身を屈めていた。

なんで、こんな？

そう問いかける視線を向けてみても、彼女ただひたすらに膝を抱えて小さく小さく身を縮こませるばかりだ。

資料室に入ってきた女子社員二人がおしゃべりをしながら大輔たちが隠れる棚とは逆方向に向かったのに気づき、美雪の身体からはほつとしたように僅かに力が抜けた。

『どうしたんだ？』

小さな声で問いかけてみても、答えは返ってこない。

覗きこんだ瞳が不安で揺れている気がして、思わずその髪を優しく梳いた。

「そういえばさ、情報課の松沢主任の私服見た？」

「見た見た」 スーツ姿もかっこいいけど、私服も爽やかだよね。目の保養になるわ」

女子社員たちのおしゃべりは止む気配がない。
突然自分の名前が出たことに驚きはしたが、美雪の前だけあって顔には出さない。
彼女たちのおしゃべりをぼんやりと聞き流しながら、指をすりと抜ける美雪の髪を見つめていた。

(柔らかい……)

見た目どおりの猫っ毛だ。毛先のゆるいウェーブを指に絡ませると、ほのかにシャンプーの香りがした。
その髪に唇を寄せたい衝動にかられて、かろうじて踏みとどまる。
誤魔化すように彷徨わせた目線が、美雪のそれとぶつかった。
甘い感情が一気に冷める。それくらい、彼女は不安そうな顔をしていた。

最後までおしゃべりをやめない彼女たちが去っていった後、しんとした資料室で一人立ち上がった。

「本当にお前、どうしたんだよ？」

相変わらず座ったままの美雪に手を伸ばすが、その手を彼女が握らない。

苛立ちながら手を下ろすと、重たそうに美雪が口を開いた。

「ちょっと……人に、言われました」

「何を？」

「……主任と、付き合ってるのかって……」

「はあー？」

予想外の答えに、間の抜けた声が出た。

そんなくだらないことを言ったのは誰　そう思ってふと気づく。
何故、そんなことを美雪が言われるのだろう。

そして、何故それを美雪がここまで気にするのかと。

「で？」

「え……」

「それで？」

「それでって……だ、だから、あんまり近くにいない方がいいかな
ーと……」

「なんでそうなるんだ？」

「な、なんでって……」

わたわたと視線を彷徨わせていた美雪が、しゃがんだままの足元を
見つめている。

「わ、私みたいなガキみたいの、主任が相手にするわけないって言
われて。避けてたっていうか……ど、どうしていいかわからなくて

下を向いたままの美雪の表情は見えない。

でも、その声が湿り気を帯びているのは気のせいではないだろう。

「どうせ、7日間だけの約束なのに……私となんて噂になったら、主任に申し訳ないし……」

それが本音なのか、それとも隠された建前なのか。

ため息をつきもう一度手を差し伸べると、そろそろと美雪の小さな手が重なった。

ゆっくりと立ち上がった小振りな頭に、自分の手を載せる。

「そっか」

さわさわと柔らかい感触を感じながら、アウトレットモールに行った時のことを思い出していた。

撮影の時に感じた刺すような視線。

張り出された写真。

あんな目立つことをして、誰かが見ていない訳がない。迂闊だった。自分は何を言われても構わない。

だけど。

「……彼女3日目のお前には、それはキツイか」

何を誰から言われたのかは知らないが、大輔のせいで嫌な思いをしたのは確実だ。

デートすらしたことのない彼女にとっては、自分は偽りの彼氏ではないのに。

美雪が距離を置こうとするのは当然だ。わかっているながらも、少し切なかった。

美雪に飲み物を買うように指示してから、一人でフロアに向かって廊下を歩いていった。

『……付き合ってますんって、言いました……』

美雪の言葉が耳に響く。

7日間が過ぎれば上司と部下に戻る……だから美雪が言ったことは当たり前のことなのに、なぜだかぐさりと胸に突き刺さった。

「あっ！ 主任！ さっきはすみませんでした〜」

へへ、と頭をかきながら山田が大輔の元へ寄って来た。

「あの……藤崎さんは？」

「休憩用の飲み物買ってくるように頼んだ」

「あ、じゃあ俺手伝いに……」

「山田」

脇に抱えていた段ボールを山田に押しつけた。

「さっきも言っただろ。浮かれて仕事してんじゃねえ。このままじや定時に終わらないぞ」

はい、と首をすくめる仕草を見てみると、頭痛がしてきた。やっぱり、放っておけない。この際、美雪の気持ちなど無視してもいい。

(今日は、何が何でも定時で終わらず。絶対に、連れて帰る……！)

妙な情熱をメラメラと燃やしながら、目の前の仕事に取りかかって
いた。

第81話 もうひとつの7日間・9

ようやく終わった大掃除。解放感に満ちたフロアで皆が缶ジュースをぶつけ合うのを尻目に、帰り支度を済ませようと立ち上がった。

「松沢くん、よかったら帰りに軽くどう？」

「すみません、今日はちょっと」

就業時間が終わりに近づくにつれ、同僚や上司からの誘いが幾度もかかる。一年の労をねぎらうとは名ばかりで、ようするに皆手持無沙汰なのだろう。

気持ちはわかるが、今日はそれに乗るわけにはいかなかった。

美雪が帰る前に、捕まえないと。

そんな大輔の焦りをよそに、背後から媚びた声がかかった。

「松沢主任、これからみんなでご飯でも食べに行きませんかあ？」

振り向かなくてもわかる。隣の課の、女子社員の集団だ。

「悪い、今日はちょっと……」

丁寧に断りを入れようと振り向いた時、目の端に山田がうつった。

アイツ、何を。

確認するまでもなく、その足が向かう先にはバッグを手に立ちあがった美雪がいる。

「先約があるから」

「え、あ」

冷たく言い残して顔も見せず、身をひるがえした大輔に、女子社員たちがポカンとしていた。普段はできるだけそのつけない対応をしているのだから、当然だろう。でも、そんなことはかまっていられなかった。

「せっかく色々話せたんだし、よかったら」

「山田」

美雪の背側から被さるように声をかけると、山田が驚いた顔をしてこちらを凝視した。

誘う事に必死で、大輔の存在には気づいていなかったようだ。

大輔が途中で切ったその会話から、まだ山田の誘いは成立していないらしい。ほっと胸を撫で下ろし、余裕の笑みをなんとか浮かべた。

「悪いな、コイツ先約があるから」

「へ？」

「行くぞ」

気づくと力づくで美雪の腕を握り締め、引っ張るように歩いていた。

嫌だったら、この手を振りほどけばいい。

ギリギリ、ほどごとくと思えばほどける強さで手を握った。
されるがままの彼女は、階段を下りようとした時によつやく大きな
声をかけてきた。

「あの、主任！！」

まだ会社だから、仕方ない。
そう思いつつも、呼ばれ慣れたはずの役職名にかすかに違和感を覚
える。

「みんな……見てましたよ」

「何が？」

「だから！ 手が……」

ああ、と繋がれた手を見下ろす。そんな事は、どうでもよかった。
手を繋ぐという行為がイヤなのではなく、皆に見られるのがイヤな
のだということはある。

あくまで隠そうとする彼女が、7日間で自分との関係に区切りをつ
けようとしているようで、少し苛立つ。

8個も上の男を、バカにするのはやめてもらおう。

「アホか。お前もつと堂々としてる。男苦手なくせに、山田に寄ら
れてんじゃないよ」

え、と声にならない声をあげて、美雪の唇が半開きになった。

「お前と帰ろうと思って、今日は車で来てただけ……やめる？」

思い切り優しい顔をして彼女の顔を覗きこむと、ぱつと顔が赤く染まった。

「や、やめません!」

素直な言葉に吹き出しそうになるのをなんとか堪える。

自分の一挙一動に反応する美雪は、単純でかわいい。

ささくれだっていた気持ちが落ち着き、彼女の手をゆっくりと握り直す。

妙な優越感にひたりながら、車を駐車場に取りに行く間、待っているように伝えようとしたら、やられた。

「ついてっちゃ、ダメですか?」

上目遣いで微かに頬を赤らめながら伝えられる言葉は、大輔と一時も離れたくないということを遠まわしに伝えていて。

ほんの少しの間なのに。

肝心なことは言い淀むくせに、こんな時だけふと素直になる。反則だ。

「お前、何気に発言がさあ……。狙ってる? いちいち、俺のツボにはまって困る」

気づくと大輔も素直に口を開いていた。

「そんなに離れ難い?」

これは、子供じみた意地悪だ。

「そ、そういう意味じゃないです! 早く行ってください!」

相変わらず顔を赤くしたままの美雪が、ばふっと彼女にしては力強く大輔の背中を押した。

スケートのチケットがあることを思い出したのは、昨夜のことだった。

取引先がスポンサーをしていた関係で手に入ったそれは、使う予定がなかったためにすっかり忘れていた。

日にちがないから仕方ないのもあるが、結局美雪とは一度しかデートしていない。

ニユースで一度だけ見かけたスケート場は、イルミネーションに囲まれて男の大輔から見ても随分とロマンチックだった。連れて行ってやりたい。今の自分の立場なら、可能だ。

ダッシュボードに置いていたチケットを胸ポケットに入れ直し、会社で待たせている美雪へと車を走らせる。

玄関のすぐ前の赤信号の時に、手早くメールを打つ。

このメールを読んでから出てきてくれたら、丁度いいくらいだろう。そう思ったのに、道路のすぐ脇に美雪が立っていることに気付いた。

「バカ。寒いのに」

そう呟きながらも、顔が綻ぶ。

ぴたりと美雪の横に車を止めて下りると、美雪がぱっと顔を上げた。

「中で待つてろって言ったのに」

そう言いながら回り込むと、彼女から少し離れたところに一人の女

性が立っていることに気付いた。同僚だろうか　そう思って何気なく顔を見て、大輔の顔がわずかに強張った。

「……大輔」

この状況で、そう名前で呼ばれるとは思わなかった。お互いが苗字でしか呼び合わなくなって、かなり立つというのに。

「江藤、お疲れさん」

わざと、はっきりと発音した。途端に端正な女の顔が歪む。

「どうして、藤崎さんと帰るの？」

そんな質問、投げかけなくてもわかるはずだ。

元々江藤はそんな無粋なタイプではないし、自分と同じ年の彼女がこの状況を飲みこめないほど鈍いとも思えない。

「どうしてって言われても……付き合ってるから」

横に並んだ美雪の手を取った。

ああ、やっぱり冷たい。だから中で待ってるって言ったのに。江藤の存在を無視している訳ではないが、頭の中ではそんなことの方が気になっていた。

「だって、この子付き合っただけ……！」

顔を向けると、江藤の顔はひどく歪んでいた。怒りなのか悲しみなのかよくわからないその顔を見ると、ふいに資料室で美雪から

打ち明けられたことが頭に浮かんだ。

「……美雪に変なこと言ったの、もしかしてお前だったの？」

思わずため息が漏れる。

江藤とつきあっていたのは入社してしばらくたってからのことで、付き合いは半年ほどしか続かなかった。大輔にしてみたらそこまでひどい別れ方をしたとも思えなかったのに、その後は嫌がらせのようにはひどい噂を流された。

正直腹もたったが、それだけ江藤を傷つけたのなら仕方がないと諦めていた。

だが、今回は違う。

美雪は、関係ない。江藤に嫌がらせをされる理由などないじゃないか。

自分より八個も上の先輩で、見た目も迫力のある江藤に言われたのなら……美雪が凹む気持ちもわかる気がした。

「自分よりずっと上の先輩に凄まれたら、“付き合いってない”って言わざるを得ないだろ」

「私の時は隠してたくせに、今回はオープンなのね」

そんな話をしている訳ではないのに、論点を変える江藤にひくりと眉が上がった。

「ほっとくと、悪いムシがつきそうなもんで」

ここまで言ってもいいのかと“7日間”の約束が頭をよぎったが、もう後にはひけない。

「大事にしたいから」

なんて言えば一番ふさわしいのかわからないまま、気づくと口から言葉が出ていた。素直すぎる美雪の性格がうつってしまったのかも
しれない。

ぴきんつと隣で美雪が固まった。

「……もうわかったわ。お疲れ様。よいお年を」

江藤の顔はなんだか泣きそうに見えたが、それを確認する間もなく
背中が向けられた。
と思うと、ちらりとこちらを振り返った。

「ハタチの子に手をつけるなんて、おじさんね」

「オイ！」

オジサン　その言葉は密かに傷つく。

接点のあまりなかった江藤が、今でも自分を好きだとは思えない。
強いて言うのなら、ちょっととした執着のようなものなのだろう。

（だからって、後輩いびりをするような奴でもないと思うんだけど
……）

ふと握られた手の力にほんのり力が加わったような気がして隣の美
雪に視線を落とすと、何故だか口を一文字に結び……泣きそうな顔
をしていた。

ビルに囲まれたスケート場は、ふるさとして子供の頃によく言った場所とは随分違っていた。

子供の頃によく通ったそこは、あくまで遊び場であり運動施設だ。デートをするカップルがいない訳ではないが、そう甘い雰囲気になれた場所ではない。

テレビで見た以上にロマンチックな雰囲気に多少気遅れしていたら、美雪が歓声を上げた。

「うわあ〜！ 寒い！ すごい！」

「なんだよその歓声」

氷に覆われたリンクの傍は、気温以上に冷える。“小さい頃に一度行ったきり”の美雪には、それすら驚きのようだった。

楽しそうに顔を輝かしている彼女も、少し前では車の中で沈んだ顔をしていた。

「あの……江藤さんと、付き合ってたんですか？」

そう聞かれた時には、何故だかぎくつとした。

「んー……昔ね。アイツ、同期なんだ」

「……他にも？」

「え？」

「他にも付き合ってた人って、社内にいるんですか？」

ほんの少しだけ、彼女の言葉に探るような色合いが含まれているよ

うな気がするの……自分の奢りだろうか。

「いや。……ちょっと懲りたから、社内ではなるべく彼女は作らないようにしてたけど」

「懲りた？」

「ちょっとね。……あまりいい別れ方じゃなかったから、色々あること無いこと言われて」

隠す理由もなかったし、もし誰かから曲がって聞くぐらいなら自分から言った方がいいだろう。

そんな気持ちで正直に答えていたが、彼女はまたしてもきゅっと口を結んでいた。

「江藤さん、きっとまだ松沢さんのこと好きなんですね」

予想外の彼女の返しに、一瞬息が詰まる。

「どうかな」

何気ない風を装ってそう答えたが、ずきりと胸が痛んだ。

そんなことないとムキになって否定することもできたのに、それは余計に状況を悪くするような気がして言えなかった。

嫌な思いをさせた罪滅ぼしでも、デートの練習でもない。食事中に申し出たスケート場でのデートを美雪が快諾してくれたことに、ほっとしたのは大輔の方だ。

大輔が思っていることは、きっと美雪には伝わっていないのだろう。

とはいえ氷に囲まれたリンクに足を下ろすと、久しぶりの感触に胸が高鳴った。

「少しだけ待ってて」

いくら子供の頃にやっていたとはいえ、数年ぶりの感触に緊張する。しかし身体に染みついていたことは忘れないもので、試し滑りはリンクを1周もすれば充分だった。

美雪の待つ入口に戻ると、彼女は目をぱちくりとさせてこちらを見ていた。

「すごい……上手ですね」

「そう?」

多少照れくさく思いながら手を伸ばすと、その手を恐る恐る握った美雪がリンクへと足を踏み入れた。

大丈夫かな、と思った次の瞬間、彼女は大きく身体のバランスを崩した。

「わっ!きゃっ!!!」

「大丈夫か?」

転ばないようにと慌てて腰を支えると、美雪がなんの躊躇いもなく腕にすがりついてきた。

これは……予想外だ。そうかそうか、とやけにカップル率の高いリンクに納得する。当たり前のことかもしれないけれど、滑れることが当然という地域で育った大輔には、想定外のことだった。

「ははっ、生まれたての小鹿みたいな？」

「ふ、ふざけてやってるんじゃないんですから」

照れ隠しの言葉にきつと表情を硬くした美雪は、そろそろと身体を起こしてリンクの手すりにつかまった。そのままでは一生そこに入ばりついていそうな状況に、無理に片手を取りひっぱる。

（あんまり運動とか得意なタイプではないのかもな……）

このまま手すりをつかまったままそろそろと回るだけでは、楽しくもないだろう。

一周した頃合いを見て、美雪の手を手すりから引き離れた。

「じゃ、手すりから手離して」

「えっ！」

わたわたと踏ん張りながらしがみついてくるが、気にせず後ろ向きに滑りながらその手をひいた。最初は必死だったその表情が、少しずつ歩けるようになってと同時に緊張が取れてきたようだ。

できないとは言わず努力してみせるのが、何事にも一生懸命な美雪らしい。ふと、意地悪を試みたくなった。

「手、離してみるか」

「え！？」

するりと手を離して美雪から身体を離すと、予想通りに慌てたように美雪に追いつがった。困ったような顔をしているのが可愛い。

あれ、俺って好きな子はいじめたくなるタイプだったっけ　そんな不埒なことを考えていると、こちらに近づこうと足を踏み出した美雪がぐらりとバランスを崩した。

「わっ！」

「あぶなっ」

氷へと落ちそうになった身体を、咄嗟に受け止める。

遠慮もなく抱きついてきた柔らかい身体からは、甘い香りがした。

「ごめんごめん」

頭を支配する感情を振り払うかのように背中を軽く叩くと、大輔に身を委ねていた美雪の身体が硬く強張った。

「　　どうした？」

「　　いつ、いえ！」

真っ赤な顔でヨタヨタと身体を起こした美雪は、転びそうになりながらもバランスを整え、そして深い息を吐いた。もっと、何かを、繋ぎとめたい。

ため息に触発されるように距離を離すと、美雪が顔を歪めた。

「もう……松沢さん！」

「　　大輔」

「　　……え？」

「名前呼べたら、手つないでやるよ。いつまでたっても、進歩しなそうだから」

美雪が、軽く息を吸い込んだ。

吐いた言葉が何を意味しているか……本当は、わかっているんだろ
う？

動揺で揺れる口元が何かを言いかけ、それを言わずに飲みこんだの
を見て、後ろ向きのままスケート靴を滑らせさらに距離を広げた。

「行っちゃうぞー」

「あ、ま、待ってー！」

これくらいの荒療治でないと、美雪との距離は縮まらないの
だろうか。

少し寂しくなった瞬間、

「だ、大輔……さん」

小さな声が聞こえた。

名前を、『さん』つけて呼ばれたことって……今まであった
っけ？

「……まさかの“サン”づけ？」

いや、でも悪くない。悪くないというか……むしろイイ。

頬が緩みそうなのを誤魔化すように目を細めると、きょとんとした
ように美雪が首を傾げた。

「だ、だって……呼び捨ては、無理で……あっ！」

急に身体が揺らめき転びそうになった美雪に、慌てて滑り寄った。
手を掴んで無理矢理体勢を整えると、顔を覗きこまれる前に美雪の
手をひっぱり滑りだした。

にやけた顔を見られるのは、なんだか恥ずかしかったから。

第82話 もつひとつの7日間・10

キスがしたい。

切実にそう思ってから、どうして自分はそんなことを考えているの
だろうと不思議になる。

思春期の頃ならいざ知らず、いい齢になってからそんな欲望を抱い
たことがあっただろうか。

とめどなく考えてから、単純な答えが出た。そう思う必要が、いま
ではなかったから。

したいと思う間もなく唇が重なるような、そんな都合がよくて便利
な付き合いばかりしていたから。

目の前の彼女にそれを望むには、経験もレベルも距離も、何もかも
が足りない。

ひと滑りした後ベンチに座って飲み物を飲んでいたら、美雪の下唇
にわずかにココアがついていることに気付いた。

意識する暇もなく、大輔の指は彼女の唇をなぞっていた。

「ココア、ついてた」

ためらいもなく指についた茶色い液体をぺろりと舐めてから、美雪
には刺激が強かったことを思い知る。

「な、な、な」

「何？」

「……………いい、いえ……………」

赤くなって俯く姿に、笑いがこみ上げた。

「口につけて飲むなんて、子供かよ」

誤魔化すようにそう言うてから、なんの未練か無意識に美雪の唇へと手が再び伸びた。

温かい飲み物を飲んだ後だからかぼってりと紅い唇は、外気に晒されているために冷たくて、柔らかくて。

キスが、したい。

唇の隙間がわずかに開いたことに気付いて、慌てて手を離れた。

「そろそろ時間だな」

素知らぬふりで立ち上がったことが、いいのか悪いのかはわからない。

帰り道の道路は、年末だというのに随分と混んでいる気がした。

他愛もない話をしながらゆっくり進む車が美雪の住むマンションへとたどり着いたのは、時計の針が0時を回る直前だった。

「じゃあ明日、買い物行くんだよね？」

「あの……本当にいいんですか？」

「当たり前だろ。今日の予定変更させたんだから。俺も買う物はあるし」

今日、買い物に行く予定だった美雪を無理矢理連れだしたのは自分だ。元々買い物に行く予定はあったのだし、それが彼女と一緒になら言うことはない。

本当は、何も予定がなかったら明日一緒に年越しすることも可能だったのに。

『年越し……えと……テレビでも見て、寝る……くらいですかね』

困ったように笑う美雪の顔を見て、激しく後悔した。

小林たちと、余計な約束などしなければよかった。でも、今さら友人を裏切る訳にもいかないし、仕方がない。

「嬉しいです！ 年末年始だし、結構色々買うものあるので。

あの」

突然美雪が姿勢を正して大輔の方へと向き直った。

「今日は……本当にありがとうございました」

「何が？」

「え、あの、食事とスケートっていうか……デートに連れて行ってくれて」

そんなこと、わざわざ改まって言うことでもないのに。

ああ、と何故だか返事がぶっきらぼうになる。

「今日もそうですけど、一昨日のアウトレットも……。私、本当に嬉しかったし、楽しかったです」

“嬉しかった”、“楽しかった”、と過去形を連発する美雪に、少し苛立つ。

「わ、私、デートってどういうものかわかんなくて、想像するしかなかったんですけど、実際体験してみると想像以上だったっていうか……とにかく、なんか、いい経験ができました！ 松沢さんには感謝してます」

“いい経験”と言い切った後には、『松沢さん』に戻った呼び方。当然悪意なんてものは全くないのだろうけど、ぶちんと何かがキレた。

「おい」

「へ？」

どうしたら、自分のものになるんだろう？

“彼氏役”を引き受けた時には絶対に落としてみせると決めていたはずなのに、素直だったり遠慮がちだったり、大輔の望み通りには距離は埋まらない。

本当の彼氏になる気にいるのは大輔の方だけで、美雪の中では、相変わらず上司のままなのだろうか。

疑問符を頭に浮かべたままの美雪の顔に手を伸ばし、そして唇をゆつくりとなぞった。

驚いたように目を丸くした美雪が、大輔の顔を凝視する。

キスが、したい。

でも、まだできない。

もし美雪が大輔に上司以上の感情を持っていなかったとしたら、ここでキスをしたら7日間の約束が彼女に重くのしかかってしまう。なけなしの理性をふりしぼって、柔らかい下唇をふにゅとつまんだ。

「大輔”って呼べって言わなかったけ？ アホ！」

わざと意地悪く言ってみせると、

「あ、アホって言う人がアホなんです！」

きつと睨みつけられた。笑いながら手を離すと、視線を逸らした美雪がため息を吐いた。

呆れたようなそのため息が、何故だか心をざわつかせた。

「何？ そのため息」

「え、別に……じゃあ、今日はありがとございました。また明日」
そそくさと車を降りようとする姿に腹が立ち、とっさに運転席から助手席のドアのロックをかけた。ガチャッと響いた機械的な音に、美雪が顔を強張らせてこちらを見た。

「え？」

「だから、なんでため息？」

「……説明しなきゃ、ダメですか？」

「は？」

なんとしても理由を問いただしてやろうと意気込んだのがまずかったのか、大輔に目を向けた美雪が固まった後に身体を小さく縮めた。

「だ、だって……なんか、いつも松沢さんにからかわれてるなーって思ってた……」

からかっているつもりなど、今は全くなかったのに。

「からかっている？ 俺、からかっているつもりはないけど」

「え、だって……」

口を開きかけた美雪が、再び押し黙った。

欲望を押さえつけるために我慢はしたけれど、からかったつもりはなかったのに。

頭の中を色んな考えが駆け巡りながら、しょんぼりと頂垂れた美雪を見つめていた。

「2回言う？」

「……いえ、結構です……」

突然他人行儀になってしまった美雪がたまらなくなり、俯いたままの髪に手を伸ばし、髪と髪の間にするりと指を通す。

「なんか怒ってるなら謝るけど」

「いえ、謝らないでください……。からかっているのかなって、思っ

た……だけです。本当になんでもないです」

「そう」

怒らせたり悲しませたり傷つけたり、そんなことばかりだ。

「本当、ごめんなさい！私……」

無理矢理作ったような笑みを浮かべて顔を上げた美雪の頬に、気づくと手を添えていた。

やっぱり、キスがしたい。

それを唇ではなく反対の頬にしたのは、ギリギリでかろうじて働いた理性のおかげだ。

何が起こったのかわからないままで固まったような表情に、思わず謝りの言葉が口をついた。

「ごめん」

呆然と見つめるその顔に浮かぶ感情がなんなのか、わからない。でも、言いたいことは伝えておかなければと思いき直す。

「オイ」

「はっハイ！」

急に呼びかけたせいか、びくりと美雪の身体が動いた。

「からかってない」

「……は、はい」

「そう思っただとしたら、気のせいだ」

もっと上手く伝えたいのに、色々な葛藤の中で伝えられる言葉は数少なくて、それでも美雪はこくこくと首を縦に振った。

自己嫌悪でハンドルに身を預けると、怖いくらいこつちを凝視している視線を感じる。

(俺は……どうすりゃいいんだよ)

自分がしたことを棚に上げて、勝手すぎる。そんな自分を嘲笑いたなくなった次の瞬間には、美雪はあたふたと帰り仕度を始めていた。

「あの……わ、私、帰ります。また……明日」

「うん」

消え入るような小さな声に誘われるように、顔だけを美雪の方に向ける。

自分がされたことの意味に気付いたからか、潤む瞳とほんのり赤くなった頬は、誘ってるように思えて。

やっぱり、キスト、それ以上のことがしたくて。

目があった途端にさらに顔を赤くした美雪は、慌てたように視線を逸らした。

「あっ、ありがとうございます！ また明日！」

ガチャガチャと慣れない手つきでドアのロックを外すと、わたわたと車の外に下りた。

「おやすみなさい！」

ドンツと一方的に閉められたドアになすすべもなく、今度は大輔がため息をついてから車をゆっくりと発進させた。

失敗した。アホか、俺。高校生かつつつの。

明日の約束を何もしていないことに気付き、車の中で大輔はさらに頂垂れた。

第83話 もつひとつの7日間・11

耳元で鳴り続ける大音量のメロディ。低く唸りながらのそのそと起き上って、携帯のアラームを止めた。

「ふぁー……」

正月休みの初日だというのに早起した理由はただ一つ。部屋を片付けるためではない。

昼すぎからは美雪と買い物に出かける約束をしていた。

買い物だけしてさっさと帰るのならないが、少しお茶でもするとなると片付ける時間がなくなってしまう。

改めて小林たちが家に押しかけてくるのを許したことを後悔しながら、ダラダラと部屋の片づけを始めた。

引っ越しの荷物もろくに片付いていないのに。

片付けは、苦手だ。

約束の時間より大分早く美雪のマンションに到着してしまい、マンションの入り口に車を止めたままぼんやりと携帯を見つめていた。いつ、美雪に到着を知らせよう。そんな“らしくない”ことに悩みながら、結局は約束の時間より2分ほど早い時間にメールを打つ。

『下に着いた』

携帯を握りしめながら、昨夜のことをぼんやりと思い返す。

つい、我慢しきれなくて頬にキスをした。

大人の関係であればそこから始まるものは容易く想像できるが、恋すらわかっていないような美雪では無理だろう。気まずいムードは避けたい。かといって、無かったことにもしたくない。

延々と考えをめぐらせていたため、マンションの入り口から彼女が出てきたことに気付くのが遅れた。

「おはようございます」

頬を微かに赤く染め、引き攣った笑いを顔に張り付けた美雪を見て、動揺を隠してわずかに口角を上げる。

「おはよう」

口からするりと出た言葉は、我ながら驚くほど普通の声色だった。

「あの、昨日はありがとうございました」

そう言って俯く美雪の顔は、みるみる赤く染まっていく。

意識されていることが嬉しいような、それでいて距離を感じてしまい残念なような……不思議な気持ちだった。

ふと見ると、目元が暗い。

「ちゃんと寝れたのか？」

そう言って顔を覗きこむと、美雪は怒ったように声を上げた。

「な、な、なんでですか！」

「目、なんか、クマみたいの出来てるけど」

昨夜、ついうつかりしてしまっていたことが、寝不足になるほど彼女を悩ませてしまったのだとしたら　自意識過剰にもそんなことを考えながらへと手をのばすと、その手が触れた瞬間に彼女はびくりと身体を強張らせた。

「だ、大丈夫です！ちょっと……メイクに失敗したのかも……」

わずかに美雪の身体が横に逃げる。その行動に、少しだけ傷つき手を離す。

そして、思い出す。彼女が、男が苦手だと言っていたことを。

「お前……まだ、ダメなの？」

「え？　何がですか？」

「男。苦手なの？」

むう、と口を結んだ美雪が、しばし沈黙した。

「えと……なんでですか？」

「……おい……触ったら、硬くなるから、まだ苦手なのかって聞いたの」

一句一句はつきりと発音すると、美雪はぽかんと口を開けた。

「え？　あ！　ち、違います！　あのっ、苦手は苦手ですけど……まつ……じゃなくて、大輔さんは大丈夫です」

ぶんぶん顔の前で手をふり、困ったように眉を寄せる。

「あの……逆ってどうか……」

「逆？」

「と、とにかく大丈夫ですから、気にしないでください！」

昨日までは普通に触れられたのに。

ビクビクとしているのは、昨日大輔が頬にキスをしたことで彼女のトラウマ的な何かを揺り動かしてしまったのではないかと、不安になる。

ここはあえて、自分はそんなつもりじゃないと伝えた方がいいのかもしれない。

「そんなにビクついてて、友達の前に俺を連れてって大丈夫なのか？ 早く緊張しないようになれよ」

笑って言いながら、ぽんぽんと柔らかい髪を叩いた。

時間はまだある。一番側にいるのも、多分自分だ。

まだ、そう思えるくらいの余裕があった。

大型のショッピングモールにつき、二人でぶらぶらとスポーツ店を目指す。

昨日スケートをしたことですっかりウィンタースポーツ熱に火がついてしまい、久々にスノーボードがやりたくなった。

ボード自体は数年前のものでイケるが、さすがにウェアは流行遅

れな感じが否めない。

すぐに買うつつもりはなかったが、とりあえずどんなものがあるのかだけでも見ておきたかった。

美雪がついてこないと言ったら一人でも行く気だったが、思いがけず興味があるようで一緒に行くことになった。

スポーツ店にあまり縁がないのか、店内に入った美雪は物珍しそうにあたりを見回している。

「私、ちょっと色々見てもいいですか？」

女性用スポーツウェアの方に目を向けた美雪が、少しだけ嬉しそうにそう告げた。

「うん。俺も適当に見てるから」

にっこり笑う彼女に背を向け、スノーボードのウェアのコーナーに足を運んだ。

数年前はダークな色合いが主流だったと思っていたが、随分とカラフルなものが多い。やっぱり、ウェアだけでも新調した方がいいかもしれない。

ぐるぐるとコーナーを回り、さらにゴーグルやグローブなどの備品をチェックしながら、ふと美雪の意見が聞きたいと思い始めていた。

（彼女じゃなくても、それくらい別に聞いたっておかしくないよな）

言い訳のように考えながら別れたあたりに戻り、美雪はどの辺にいるだろうとキョロキョロと辺りを見回してから、やけに背の高い男が目に入った。

大輔と身長はさほど変わらないくらいだが、冬にしては焼け過ぎた肌が目立つ。

その顔をどこかで見たことがあるような気がして、通りすぎかけた足を一歩戻して、ぎよっと目を見張った。何故か、男の前に美雪が立っている。そして、困ったように眉をしかめてふるふると首を振っていた。

(ナンパか?)

焦って歩みを速めながら彼女の方へ向かうと、男の声が耳に入った。

「もしよかったら、連絡先」

「美雪！」

ふざけんな、という気持ちで美雪の前へ立ちはだかった。

「俺の連れに何の用？」

いざ正面に立つと、あらためてガタイの良さがわかる。

全身がまんべんなく日に焼けていて、服の上からでも引き締まった身体がわかる。

そして、若い。このナンパヤローめ。

ぐっと視線を険しくしたのと、美雪が大輔の腕をとったのはほぼ同時だった。

「ちつちが、松沢さん!! あのだ……高校の時の、同級生なんです」

「え？」

予想外の答えに、間抜けな声が出た。

思わず美雪を見下ろすと、困ったような顔で大輔の腕を掴んでいる。

余計なことをしたのかと思った次の瞬間、

「藤崎……もしかして、彼氏？」

ほんのわずかに険を含んだ声色で、目の前の男が言った。

まっすぐに大輔を見つめるまなざしには、戸惑いが含まれている。

「あ、えと……うん……」

歯切れの悪い返事に少しムツとしたが、みるみる赤く染まる顔は言葉以上の説得力があるだろう。

肩の力が抜け、自然と目の前の男へと軽く頭を下げていた。

「……悪い。ナンパかと思った」

自分よりもはるかに年上だと思われる男が、素直に頭を下げたことに驚いたのだろう。

美雪が同級生だと言ったその男は、眉をひくりとあげた後に、いえ、と小さく呟いた。

苦虫を噛み潰したかのようなその表情が表すものがわかって、密かにたじろいだ。

美雪は、気づいていないだろうけれど。

「藤崎……今、幸せなんだ？」

今、とはどういう意味だ。

さぐるように向けられた視線を正面から受け止めていると、

「……うん……」

小さな声が横から聞こえてきた。

「そっか。それなら……良かった……」

ぼつりと漏れた声があまりにも悲しそうで、大輔の胸がざわめいた。

美雪は『幼馴染』だと言ったが、きっとそれだけではないだろうと容易に想像できた。

あの男が美雪を見る目が、ただの同級生とは思えない。

(元カレとか……あ、でも彼氏はいたことがないと言っていたか)

「松沢さん？」

いつの間にか、呼び名が元に戻っていたことに腹を立てて無視を決め込むと、

「あの、大輔さん？」

控えめに呼びなおす声が聞こえた。

「何？」

わかってるのなら、アイツの前でもちゃんと名前と呼べよ。精いっぱい嫌味をこめた笑顔を返すと、美雪の笑顔がひきつっていった。

もしかして、美雪のことを好きだったヤツとか？

考えても仕方がないことを考えながら、最初に感じた違和感を美雪に尋ねてみた。

「あいつ、なんかどっかで見たことあるような顔なんだけど」

「あ、プロ野球の選手なんです。今はまだ2軍ですけど……」

は、と口が半開きになる。

「マジで?」

「はい……3年前、高校卒業の時にドラフトで指名されて」

思わずアツと声を出しそうになった。

確か、数年前に一時期だがニュースや新聞を賑わせていた投手がいた。長身に甘いマスクで、ドラフト会議で希望通りの球団に指名されていたはずだ。

それが、アイツか……。名前がどうしても思い出せなくて、でも悔しくてそれを美雪に問うことはできない。

姿など見える訳もないのにあの男の立ち去った方向を見つめていると、美雪が不思議そうに大輔の顔を覗きこんだ。

「大輔さん、野球好きですか?」

「あ? まあ、人並みに」

「サインとか、欲しかったですか?」

「……お前、何言ってるの?」

(んな訳、ねーだろ！)

ぐいっと美雪の手を掴み歩き出した。

自分が、一番側にいるだろうと思っていた。

この7日間で落として、彼女にすると決意したことに、なんの疑いもなかった。

でも、それでいいのか？

美雪と同じ年の同級生で、夢に向かって生きていて。

そんな相手が美雪への好意を滲ませ、大輔を不快感のこもった視線で見つめてきた。

年の差を気にしたことはなかったけど、でも。

暗い感情のままにしばらく歩き続けて、ようやく足を止めた。

彼女の歩みのスピードを無視していたことにすら、気づいていなかった。

「……悪い」

「え？ 何がですか？」

ぼつりと漏らした謝罪の意味すらわからないようで、美雪はきょとんとした顔でカートを手にしていた。

「……いや……いいよ」

7日間で落とそうとか、駆け引きめいたことを考えている自分を、初めて情けないと思った。

(俺より、アイツの方がずっと美雪に似合うんじゃないか？)

「大輔さん、なんか変です」

素直に向けられた笑顔が、前以上に、心に染みだ。

第84話 もうひとつの7日間・12

ポケットから見慣れた鍵を出し、ガチャリとドアを開けた。

「どござ」

「お、お邪魔します……」

恐る恐る足を踏み入れた美雪が、控えめながらきよろきよろと玄関から部屋を見渡す。

まさか連れてくることになるとは思わなかったから、部屋の片づけ具合はあくまで『気の置けない友達が来る』レベルでしかない。

片付かない段ボールが数多く残る部屋は多少恥ずかしくもあったが、ここは気にしないことにする。

本当は、買い物が終われば別れるはずだった。

それが思いがけず美雪の母親手製のお節料理を譲ってもらえることになって、彼女の部屋を再び訪れて。

お節料理を受け取って、さよなら、また来年、よいお年を。

それで、いいのか？

一人で年を越す美雪が可哀想だと言ってしまえば聞こえはいいが、そうじゃないことは大輔が一番よくわかっていた。

結局 離れ難いのだ。

スポーツ店で会った『アイツ』のことが気になって仕方がなかった。男の影が全くないから安心していたけれど、それがイコールで自分のモノになると直結した訳ではなく。

年齢だとか、上司と部下という関係だとか、そんな今さらのことが押し寄せてくる

結局、半ば誘導するような形で自分の部屋へと呼んでいた。

知らない男ばかりで、イヤかもしれない。

嫌なことを強いているのかもしれない。

そんな気持ちよりも、“一緒にいたい”という感情が上回る。

『大輔さんと一緒に、年を越せたら……すごく、嬉しいですけど…』

…』

美雪から投げられたストレートな言葉に、甘えていた。

友人達が来てから緊張しっぱなしだった美雪は、お酒のせいもあったのか大輔の隣でトロンと目を重くしていた。

大輔たちのよくわからない話も一生懸命聞こうとする姿は可愛らしく、そして何より野郎ばかりで飲むよりは一人でも女の子がいた方がいいわけで、皆ニコニコと愛想がいい。故に、話もはずんでいた。

「大輔、美雪ちゃん……」

小林が小声でそう言い、美雪の方を目で合図した。

とうとう落ちてしまったようで、カクンと首が下を向いている。

友人たちの前だと、堂々と彼女扱いできる。

拒否されないことをいいことにずっと握っていた手を離し、ゆらゆらと揺れる肩を軽く引き寄せて自分の方にもたれさせてから、声をかけた。

「美雪」

ぱつと目を開けた美雪が、一瞬どこにいるのかわからないような表情で目を泳がせ、それからさつと姿勢を正した。

「あ、ご、ごめんなさい！」

「お前、やっぱり昨日あんまり寝てないんだろ？」

「あ……はい……」

寝ていたことの恥ずかしさから頬を赤く染め、美雪がぶるぶると頭を振った。

『寝てない』の単語を大いに誤解した友人達が、ニヤニヤと口元を緩ませる。

“そんな目”で見られていることが、気に食わない。

「奥の部屋で少し寝てるよ。起こすから」

「え、でも……」

「俺らなら気にしなくていいから」

困ったように首を傾げた美雪に、小林が優しく言葉を続けた。少し迷う素振りをみせた美雪だったが、結局はこくりと頷いた。

「じゃあ、ちょっとだけ……」

即座に立ちあがるように促し、自分の寝室へと連れて行った。

「俺のベッドで申し訳ないけど」

「そんな。むしろ……場を壊すようなことをして、ごめんなさい……」

「大丈夫だって」

俯いた美雪の頭を、軽く撫でる。

「あんなとろんとした顔で、あそこに居られる方が心配だから」

「え？」

聞こえているはずなのに、聞こえなかったように聞きなおすことの意味は。

「……なんでもない」

突きとめて考えてもその先に待つものが怖くて、頭に置いた手を離した。

「じゃあ、0時が近づいたら起こすよ」

「はい」

静かにドアを閉めて、皆の待つ居間へと戻った。

「寝不足にさせるほど、昨日はがんばったんだあ〜？」

大輔が戻った途端、待ってましたとばかりに小林がニヤニヤとからんできた。

「彼女が二十歳ときたら、そりゃ張り切るよなあ！」

「アホか」

だったらどんなにいいか……とはもちろん言えない。気の知れた友達ばかりとはいえ、正式な彼女でもないのに晒し物にしてしまったことを後悔しかけて、はたと気づいた。

今まで、こいつらに彼女なんて紹介したことがあったか。それをなんの躊躇いもなくやってしまった自分に驚きながら、ぬるくなったお茶を喉に流し込んだ。

「そつえば、携帯鳴ってたぞ」

桐野に言われてテーブルの上に置きっぱなしだった携帯を手取る。

「誰から？ 早速浮気!？」

「アホ、平岡からだ」

「なんだって？」

「後で差し入れ持って寄るってさ」

「相変わらずダメだなー。俺らに気いなんて使わなくていいのに」

小林が苦笑しながらピザを口に放り込んだ。そういえば、美雪の携帯にかかってきた電話を一方的に切ってから、平岡に連絡を取ることにすら忘れていた。皆に彼女として紹介してしまったことが若干心にひっかかったが、余計なことと言わないやつだから飲み会での大輔の失態がばれるようないだろ。

「なーなー、どうよ？ 二十歳の彼女。いいよな、俺も付き合いたい！」

酒のせいもあるのか、デレデレと鼻の下を伸ばした小林がテーブルに顎を乗せた。

美雪が居たときは多少は節度のある態度だったのが、一気にゆるむ。

「お前、離婚の傷は癒えたのか？」

「癒えてねえよ。だから癒してほしいんだよ！ 美雪ちゃんみたいな純粋そうで可愛い子に……いてっ！」

顎を乗せたままの顔を、上からガンツと押さえつけた。

「人の彼女を、そういう目で見るな」

「おー、珍しい！ 大輔が怒った」

「うるせ。追い出すぞ」

「おーい。格闘技始まったぞー」

真の抜けた河原の声に、皆の視線がテレビに集中した。

「いやでも正直さー、助かったよ。大晦日、お前らいなかったら俺一人で寂しくコレ見てたんだなあ……」

ぽつりと呟いた小林の言葉が、意外に響いた。

仲間内では触れないようにしているが、小林が離婚してからまだ日は浅い。

明るく振る舞ってはいるが、内心どれだけこたえているのかはわからなかった。

「おう、感謝しろ」

しんみりしそうな場を取り繕うかのようにそう言つと、

「偉そうにー。大輔なんて美雪ちゃんに振られてしまえ！」

思いがけなく痛い言葉をかけられていた。

『ピンポーン』

特に大した話もなくテレビを見てみると、玄関のチャイムが鳴った。誰も動く気配がないことにため息をつきつつ玄関にむかいドアを開けると、ビニール袋を手にした平岡がニコリと笑って立っていた。

「これ、差し入れ」

「氣い使うなよ」

おまえらー、と奥にいる友人たちに声をかけてはみるが、しまりのない返事が聞こえてくるばかりで出てくる気配はない。

「悪いな。所持持ちがわざわざ寄ることなかったのに」

上がっただろ？、という平岡は軽く首を振った。

「いや、麻友の親戚の家に寄った帰りなんだ。車で待ってるし、すぐ行くよ」

「平岡、上がっただけよ」

玄関まで出てくるのは面倒なのか、ドアからわずかに顔を出した桐野が声をかけた。

「今日は帰るよ」

奥に向かってかけられた声は大きくて、美雪が起きてしまうのではないかと少し不安に思っていたら、平岡が真面目な顔で大輔に向き直っていた。

「大輔にちょっと……聞きたいことがあって」

抑えられたその声のトーンで、何を言いたいのかが大体わかる。

「何？」

「美雪ちゃんと付き合ってるって、本当なのか？」

「……ああ」

「もしかして、俺があの日に押しつけちゃったことが原因？」

「原因って訳じゃないけど」

原因というより、せめてきっかけと言ってほしい。

美雪に『彼氏のフリ』という恩を売っていることを責められている
よつで、居心地が悪くなる。

「俺、ちょっと責任感じちゃって……。あの子に悪いことしたかな
って」

「どついつ意味だよ」

「お前、本当に真面目に付き合う気あるの？」

その言葉は、前にも聞いたことがあった。

麻友と平岡の結婚が決まって、大輔の女遊びが最高潮の頃だった。
誘われるままに友達の妹に手を出しそうになった時、それに気づい
た平岡がそう釘を刺した。

“お前に関係ないだろ”

そう言い捨てたら何故だか平岡の方がひどく傷ついた顔をして、結
局それがネックになってその子と付き合うことも遊び相手にするこ
ともなかった。

「……もう、昔の俺とは違うんだよ」

「そっか……それなら……。もしかして、あの日」

微妙に口籠った平岡が再び口を開いたとき、ギィ、と寝室のドアが鳴った。

何事かと平岡が言葉を止めたのと、そのまま勢いよくドアが開いたのはほぼ同時だった。

「すみません」。私、結構寝てました？」

能天気とも言えるその声は、美雪のものとしては少しだけ元気すぎる。

もしかして、聞こえていた？

一瞬焦りが沸いたが、聞かれてマズイ内容でもないはずだと思いきす。

「み、美雪ちゃん？ いたの？」

大輔よりも、平岡の方がはるかに動揺している。

「あ、平岡さん」

寝起きのせいかわずかに赤い目をした美雪が、驚いた顔でこちらに歩いてきた。

「美雪、起きたのか」

「はい……なんか、ぐっすり寝ちゃってたみたいで」

にこりと向けられた笑顔はいつも通りで、少しだけほっとして息を

吐いた。

「あ、平岡さん。メールの返事してなくて……ごめんなさい」

メール？ そう言えば、泥酔して美雪の家に泊まることになった始まりの日に、平岡からのメールがあつたと言っていた気がした。今さらながら、そのメールの内容が気になった。

「いや、いいんだよ」

困ったような顔で軽く手を振る平岡は、明らかに大輔と美雪の距離をはかりかねているようだった。

「人の彼女にメールなんかしてんじゃねーよ」

隣に並んだ美雪の髪をクシャクシャと撫でると、甘えるように大輔を見上げてきた。

「……寝ぐせ、ついてますか？」

「ガッツリ」

「え！」

「嘘だつて」

美雪がどうして平岡の前でこんなに親しげな態度をとるのかわからなかったけれど、今は都合よくそれに乗るしかない。

大輔はともかく美雪までもが親しげな態度をとったことで、平岡はようやく納得がいったようだった。

「安心したよ。俺、色々考えちゃってたんだけど。なんか幸せそう
で」

“幸せ”という単語に、微妙に違和感を覚えた。
つくづく幸せなやつだと逆に思う。

一人の女性を一途にずっと想い、そして手に入れたヤツらしい発言
だ。

隣の美雪の身体がわずかに強張った気がして、さり気なく話題を変
えた。

もうこれ以上、美雪に無理をさせるのもよくない。

そう思っているのに、最後に平岡はもう一度美雪に向き直った。

「美雪ちゃん、本当に大輔なんかでいいのー？　こんなオッサン」

「お前だってオッサンだろうが」

俺がオッサンなら、結婚してもうすぐ父親になるお前はもっとオッ
サンだ。

思わず腹が立ちそう返すと、美雪が慌てた様子で口を開いた。

「いえ！　私には勿体ないくらいの人です」

（なんで、コイツは　　）

きっと、演技ではない。そんな器用なタイプではないのは、ここ数
日で充分わかった。

素直でストレートな言葉は、どうしていいかわからなくなる。

勿体ないという言葉に深い意味はない、それはもしかしたら上司と
して尊敬してるという意味も兼ねられてるかもしれないし……言い

訳のようにつらつらと考えていたから、平岡のからかうような視線にハツとした。

「だって！ 大輔、お前ちゃんとしろよ？」

「……うるせえな」

いつもなら上手く返せるのに、この時ばかりはこう言うのがやっとだった。

「俺、お前には本当に幸せになってもらいたいと思ってるから。美雪ちゃん、コイツのことよろしくね」

「は、はい……」

平岡が、未だ麻友と大輔との三角関係を引きずっているかもしれないと薄々感じることはあった。だからって、それを美雪に負わせるのは少々卑怯だ。

そう思っても、何も言えずに美雪を見つめることしかできなかった。

「じゃあ俺もう行くわ。お前ら、良いお年を！」

「おう！ 良いお年を〜！」

ニコニコと機嫌よく立ち去った平岡を見送りながら、ちらりと横目で美雪を見つめた。

視線に気付いたのか、顔を上げた美雪と目が合う。

「……幸せにしてくれんの？」

「えっ！」

「冗談だって」

無理矢理笑顔を作りながら、ネックレスの鎖に指を這わせた。

隙間を埋めたくて触れてみても、二人の距離が縮んでいるのかどうかはわからなかった。

第85話 もつひとつの7日間・13

玄関の外に出ると、しんとした静寂の中でちらちらと雪が舞い降りていた。冷たい空気に背筋が伸びる。

北国育ちのせいかな寒さには強い方で、季節の中では冬が一番好きだった。大学進学のために故郷を出てから、めっきり見る機会が減ってしまった雪。

「わー……さすがにちよつと寒いですね」

美雪がふうつと白い息を吐いた。

「悪いな、何かあつたら困るから、車では送れない」

そうは言いつつも、車だと5分くらいで終わってしまうこの距離を、引き延ばすことができるのが嬉しかった。

「いえ、いいんです」

はにかむように笑う彼女が、自分と同じことを少しでも思ってくれたらいい。

「ん」

差し出した手に、柔らかい手が重ねられきゅつと握られた。一瞬の迷いの後に、その手をポケットに入れる。手袋がないならそれぞれが上着のポケットに手を入れてしまるのが一番温かい。でも、繋いだ手は離したくないから、こうするのが一番いい。

「……あつたかいです」

「うん」

ポケットの中の小さな手のひらを親指でそつとなぞると、ほんの少しだけ熱が上がった気がした。無理強いをしていないかと気がかりだった友人達との飲み会も、思いのほか楽しんでいたようで、ほっとしながらもふいに昼間のことが思い出された。

「そついえば……今日、スポーツ店で会ったやつ、アイツお前の何？」

驚いて目を見張る彼女を見て、唐突すぎた質問だったことに気付いた。

「え、いきなりなんですか？」

「いや、気になってたから。……ただの幼馴染じゃないだろ」

隣を歩く美雪が大輔を見上げてきたが、視線は合わないようにと前へ向けたまま動かさなかった。

昼間のスポーツ店で挑むように向けられた視線を思うと、アイツが美雪に好意を抱いているのは明らかだ。

それが、ずつと妙にひっかかっている。

年の差を痛感して 要するに子供じみた嫉妬だ。

美雪は自分を『彼氏』だと言ってくれたのだから、別にいいじゃないか。

そう自分に言い聞かせて質問を取り下げようとしたら、ぼつりと美雪が口を開いた。

「……中学高校のときに、好きだった人です」

ひくつと大輔の口角がひきつった。余計なことを聞かなければよかったと思っただが、もう遅い。

「へえ」

口から出てきた言葉は、随分と素っ気なく響いた。

大輔から見ると、むしろ向こうに気があるように見えた。好きだった、と一方的に美雪が言うのはなんだか違う気がする。

「好きってというか、憧れてただけってというか……」

「憧れ？」

「中学の時から野球がすごく上手で、全国大会に行ったり甲子園に行ったりしてたんで、皆とアイドルみたいに騒いでただけってというか……」

「でもアイツ、お前に気がある感じしたけど」

え？ とでも言いたそうに美雪が首を傾げた。

「2軍とはいえ、プロ野球選手とはすごいよな」

沈黙が怖くて、思ってもいないことを言ってしまう。アイツを勧めるようなことを言っただけです。

舌打ちしそうになった寸前に、美雪の言った言葉でさらに凍りつく。

「でも、卒業式に玉砕してますから」

「告白したの？」

「はぁ……友達にそそのかされたというか……」

「ふーん……」

奥手な美雪から告白をした、という事実には打ちのめされていた。

さしずめあの男は、逃がした魚の大きさに後悔したといったところか。

短大卒でまだ二十歳の美雪にとっては、ほんの2年ちょっと前の出来事……そう思うと、ちくりと胸が痛んだ。

短いような。長いような。

今まで彼氏がずっといなかったということは、告白の後も誰とも付き合っていないかったことを表していて、それはもしかしてあの男のせいなのか。

8歳という年の差が恨めしい。自分よりも、アイツの方がずっと美雪の隣が似合う気がした。

ぼんやりと考えながら歩いていたら、いつの間にか美雪のマンションの近くまで来てしまっていることに気付いた。

明日は友達と買い物に行くと言っていたから、きっと会うことはないだろう。

デートの練習という口実は、もう使えない。

用が無いなら会えないくらい微妙な関係がもどかしく、このまま後味の悪いままで別れるのはイヤだった。

そういえば引越してきてから数回しかできていないジョギングで、この近くに小さな神社を見つけていたことを思い出した。さりげなく上を見上げるとかすかに灯りが見え、参拝できる気配がする。

「この近くに、神社あるの知ってた？」

「え、本当ですか？」

人目につかない神社の存在は、案の定知らなかったらしい。

「うん。小さいけどな」

「知らなかったです」

「……少し、寄っていく？」

「はい！」

間髪を入れない返事に幾分ほっとして、ポケットの中の手を緩く握った。

遠回りをして小さな神社に寄り、デートのような参拝をすませた。ただ送って帰ってくるだけにしては時間が経過しすぎていて、家に戻ったら小林たちにからかわれるのは必至だろうなと思う。

拝殿に手を合わせていた美雪は、何を祈っていたのだろう。その横顔を盗み見てから遅れて手を合わせた大輔には、何も願うこととはなかった。

小振りになった雪を見上げながら、ポケットに入れたお守りの袋を指でなぞる。

買ってやると言ったのに断られたことが少し空しくて、押しつけるように青いお守りを買わせて交換した。

お守りなんて持ち歩くタイプではないのに。

無理矢理の自分の行動がなんだか気恥ずかしくて、小さな紙袋をぎゅっと握った。

「雪、つもりですかねー」

のんびりとした声が隣から聞こえる。

「こんなちよつとじゃ、すぐ溶けるよ」

寂しいけれど、きっとこの雪は積もることはない。

無言でしばらく歩いてみると、ふいに美雪が顔を上げた。

「送ってもらった上に、神社にまで連れてってくれて……ありがとう
うございしました」

「おー」

相変わらず律儀だ。仕事をしている時も丁寧な姿勢には好感を持っていたけれど、個人的な付き合いをするようになってからは尚更そう感じていた。

見慣れたマンションが見えてきた頃、無意識に口を開いた。

「美雪」

“はい？”と美雪が顔を上げる。

この名前を呼んでいるのが、俺でいいのだろうか。

「淋しい？」

何故、こんなことを聞いてしまっただろう。笑って聞き流してくれればいい。でも、本当は違う。

目を丸くした美雪が一瞬考え込み、そっと息を吐いた。

「えーと……はい……」

その返事には、どんな感情がこもっているのだろう。

聞いたのは自分の方なのに、その言葉を素直に受け止めることができな

「お前は、素直だな」

まっすぐに見つめる瞳が、揺れた。

「あんまり素直で、どうしていいかわからなくなる時がある」

お守りの入った袋を握り締めていた手をポケットから出し、美雪の頬へと伸ばす。

冷たいけれど柔らかい肌は、微動だにしない。

その肌に触れていいのかわからないまま、軽く開いた唇に視線が吸い寄せられた。

「俺が何したいか、わかる？」

声が、僅かに掠れた。

「えと……わか、りません」

わかっていて気づかないフリをしているのか、本当にわからないのか……。

ふいに美雪がまだ二十歳だということを思い出す。自分が二十歳の時って、どんなだったっけ。

大学時代を一瞬思い出し、すぐさま記憶の蓋を閉じる。大輔と美雪では、その経験を結び付けて考えるには無理がありすぎた。

（彼氏ができたことないってことは　　）

指で唇の縁をなぞりそうになって、ぴたりと指を止めた。

「お前、ひよつとしてキスもまだ？」

直球をぶつけると、呆けたように口がぱこつと開いた。

「き、急になんですか?!」

「初めてだったら、悪いようなそうじゃないような……」

うわの空で答えながらも、手は美雪の顔から離すことが出来ない。キスが、したい。

昨日から切実に思っていたことが、どくりと胸を高鳴らせる。

「は、はあ？」

大輔の心情など知りはない美雪が、顔を赤くして見つめ返してきた。

美雪にとっては刺激の強すぎる質問だったのか、ウロウロと視線を

あちこちに彷徨わせる。
その仕草で、ファーストキスは誰かに捧げた後だということを感じた。

「あの……初めてじゃ、ないです」

「マジで？ 男に免疫なくせに」

思わず意地悪な言葉を口をついて出た。そんなに都合のいい話がある訳がない、と思いつつ落胆は隠せない。

「……そりゃ確かに……彼氏は今までいなかったですけど」

むっとしたのか眉にぐっと皺を寄せた美雪が、驚くべき発言をした。

「小学5年生の時に……」

「は？ 何それ」

予想外の答えに、大きな声が出してしまった。

「……転校していく同級生の男の子に……記念に最後に、キスさせてって言われて……」

「させたの!？」

「は、はあ……」

大人しく見える美雪に、そんな大胆な面があったのが驚きだった。子供だったからだろうか。いや、そうとも言えない。小学生の頃な

んで、男子より女子の方がずっと大人だった。

「マセガキ」

何故だかイライラが募り、吐き捨てるように言つと美雪の目尻がキツと上がった。

「……色々と、好奇心旺盛なお年頃だったんです!」

「へー」

顔をそむけて空中にはあつと白い息を撒き散らす。

「みんなに人気があつて、スポーツが得意で、仲良かったし……ちよつと、好きなタイプかもつて思つてたし、ほ、ほつぺにするのかと思つてたから、驚きましたけど……」

「へー、意外とミィハー」

小学生の女子なんてそんなもんだらう。わかっているのに、嫉妬とも言えないような情けない感情が胸を占める。

「……もーいいです。今思えば、あれが私の、最初で最後のモテ期だったんです」

今だって、充分モテ期じゃねえか。

ちらりと美雪を横目で見下ろすと、不貞腐れたように横を向いて軽く頬を膨らませている。

「正直、はつきり覚えてないし……」

「オイ」

「なんですか!？」

拗ねる彼女に、ただ悪戯したかったのか。
ファーストキスじゃないなら、いいだろうという免罪符か。

勢いよく振り向いた美雪の顔へと屈みこみ、攫うように唇を重ねた。
そして柔らかい感触に触れた瞬間に思い出す。
ただ、キスがしたかったことを。

「……セカンドキス？」

照れ隠しに笑ってみせても、美雪がつかれて笑うようなことはなかった。

ただ、目を見開いて大輔を見つめ返す。
その瞳に映るのは、自分だけでいい。

「いくらオツサンでも、我慢の限界です」

冗談めかしてそう言ってみても、呆然とした彼女からはなんの言葉も出てこない。

そおつと頬へと手を伸ばし、指の背で撫でた。
頬の丸い膨らみをなぞったあとに、唇に触れる。

「……なんか言え」

これ以上の沈黙はキツイ。

「な……なんかって……」

自分の置かれていている事態に気付いたのか、美雪の顔がさあっと赤く
なった。

言葉を吐けない唇がぱくぱくと小さく動く。

「もう一回、していい？」

キスがしやすいように首を傾げると、大輔を見つめたままの美雪の
首もつられて傾いた。

「は……」

返事の続きは、大輔の唇の中へと吸い込まれていった。

触れるだけのキスは名残惜しくて、その痕跡を残すように音を立て
ながら再び触れる。

離れたくない。

小さな唇を挟むように重ね、無意識に口を開きそうになって押しと
どめる。

そんなことを、目の前の彼女にする権利はまだない。

感情に流されそうになっていることに気付いた時、逆に美雪が霧困
気に流されているのではないかとふと思った。

「じゅめん……」

彼氏役を引き受けてる分際で、それを盾にとったかのような行動。

唇が僅かに離れた距離でぽつりと呟くと、美雪がゆっくりと目を開
けた。

頬を染めながらぶるぶると頭を振る様は、まるで催促でもされてい
るようすで。

そんな訳はあるはずなのに、流されるようにもつ一度キスをする。

「あー……。ごめん」

「……どうして、謝るんですか？」

潤んだ瞳で伏し目がちに問われると、何も言えなくなる。

「いや……」

抱きしめようと背中に回しかけた手を、力無く下ろした。

こんなことして、よかったのか？

キス程度で真っ赤になって俯く彼女は、明らかにこういう行為に慣れていなくて、それを逆手に取った自分の行動に嫌悪がわいた。

はじめもつけられないうちに手を出して。情けない。

「寒いから、もう家に入れ」

してしまったことはもうどうしようもない。それなら、なるべくそれに深い意味をつけないようにしよう。

卑怯にもそんなことを考えながら美雪の背中を軽く叩くと、何かを決心したかのように美雪が顔を上げた。

「……あのー！」

「ん？」

振り向いて見つめた彼女は、何も言えずに黙りこんだ。

いつの間にか離れていた手の指の部分を、きゅっと握られる。

彼女から向けられているのは、好意だ。

それにはずっと気づいていた。
でもそれが恋情なのか、ただの上司に対する尊敬なのかわから
ない。

わからないまま、混合してしまっているとしたら 果たしてそれ
でいいのか。

それでもいいじゃないかと開き直れないのは、明らかに昏間に見か
けたあの男のせいだ。

彼女の眼差しを受け止めながらも、気持ち揺れる。

黙って、誘導するように彼女の手をひいた。

「大輔さん、あの……」

「何？」

「私……」

平静を装いながらも返事をする、手をくんとひっぱったまま美
雪が立ち止り俯いた。

追い込んだのは大輔だ。

ぼんぼんと手慣れた動作で軽く頭を撫でながら、気持ちとは裏腹の
言葉を吐いた。

「お前、男と付き合ったことないから……、こんなことしたら好き
だと勘違いしちゃうよな？」

傷ついたような顔は、見られない。

「どづいづ……意味ですか？」

「……俺のことを好きだって、錯覚しちゃうんじゃないかと思って
自意識過剰かもしれない。でも、熱に浮かされたような顔が表すも
のが怖くて、目を逸らした。」

「免疫ない子に、こんなことしたらダメだよな。ごめん」

こんなことを言いたい訳じゃないんだ。
でも、頭の片隅にあの男の顔がちらついて、そんなことを言ってい
た。

「大輔さんは……、誰にでもこんなことできるんですか？」

美雪の口から出たとは思えない冷たい口調に、怯む。

「……誰にでもじゃないよ」

「だったら！……私だって同じです」

唇を噛んで俯く美雪の目に、涙が滲んでる気がした。

「男に縁のない、免疫のない子はかわいそうですか？」

「そんなこと言ってない」

「でも……」

何かを言いかけた彼女が、静かに細い息を吐いた。

「もう……いいです……」

繋いだ手を振りほどこうとする気配がして、慌てて握り直した。

「待って。そういうことじゃないって」

自分で言っておきながら、“そういうことって、どついでことだよ”と自分で問いかける。

悲しそうな目をさせているのは自分だ。そう思うとたまらなく締め付けられる気がしたが、吐いた言葉は取り戻せるはずもない。

どうやって誤解を解けばいいのか。そもそも美雪は何を言おうとしていたのか。

「もういいです。私、勘違いなんかしませんから……」

俯いたままの小さな頭が、そう言った。

「松沢さんに、ご迷惑かけてるの、充分わかってます。7日間の約束も、忘れてません」

確実に読み違えてしまったらしいことを後悔しながら、どうしたらいいのかがわからなかった。

わざと呼ばれた名前が切なくて、腹立たしくて。無意識にチツと小さく舌打ちをした。

「美雪」

「……」

「俺をちゃんと見ろ」

微動だにしない頭を力づくでも上を向かせてやるうと思った次の瞬間、気丈な顔をした美雪が頭をあげ大輔を見据えていた。

「そういうこと、言ってるんじゃない」

その顔にひきずられるように、本当は言いたくなかったことが口から滑り出た。

「今日会ったアイツみたいに……お前がちゃんと好きになる相手は、他にいいのかもしれないと思って」

強制的のように始まった7日間を大いに利用しようとしていたはずなのに、それを利用するのが間違っていたかのような気持ちにさせられていた。

素直でストレートな美雪を、騙しているような感覚に陥る。

「じゃあ、なんでキスなんかするんですか？」

相変わらずの直球に、目を細めた。

キスする理由を聞いて、どうする？

その答えにお前は、どうする？

「……したかったから」

「し、したいからするって、子供ですか!？」

「そうだな」

セクハラだと言われそうな気もしたが、それが出なかったことに安堵する。この状況で、上司と部下という烙印を押されなかつただけまだマシだ。

くしゃくしゃと乱暴に美雪の頭を撫でると、複雑そうにそれを受け止めている。

「ごめん。俺、帰るわ」

マンションはもうすぐそこだ。ここからでも、無事に部屋に入るまで見届けられる。これ以上一緒に居ると、墓穴を掘りそうだ。

「お前も早く家に入れ」

くるりと背を向けてそう言うと、

「い、言われなくても入ります！」

背後からは威勢のいい声と駆けだす足音が聞こえた。

「おやすみなさい！！」

放り投げるような言い方に思わず振り向くと、逃げるようにマンションへと走り出す後姿が見えた。入る瞬間にこちらをちらりと振り返ったような気もしたが、その表情を伺い知ることはできなかった。完全に姿が消えたのを確認してから、ガシガシと頭をかく。

どうしてキスをしてしまったか、なんてことを考えても仕方ない。我慢の限界だった。

(アイツも悪い。小5でファーストキスなんて変な話をしなけりや……)

唇を重ねても、何故か距離が縮まった気はしなかった。

隙間を埋めるための上等な手段であったはずなのに、むしろ隙間ができたみたいだ。

のろのろと時間をかけて家に戻ると、だらけたムードの友人たちはテレビをつけたままソファやテーブルを囲んでうたた寝をしていた。無償に腹が立つ。

「こら、起きろおめーら！」

げしつと一番手前にいた小林の背中を軽く蹴ると、うがつと妙な声を出して飛び起きた。

「あ……あけましておめでとう……」

「それは言っただろ」

呆れながらコートを寝室に投げると、目を覚ました桐野と河原の声が追いかけてきた。

「あれ、まだこんな時間？ 帰ってくるの早かったなー。お泊りもアリかと思ってたのに」

「微妙な時間だなあー。何してたんだよ」

確かに、送っただけなら長すぎるし、あがりこんだのなら短すぎる、

微妙な時間だった。

「別にー。美雪の家の側の神社に初詣に行っただけ……」

「え、こんな住宅街に神社あんの！？俺も行きたいー！」

復活した小林が、能天気な事を言った。

「一人で行け！ばーか」

「なんなの大ちゃん！欲求不満！？」

冗談で投げかけられた言葉に、ゆらりと振り向いた。

「お前らが言うか、それ」

「うわ、凶星なんだー。鬼畜」

もう一度背中を蹴りあげようとして、あざやかに足を止められる。その拍子にポケットから携帯が滑り出た。

「あれ、なんかチカチカしてるぞ。着信じゃね？」

拾ってくれた桐野からあわてて携帯をひったくるが、届いていたのは新年早々のセールを知らせるレンタル店のメールマガジンだった。

（あんな別れ方で、メールなんて来るわけがないか……）

無言でぱたんと携帯を閉じた仕草を、3人が見ていた。

「……なんだよ」

「いや、甘い時間を過ごしてきたのかと思ったら……そうでもないのな」

「飲み会はちゃんとやるから、安心しろ」

「そういう話じゃねえよ」

立ったままの大輔の膝を、こつりと小林が小突いた。

「素直そうない子じゃん。お前が彼女紹介してくれたのなんて初めてだし。ちゃんと大事にしるよー」

少し前に、泣かすようなことをしたとはとても言えなくて。

「……言われなくてもわかってるよ」

眉をしかめて不機嫌な顔を繕ってから、携帯をポケットにしまった。

第86話 もうひとつの7日間・14

朝になり雪が全く積もらなかったことを確認し、3人は帰っていった。

散らかった部屋にため息をつきながら、ソファの上へと倒れ込む。携帯を手元に置きながら浅い睡眠を繰り返し、ダラダラとたいして興味もない新春番組をぼんやりと見つめる。情けないほどに寝正月だ。

ピリリーと携帯が無機質な音を鳴らし慌てて携帯を開くが、表示されていたのは見慣れた実家の電話番号だった。

「……………もしもし？」

『大輔？ あけましておめでとっ』

「あー……………あけましておめでとっ……………」

『あんたね、帰って来ないなら来ないでいいけど、せめて電話くらいしたら？』

母親の後ろはがやがやと賑やかで、故郷の正月の風景が懐かしく思い出される。

『メールも寄越さないし』

「引越したり……………色々と忙しかったんだよ」

『引越し！？ いつよ？』

「12月に入っすぐ」

『なんでまたそんな忙しい時期に……。ていうかね、引っ越し先くらい教えときなさい』

そういえば、住所はおるか引っ越すことすら実家に教えていなかったことに今さら気付いた。

「だから色々、忙しかったんだよ」

『まあ元気なら別にいいけど。たまにはこっちに帰ってきなさいよ。あ、ちよっと待って』

ゴソゴソと雑音がした後、キンと高い声が耳に響いた。

『大輔くん？ 久しぶりだねえ、元気？』

「由美子おばさん？」

電話に出たのは、父の妹の叔母だった。

よりによって、正月早々面倒な相手に変わるもんだと眉に皺が寄る。

『こっちに帰ってくることはないの？』

「仕事が忙しくて……この時期は飛行機も混むし。そのうち顔出します」

『ああ、いいのいいの。そうじゃなくてね、私の友達の娘さんが東京で一人で働いてるんだけど、大輔くんの話したら一度会って

みたいて言ってるね』

「俺の話って……どんな話？」

叔母のご機嫌そうな様子とは裏腹に、こちらは不機嫌な声色になる。

『ふふー。28のイケメンの甥っ子が、そっちで独り身でがんばってますって。私もそのうち友達と一緒に遊びに行く予定なんだけど、ご飯でも一緒に食べない？』

「おばさんと会うのはかまわないけど、その友達の娘さんとやらはご勘弁」

『どうしてー？ 写真で見ただけですごく可愛らしいお嬢さんだし、故郷が一緒だと何かと都合もいいでしょ？』

故郷が一緒だと、どう『都合がいい』というのか。

叔母に好きに電話をさせているあたり、父親も母親もこんなお見合いめいた話を黙認しているのだと思うと少しだけむっとくる。

『あなたのお母さんも、“決まった彼女もいないみたいでフラフラしてる”って言ってたし。いいっしょ、会うくらいなら』

はあ、と小さくため息を吐き、無意識にソファの下に手を突っ込んだ。

そこには アウトレットモールで美雪と一緒に撮った写真を挟んだノートが置いてある。撮影の後に、スタッフからもらったものだ。一枚ずつ二人で分けた。

真ん中あたりをぱらりと開くと、恥ずかしそうに笑う美雪の姿がある。

「いや……今は彼女いるからさ」

『あら、やっぱりそうなの？ それはガツカリだわ……。ま、仕方ないね。じゃね』

用事はそれしかないのかと突っ込みたくなるくらいにあっさりと電話を終えた叔母は、ごそごそとまた誰かに電話を変わった。

『にいちゃん？ 俺。あけましておめでとう』

「ああ、おめでとう。なんだよ浩輔、たまには電話くらいかけてこいよ」

『にいちゃんに言われたくないよ。これでも俺だって忙しいんだからさー』

4つ年下の弟は、地元の大学を卒業後、同じく地元の企業に就職した。

大学時代の彼女と今では家族ぐるみの付き合いが続いているようで、このままいけば恐らく大輔よりも早く家庭を持つことになるのだろう。

『おばさんが今ちらつと言ってたけど……彼女できたの？』

「え、ああ……別に俺だっていい年なんだから、珍しくもなんともないだろ」

『うんまあ、珍しくはないけどさ。それをわざわざ理由にするのが珍しいなって』

叔母がお見合いもどきを企てていたことは、既に筒抜けらしい。苦笑しながら頭をかいた。

「そうか？ 断る理由としては常套手段だろ」

『そりゃそうだけど……それを理由にしちゃったら、連れてこいとか結婚はまだかとか、言われるに決まってるのに。どんな子なの？』

「別に普通……会社の後輩。お前より年下だ」

『うわ、本当にいるんだ、本命。しかも軽く自慢？』

その言葉に、誘導尋問されていたのだと気付く。

「……周りに余計なことは言うなよ」

『わかってるってー。俺より年下かー。ちなみにいくつ？』

ハタチ、と答えそうになってから、まだ正式に彼女になっていないことをようやく思い出す。しかも、昨日は逃げるように帰ってきてしまったことも。

「もーいいだろ。そのうちまた教えるよ」

『あーダメだったかあ、残念。じゃーこれからみんなで出かけるらしいから、またねー』

ぷつつと電話が切れて、そのまま力無くソファにつつぷせた。

ダメだ。何もする気力がわかない。

直後に、メールの着信音が鳴り響く。

どうせ弟か母親だろう……そう思いながら携帯を開き、表示された『miyuki』の文字にがばっと飛び起きた。

『こんばんは。今、何してますか？』

これは……もしかして、お誘いのメールだろうか。

いや、期待はするなと自分に言い聞かせながら冷静に言葉を選ぶ。

『家。テレビ見てた。あいつら帰ったよ』

送信を押してから、これでは美雪から返信がしづらいかもしれないと思い直し、さらに急いで追加の文を送る。

『お前は？ 何してるの？』

『電車の中です。買い物に行っていました。福袋買ってきました』

そういえば、友達と買い物に行くと言っていたか。

元旦早々初売りに出かけて行き福袋を買ってくるとは、少し意外な感じがした。

でも、と思い直す。

自分は美雪の何を知っているのかと。

二十歳の女の子にとっては、当たり前前の行動だ。勝手に自分の中で美雪のイメージを作り上げてはいないか。

そう、何も知らないくせに。

『1人？』

『はい』

3文字のメールに、2文字の返事。

素っ気ないやり取りは、ますます大輔を混乱させていた。

今までの付き合いでメールをやりとりしていた女たちは、いつも饒舌だった。

しばらく待っても美雪からの追加のメールはなく、やはり自分が返す番なんだと思った。

『そっか。気をつけて帰れよ』

これじゃあまるで、メールを終わらせたがっているみたい、か……？
そのことに気付いたのは、送信ボタンを押した後だった。

案の定、いくら待っても美雪からの返信はなく、力無く携帯をソファに放りだした。

気付くとすっかり日は沈んでいる。

メールは相変わらず来ない。

ため息を吐いて立ち上がり、カーテンを閉めた。

友人達が帰ったままの部屋はひどく散らかっているような気がしたが、相変わらずどうにかする気が起こらない。

だらけすぎたせいでぼんやりと霞みがかかったような頭を軽く振りながら、トイレへと向かった。

ぼーっとした頭を冷やそうと、ガタガタとトイレの小窓を開ける。

冷たい風が気持ちいい。

用を足しスッキリしたところで窓を閉めようと手を伸ばし、ついで

に何気なく外を見て　固まった。
暗い中、マンションの駐車場の側をテクテクと歩いている女の子が
いる。

あれ、美雪に似てないか？

それとも、彼女ことばかり考えていたから、背格好が似ているだけ
でそう見えてしまうのだろうか。

一瞬考えた後に居間に置きっぱなしになっていた携帯を取り、再び
トイレに戻る。

女の子は、マンションの前で立ち止まっている。目を凝らしてみる
と、着ているコートにも見覚えがある気がした。間違いない。

(なんでこんな時間に……)

そう思ってからのはたと気付く。

やっぱりあのメールは、何かの誘いだったんだ。

自分に舌打ちをしながら急いで美雪の携帯番号を呼び出し、通話ボ
タンを押した。

遠目でも電話がかかってきたことに慌てた様子を見て取れた。

『も、もしもし……』

「美雪？ ……もしかしてお前……俺のマンションの前にいる？」

『えー!?!』

より見えやすいようにトイレの窓を全開にした。

微かに立てた音に気付いたのか、キョロキョロと首を動かしていた
美雪が大輔の部屋のある方向を見上げる。

「やっぱり……。ちょっと待ってて」

一方的に電話を切ってから、居間に戻りコートを羽織った。ラフすぎる自分の格好が少し気になりはしたが、着替えている時間はないし、外に出られないほどではないだろう。

コートを羽織って何も持たずに、階段を駆け下りる。

自分が気付かなかつたら、美雪はどうするつもりだったんだろう。先ほど打ち切るようなメールを送ってしまったことを、改めて後悔する。

「どうしたんだよ」

息を切らせながら近付くと、美雪は困ったような恥ずかしそうな笑みを浮かべていた。

「あの……どうしてわかつたんですか？」

「あそこの小さい窓、トイレ。用を足しながら外見るのがクセで。美雪に似てる、と思って電話かけたらビンゴだったから。驚いた」

お前のことを考えていたから　なんて言える訳もなく、誤魔化しながら美雪を見下ろす。

「すごい荷物だな」

両手いっぱい紙袋を抱えた美雪は、一層恥ずかしそうに身を縮めた。

「あ……初売りに行つてて」

「友達と行くって言ってたもんな。俺にお土産？」

わざわざここに来るということは、大輔に用事があるということだ。紙袋は全て福袋に見えたが、もしかして違うのかもしれない。そして美雪がわざわざマンションまで来てくれた理由を思いつくと言ったら、それくらいしかなかった。

しかしそれはどうやらハズレだったらしく、途端に美雪が慌ててパタパタと手を振った。

「あつ！ ご、ごめんなさい！ そうじゃなくて……」

「冗談だって。でもそれなら……どうした？」

そう言つて顔を覗きこむと、寒い中ここまで歩いてきたせいか美雪の頬はほんのり朱に染まっていた。

こんなことで立ち話をしている理由はない。

「さつき、来るってメールくれたら駅まで迎えに行つたのに。上がつていくか？」

「いえ、あの……ちょっと会いたかっただけというか……」

「え？」

上目遣いで言われ、驚いて目を見張った。

（約束もないのに、そのためだけに？）

中学生や高校生の恋愛のように、会うか会えるかわからないまま、ただ運にまかせて来てみたというのか。

マンションまで歩いてきて、そして美雪には大輔に電話する勇氣は果たして出たのだろうか。

その答えは、大荷物を手に立ちすくむ美雪を見ていたら、明らかで。

「そっか」

くすぐつたい告白に頬が緩むのを感じながら、無意識に美雪の手に頭を乗せた。スルリと後頭部を滑らせ、冷えた髪の毛の中に手を差し込み首に触れた。

「俺も、会いたいと思ってたよ」

つられるように吐いた素直な言葉に、美雪が俯いてつむじをこちらに向けた。

自分は素直なくせに、人の素直な言葉には慣れていないのかもしれない。

(可愛いやつ……)

思わず腕を寄せて抱きしめたい衝動にかられたが、美雪が始めた話題は逆に大輔を固まらせた。

「あの、今日偶然平岡さんに会って」

「平岡に？」

「お茶してたら声かけられて……奥さんと一緒にいて……。あ、奥さんは先に帰られたんですけど」

麻友と一緒にいた、ということわざわざ美雪が告げたことで、胸が

ざわりとした。

平岡が、何か余計なことを言ったんじゃないかと。

「ふーん。それで？」

「え？」

「わざわざ俺に言うってことは、なんか言ってたの？」

自然と声色がキツくなった。

「えと……平岡さんに……色々話聞いて……」

「色々？」

元々二人がこうなったきっかけは、平岡にあつたといっても他言ではない。そして、平岡が麻友のために急いで帰らなければならなかったとはいえ、無理矢理押し付けたことで美雪のことを気にかけていたのもわかっている。

欠点を知り尽くした友達より、まだ二十歳の美雪を心配するのは当然だ。

大輔の過去の悪行を知ってるなら、尚更。

それでも、イラつくのは仕方ない。

「あの……なんでもないです」

「なんだよ、言いかけたんならちゃんと言えよ」

ゆらゆらと彷徨う視線は、何かを隠しているに違いなくて。

大人な対応で流してやればいいのかもしれないが、今の太輔にはで

きなかつた。

「……高校の時の、同級生だとお聞きしました」

「他には？」

「奥さんが……同級生だって……」

「で？」

「平岡さんが……大輔さんから、奥さんを奪ったって」

「……はあ？」

「ブン」。

一番言っただけほしくないことを言いやがった。

こっちはとっくにふっきれていたことを、いつまでも平岡が気にしていたのはなんとなくわかっていた。

今さら蒸し返すのもなんだか癪で放置していたことが、こんな事がきっかけで掘り起こされるとは思ってもいなかった。

「アイツそんなことまで言ったの？」

思わずため息が出る。物事にはタイミングというものがあり、正式な恋人同士でもない美雪がそれを知るのは早すぎだ。

「……奪ったって思ってるのは、アイツだけだろ」

「え、でも……」

「そんなことを、俺に言いに来たの？」

「……いえ……」

「同情でもした？」

自分の気持ちがハッキリ見えていない女の子に、好きだとはき違えているだけの女の子に、この事実は余計な追い風だ。思い通りに進まないことに、天を仰ぎたくなる。

「違います……」

俯く美雪の頭をぼんぼんと軽く叩いた。

言い方がきつくなつたのはわかったが、どうしようもなかった。

「上がってかないなら、送ってく。もう遅いし、危ない。車のカギとってくるから待ってて」

これ以上、この話をしたくなかった。

彼女の気持ちごと流すようなキスをして、自分の気持ちすら見失わせて、さらに同情で心を動かされたくない。

背を向けて部屋に戻ろうとしたら、つんつと何かがコートの裾をひっぱった。

「待ってください!」

「ん？」

こんな形で、二人の関係が始まってほしくはなかった。

部下に手を出す勇氣すらなかったくせに、縮まらない距離にもどか

しい思いをしていたくせに、そんな情けない気持ちが沸いてくる。振り向いて見つめたその顔は、意外に力強くて。

好きだ。

その想いを、ごくりと飲み込んだ。

「本当は……明日言おうと思ってたんですけど」

「うん」

「私、大輔さんのこと……好きです」

すつと息を吸い込んだ後に、美雪は吐き出すように一息に言った。ぶれずにまっすぐ向けられた視線が痛かったが、逸らすことはできない。

「男の人に、免疫ないからじゃ、ないです。優しくしてくれたからでも」

美雪の瞳が、うつすらと膜がかかったように揺らめいた。

「わかんないですけど……私、大輔さんの側にいたいんです。明日……7日間の約束が終わっても、ずっと」

嬉しいはずの告白が、何故だか痛かった。

意図せず急激に進んでしまったことで、彼女の気持ちが見えなくなつた。

自分が言えずにいたことを、言わせてしまった後悔もあるのかもしれない。

「ごめんなさい。困らせて」

「いや……」

なんと行っていいかわからず立ちすくむ大輔に、美雪は申し訳なさそうに眉に皺を寄せた。

単純にそうですかと彼女の好意を受け取ることはできなくて、それどころか彼女の好意につけいった自分に嫌悪がこみ上げる。

経験のない彼女の気持ちをかき乱し、さらに親友は同情を煽るようなことをした。

これで、素直に“好き”と言われた言葉を受け止められるほど、こっちは単純でもない。

頭の中に浮かぶのは、昨日スポーツ店で会ったアイツと向かい合う美雪の姿で。

だけど、手放したくなくて。

『俺はお前にふさわしくないけど』　そう前置きした上で、“それでもいい”という了承を取ろうとする自分は、やり方が汚いだろ
うか。

「……悪いけど……」

「へ、返事は、明日聞かせてください!」

最後まで言わせないとでも言うように、美雪が大輔の言葉を遮った。

「え?」

「あの、なんだったら……明日は来なくても大丈夫ですから!」

無理に明るい声を張り上げる彼女は、明らかに誤解をしている。

「じゃあ、私帰ります!」

「待って!」

身を翻し去ろうとしたところを、すんでのところで捕まえた。

「送ってく」

「い、いいですから!」

こんなに暗くなってから、一人で帰せる訳がない。

美雪は激しく腕を動かして見せたが、所詮男と女の力の差では些細な抵抗しかない。

「いいから。危ないだろーが。言うこと聞け」

それでも抵抗をやめようとしないう美雪の身体を、つい引き寄せた。顔が見たくて覗きこんでも、視線から逃れるように下を向く。

「明日の約束も、まだしてないだろ? 上がるのがイヤだったら、車の中で話そう」

「はい……」

明日の約束と言われてしまえば、何も言えないのだろう。ようやく腕の中で大人しくなった美雪がコクリと頷いた。

「鍵、取ってくるから」

その態度にほっとしながら、軽く頭を叩いてからマンションへと戻った。

腕の中に抱きこんだその身体は小さくて、このまま一人にしていたら居なくなってしまうかもしれない。

それが急に不安になって、勢いよく階段を駆け上がった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0650t/>

7日間彼氏

2011年10月11日09時54分発行